

古明地さとりは隠居したい

小鈴ともえ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうやら元来巻き込まれ体質であるせいでどう足掻いても面倒ごとを避けられない。何とかして一番の原因となったであろう地霊殿主という立場から降りたいのですが……

主人公はさとり。時間としては地霊殿EXから

<https://syosetu.org/novel/232464/>

『面倒ごとを押し付けないで!』→の続編です。精神的に成長してほしい

目次

東方地霊殿 Ex

古の本能 | 1

明るい地上に暗い光を | 8

地底への刺客 | 16

さらに拡がる冤罪の波 | 25

とらわれの姫君 | 33

りんごは握りつぶされた | 42

のこされた選択肢 | 49

未だ掴みきれぬ尻尾 | 56

来るべき過労のツケ | 63

はれない疑惑はない | 71

どう足掻いても逃げられない | 79

この気持ちこそ | 87

まともだった彼女 | 94

でたらめ | 103

もっと広い世界を | 112

重ね続けた罪の形 | 121

苦労など無く | 130

しつかり者の中間管理職さとり | 138

くり返す嫌いがある | 144

さとりと休暇

復興と拒絶 | 152

時空旅行と宇宙人 | 161

人間と妖と神及びそれらの中間の子 | 170

違和感と非常識と違和感

177

未来の少女と過去の少女

184

休暇期間と三半規管

192

美しき死の幻想（ネクロファンタジア）

199

残酷な世界 ※読みたくない方はスルーしてください

212

東方星蓮船

暗雲広がる幻想郷

223

黒き太陽

229

ヘルズ・メス

237

とうの昔の封印

244

落ち込む大妖怪

251

ちからと力

257

今日はさとりの日

265

復古令

270

活躍する勝つ役と喝役

278

さとりと怪書

私の死ねない理由

286

道端の妹

294

私の新しい夢

302

疎ましく紅き太陽

307

私の楽しみはまだ続く

315

そして誰もいなくなるか？

322

もし私が犯人だったら木の下に埋めて貰っても構わないよ

328

正論の刃

337

解決できるのは私だけ

343

終幕	372
決着	362
仮像	356
鍵は開かれた	349

東方地霊殿 E X 古の本能

「自分の能力ちからを恐れているうちは何をやっても失敗続きだよ？ 折角そんなに素晴らしい能力を持っているのに使わないなんてもったいないと思わない？」

「素晴らしい？ 破壊この能力の力が？」

地下に閉じ込められてもう五百年にもなる少女には、突然目の前に現れた、これまた幼い背格好の少女の言っていることが理解できない。疎まれ、恐れられたからこそ閉じ込められているというのに、まるでそれを知らないかのようにその能力を褒める。

いや、きつと本当に知らないのだろう、と幽閉された少女は断定する。今まで見たことも無い相手なのだから当然と言えば当然のこと。

そんな少女に構うことなく、勝手に部屋に入った少女はさらに言葉を紡ぐ。

「なんでも壊せるってことは何処へでも行けるってことだよ。この部屋の鍵なんて機能しない。出ようと思えばいつでも出られるのに出ない理由なんて無いわ。それとも外が恐いの？」

「貴方は何も知らないからそんなことが言えるのよ。私はこの能力のせいで495年もこの部屋に閉じ込められっぱなしだった。館内を歩けるようになったのすら最近なのよ」

この部屋の主であり閉じ込められた張本人でもあるフランドール・スカレット。

彼女の悲痛な叫びはしかし、目の前の少女に届くことは無い。それはフランドールが見てきた世界があまりにも狭いからだ。500年の生の中で495年と言うのはとても長い時間なのであろう。

しかし彼女にとっては残念なことに、千を超える目の前の少女からみた500歳というのはあまりにも幼すぎた。

「私のお姉ちゃんなんてもう千年近くも地下に閉じ込められてるよ。私は嫌だったから逃げ出したけどね。そしたらほら、こんなに世界が

広がったわ。まだ五百年でしかないうちに外を経験すべきね。きつと。心配しなくても私が叶えてあげるわ」

実際には古明地こいしの姉、さとりは他者との交流がある中で地底の妖怪として封じられている。地下に閉じ込められているという事実はあれど、フランドールの境遇とは全く違うのだ。

しかしそれを言わず年月の差だけを取り出すこいしの話し方は覚として心理戦で培ったものなのか、はたまた無意識でそうなっってしまっただけなのか。答えは神も知らない。

だが、フランドールの心に隙を生じさせることには成功した。心の揺らぎは自分ではなかなか抑制しにくいものだ。さとりの前であつたなら間違いなくそこを突かれただろう。

しかし目の前にいるのはこいし。心が読めない彼女には純粋な心理戦が展開できない。だからこそ時にはさとりが聞けば卒倒するような持論を展開することがある。

「大丈夫。ほら、無意識の記憶は意識の記憶より忠実に残るものなんだよ。心の何処かで忘れたくないって思ってるからだろうね」

「な、何言ってるのかよくわからないんだけど。適当な事ばかり言うなら壊しちゃうよ?」

フランドールがそう言うのも当たり前だ。何せこいしはつい先ほど勝手に部屋に入って来ただけの部外者。互いに名乗り合った完全な初対面でレミリアからのお遣いという風でもない。

フランドールはこいしの能力を知らない。だがこいしは当たり前のようにフランドールの能力を知っていたのだ。不気味で今すぐにも握りつぶしたいのに、こいしには肝心の「目」が見つからない。ならば力で捻じ伏せるか、というところまで考えが進んでいる。

「私を壊しても壊れてしまうのは貴方の心よ」

怯えて本心を隠しているような弱い子に私が負けるはずもなし。貴方の本能は無意識のうちの外に出たいと思ってるよ?」

「そんなわけ?...?! い、いったい何をしたのよ!」

「別に? ただ貴方を手伝ってあげただけ。じゃあね、フランちゃん。また外で遊ぼうね」

散々勝手をした拳句の果てにそう言って部屋を出るこいし。部屋に入って来た時にスウつと現れたように、今度は影も形も無くフェードアウトした。とフランドールにはそう見えた。

思わず部屋を出てこいしを追おうとするフランドール。強引に鍵を破壊し、扉を蹴破る勢いで部屋を飛び出して地上に向かっていく。訳の分からぬ部外者をとっ捕まえるため。

空になった地下室の扉は音も無く閉じた。静かな地下牢にカチャリという音さえ残さず。



嫌な予感がする。目の前に座っている紫さんも。その手に持っている紙も。あれはただの書類ではない。妖怪同士の契約にも用いられる特別な紙だ。

此度の異変に関する罰則でも持って来たか。そう勘繰ってしまうのも無理はない。仕方のなかったこととは言え地上への侵攻とみられてもおかしくはない異変だったのだ。

私の知らない場所で地上に甚大な被害が出てしまったとすれば、いくら事情を知っている紫さんでも私を許さないかもしれない。紫さんの最優先は幻想郷の維持だから。

戒を育てることも考えれば、今の私がボロ雑巾のようになるのはできるだけ避けたいことだ。せめてあと二年は欲しい。二年も経てば怒りも風化する？ それを狙っているのだからそれならそれでいいではないか。

「本日はどのような御用で？ そんな契約書まで持ってきて」「提案よ。提案。……別に身構えなくても良いわ。呑んでくれると地上側としてはとてもありがたいわね」

私に危害が及ぶような物ではない、と言いたいのだろうか。

それにしても紫さんがこのような言い方をする時は大抵？まぎる

を得ない条件の時なのだ。呑まなければ地底がどうなるかは保障しない、そう暗に言われている気がしてならない。

「先の異変で地底の存在は人間の知るところとなってしまうたわ。主に天狗の新聞のせいだけれど。今まではごく一部の例外を除き地上と地底を互いに不可侵としてきたわね。しかしこうなってしまうた以上それにも限界がある、というのはさとりも分かっているでしょう？」

つまり地上の二柱が地底に干渉し、さらに地底の資源であるお空の核エネルギーを利用しようとしているとなればもはや不可侵にしておくにも限界があると、そういうことだろう。

確かにそうだ。これ以上不可侵と言い続けても必ず破る者が出てくる。お空の力を求めて、今度は地上から地底へ侵攻してくる恐れも十分にある。だがそれを踏まえても確かにそうだ、と納得できるかと問われればそうでもない。

「そうは言ってもですね、地底には私含め疎まれた妖怪がごまんと存在しますし、地上の妖怪に悪影響を及ぼす怨霊もまた数えきれないほど存在します。地上の解放は確かに益も多いでしょう。しかしそのような存在の管理という損もまた多くなるのではないですか？」

「勿論益だけとは言わないわ。でも少しくらいの損はむしろ楽しむべきではないかしら。少しの自由がある方がむしろ怨霊も大人しくなるかもしれないわよ」

これだ。私には理解しがたい感覚。利だけでなく害もまた楽しみであると捉える強者の感覚。お燐もたまにこんな考え方をする。怨霊の管理がたまに杜撰になっているのもそのせいだ。怨霊を適切に管理することが地底を維持する最善策なのに。

「そう上手くいくでしょうか？ つい最近も自由を手にした怨霊が被害を出しましたが」

「あれは、そうね。本当に悪かったと思っっているわ。私がもう少し早く気づいていればあんなことにはなっていなかったでしょうに……」

おや、紫さんは先の異変の後始末にそれほどの責任を感じていたのか。紫さんの事だからもつと軽く流す程度のものかと思っていたが。

紫さんの価値観がやはりよくわからない。こちらとしては地上から怨霊を連れ戻してくれたことに感謝しているのだが。

「いえいえ、私は感謝していますよ。」

それよりも本題に戻して不可侵条項完全撤廃の件でしただけ」

確かに損も大きい。怨霊を迂闊に地上に行かせるわけにもいかな
い上に、地上から地底への流入もまた増えてしまう。そうなればあ
の人間たちが地底の妖怪に私の事を話さないとも限らなくなる。

対して益の方だが、これは明らかに資源の入手がし易くなる、と言
うのが一点。さらに重要な事として、お空に勝手に力を与えた神々が
攻めてくる心配も無くなるといったところか。

神とは本当に身勝手なものだ。あちらの方から掟を侵してお空に
力を与えたくせに、その力が使えないかもしれないとなれば問答無用
でこちらのせいにしてくる。お空は私の家族であり、奴らの道具など
ではない。

神未満の存在、つまり神以外を同等と認めない高慢さ。人も妖怪も
自分たちの道具としか見ないその無情さ。鼻についても私程度では
どうしようもないのだ。

勝てないと思うならば戦うな。と言われているようなものだ。反
抗すれば叩き潰される。反抗しなければ軍門に下ったと勝手に思わ
れる。強者はそれが許されてしまうのだ。

万に一つも私に勝ち目は無い。大人しく紫さんの提案を受諾する
ほかないのだ。悲しき弱小妖怪の性である。

「呑みましよう」

面倒ごとに発展する前に芽は潰す。摘むのではない。叩き折る勢
いで潰す。

相手が強ければ平身低頭。まるで昔見た天狗のようだ。確か射命
丸さんだったか。

「ならばこの書類にサインを。……………ありがとう。これで地上の方
の懸念も少なくなったわ。一応言っておくけれど、霊夢をはじめとし
た人間は滅多に地底に来ないと思うわよ。あの日の貴方は彼女らに
随分と深いトラウマを植え付けたようだから」



慌てて地上に出たフランドール。真っ先に気づいたのは当然館の仕事に従事しているメイド妖精たちだ。彼女が地下から出てくることは滅多にないので当然これは非常事態だ、として彼女らの上司である十六夜咲夜に報告に向かう。

暫くして現れた咲夜が見た光景^もは妖精たちからの報告通り、血相を変えて館内を走っているフランドールだった。

これには当然咲夜も驚きの表情を隠せない。地下から出てくる事自体は稀にあってもこうして走り回っている彼女を見るのは初めてだったからだ。まるで何かに取り憑かれたように急いでいる様子は、普段地下で籠っている時とは比べ物にならないほどの恐怖を感じさせる。

しかし咲夜も熟練のメイド。動してもそれを表に出さない程度には精神の統一が上手かった。時間を止めて呼吸を落ち着かせているだけなのかもしれないが、それでも時間をかけずに冷静に戻れるというのは如何なる時でも有利にはたらく。

走り回るフランドールをまずは止めようと咲夜は彼女の前に立ちふさがる。下手を打てば吸血鬼娘の勢いで粉微塵^{殺れ}になってもおかしくはないという正気とは思えない判断。

しかし彼女は完全なメイド。距離、速度、フランドールの判断まで全て考慮し、完璧な計算に裏打ちされた行動だ。故にフランドールが咲夜と衝突することは無い。

「どうしたのです？ 妹様。何か必死に走っておられますが」

「ちよつと邪魔しないでよ咲夜。人探しをしてるんだから………人探し？ あれ？ 誰だっけ。さっきまでは覚えてたのに。咲夜に話しかけられたから忘れちゃったじゃない」

無意識に支配された行動は意識の介入によって阻害される。逆もまた然り。無意識にこいしを追っていたはずのフランドールは咲夜

を意識してしまつたが故にそのことを忘れてしまつたのだ。

と言つても完全に忘れ去つたわけではない。会えばまた思い出すだろうし、無意識の層に記憶が残っているうちは引き出すことも不可能ではない。

「？ おつしやる意味がよくわかりませんが………そもそもそのよ
うな事で忘れるような方でしたら無理に探さなくても良いのでは？
お名前を憶えておいででしたら私十六夜咲夜が命に代えてもお探
しいたしますが」

「誰だっけ………うーん、こめ……こめい……あー記憶に霧がか
かつて思い出せない」

これだけ思い出せるだけでも大したものだ。常人ならば一文字す
ら思い出せないであろう。出会いの少ないフランドールだからこそ、
貴重な出会いを何よりも深く心に刻み込むことができたのだろうか。

「……もしや古明地さとりでは？ 奴ならば他人の記憶を消すことも
容易いはずです」

「あー、確かそんな感じだつたかな。うんうん、聞けば聞くほどそんな
ような気がしてきた。なんで探していたかは覚えてないけど。まあ
何でもいいから捕まえてきてね」

そう言つてスツキリしたように地下に戻るフランドール。

何故さとりがフランドールの部屋にいたのかすらわからない上に、
地底に籠っている妖怪を連れてこいと言われて困る咲夜。

そして妹の不始末を押し付けられたさとりは安寧は訪れない。

明るい地上に暗い光を

ゆっくりと本でも読もうと考えていたのに、突然来た紫さんのせいで私の予定は儼く消えた。それにしても同じ日に二度も来るなんてことは今まで一度も無かった。

急いでいる様子を見るに相当緊急性の高い厄介ごとを引っ提げてきたのではないかと思う。

嫌な予感というものは得てして当たるもの。その例に漏れず私の予想は見事に当たってしまったようだ。

「貴方、地上に出るのが解禁になったからと言って地上にちよっかいを出してない？」

そんな紫さんの言葉。そんなことを聞いてくる意図が全く読めない。話もつかめない。

私が地上に出ることはおろか、地霊殿から出ることもすらあり得ないというのに何を言っているのだ。そう思っても仕方ないと思う。紫さんもそのあたりの事情は知っているはずなのだが。

「そんな愚かしい事はしませんよ。私はただ平和に暮らせればそれで良いのです。地上に興味は無いですね。それとも何ですか？ 地上で私を見たとしても？」

それこそあり得ない。わざわざ私に扮する者がいるとは思えないからだ。覚という種族の扱われ方を見れば、それに似せるメリットは皆無であろうという事は容易に分かる。

だから紫さんがこれ程までに急いでいる理由が分からない。約定の破棄の後まだ数時間しか経っていない上に私は全く地上に干渉した覚えがないからだ。

「……ええ、まあそういう事よ。フランドールを覚えているかしら？

……そう、そのフランドール・スカーレットであっているわ。あの子の部屋に古明地さとりを名乗る妖怪が侵入した、と紅魔館の連中がお怒りなのよ」

もちろんレミリアを除いてだけれど、と付け加える紫さん。

待て待て待て。これに関しては本当に身に覚えがないぞ。紅魔館

に行ったのだってもう数年も昔。それも一度だけ。フランドール・スカーレットにだってあの時一度しか会っていない。

私は完全に無罪。冤罪もいいところだ。

「ちよ、ちよっと待っててくださいよ。私が紅魔館の地下に？ 行くわけじゃないじゃないですか。そもそも地下に行くまでに咲夜さんやらに気づかれますって」

「確かにそうなのだけど……これは十六夜咲夜から聞いた話なのよ。あの人間が、わざわざ貴方を殺すためだけに嘘を吐くとは考えにくいでしょう？ まあ彼女自身もフランドールから話を聞いたようだけど」

咲夜さんが私をぶち殺すためだけに嘘を吐くかどうか、か。可能性としては割と捨てきれないのではないか？ あそこまで冷徹な人間はなかなか見ないと思うが。

まあ今回はそうではなさそうか。自分の嘘に主の妹を巻き込むとは流石に考えにくい。

で、レミリアさんはどうせ私ではないと分かっているながら知らないふりをしているのだろう。あの吸血鬼もあの吸血鬼で良い趣味していると思う。分かっているならばそうやって私を助けてくれればいいものを……。

「もしかしてあれじゃないですか？ フランドールさんの幻覚。あの子は確かかなり気が触れてましたよね。虚像でも幻視したのではないですか？」

私の中ではこれが最も可能性が高い仮説だ。会った時は会話すらもまともに通じなかった子。レミリアさんに言わせても気が触れていて危険な妖怪。

あまりにも長く一人でいたせいで所謂イマジナリーフレンドが構築されていてそんなら不思議ではない。それが私の姿である可能性は極めて低いと思われるが。

何故一度しか会っていないような弱小妖怪を幻視するのか。そのメカニズムは私でもいまいち分からないことだ。

「しかしこのままでは罫が明きませんね。レミリアさんをお呼びください」

さい。どうせ暇でしょうから今すぐにでも」

咲夜さんも少なからず紫さんの事を警戒しているだろう。故にブランドールさんの話、その全てを語ったとは思えない。あくまでも地底に殴り込むための足を確保するために、仕方なく打ち明けたものだと思われる。

幻想郷の危機になり得ることならばすぐにでも動くと考えていたのだろう。咲夜さん側の誤算は紫さんがワンクッション挟んだことかと思う。

紫さんとの付き合いの浅さが垣間見えるような甘い認識だ。紫さんが考え無しに行動することはまずあり得ない。状況証拠がある場合は別だが、ただ伝え聞いただけの話ではそんなにすぐ行動せず、まずは裏をとることから始めるだろう。

紫さんの能力故にいざとなれば即行動することも可能だからだ。わかりやすいスロースターター。それでも間に合うからそうしている典型的な強者だ。



唐突に地霊殿に召喚されたレミリアは全く驚いた様子も無く、怒った様子も見せなかった。こうなるであろうことが事前に分かっていたような様子……否、実際に分かっていたのだろう。

「さて、何の用件かしら？」

余裕綽々、と言った風に気取って尋ねるレミリア。

と言っても良いのは外面だけ。内面はかなり緊張しているようだ。何せ紫はレミリアの天敵。いくらさとりが同席していると言っても紫の前で失言は許されない。

故に心臓はバクバクだが何とか上辺だけは取り繕って澄ましているようだ。それが分かっているさとりも指摘するような事はしない。

さとりが厭味を言うのは基本的に敵対している時のみだ。だからレミリアも含め、友人と呼べる者たちがそれなりにいるのだろう。

「ええ、その事であっていますよ。それにしても……ふむ、紫さんから聞いた事以上の事はレミリアさんでも知りませんか。……いやそうでもない？ もう少し思い出せませんか？」

予想とは異なり、レミリアも紫とほとんど同じことしか聞いていなかったのかと一度は落胆したさとりだったが、どうやら何か手掛かりになりそうな記憶が見つかりそうになったらしい。

もう少し思い出せと言われたレミリアは何を思い出せばいいのかがよくわかっていないようだ。

さとりからすれば咲夜との会話を今一度思い出せば良いと言ったつもりだったようだが、明らかに言葉足らずである。

これで文句を言われるのがレミリアなのだから理不尽にもほどがある。結局はさとりが強引に思い出させる方法で解決することにしたようだが。

「想起………ふむ、ふむ……なるほどわかりました。どうやら犯人はこいしで間違いなさそうですね。証言が明らかにおかしいですから」

咲夜が紫には語らずレミリアにだけ語っていた事実、それはランドールが名前を思い出せなくなっていたから記憶を弄られたのだろう、というものだ。

「こいし……さとりの妹だっけ。心は読めないんだっかわよね。どんな能力を持っているの？」

「無意識を操る程度の能力です。普段生きている中で使っている意識とは対極に存在する無意識。故に普通ならばあの子に気づけるはずはないんです。あの子が自ら干渉すれば話は別ですがね。恐らくランドールさんはこいしと関わったんでしょう。普通ならあの子の名前も思い出せないはずなんですがねえ」

それこそよほど彼女と親密でない限りは。会えば記憶が戻ってくる。だが会わなければそっだけ記憶が抜け落ちる、そこにいるのにまらばまず精神はもたないだろう。

それでも笑っていられるこいしの事がさとりにはいまいち理解で

きない。覺妖怪だからこそ心が読めない相手を深く知ることができないのだ。

「へえ？　もしかしたらフランと相性がいいのかもしれないわね。姉同士、妹同士で丁度良いんじゃない？」

「咲夜さんはじめ紅魔館の皆さんは決して許さないと思いますけどね……おや、この神力は？」

「守矢の二柱ね。今日の地霊殿は千客万来だわ。と言っても普通に中庭の方に抜けて行ったみたいだけれど。用があつたのはあの地獄鴉ね」

スキマを覗きながら情報を追加する紫。

他人のペットに手を出しておきながらその主には何一つ言わないどころか顔も見せない徹底ぶり。不可侵条項など知らない二柱は今日も無断で地底に降りてきたわけだ。

紫にレミリア、そして守矢の二柱、と普段地上から人の来ない地霊殿に対して今日は千客万来だと言った紫。しかし談笑する三人はまだ気づいていなかった。もう一人、音も無く近づいてくる者がいることに。



「やあいましたねパルスィ殿」

「誰……ああ戒ね。こんにちは。こんなところで会うなんて珍しいじゃない。普段ここを通る奴なんていないわよ？　部外者で言えばこの前の人間たちが最後ね。何しに来たの？　貴方の事だからただの散歩ではないと思うけれど」

正直に言えば私の事をこんな風に呼ぶのが戒くらいしかいないから声をかけられた瞬間に誰かは分かっていた。まあこれも一つの挨拶のようなものだ。

それにしてもこの子がこんな端^橋まで来るなんて珍しい事もあつたものだ。普段は地霊殿でさとの手伝いをしているのに。足手まと

いだと追い出されるような処理速度でもないはず。となれば何か特別な用事でもあったと考えるのが妥当だろう。

「ええ実は地上との行き来が自由となったんですよ。今朝付で約定の破棄が為されました、という報告を。……いえいえ、パルスィ殿も関係なしではいられないかもしれません。橋を通る者はまず間違いなく増えるでしょう」

うわ、面倒くさい。

この橋はいわば自分しか知らない秘境のような存在。好きだからここにいる。自分だけの場所だと思っていたのに、そこに大量、とは言わずとも今まで訪れなかったような奴が来るようになるのだ。誰だって良い気はしないだろう。

しかし遂に例の約定が破棄されたか。八雲紫とこいしだけ特例でいたとはいえ、いずれはこれと同じノリで完全撤廃になるのではないかと思っていた。それでなくとも萃香やさとりも地上に出ていたし、つい最近では人間を入れるために一時的に破棄されていたし。

とても面倒だがこれも一応はさとりが決定したこと。何も知らない私たちがどうこう言える立場ではない。それに彼女の性格を鑑みると決して乗り気ではなかったのだろうことが伺える。

本来この約定だって八雲紫を地底から締め出すことが目的だと言ったことがある。結局はこいしの事を踏まえて八雲紫だけが特例になるというわけの分からない結果になったと言うが。

だがこれに関してはそうなって良かったのではないだろうか。八雲紫がいなければさとりはもう少し楽に生きられただろうが、彼女には少し波乱万丈なくらいが丁度良い。

それに外の情報が手に入るのもありがたいことだ。洋菓子も洋酒も八雲紫がいなければまだ地底には入っていないだろう。

上二人に恩があるからこそそう言ったことにも文句は言えない。流石に仇で返すほど腐っているつもりはない。こんなことを考えるのは恩義に篤い鬼との付き合いが長いからだだろうか。

「そんな嫌そうな顔をしても既にさとり様と八雲様が決定なさった事。もう覆りませんよ」

「分かっているわ。それにしても地上、か。私にはまだまだ遠いわね」
地上と地底。精神的な距離がまだまだ遠すぎる。昔は私も地上にいたはずなのに、今となってはそれすら思い出せない。地上の空気も、空の明るさも、月の力も、流れる風も……すべてがもう遠い存在として記憶の彼方にあるだけだ。

今更地上に出たいとは思わない。思えない。数年前地上に出た萃香も結局は地底に帰って来た。それは幻想郷が私たちの求める世界ではないという確たる証拠。少しの迷いはあつたらしいけれど。

「その心理的距離もさとり様が埋めてくださるかもしれないよ」

「貴方にはそれをする気が無いのね」

「私程度ではできないというだけです」

さとりは凄い。見た目はただ幼い妖怪なのに、その頭から生み出される考えは私たちには理解できないようなものばかりだ。神が与えた不公平？ 努力の差？ 答えは恐らく後者。

常人ならば倒れてしまうような量の仕事を睡眠時間一刻というハードスケジュールでこなすような子だ。今までしてきた努力は計り知れない。

それでもやはり完璧というわけではない。時々動物に埋もれて休憩している時もある。

さとり曰く『こうでもしないとやっていけませんよ』らしい。私は恐らくそれをしてやっついていけないと思う。

「いずれはパルスィ殿も地上と地底を結ぶ懸け橋の姫となるかもしれませんね」

それはそれは……あまりにも夢見た者の意見のようで想像もできない。そもそも私は誰かと積極的に話せるような性格でもない。どちらかと言えば内気。付き合いのある奴か、よほど馬が合う奴でもない限りはお喋りをする気にもなれない。

あの人間二人とはできればもう話したくないかな。あれは地上の顔のような奴らだと思うが、そいつらと馬が合いそうにないのだから地上と地底を私が結ぶことは不可能だろう。

何百年経って世代が変わればまた何かあるかもしれないけれど。

地上と地底をよく往き来していて社交性もありそんな妖怪か。
こいしは次はいつ帰ってくるのだろうか。

地底への刺客

それはまだレミリアがさとりたちと話している頃の事。

紅魔館の何も無い平和な日々突然乱入した古明地という異分子。フランドールの精神状態を安定させるために話を聞き、宥めたくえで更なる続報を伝えようとレミリアの部屋に訪れた咲夜。だが扉を開いた彼女の眼に映った部屋にはいるはずの主人の姿が無かった。

普段は冷静沈着で人間味が無いと思われるメイド長もしかし、れつきとした人間であった。自身の嫌悪を煽るような言動をする憎き相手、古明地さとの事になれば、思考の過程がいくつか飛ばされるのは今に始まったことではない。

否、咲夜だけでなく美鈴もパチュリーでさえも古明地さとりに対しては一定以上の嫌悪感を抱いている。彼女たちにとつてさとりという少女ははったりだけの詐欺娘でしかないからだ。

唯一無二の主人を、親友を誑かして地上とのパイプを作っている少女として。

レミリアは地底を発展させるために使われた体のいい駒として使われていると誤認している紅魔館の住人たち。

悲しいかな。それは彼女らがレミリアの事を信用していても完全に信頼しきれていないからこそ生まれてしまう感情なのだ。

『お嬢様ならばあの程度わけなく打ち負かせるはずだ』
『レミイならばあの程度わけなく打ち負かせるはずだ』

と、そう思えるならばこのような誤解はよもや生まれ得まい。レミリアはその思いに気づいていないのだろうか？

そうではない。彼女は気づいていながらもこれを放置しているのだ。理由は単純。説明が面倒だからだ。

もしここで『私は別にさとの意思に従って動いているわけではない。彼奴の手駒になるなどあり得ない』と弁明したところで彼女らが納得するわけがないのだ。表面上は納得の意思表示をしたとしても、心の中では決してそうはならないだろうことがレミリアにも分かっている。

元よりマインドコントロールに優れている（と勝手に思われている）さとりが相手なのだ。レミリアの意思すら奪って言わせることも可能なのではないか、と言う疑念を抱くことは間違いない。完全に疑いを晴らすことは現状不可能なのである。

しかも厄介な事にレミリア自身もまたこの状況を楽しんでいる節がある。彼女にとって今のさとりに対する咲夜は一昔前の自分に対する咲夜像に重なる部分がある。

ただ自分に従順なだけだった咲夜が誰かに強い嫌悪感抱いている。そのことに対してわずかな愉悦を含んでいるのだ。対象が自分でないのが些か残念、といったところか。

幼い見た目に騙されてはならない。吸血鬼はあくまでも大妖怪。他人の持つ強い感情でさえもただの暇つぶしの道具でしかないのだ。

一方でさとりがこの誤解を解こうとしない理由、これは言うまでもなく聞く耳を持ってもらえないからだ。何を言っても聞かない連中に割く時間など無駄でしかない。

その時間があれば読書も執筆もできる、とそう考えているのだ。

故に彼女はレミリアとさとりを取り巻く人妖の意思を全て理解したうえで現状を保っているのだ。

憎まれることも、嫌われることもとうの昔に慣れてしまった哀しき妖怪。

彼女はただ自分の事など放っておいてくれればよかった。嫌いならば近寄って来なければ良いと思っていた。

しかし現実はどうも非情なるか。

彼女の願いに反して人間はどこまでもしつこい生き物だった。

弱者に対して優位に立ったと見ればそれを誇示するかのようになり力の差を見せつける。逆に劣位に立ったと見れば異常なまでの反骨心を燃やすこともある。

目の敵とした者を地獄の底まで追うほどの執着心をも持つ。寿命が極端に短いからこそ狙った獲物を逃さぬとばかりに追ってくる。

相手が妖怪であれば、神であればすぐに飽きられて放置されること

も容易かっただろう。実際に地底ではもはやさとりの存在を覚えて
いる者すら少ない。死んだと思われる者に脳のリソースを割くくら
いならば今日呑む酒の事を考えた方がマシだからだろう。

しかしこれが人間となれば違ってくる。本当に死んだのか、また誰
が憎むべき相手を葬ったのか。そこにまで思いを巡らす。そしてそ
の出来事を忘れることは無い。

妖怪ばかりの場所で千年近くも生きてきたさとりは人間への対応
が致命的に下手だったというわけだ。人間の性質を見誤ったが故の
現状。

放っておいて欲しかった彼女はしかし放っておかれず、妖怪三人で
の談笑は音も無くやって来た一人の人間によって破られた。

「あらあら、今日は本当に千客万来ですこと。貴方が立つべきはさと
りではなくそちらのチビツ子吸血姫の後ろではなくて？」

「……ちっ」

レミリアの部屋に誰もいなかったことから攫われたことを確信し
た咲夜。門を通らなかつたことを確認した彼女は誘拐犯が紫である
と決めつけた。このようなことができるのは彼女の知る限るでは紫
だけだからだ。

部屋が空だったことで一瞬パニックに陥った彼女だが、頭はひどく
冷静に行き先を地霊殿と結論付けた。紅魔館での急な古明地騒動と
レミリアの誘拐。これらを統合すれば真犯人はさとりの他に考えら
れないと判断したのだ。

そして長時間時間をかけずにをかけて地霊殿にたどり着くと誘拐犯に慈悲は無し、
とさとの後ろから幾本ものナイフを投げつけたのだ。

しかしこれに対応したのは紫。ナイフは全て呆気なく無限の隙間
に飛ばされてしまった。投げたナイフを回収できなければそれ以上
は投げられない。今の咲夜はただ時を止められる少女でしかなく
なってしまったのだ。

たとえそうであっても相手が人間ならばどうにでもなるだろう。
時間停止と言うのはそれだけでも十分に脅威になる。

しかし今日の前にいるのはそれぞれ地上と地底のトップ。詰み、である。

「はて、何かおっしゃいました?」

「いえ何でもありませんわ。私の言いたい事はただ一つ。お嬢様を返していただけないかと」

「ええええ、もちろんお返ししますわ。ただしこちら側の用が済めば、ですけれど。それまではしばらく拘束させていただきますわ」



「おや、レミリアさんと咲夜さんはどうしたんです?」

「しばらくスキマの中で眠ってもらったわ。本当は咲夜だけでも良かったのだけれど、まあついだね。主従一緒の方が何かと安心でしょう?」

どうせ寝ている時間も紫さんの匙加減なのだから咲夜さんだけでも良かった気はするが。それにしても境界の能力は本当にできることの底が見えない。

気絶させることくらいならば強いトラウマを瞬時に想起することでも私も真似できるが、その気絶した相手を入れておく場所もスキマ。この妖怪にかかれれば何でもありだ。

「それにね……ここだけの話、今回の騒動にレミリアは関与しないベキだと思うのよ」

「どういう事です? レミリアさんは騒動の起こった紅魔館の当主。関わらないのはむしろ不自然では?」

「いえ、そうではないわ。こいしの次の狙いは紅魔館になる。真の狙いはフランドールの外出、かしらね。意図はさっぱり理解できないけれど」

その段階で邪魔になるのがレミリアさんと咲夜さんの存在というわけか。絶対に外出させたくないレミリアさんは如何なる手段を用いてもそれを阻止しに来るだろう、と。

私としてはそれでも構わないと思うのだが。だってあのフラン
ドールさんだ。力の方は鬼にでも任せれば何とでもなるが、問題はあ
の話の通じなさだ。何処かズレた回答ばかりしてくるといふ点にお
いてはこいしよりも酷い。

「彼女を野放しにした方が良いと？ それこそ意味が分かりませ
んが。あの子の歪さは紫さんもご存じの通りでしょう。それにこいし
が干渉すればどうなるか……」

あの子だって常に気が触れているわけではない。それはレミリア
さんから聞いたから知っている。それでも万が一が起こればうつか
りで済まされる事にはならないだろう。

無意識的に本能が働いてしまえば今までの圧制の苦痛を何倍にも
増幅させた感情が爆発してしまうかもしれない。目も当てられない
ことになる前に止めるのが得策だと思っただが、紫さんはどうしてそ
れを危惧しないのだろうか。

「それこそ無駄な考えよ、さとり。フランドールはたかが495年と
いう私たちにとっては短い時間でもその生涯のほとんどを地下牢で
過ごしてきたわ。抑圧にも限度はある。現に今の彼女は館内ならば
そこそこの自由が許可されている。

でもいざこれ館と言う空間も牢となってしまうでしょう。外に
出すならば今、このタイミングこそがベストなのよ。極端に狭い世界
からそこそこの広さを持つ世界、そして無限に広がる世界へ。世界を
広げることは幼い者の成長にもつながる」

——— だから貴方もこいしを自由にしているんでしょ
う？

そう言われてしまうと何も言えない。確かにこいしを地霊殿に閉
じ込めることは可能だ。彼女はただ他人の無意識を操って認識され
ないように動いているだけで物を透過することはできない。こいし
が寝ている間に部屋に鍵をかけさえすれば監禁できる。

まさにレミリアさんがフランドールさんにしていたように、外に出
させないようにする方法ならばそれが最も手っ取り早く、かつ簡単
だ。でも私がそれをするには無い。あの子がああなってしまった

のはあの子のせいではないからだ。

他人からの負の感情を嫌って心を閉ざしたあの子を責める事など私にできようはずもない。それならばせめて第二の生とも言える今を楽しく過ごしてもらいたい。そう願うのは別におかしなことではないだろう。

自由という便利な言葉を笠に着て、その実放っておいているだけであることは否めない。全ての自由が相手にとって良いわけではないことも分かっている。

だがどうすればいい。自由を奪うにはあまりにも可哀そうで、先の行動も読めないので管理もできない。

確かに紫さんの言う通り、あの子の世界は極端に広がったし、そのおかげで多少なりとも成長した面はあっただろう。心を読むのを恐れていたあの子はもういない。いるのは広い世界をただ自由に飛び回るあの子だけ。

どちらが良いかと問われれば、当然後者と答えるだろう。種族に縛られない生き方をするあの子を見て少し羨ましい部分もある。

だが本当にそれだけか？ 世界が広がることはメリツトだけなのか？

違うだろう。得た物の裏には失った物がある。何事にも対価は支払われねばならない。強くなろうと思えば、賢くなろうと思えば、その分だけ時間を対価として支払うことになる。

それと同様。あの子は自由の対価として心を失った……いや、その言い方は正しくない。あの子にも心は存在する。だがそれを表に出すことができなくなったのだ。文字通り閉ざされた心は他人はおろか、あの子自身でさえも自覚できないようになってしまった。

あの子の表情は嘘。あの子の言葉は虚ろ。あの子の心に私の言葉は響かない。響くほどの隙間が心に存在しないから。あの子に私の言葉は通じない。もはやあの子に真意は汲み取れないから。

利益と損失は表裏一体。

自由を与えることは全てが益とはなり得ない。これは絶対の掟。それは貴方も分かっているはず。

「紫さん………いない。いつの間に……」

私が少し思考している間に何処かに消えてしまった。もしレミリアさんがどうにも抵抗できない様ならばフランドールさんが野に放たれるのも時間も問題か。

非情に拙い事態だが、残念ながら私にできることは無い。地上への移動が自由化されたとはいえ、基本的に私は地霊殿から出られない存在。地底に被害が及ばないならばどうでも良いのだがフランドールさんの力は地底にも届き得る。こいしと関りを持ってしまっている以上樂觀はできない状況だ。誠に不運である。

「失礼します………どうしたんです？ さとり様」

先ほどまで賑やかだったとは思えないほど静まり返った部屋で今後について考えていると、ノックと同時にお隣が入ってきた。

丁度良い。紫さんについて知っていることが無いか聞いてみるとしよう。あの人の事だから扉をくぐるとは思えないけど念のためだ。

「紫さんがどこに行ったか知らないかしら………いえ、あの後もう一度来たでしょう？ レミリアさんも来てこの部屋で盛り上がっていたし………そんなはずはない？ 部屋も至って静かだった？」

お隣が言うには部屋からは私の寝息が聞こえていたし特段強い力も感じなかったらしい。耳が四つもあるお隣が寝息と喋り声を聞き間違えるとは思えない。ならば夢、だったのだろうか。にわかには信じがたい。

あれほど生々しい紫さんの焦り。レミリアさんの記憶。そして咲夜さんの嫌悪。その全てが、あれは夢でないと言わしめる力を持っている。

しかしその一方でお隣の証言。お隣が入ってくるまで私は一人で部屋にいたこと。机に置かれたままの書類。これらはもしや夢だったのではないかと思わせる。

どう足掻いても今の私とお隣の証言が食い違っている以上、さらにこの問題について追及するのは時間の無駄だ。

「不可解だけでもまあ良いわ。それよりもお隣も何か用事があったんでしょう？ ……へえ来客。今日は一人で来たのね。ありがとう。客

間にでも通しておいてちょうだい」

やってきた客は博麗の巫女。どうやら不可侵条項の撤廃を紫さんから聞いてやってきたらしい。真つ先に博麗の巫女に伝えるとは……あの妖怪もやはり真面目なところは真面目なようだ。

「お久しぶりですね、博麗霊夢」

「別に、まだあれから一月も経っていないじゃない」

普通の人間は数日でも会わなければ久しぶりと言ったりするものだ。特に限られた空間に住んでいる者たちは。そう言う意味でもこの巫女はやはりどこか人間からずれている。悪い意味で人間離れしている、という言葉が用いられる例だ。

「本日はいったいどんなご用件で？」

「あんたの事だから別に聞かなくても分かってるんじゃないの？ 忠告しに来たのよ、忠告」

社交辞令のようなものである。

この巫女は妖怪相手だというのにいちいち要らない一言を追加するんだから。まあ霊夢さんからすれば妖怪を煽って怒ってくれば儲けものといった風にしか考えていないのだろう。妖怪退治とはストレス発散の暴力の事をいうわけではない。

「生憎忠告などされずとも地上に出る気など無いですよ。地上に迷惑をかける事の対価はつい先日いただいたばかりですしね。で、用事はそれだけなの？」

不満そうに首肯する霊夢さん。普段妖怪相手にもずけずけ言うように私にもはつきり言えばまだ可愛らしい人間の子供、といった風に思えるというのに。

だが意固地を通して否定しないうちはふてぶてしいだけの少女である。霊夢さんが妖怪に好かれがちなのもこのような性格のせいだろう。妖怪はやはり張り合いのある者を好む。強い上に素直ではない霊夢さんは意識せずとも釣り餌となっているわけだ。

「それはそれは殊勝な事ですね……………ふふっ、私相手に本来の目的を隠し通せるとでも？」

情報を流したのは萃香か。この前の異変の時に言っていたようね。

「わざわざ温泉に入りに来たなんて言えるわけないでしょ！」

あら可愛らしい。……………はあ、性格が悪いと称されるのはこういう事をしているが故なのだろう。これは他者から嫌われていても何も文句は言えない。

「はいはい、すみませんでした。まあゆっくり浸かってくれればいいですよ。鬼の肌には温くても人間の肌には丁度良いくらいの温度でしよう。入ったことがあるのは妖怪だけなので何とも言えませんがね」

地底の温泉の話は萃香から聞いたらしい。萃香曰く温いらしいが私にとっては丁度良い湯加減だ。鬼の肌は丈夫な分、分厚くて熱を感じにくいのかもしれない。

「ご安心を。湯は常に入れ替わっているので妖力が溶け込んでいるわけではありません。そもそもそうでもなければ博麗の巫女など入れませんよ」

妖怪しか入らない、という言葉に露骨に嫌な顔をされたので一応の補足はしておく。

もし入れ替わらなければ巫女の浄化の力が湯に留まる可能性を秘めているのだ。そんなリスキーな事はしない。数時間もすればすべてが入れ替わるからこそ巫女の入浴も許可するのだ。

あちらはまた別の解釈をしたようだが所詮は些細な問題。気に留める必要もないだろう。

さらに広がる冤罪の波

「さて、どうやらさっぱりして落ち着いたようですね。では改めて聞きましょう。貴方を地底に送り込んだ犯人は誰なんですか？」

ここに来た当初は確かに温泉の事が彼女の心を支配していた。私が見るのは、聞くのは心の表層の感情。記憶は手順を踏まなければ確かめられない。だからあの時は分からなかった。

だが彼女が温泉に入っている間に改めて考えてみるとどうにも腑に落ちない点がいくつかある。その最たるものが彼女が地底に来た理由だ。間欠泉が地上にも噴出した以上、地上でも温泉はできていると考えて良い。

ならばわざわざ地底に入りに来る意味はありはしない。危険な上に湯の温度は地上の物の方が確実に人間向け。忠告するついで、と言うのも理由としては弱すぎる。

安全な地上ではなく危険な地底に来る。そこには必ず裏で動いている人物がいるに違いないのだ。

そしてそのタイミングも気になるところだ。今地霊殿にいるのは私とお隣だけ。レミリアさんも咲夜さんも何処かへ攫われ、紫さんも丁度良く何処かへ行った。お空の方に行ったであろう二柱を除けば来客はいない状況だ。

あまりにも都合が良すぎる。裏で糸を引いている者は確実にいて、しかもその人物は地上と地底の不可侵条項撤廃を知っている。さらにこの屋敷には現在ほとんど人がいないことも知っているという。ここまで考えればもう誰なのかを聞くまでもない。

「やはり八雲紫ですか。まったく身勝手なものですよ。幻想郷一困った妖怪であることは間違いないでしょうね」

「別にあいつに送り込まれたわけじゃないわよ。『地底にある温泉にでも行ってきなさいな。異変解決の労いとして私がお金は出してあげるから』とか言っただけ。異変解決の労いとして私がお金は出してあげたから来ようと思っただけ。あいつはすぐ何処かに行ったけどね」

そして去り際にさりげなく条項撤廃を伝えたわけか。あたかもこ

ちらが本命であると言わんばかりの捨て台詞として、彼女は博麗の巫女という少女に役割を与えたふりをして霊夢さんを確実に地底に向かうようにしたのか。

これを言わなければ霊夢さんが地底に来る意味は皆無だ。地上にも温泉があるのだから、いくら紫さんが地底の温泉を勧めても向かうならば当然そちらだっただろう。

本当に厭らしい。彼女は地底に行けと命令したわけではなく、そのために金を渡したわけでもない。ただ霊夢さんの中で地底に行くことが正当化されるように取り計らっただけ。

霊夢さんは気づいていないし気づかない方が良い。妖怪の言いなりになっていると知れば誰でもいい気分にはならないだろうから。

一仕事に対して労いの言葉をかけ、それを示すかの如く報酬として温泉で身体を休めさせる。

霊夢さんの性格上面倒を起こした妖怪は特に目を光らせるようになる。それを利用して直近の異変の首謀者である（と思われる）私を利用したわけだ。

私と紫さんの関係は公表されていない。しかし異変解決時にはなるべく地底と地上の関係が悪いかのような演技を続けた。

だからこそ最後の言葉が霊夢さんにも深く刻み込まれたのだろう。

——地底の妖怪は非常に危険な奴らばかり。一步誤れば地上は喰われてしまうほどに

仲が悪いから放置しておくのは拙いよ、という忠告をさりげなく挟む。もちろん実際にはそんなことはあり得ない。地底でまともに戦力になる妖怪など一握り。

……それは地上でも同じなのかもしれないが、それでも地上のトップと地底のトップの差が果てしないのでやはり勝負にはならないだろう。つまり紫さんの最後の言葉は、事情を知っている者からすればただ杞憂を煽るための文句でしかないのだ。

これをした紫さんの意図は全く分からない。こんなことをされなくとも私には地上に出るつもりがない。もつと言うなら地霊殿から出るつもりも。

だというのに彼女はわざわざ博麗の巫女を使ってまで地底に警告を出した。私にとっては意味を為さず、霊夢さんにとつても結果として無駄骨になるといふのは紫さん自身も理解しているはず。

警告された私にも、警告しに来た霊夢さんにもメリツトはない。だがわざわざこうなるように言葉を選んでそれを伝えた。

となれば考え得るのはもはや一つ。これは紫さんにとつてメリツトを生むということだ。それがいったい何なのか、私には彼女の見える世界を想像することさえ叶わない。

しかし彼女の都合で動かされた霊夢さんは本当に可哀そうだ。直接的に言えば無様。妖怪を退治する役目を持つ人間が妖怪の手の上で踊らされているのだから。

だが私は別に彼女を恨んでいないわけでも憎んでいないわけでもない。ただ憐れんでいるだけ。無料の温泉に金を持って来た。地底の環境も人間の身体には良くない。騙される方も悪いとは言うが、今回ばかりは騙した方が100%悪い。まだ幼い人間を自分の駒のように扱うとは何事か。

「お帰りになるのでしたらこれをお渡ししましょう。鬼の国で作られたという鬼ころしと地底の温泉まんじゅうよ………ああいや、この鬼ころしは所謂普通の鬼ころしとは完全に別物。ただの美味しい日本酒です。ご友人方どうぞ」

鬼が自分たちの酒のために生み出した酒虫。普通に醸造される酒よりもはるかに美味しいそれはしかし、鬼が呑むために度数もかなり高い。それこそ人間の造る鬼ころしなどよりもはるかに。

しかし今回私が出したのはその酒虫をさらに改良して造られた酒。地底でも鬼以外からの評判は相当に高いと言われている逸品だ。鬼からすれば薄すぎるので評判はからつきし良くないらしいが、味だけならば勇儀のお墨付き。

しかしこの酒虫は非常に数が少なく、また再び生み出すことも不可能とされている。故にこれは超がつくほどの高級酒。鬼以外なら誰にとつても喉から手が出るほど欲しい酒だが、生憎私はあまり酒を嗜まないで持て余していたのだ。

一升しかないということでお燐も遠慮していたし。美味しい酒を中途半端な量だけ呑むというのはむしろ苦行らしい。あの子らからすれば一斗未満は全部中途半端なのかしらねえ。

地底の温泉まんじゅうは普通に旧都から少し歩いた場所にある温泉街で売っている物だ。名前は『怨泉おんせんの柵しがらみ』ちなみに私が決めたわけではない。と言うか仮にも土産物ならばこんな物騒な名前は付けないでほしいものだ。地底の印象が悪くなる。

元々地底の妖怪相手の商売だから特に問題はないのだが、こういう時には渡すのを躊躇してしまう。土産としてこんなおぞましい物を見せられたらその土地を色眼鏡無しには見られなくなる。

ちなみに怨泉と言うだけあってまんじゅうは怨霊の形。つまり怨泉の柵とはそのまま地底の事。大罪人を模した造形とそれを閉じ込める監獄を模した入れ物。

見た目はあれだが味は普通の饅頭同様美味しい。しかもきちんと温泉の蒸気で蒸しているらしい。そこに力を入れる前に形と名前をどうにかしてほしかった。まともな感性を持っていれば進んで食べようとは思わないだろう。やはり地底の妖怪はどこか感性がずれている。

「毒なんて入っていないでしょうね」

「おやおや、妖怪から施される物がそれほど嫌なら捨てれば良いでしょう。どうしても怪しいのならば八雲に押し付けるのもまた一手あの妖怪ならば喜んで受け取るでしょう」

実際彼女は試作品の味見役としても食べたことがあるし。地底に對しても強く意見ができ、外の世界の食べものも食べたことがある彼女はそのような役にはピッタリなのだ。

味として判断してもらおうならば幽々子さんが一番なのだろうが、彼女には広大な冥界を管理するという役割がある。紫さんを介して間接的に評価を聞くことは可能だが、それはそれで彼女の従者などの関係を含めれば面倒に感じてしまう。

まあしかしここで霊夢さんが渡した物を警戒しているのは相手が私だからだろう。同じ妖怪でも恐らくアリスさんの渡した物ならば

無警戒に受け取るものだと思われる。紫さんやレミアさんが渡しても私同様警戒されるだろう。

つまるところ信用できるか否か。アリスさんは前者。私たちは後者といったところだ。力としては頼りになるが心から信ずることはできない、そんな関係。希薄であるが蜘蛛の糸よりも強い、そんな繋がり。

そこにあるのは妖怪と元人間との違いなのか。或いはそのもの持つ人間らしさであるのか。人間の持つべき温かみというものを持ち合わせていない私には到底理解できそうもない。

だが今回はできれば紫さんの手には渡ってほしくないというのが本音だ。ここで土産を渡すのは紫さんへのささやかな意趣返しのようなもの。

『人間を好いていないさとりならば人間の益になるような事はしないはず』と彼女はきつとこう思って霊夢さんを送り込んだのだろう。この金は霊夢さんへの労いではなく私への手間賃だったとすればどうだろうか。

霊夢さんを少しの時間地底に押し付ける事への手間賃。そう考えれば納得がいく。彼女が何を思って霊夢さんを一時的にでも幻想郷から追い出そうとしたのかは分からない。だが私に金を払った。

紫さんにとって道具に人権はない。それが人型をした式神であっても彼女にとっては意志の無いコンピュータと同じ物。今回は霊夢さんを道具として使った。

だがこの子にはこの子だけの感情が、思想が、意思がある。手土産を渡すのはそんな霊夢さんへの惻隠と共に紫さんへの抵抗を見せるため。

霊夢さんは結局何も言わずに帰ったが、払わせた額以上のリターンを持ち帰った霊夢さんを見れば彼女も理解するだろう。私が人間に對してどのような感情で接しているのかを。嫌いだから突っぱねる、では統治などできない。

彼女はもう少し道具としての人間、式神への接し方を変えるべきだ。そうしなければ取り返しつかないことになる恐れもある。

妖怪と人間との溝が広がれば人里は閉鎖的になってしまふ。そして年月が経ち、もはや人間が妖怪の脅威を忘れ去った時、幻想郷は外の世界との境界を失ってしまうだろう。妖怪や神を失い均衡を破られた世界は直ちに崩壊を始めるだろう。

人と妖、主と従者は常に表裏の関係としてあらなければならない。妖は人がいて初めて生まれる。主とはそれに従う者がいて初めて成立する。妖の頂点として、また強力な従者を持つ主人として存在する紫さんがそのことを忘れてはならない。

抵抗と警告。私が霊夢さんに何も言わずとも彼女ならば理解するだろう。その上で計算高い彼女が今後どうするのか、それは非常に楽しみであり恐ろしくもある。

地底と地上との入り口が開かれた。それは地上の事柄に地底をも巻き込む意思を表しているとも見れるからだ。面倒ごとが増えるならば当然それを次々と処理しなければならない。

面倒ごとを効率よく処理するならばやはり演算能力の高い式神が有用だ。裏の統治者を廃止し、戒を真の統治者として育て上げる。完成はそう遠くないだろう。あとはもう少し臨機応変に対応してくれるようプログラムしなす。様々な状況に対応できるよう教え込むこと

式神を憑けてはいるが、その力は藍さんほど強くない。式神そのものの力だけで言えば橙さんにも劣るかもしれないほどだ。だがこれを逆に利用すればプログラムした以上の働きをしてくれるようになるだろう。その時が今から楽しみだ。

「嬉しそうですね、さとり様。そんなにあの巫女を好いていたんですか?」

「いえ、あの巫女の事は嫌いよ。でも気に入っているのは事実ね………よくわからない? そうねえ……お隣は人間の死体は気に入っているでしょう? でも自分で殺すのは嫌い、それと似たようなものよ」

実際には結構違うのだろうがお隣がそれで納得してくれるのならばそれで良い。この子の事よりも自分の都合を考える私は理想的な

主人とは言い難い存在なのだろう。

でも今はまだ知らなくていい。まだ好きの反対は嫌いでもいい。



さとり、レミリア、紫が談笑している頃。咲夜がまだ時間停止を使わずに地底への縦穴を探している頃。霊夢が紫に唆されて地底に向かっている頃、紅魔館の地下にはまだ侵入者がいた。

侵入者の名は霧雨魔理沙。何を隠そう第一の侵入者であるこいしが館に入るきっかけを作ってしまったのがこの少女である。

こいしは実体を持っているがゆえに壁を透過することはできない。しかし彼女はフランドールの部屋に確かにいた。入るためには彼女の部屋の扉が開いている時に滑り込むしかない。そしてその扉を開けたのが魔理沙なのだ。

過去の一件から、紅魔館の住人よりは魔理沙の方がフランドールの精神を安定させられることが分かっている。別に魔理沙でなくとも霊夢でも構わないのだが、頻繁にここに訪れるのが魔理沙であるだけだ。

こいしが魔理沙についてきたのはたまたまだ。おかしな恰好をして箒に跨りながら空を飛ぶ人間など初めて見た彼女は興味本位でフラフラと付いてきたのだった。

当然魔理沙は気づかず、美鈴もパチュリーも気づかない。図書館からフランドールの部屋へ。そして少しだけ扉を開けて中を確認した魔理沙は二言三言だけフランドールと話すとまた扉を閉めて帰っていった。

少しでも精神を安定させるための交流。それが魔理沙の与えられた役目だった。対価としては図書館の本数冊。貸し出し期限は二週間。未だに守られたことは無い。

だからこそフランドールが館内を走り回っていたという一報を咲夜から受け取った時、魔理沙はひどく驚いたし、パチュリーは何やら

考えに耽ってしまった。

精神安定をした直後に暴れたケースなど過去に無かったからだ。原因は古明地さとりにあると言う咲夜に対し、パチュリーは珍しく怒りを露わにしたが魔理沙はまた別の違和感を覚えていた。

(さとりのやつがこんなところまで誰にも気づかずに来れるのか?)

魔理沙がフランドールの部屋に行った時にはさとりの姿は無かった。となれば考えられるのは魔理沙が図書館に戻った後からこれまでの短時間で美鈴や咲夜の目を掻い潜って紅魔館に忍び込み、そしてフランドールに何かをしたということになる。

魔理沙はパチュリーがこれ程感情を露わにしている物珍しさよりもその違和感の方が気になったのだ。先の異変で一度会った程度ながら、彼女はさとりの性格を概ね正確に把握できていた。普段から他者のスペルカードを研究しているからか観察眼はなかなかのものらしい。

その上で彼女の出した結論は古明地さとりを名乗る何者かがいつの間にか侵入した、というもの。さとりを知っていて誰にも気づかれず侵入でき、かつ他人の心を弄ぶような真似ができる妖怪は彼女の知る中ではただ一人。八雲紫に白羽の矢が立った。冤罪である。

そもそも古明地さとりを名乗る者はただの一人もおらず、侵入者が名乗ったのは古明地こいし。

こいしに悪気はない。騙してやろうという意志など欠片もありはしない。

だがそれを知る者はいない。彼女を知る者がいないのだから。

皆が無意識のうちにあらぬ嫌疑をかけ始める。ある者は私怨から。またある者は自身の持つ知識から。各々が自分の考えを肯定する中、ただ一人当事者だけはその現状を知らない。

冤罪は対立を生み、対立は疑心暗鬼を生む。幻想郷は大きく傾き始めたかもしれぬ。当事者たる悪意無き自由者は誰の目にも留まらない。

とらわれの姫君

さてさて、霊夢さんも帰ったことだし気は乗らないが灼熱地獄跡まで降りようか。既に異変の黒幕があのおの二神であると人間側には伝えられた。となれば彼女らが守矢神社に赴くのも時間の問題だと言えるだろう。未だに向かった様子が無いのは山の妖怪を気にしてか。

兎にも角にも彼女らが神社に行った時にその主である神がいなのはあまりにも不自然。これ以上こちらに面倒ごとを押し付けられないためにもさつきとお帰り願いたいものだ。

「何処に行くんですか？ さとり様」

「ちよつとお空のところだね。そこに元凶の神様が二柱ほどいるはずだから」

先ほどの霊夢さんの発言から分かる通り、彼女を地底に送り込んだのは紫さんで間違いない。すぐ何処かに行つた後向かつた先は恐らくここ。

紫さんは霊夢さんが紅魔館の異常に気付くより前に真実を知りたかつたからここに来たのだろう。そして霊夢さんが間違つても紅魔館に行かないようにしばらく地底で足止めをした、と。

恐ろしく冷静で周到だ。彼女はここに守矢の二神が来ることも予測していたのだろう。犯人が現場に戻るときの心理とはまた別だろうが、彼女らがまたお空の様子を定期的に見に来るだろうことは十分に予測可能な範囲だ。

それでもお燐はまだ疑っているようだ。主人の言動を疑う事も時には大事だけれど。それでも今回はこうでもなければ辻褄が合わない。

「お燐、私の話は決して夢の中の話ではないわ。紫さんもレミリアさんも咲夜さんも、間違はなくこの館に来ていたの。寝ていたのはお燐、貴方の方かもしれないわよ」

「……そうですか。ではあたいもついて行きますよ。今のお空は少し危険ですからね。それにさとり様なら大丈夫でしょうが相手の神は二人なんでしょう？ ならこちらも多い方が良いでしょう」

本当に優しい子。でも本当に疑り深い子でもある。口に出さずとも私にはすべてが分かるというのに……だからこそ本音は心の内に留めるのかしらね。



一方その頃、紅魔館地下フランドールの部屋。

「結局帰って来ちゃったのね。折角自由の翼をあげたと思ったのにな」

そこにはまだ無意識の娘が居座っていた。否、この言い方は正しくない。フランドールが部屋を出て行った後、彼女も一度は部屋を出ている。

その後行く当ても無くフラフラしていたらもう一度ここに戻って来ていたというわけだ。やはり犯人は現場に戻る。しかしそこには何の心理も働いてはいない。何故か惹かれるようにこの部屋に戻って来ていたのだ。

しかしそれに驚いたのはこいしではなくフランドール。咲夜が出て行って一人になったと思った矢先にこのように声をかけられてしまえば驚くのも無理はない。

ただ彼女の感情表現はそう豊かではない。生きている間のほとんどが一人であった為に、他人と比べれば感情が極端に薄いのだ。

面白いから笑う、ではなく皆が笑っているから笑みをつくる。吃驚仰天する、ではなく一瞬肩を震わせる。怒る、ではなく苛立つ。普段の彼女はあまりにも喜怒哀楽の表現に乏しい。

しかし彼女は感情が昂る事もままある。気が触れている、とも言われる彼女は一度スイッチが入ると感情の振れ幅が大きくなってしまふ。

こいしの操る無意識と言う部分がフランドールの本能を刺激し、思わずしてそのスイッチを入れてしまう原因になってしまっている。先ほどは起こらなかつた感情の爆発。抑え込んできた感情の波の暴

走。それはもはや避けようがないだろう。

「貴方は……古明地こいし……そう！　古明地こいしだわ。古明地さとりではなかったのね」

「ん？　あれ？　私フランちゃんにお姉ちゃんがの名前教えたっけ？」

思わぬところで出てきた姉の名前に困惑するのはこいしも同じ。それでも彼女にとって重要なのはどこからその名前が出てきたのか、ではなくその名前自身の持つ意味である。彼女の心を占めるのは何故フランドールが名前を知っているのかではなく最近地霊殿に帰っていないという事ばかり。

「まあいいや。でも折角あげたチャンスを棒に振るなんてもつたいないことしたね。こんな地下に閉じ込められてさ、嫌だと思ったことないの？」

「……でもここが私の居場所なの。地上に出てもみんなにメイワクをかけるだけってお姉様に言われたし……」

「じゃあそのお姉ちゃんをぶっ飛ばせば良いんじゃない？　そしたらフランちゃんも外に出られるしきつと楽しいと思うよ」

あまりにも狂った理論である。こいしは根っからの自由人となっている。故に不自由に甘えて自由を求めようとする者の気持ちが理解できない。

自由を求めるならばそれを手にする未来を諦めてはいけない。こいしはそのためなら何でもしてみろ、とフランドールに言っているのだ。

長時間閉じ込められ、外部との接触も断たれていたフランドールにとって自由という言葉の持つ甘美な響きはとても魅力的に残った。それをこいしの策略だとは気づけず、彼女はそれに手を伸ばした。伸ばしてしまったのだ。

「ふふ……今日は曇り。私で良ければ少しだけ遊んであげる」

そう言って今度こそ部屋から地上へ向かうこいし。フランドールもそれに続く。

全てはレミリアをぶっ飛ばすために。レミリアと咲夜は紫のスキ

マ空間の中で気絶中。パチュリーと魔理沙は図書館内。美鈴は昼寝中。

誰も二人に気づけない。瞬間、紅魔館が爆発した。

姉の苦勞妹知らず。

さとりが、レミリアがこれを見ればどう思うだろうか。愛ゆえに野放しにし、愛ゆえに閉じ込め、それでも姉の愛は妹には真つ直ぐ届かなかった。

彼女らが姉の愛に気づいていればこのような事には決してならなかっただろう。正反対で、それでもある意味似た者同士である妹たちが幻想郷を傾ける。

後に間欠泉異変のEXTRA^{後日談}として一緒に語られることになる妹たちの下克上。

親の心子知らず。姉たちは勿論、幻想郷の親である紫もまたこのことに胃を痛めることになるのだがそれはまた後の話。



分かっではいたがやはり力は別格だ。地底でもまともに渡り合えそうなのは勇儀や萃香くらいか。それだけでも神という存在がどれほど自分たちと次元を分けて生きているのかが分かる。

何せこの二柱は外で生きて行けなくなったからと幻想郷の信仰を頼りにやって来た、いわば敗走者のようなもの。それでも妖怪の頂点に近い者たちと余裕で渡り合うのだ。矮小な私たちがいくら束になっても勝てつこない。

スペルカードルールという決闘法が無ければもはや勝負にすらならないだろう。彼女らが少しやる気になればお燐でさえも蹂躪されるだろうというのが目に見える。

それほどまでに強い。まさに異次元の相手。紫さんの境界や咲夜さん、輝夜さんの時間干渉では破れない意識的な次元の差。それをまざまざと見せつけられている。

「うーん、本当にいたよ。となると寝ぼけていたのはあたいの方なんでしょうかねえ」

「さあどうかしら。紫さんの事だから特殊な結界でも張っていたのかもしれないわ。どちらにせよ私が寝ていたわけではないのは確定ね」
つまり最悪の事態とも言える、こいしのフランドールさんへの干渉もまた事実ということになる。何か変な事をしていなければ良いが。とにかく紅魔館とのコネクションが無くなるようなことになるのはかなり拙い。

レミリアさんが紅魔館の多勢に寝返ってしまいうようなことになれば地底は大きく傾いてしまいかねない。洋酒が無くなった後の鬼の暴動も心配だが、一番懸念すべき点はやはり紅魔館全体の意見一致による地霊殿への襲撃か。

総出で対処しようにもやはり主人同士の対決になれば分が悪い。何よりも相手の狙いは私一人になるだろうからそもそも対処しきれない気がする。

だが今あれこれ考えすぎるのも良くない。生じ得る未来はそれぞれ無数に存在し、レミリアさんのような能力も無い私では到底絞り込むことなどできない。今はまだ経験から僅かな手を選び取る事しかできない。

今考え得る最悪の場合は地上と地底の全面戦争になること。こうなればもはや地底側に勝ち筋はない。紅魔館は私たち+α、妖怪の山は鬼で完封できるとしても他、特に八雲と永遠亭があまりにも厄介すぎる。冥界は紫さんからの要請が無い限りは不干渉だろうから考えなくていい。

後はそうか。この二柱が住む守矢も相当に厄介だ。妖怪の山とは完全に別勢力だと切り離して考えるべきか。そして最後にして最悪の博麗。妖怪にとっては相性が悪すぎるのもあってまともにやり合えば大ダメージは避けられない。

風見幽香は恐らく完全に不干渉を決め込むだろう。あの妖怪は俗世に全くと言っていいほど興味がない。自分の生活と花が脅かされなければ、いくら紫さんからの願いとあっても無視するだろうと思う。これは単純にありがたい事だ。一介の妖怪としては破格の強さを持っているし。

最悪の場合を想定することが大切であるとは言え、そもそも全面戦争などならない方がよい。地底の方がより大きなダメージを受けるだけで、地上もかなりのダメージを受けることになるだろうから。「おやおやおや、お前がお空こいつの主のサトリか？」

会った瞬間に気を引き締めてくるか。こちらが臨戦態勢に入っているわけでもないのに敵対心をむき出しにしてこちらを見てくる理由は……なるほど。

少々揺さぶってみるか。どうせ神には通用しないだろうが物は試しだ。

「いかにも。私がおの子の主にして地霊殿主人である覚妖怪、古明地さとりでです。それにしても……フランクだと聞いていましたが話とは随分と違うようで」

「ふん、私は別に地底の妖怪からの信仰など求めちゃいない。私が地底の妖怪どもに求めるのは神への畏れのみよ。フランクに接してしまえば畏れなど吸い上げられんだろう？ 地底の妖怪どもは皆私に畏れをなすが良い。何、悪いようにはしないさ」

「ふっ、あはははは」

笑わせてくれる。地底の妖怪から強引に畏れを引き出そうとするのを黙って見ていようとでも言いたいのだろうか。ただでさえペットを良いように使われているのに。

ああ、私は本当に神が嫌いだ。あまりにも自分勝手。あまりにも傲慢。

でも私では相手にならないほどに強力。故に私から出せるのは拒絶ではなく譲歩の一手。

別にこの神たちだって悪意があるわけではないのは分かっている。信仰が無ければ生きられない、畏れられなければ姿を保てないのは妖

怪だって同じこと。

「失礼。ですがそれはあまりにも一方的で勝手な暴論じゃないですか？ お空も私の大切なペットの一人。それを主に黙って改造。それだけでも笑止千万ですよ。その子が強くなりたいと望んだから？ そう思わせたいのは貴方たちなのよ。」

その上でさらに他の妖怪たちからも畏怖されようとするのですか？ それは流石に黙認できないですよ。面倒な事に地底を巻き込まないでもらいたいわ」

直後に飛んでくる殺気。こりや拙い。下手すりや中てられているだけで気を失ってしまうかもしれない。というか殺す気満々だ。私を殺せば紫さんも黙ってはいないだろうが、たとえただの脅しのつもりでも私としては怖いからやめてほしい。

つい最近戦の味を思い出したせいでもた血が騒いでいるのだろうか。できればそういうのは地上で発散していただきたいものだ。私に向けてくるのはやめて。

「やめな、神奈子。確かにこの件に関しては私たちも悪いさ。これじゃただの侵略だよ。ま、あんたは私の国に侵略してきた実績があるけども」

うひょー。助かった。絶対に殺されると思ったから本当に気絶寸前だった。

まさに捨てる神あれば拾う神あり。心の中では勝手に洩矢様と呼んでおこう。崇め奉るような事は絶対にしないが感謝くらいはする。

「……………そうだね。すまなかつたな、さとり。ただ私たちも何の意図も無く八咫鳥を降ろしたわけじゃない」

「(こちら)そ良い過ぎましたね。すみません。…………お空の力を貴方たちの計画の下利用するのは許可しましょう。当然お空本人も了承すれば、ですが…………ああ良いのね。ではそれは許可します。ですが地底への過度の干渉は避けていただきたいところです。」

当然私たちも妖怪。しかもここに閉じ込められていますから地上よりも畏れられにくいのが現状です。先の異変でようやく地底の存在が明るみに出てその恐ろしさも人間に伝わったでしょう。ここで

あなた方がそれを制圧したとでも言ってしまうえばその畏れは一気に冷めてしまうのですよ」

私が一番謝ってほしかったところは勝手にお空に力を与えたところだったのだが、それに関しては一切の謝罪もないようだ。だがそれも仕方あるまい。相手にとっちゃ力を欲した妖怪に究極の力を与えてやったわけなのだからむしろ貸し一つと思っているだろう。

それについて追及し始めるとまた話が平行線を辿りそうなのでここは切ってしまう事にする。私だって暇ではない。不毛な論争をするくらいならば状況に応じて折れることくらいなんてことはない。しかし私が過度な干渉を避けてもらいたいにはもつと重大な理由がある。

「……というのはあくまでも建前に過ぎません。一番避けたい事をこれからお話しましょう。それは私の存在が明るみになる事。今の地底を治めているのはあくまでも私の式神ということになってしまっていてね、私は世間では死んだことになっているのです。

もし今も私が生きていることが地底中に知られたらどうなるでしょう。恐らく被害は百数十年前の騒動をはるかに超えるでしょう。ええ。私を殺すために起こった暴動です。え？ どうして生きていることがバレていないのか？ ふふ、簡単な事です。私の式神が騒動の主犯ですからね」

「敵将を自分の駒にして操っているというのか？ なかなかクレイジーな事をする奴もいたもんだ。紫の言っていたこともあながち間違っていないかもしれないな」

いやだからそのイメージは間違っている。あまり私を過大評価しない方が良くと思いますよ。私は平和主義者だから戦う事なんてほとんどないでしょうが。

「分かった。信仰の糧に地底を使うのはやめよう。その代わり頻繁に出入りはすることは許可してもらいたい。これで良いか？」

「ええ、それで構いません。しかし今日はもう地上に帰った方が良いでしょう。どうやら厄介な事になっていそうです」

紫さんが私を放置してまた何処かへ行ってしまったことを考えて

も、また地上で何か動きがあったと考えるのが妥当。その中心にいるのは恐らくこいし。

もう何か月も帰っていないのに心配事だけは引っ提げてくるこいし。早く帰って来てちょうだい。地上からの報復がある前に。

りんごは握りつぶされた

何とか威圧感のある神を地上に追い返したが、どうにも今日はイレギュラーな事態が多すぎる。これからいつものように仕事をしようと思ってもきつとどこかで邪魔が入るだろう。

私と地上を最も強くつなぐのは紫さんではなくこいし。そんな子が渦中にいるのだと言うからにはこんな場所でのうのうと過ごしている時間ももつたいなく感じる。だが私が地上に出ることは好ましくない。地底と地上双方にとつてだ。

今までの経験から立てられる予想として、こいしが地底に帰ってくるのは主に二パターンだ。一つ目は当然彼女の気が向いた時。年に数回ほど何となく帰ってくる事がある。二つ目は私が何らかの理由で危機に瀕している時。

あの子は何故か私の身が危なくなれば帰ってくる。多くの場合私があの子の姿を直接見ることは無いが、それでも後から聞いた話に出てきたり、私の意思とは無関係に身体が動いたりという経験は今までも何度かあった。

本当に何故帰ってくるのかは分からない。理屈ではない部分で彼女の本能がそう告げるのだろうか。無意識だからこそ本能に正直で敏感なのか？ 私にはそのあたりの事はよくわからない。

とまああの子に確実に帰って来てほしいならば私が危険な目に遭えばいいというわけだ。生半可なものではなく、それこそ命の危険を感じるレベルで。

もちろん嫌である。確かにあの子の事は心配だが、その見返りが私の命では重すぎる。あの子が地上で好き勝手に振る舞った結果私の命が刈り取られる可能性は無きにしも非ずなのだが、それでもできるだけ長く生きたいと思うのはいくら妖怪であるとはいえ生者の性というもの。

つまり何が言いたいかと言えば、今の私にはあの子を止める術がないということだ。姉の権力なんてものはありはしない。

私よりもよほど厄介なあの子を止められる人はきつと地上にもい

る。それに紅魔館の連中も流石にフランドルさんが関わったとなれば本腰を入れてくるだろう。その結果あの子が干されるような事にならなければ良いのだが。



「お嬢様……これはいかがいたしましたでしょうか」

どうしようもこうしようもない。八雲の罠から解放されたと思っただらこれだ。

「とりあえずは皆の安否確認が先決ね。美鈴は………あの間抜け面は寝起きね。後で叱っておきましょう。心配なのはパチエとフランね。探すわよ、咲夜」

そう言っただけで崩れ去った我が館跡へと舞い降りる。今日が曇りで良かった。いや、そうでもないか。これだけの被害を出したのは恐らくフラン本人。もう館の中にはいないと考えるのが自然だ。

問題はこれが唆された結果なのか自発的に行った結果なのかというところ。多分前者。しかも唆した本人は悪意も無いと思われる。紅魔館と地霊殿の対立は深まるばかり、か。

「あつ、お嬢様に咲夜さんじゃないですか。お二人は外出なさっていただけですね。でも丁度良かったです。たった今原因不明の大爆発が起こったところでして……パチユリー様の魔法実験の失敗か何かでしょうか」

うむ。確かにそれも候補の一つに入れるべきか。ここまでの大爆発を起こすような実験をしたら彼女自身の身体が危ないからしないと思うけど。

とはいっても事の詳細を知っている私からすればやったのはフラン一択。この館にフランがいなければそれは確固たるものになる。だから美鈴に気配の探知を行ってもらうことにする。生存確認も兼ねることができるので案外便利なのだ。

「うーん……地下に比較的大きな反応が三つありますね。地上にぼつ

ぼつ残っている矮小な反応は妖精たちでしょう」

「地下に三つ?!」

「え、ええそうですが……恐らく妹様とパチュリー様と小悪魔ですよ
ね。どうかなさいました?」

何でもないと口では言っておくが正直に言うとは完全に訳が分からない。錯乱状態である。さとりがいればそれはそれは良い笑顔でこちらを見るだろうほどに。

考えていたことすべてが水泡に帰したことになる。

仮にフラン以外が紅魔館を爆発させたとして、この規模の爆破が瞬時にできるような存在は相当限られる。

まずは先ほど美鈴も言ったようにパチエの魔法。貧弱でも魔力だけは多いので当然魔法の威力は高い。可能性として一番高いのはこれだろう。

次に八雲紫。あいつの場合は底が知れない分、爆発を起こせるのかも正直不明。それでも私たちがあいつの空間から抜け出した直後に起こったことを考えれば十分容疑者であろう。

次いで河童と月の連中。河童に関しては恐らく紅魔館に喧嘩を売ることに対する不利益が分かっているだろうから無いだろうし、永遠亭の奴らは八雲以上に動機が思い浮かばない。

次にフランが爆発を起こした場合についてだ。爆発を起こしたのちに地下に戻ったとすると一応辻褄が合わない事は無いのだが、そうするメリットが考えられない。

さとりの言っていたように犯人は現場に戻るといふ心理に基づいた行動なのだろうか。仮にそうだとしてみわざわぎ地下の自室(と思われる)まで戻る必要はあるのだろうか。凡そ犯行が不可能な位置にいることで犯人が自分ではないと主張する算段なのか?

「おや? 変ですね。あの規模の爆発ならばこの辺りの装飾品は軒並み全滅かと思っていきましたが……。妖精も何事も無かったかのよう
に元気ですしどういう事でしょうか」

館の残骸に近寄ってみて初めて分かった。館は破壊されているが中はそのなに家具の破片が散らばっているわけではない。崩れ落ち

た館の下敷きになって破損しているといった感じだ。

となるとやはり犯人はフラン以外に考えられない。ただの爆発ではなく館のみの破壊でなければこうはならないはずだからだ。

咲夜はパチエが家具を魔法で保護していたのではないかと云っているがあの親友に限ってそれは無い。我が親友が大事にしている物は館の家具ではなく図書館の本。

本には全て恐ろしいほどの保護魔法がかけられているというのに、妖精がよく落として割ってしまう壺なんかには魔法をかけてくれない。そんな奴なのだ。私はあんな壺の良さが分かるほど目が良くないので割れたところで別に何を思うでもないのだが。

あくまでもパチエの魔法実験失敗説を掲げ続ける従者たちとは違って私は概ね答えにたどり着きそう。だが私の推理が間違っていれば余計に面倒なことになるのでまだ二人には言えない。地下にいるフランを問いただせばわかる事なのだから急ぐ必要も無い。

しかし何を意図してこんな破壊を行った？

何を思つて地下に戻った？ やはり私にはさっぱり理解できそうにない。

あと気になるのはこいしの行く先か。さとりによれば今日フランに接触したのはこいしで間違いないとのことだ。しかしその後の行動が全くつかめていない。

フランが咲夜と遭遇したタイミングで既に紅魔館から出ていたのか。それともいまだにフランと共に紅魔館に残っているのか。無意識を操るといのがどこまで通用するのは分からないが、美鈴の探知を意図的に回避するくらいはできるのではないだろうか。

しかしそうなるともはや彼女を探すことは不可能に近い。意識して彼女を見つける事はできないらしいからだ。不意に、いつの間にかそこにいる、という状況以外ではさとりでさえも見つける事は不可能だという。

ならばどうする。一時彼女を認識できなくなれば相当親しくない限りは断片的にしか彼女を思い出せない。まだ一緒にいる可能性にかけて先にフランの部屋に行くか。美鈴の探知に引つかかったとい

う事はパチエたちも無事ではあるようだし……うぬぬ………うん
決めた。

「先ずフランの安全を確認しましょう。最深部だから部屋ごと埋めら
れて寝床に閉じ込められている可能性もあるわ」

それっぽい理由で先ずフランに事の詳細を確認をしに行くことに
する。

「——っ！ 今何か聞こえなかった？」

キーンと耳をつんざくように一瞬鳴った耳鳴りのような不快な音。

それでも咲夜と美鈴には聞こえなかったらしい。だとすれば本当
に耳鳴りだったのだろう。幻聴が聞こえるようになればいいよ
もって危ないと判断されかねないから気のせいだということにして
おこう。私はまだまだ健在だ。



「どうかなさいましたか？ 紫様。私共にできることなら何でもいた
しますが」

八雲藍は非常に困惑していた。朝から忙しそうに外出していた主
が大層疲弊した様子で帰って来たからである。

普段の主の姿とはかけ離れた様子を見て、彼女も何か不穏な空気を
感じ取ったのだろう。

「ならばしてもらおうかしら、とはならなさそうね。貴方はただ結界
の管理をして橙の稽古をつけていればそれで良いわ。今回の件に関
して貴方ができることは無い」

彼女の主、八雲紫も相当参っていた。朝、地底との不可侵条項を撤
廃したところまでは何ともなかった。だがその後、紅魔館に立ち寄っ
たことで彼女の運命は大きく変わり始めてしまったのだ。

先の異変で中断してしまった冬眠を再開しようと画策していたと
ころにこれだ。なお紫が冬眠しようがしまいが藍が為すべき仕事は
増えも減りもしない。

普段なら冬は完全に無気力になる紫が忙しそうに動き回っているのも彼女が混乱している原因の一つであるだろう。

結局先の異変は人間と紫たちの援護によって無事に収まった。主が河童や天狗などと手を組んで人間を援護する中で、藍はただ適当に幻想郷を見張りながら主の帰りを待つことしかできなかつた。

藍はあくまでも式神。定められた命令に沿って動く忠実な僕だ。紫は式神をソフトウェアと表現する。元の人格に憑依させた藍という式。しかし一般のハードウェアとは異なり、本体も思考を巡らせる程度のことなら軽くこなせる。

紫の憑けた式神があまりに強力であるがゆえに完全な思考の自由が許されているわけではない。しかし元が最強の妖獣である九尾には捨てがたい感情が強く残っていた。

その一つが矜持。プログラムされていないにもかかわらず自身より弱い相手に対して高圧的に接するのはこの感情が強く出ているが故だろう。

しかし彼女のそれは主によってよく傷つけられる。異変時も紫は藍を頼って解決に赴くことは無い。彼女が助力を求めるのは藍よりも力が弱いであろう妖怪ばかり。

河童も、天狗も、森の魔法使いも（実は覚妖怪も）実力で彼女には敵わない。自身の方が強い、という自負があるからこそ彼女は傷つけられる。

残るのは強い無力感。主のためになる事を何もできない自分に呆れるのが異変後の日課になりつつある。何かあっても頼られるのは自分ではなく他の弱者たち。自分には紫の式たる資格が無いのではないかとぐるぐる思案を重ねる日々。

そこに投下された今回の言葉。——— 貴方ができることは無い

紫にとって悪意はなく、それどころか藍への期待をも含んだ言葉だった。

今は橙を役に立つくらいまで育て上げる事。藍ならばそれができるはずだ、と。自身が何もしなくても藍ならば結界の管理に問題は生

じないだろう、と。

主が滲ませた期待と信頼が全て従者に届くわけではない。言葉足らずと言ってしまうえばそこまでだが、紫は藍がそこも含めて理解できるようになってほしいと願っているのだ。

「本当に……私にできることは他に無いのですか………?」

悔しいのだろう。

声が少々震えているのを自覚もしていないように絞り出すその声には悲嘆もわずかに含まれているようにさえ感じる。

紫もそこまで理解できぬほど鈍感ではない。どうにも仕事を与えていなければならぬと考えた彼女は短冊にさらさらと何やら書き付けて藍に渡す。

『八雲立つ 雲間抜ければ 夏は来ぬ 惑い止まれば 春はまだ来ぬ』

「これが理解できれば貴方を異変解決に帯同するわ。でもそれまではまだ、早い」

のこされた選択肢

とりあえずフランの部屋の辺りまで来たのは良いのだが、肝心のあの子が何処にいるのか皆目見当もつかない。

「フライン、フライン？ 何処にいるのー？ ……おかしいわね。本当にどこにいるのかしら」

呼びかけても返事も聞こえない。鍵を無理やりにもこじ開けようか。かなり強固なものだから私の力でも簡単には開かないかもしれないが。

そう思っただけ思い切り取っ手を引っ張ると、恐ろしいほど簡単に扉が開いてしまった。そのせいで思い切り力を入れた私が後ろの壁にたたきつけられてしまったのは言うまでもない。痛い。

思わず咲夜の方を睨むと、何やら勝手に弁明し始めた。別に怒っているわけではないのだが面白いから話させておこう。普段冷静沈着な彼女が、ここまで慌てふためく様はなかなかお目にかかれないうからせめて今のうちに脳に刻み込んでおくか。

あとで弄るタネにでも、と咲夜の弁明を背景音にしてフランの部屋を探るがどこにもいる気配が無い。元が然して広くも無い部屋兼地下牢。まさかあんな小さな戸棚に隠れるとも思えないから隠れるような場所も寝床以外には存在しないと考えられる。

しかし案の定と言うべきかそこにもいない。問題はこいしの能力の可能性だが、恐らくそれは無視できるものだと思われる。彼女の能力の限界は彼女自身にまでだろう。無意識を操ると言っても他人を無意識の領域に置くというわけではないはずだ。

どちらかと言えば他人の無意識部分を刺激するというのが正しいか。本人ですら気づかない思いも彼女なら操れるという風なものだろう。つまりここにこいしはいてもフランはいないと見るのが良さそう。そうなると地下の三人と言うのがそもそもおかしくなるよな……。

「地上で凄惨な音がしたと思ったら今度はフランドールの部屋？ まったく今日は騒がしいわね」

「あらパチエじゃないの。フラン知らない？　ここにはいなさそうなんだけど」

そう言うと、つい先ほどまで怠そうにしていたパチエの目が見開かれ、まずはフランの部屋の中を一周ぐるりと見渡した。

次にゆっくりと私の方へ顔を向けてきたが、その顔からは何とも信じられない、と言った感情が読み取れる。フランがここにいないのは彼女も想定外だったらしい。

「ごめんなさいレミィ。今回は私の過失のようだわ。一度あの子が部屋から飛び出した後鍵を修復し忘れていたみたい。あの子は何処に……」

「うひゃー。地上はかなり悲惨なことになってたな」

「あら魔理沙。もう見て来たのね。ご苦労様」

……………そうか。美鈴の探知には確かに三人引つかかった。しかしその三人と言うのがフラン、パチエ、小悪魔ではなく魔理沙、パチエ、小悪魔だったのか。そう言えば今日の午前中に魔理沙が来た。もう帰っているものだと思い込んでいたが。

ここに来て私の初めの推理が正しいことになった。フランもこいしも恐らく紅魔館にはいない。恐らく、と言っているのはこいしの能力が未だによくわかっていないからだ。こんなことならさとりにも少し聞いていれば良かったと思う。

「あれ？　先ほどの爆発はパチユリー様たちには関係なかったんですか？　てつきり実験でもしているのかと思っていましたが」

「私たちは何もしていませんわ。いつも通り過ごしていたら地上から爆音がしたけれど。美鈴の方こそ地上で何かあったのなら見ていたんじゃないの？」

「え？　あはは……何かありましたっけ。特に記憶にはありませんけどね」

そりや寝ていたら記憶にも無いでしょうね。起きていたら事の一部始終を見ていたかもしれないだけに、美鈴の今回の罪は大きい。

「美鈴は後でお仕置きね」

少しきつめの。ここらで灸をすえておかなければいざという時の

防衛に支障をきたす恐れがある。戦闘となれば頼りになるのにこの欠点があるから惜しい。美鈴が門前で堂々と寝るせいで紅魔館の品位が疑われる恐れもあるし。

美鈴はその顔に絶望の色を浮かばせて情けない悲鳴なんかあげているが、そんなもの私の知ったことではない。大事な時に寝るからこうなるのである。

「とりあえずフランを探しましょう。きつとさっきの爆発に乗じて逃げたんだわ。あの子の行先に関して何か心当たりのある者は？」

聞いてみたは良いものの当然そんなものに心当たりのある者はいない。だってあの子は外との接点が無かったはずだから。一番外に近い存在は魔理沙だが、それでもフランとは定期的に話す程度。あとフランが関わったことのある奴と言えば霊夢と天狗か。

どちらも今回の件に関わっている気はしない。霊夢はまずあり得ないし、天狗の方は自ら厄介ごとに身を突っ込むくせして意外にも面倒ごとを嫌う質からだ。

フランを攫うとは思えない。まあ結局たどり着くところはこいしになるのだろうが、他に何か心当たりがあればそちらを優先したかった。それだけだ。

「あの、お嬢様……やはり古明地さとりなのではないでしょうか。先の異変の首謀者たる彼奴ならば地上への怨みもあるかもしれないませんですよ」

「心を読むというあの。なるほど確かにそれは否定できないわね。地底の妖怪共にとって地上はまさに理想の楽園。そこに住む奴らにやられたのだからその報復に來てもおかしくはない、と」

ここに魔理沙がいるのが面倒だ。私たち紅魔館と地霊殿の関係を悟られるわけにはいかない。そんなことが知られたら、また霊夢が退治しに來るかもしれないし。

それに八雲紫も何か言ってくるに違いない。私たちの生活を安定させている最大取引先を失うのは当然大損失。だから咲夜もパチエも、他人の前ではさとりへの憎悪を隠しているのだろう。

それにしてもさとりは不憫だと思う。彼女が何かしたわけでもな

いの他に者に嫌われるなんて。紅魔館内の問題に関しては、恐らく私が彼女の事を嫌いになればかなりマシになると思われる。でも私にそんなつもりはさらさらないから現状は何も変化しないだろう。可哀そうに。

「ちよつと待てよ。さとりがそんなことをするような奴には見えなかったぜ？」 咲夜は本当にフランのやつからさとりの名を聞いたのか？」

「ええ間違いないわ。そもそもこの私が主人の妹の話半分で聞くとお思いで？ それこそ天地がひっくり返ってもあり得ない事だわ。次に同じような事を言ったらその時はお嬢様への侮辱とも取るわよ」 「なんて理不尽な奴だ。おいレミリア、お前のとこのメイド教育しなませよ」

確かに理不尽。そもそも咲夜がフランから聞いたときにはこいしの事をあまり覚えていなかっただろうから、むしろ話半分で聞くべきだったんだけど。

というかそもそも咲夜をメイドとして教育したのは私ではない。

「そういうことは私じゃなく美鈴に言っただろうだ。ま、咲夜も食いかかるのはみつともないからやめなさい。魔理沙のいう事が間違っているという保証も今は何処にもないんだから」

「そうは言ってもお嬢様……」

「何？ 言いたいことがあるら聞かせるけれど」

「……………いえ、何でもございませぬ」

これでよし。咲夜は時たま冷静さを欠いて熱くなる癖を直してほしい。満月が熱く、紅く輝くのは異変の時だけで十分だ。

今の状況も異変のようなものだが、それでも今はまだ冷静に物事を見つめていてほしい。

十六夜咲夜、つまりは満月。常に冷たい光を反射し続ける蒼い瞳に對して、また吸血鬼と寄り添う者としての名。

しかし満月は時に荒ぶる。それは月が食われて真の闇が訪れる時だ。闇夜に冷たい光を与えるのが満月ならば、紅く燃えて暗闇を生み出すのもまた満月。時を止め、他者の視界から消える時、咲夜の瞳は

紅くなる。

さどりの所に行つた時には我を忘れて熱くなる。満月は食われ、自身の姿さえ見えなくしてしまう。残念ながら紅い満月は自分自身をも盲目にしてしまうのが理というわけだ。

だが今はまだ、フランを見つげるための光を放っていてほしい。



今日は本当に来客が多い。と言うか本日来訪二回目のお客さんは紫さんに続いて二人目なのだが。本当に、下手に仕事に手を付けていなくて良かった。でも今日一日でこれならば明日以降どうなるか分かつたものではない。

早くこいしが見つかつてお説教されることを祈るばかりだ。あの子は私に迷惑をかけている気はないと思うが、どうやら地上では私に對してあらぬ嫌疑をかけられているようだ。

「お久しぶりですね魔理沙さん……と貴方はレミリア・スカーレットですか。碌な事ではなさそうですが本日はどのような御用で？」

「何、うちの咲夜がお世話になつたそうじゃない。お礼でもと思つてね」

ああ、またこの茶番を演じなければならないのか。これが割と面倒くさい。本当の関係を知らない者の前で地上と地底の不仲を演じるためには、どれだけ心が痛もうとも相手を傷つけるような発言をしなければならぬ。

と同時に私自身も傷つけられるような発言を聞くことになる。私の場合には相手の心まで読めるからダメージは少ないが。

それでも割と辛いのは本当だ。紫さんの場合はきちんところちらに重圧までかけてくる徹底ぶり。それに耐えつつ演技もしなければならぬのだから疲労は倍増である。

「ほほう？ それは面白い。彼女の主だというからどんな化け物かと思えば小さな子供ですか。その態なりで私と遊ぼうとでも？ 馬鹿な事

を」

「お、おい。二人とも急に険悪になるのはやめろよ。な、レミリア、さとりだつて最近ペットがいじめられて怒りのやり場が無いだけだと思うぜ?」

「あら、魔理沙はそいつの味方をしようつての? くつくつく……別に構わないわよ。怒りのやり場が無いのはこちらだつて同じこと。うちのメイドがさんざん可愛がられたんだもの」

レミリアさん……楽しんでるんじゃないよ。これ以上変に拗れると魔理沙さんの精神がもたなくなりそう。私は精神を壊すことはできても修復することはできない。

ただの猿芝居で精神崩壊なんぞ起こされれば堪ったものではない。地上の貴重な戦力が削がれることになるから紫さんにもお叱りを、酷ければ折檻される恐れもある。

「可愛がつてあげたのですからお礼の一つくらいしてくれればいいですのに。今日はそのメイドもいないんですか? いればあの時以上に可愛がつてあげたのに」

「^{昨夜、美鈴、パチエは私たちとは別行動きとりに会わせると色々面倒だから}馬鹿め。お前に会いに来るのに連れてくるわけがなからうよ。」

「^{こいしについて調べてお前こそどうなんだ? 何処にいるか知らない? やるが何処にいるんだ?}私もペットたちを可愛がつて

あくまでもこの言い合い擬きは続けるというスタンスか。これ、私だけ異常に不利じゃないか? 下手すればかなり長引くかもしれない。

私よりも魔理沙さんがこの状況で平静を保てるかが心配だ。少しずつイライラが募っているようだしできるだけ手っ取り早く終わらせるのが吉だ。

「知らないですよ。私はあくまでも放任主義なんでね。貴方のところと違って縛り付けないのでのびのび生活させてるんですよ。でも私の猫に手を出すようなら貴方の犬を無惨に作り変えてあげる」

「くつくつく……」

本来ならば、私が直接フランクン共々見つけてお前自身を私の手で直接可愛がりたいところではあるが、念な残念が

八雲紫に頼るほかなさそうね
それをすると八雲紫が黙つてはいまい」

嘲笑を間の繋ぎに使うでない。でも私も紫さんに頼るのが最適だ
と思う。彼女ならばおよそ行けない場所はない。あとは……そう言
えば鈴仙とかいう玉兎は波長を操つて姿を隠しても音を消しても気
づけるような者だつたはず。

「奴は面倒ですからね。奴から姿を隠すなら位相を変えるくらいしな
ければ。ま、私にはできませんし当然貴女ごときにできるものでもな
いでしょうけれどね。奴から逃れるのは実質不可能。鬱憤は鬼にで
も晴らすと良いわ。さ、出てつた出てつた」

これ以上滞在させると流石に魔理沙さんが爆発しかねない。紅魔
館の爆発に次いで地霊殿まで爆破されるなどどうにかしてでも避け
ねばなるまい。

ということできつさと帰らせる。私だって自分の命が惜しいから
ね。

「すみませんね魔理沙さん。今度地底にいらした時には温泉と兎鍋で
も提供しましょう。もちろんそのチビツ子吸血姫を連れて来さえし
なければ歓迎しますよ」

結局傍で聞いていただけの魔理沙さんにとっては最後まで罵詈雑
言が飛び交っていたわけである。これに関しては致し方なかったと
はいえ申し訳ないと思つている。完全にこちらの都合で居心地の悪
い雰囲気にしてしまったのだから。

次来るなら歓迎しよう。ただしレミアアさんの場合はその従者親
友たちが付属するから却下。あの容赦ない嫌悪を向けられたら覚と
して情けないが私の心がきつともたない。

未だ掴みきれぬ尻尾

どうしてこうなったんだと思っているのはきつとさととりも同じだろう。どうにもこの辺りの関係と言うのがなかなか面倒くさい。

確かに紅魔館と地霊殿が地底の異変以前から懇意にしているというのには隠すべき事実だろう。実際仲良くしているのは私とさとりの間くらいだと思うが、それについては今は触れなくていい。

致し方のない事であるとはいえ、さとりとああして暴言を吐き合うのはあまり愉快な事ではない。むしろさとりの発言に本心が混ざっているのではないかと少々不安にもなる。

だが一方であれを楽しんでいたのもまた事実。あのような冗談を言い合える仲にあるのは親友のパチエか、このさとりくらいだからだ。

さとりの場合は私にも理解できるように話を進めてくれるのが尚ありがたい。パチエは偶にチンプンカンプンな小難しい言葉を並べ立てるからか、彼女との会話は心の休息になり辛いという欠点がある。それさえなければ悪い奴ではないんだけど。私を思ってくれてるからこそさとりを嫌うんだろうし。それはそれで迷惑だけだね。

とりあえずこいしについての話に思考を戻そう。

さとり曰く彼女の場所は分からない。監禁も良くないが放任と言うのも困りものだ。

少し気になった問題は「私の猫」が自由気ままなこいしを表す隠語だったのか、それとも文字通り彼女のペットの火車だったのかだ。その後の「貴方の犬」は明らかに咲夜の事だ。

『こいしに危害を加えればどうなるか分かってるんだろうな?』という脅迫まがいのものであったのだろうか。深く読むべきか否かは判断できないが、とりあえず見つけられない事には始まらない。

「結局さとりの奴は犯人じゃ無さそうだったな。文のような速さがあるわけではないし、咲夜や紫みたいなのは反則的な移動手段があるわけでもない。何故か知らんがどっちとも仲は悪そうだったしこの短時間

であいつが地底まで戻るのとは不可能だっただろう」

「ええそうね。となると影で人を操っているのはいったい誰なのかしら」

そう言えばあの子は八雲紫とも不仲を演じさせられているんだっけ。実際は私よりも仲が良いと思うけど。思い出したくも無い月面旅行の最終的な成功にもさとりは暗躍していたし。一瞬見ただけだったが、あの時も八雲に請われて参加したようだ。まあ彼女が自ら月に行きたいなんて言うはずもないから当然と言えば当然か。

八雲紫……さとりが厄介だと発した言葉の本質もまた理解できてはいない。彼女が放浪者にとって厄介な能力者だから積極的に応援を要請した方が良いと言いたかった可能性もあれば、私たちにとって厄介だから頼らない方が良いと言った可能性もある。

だが彼女が最も伝えたいと思ったのはその次の言葉だろう。八雲紫の能力から隠れるならば位相をずらす。位相と言えば波。それくらいはわかる。しかし波が何に関係するのか、それが瞬時には理解できなかつた。

理解できたのは彼女が魔理沙に伝えた言葉の中にヒントが混ぜられていたからだ。あの場面、彼女なら決して無駄な発言はしないだろう。彼女の発言内で最も波に関係のありそうな単語は温泉だったが、温泉に解決策があるとは思えない。

となれば残りは兎鍋の方だ。と言うか兎だ。波に関係する兎と言えば永遠亭に人を狂わせる兎がいたはずだ。名は確か鈴仙・優曇華院・イナバと言ったか。

とにかく次に私たちが目指すべき相手はその鈴仙ということになる。だが、ここで急に彼女の名を出しても魔理沙に疑われるのは明白であり、仮に彼女に頼ろうと私たちの間で決まったとしてもその理由が浅ければあの薬師は貸し出してくれないだろう。

どうにかして魔理沙と鈴仙を納得させるだけの理由を考えなくては、と思っているとこころで魔理沙が再び口を開いた。どうやら先ほどの私の発言に思うところがあつたらしい。

「人を操る………なあレミリア、次はアリスのところに行ってみないか？ 人形を操れるんだったら人一人くらい簡単に操れるかもしれないぜ」

ここに来て更なる回り道を通らなければならぬか。答えにたどり着いているであろう私と全く何も情報を持たない魔理沙。

普段ならあり得ない、と一蹴できるような突飛な考えも今は撥ねつけることができない。魔理沙から見れば私も何も知らないはずであるから私は首肯するしかない。

それにアリスに興味が無いと言えば嘘になる。パチエと同じ魔法使いであり、さとりや八雲からも高く評価されている。実際さとりが地上にいた時はアリスの作った着ぐるみを着ていたらしい。極秘計画に参加しているところを見ても八雲からの信頼は伊達ではないことがわかる。

私個人としても関りが無いわけではない。偶に紅魔館にも足を運ぶ彼女との仲は悪くないと思っているし、地上では唯一さとりについて穏やかに話ができる相手だ。

ただ私とアリスの関係は悪く言えばその知り合い止まり。共通の話題がさとりの事くらいしかない以上仕方のない事なのかもしれないが、できればさとりが彼女を高く評価する理由、そしてあの八雲紫がさとりと同列までとはいかないものの一目置く理由を是非知りたいたいものだ。

「相変わらずこの森は陰気臭いわねえ。よくもまあこんな場所で暮らせるわ」

「おいおい、それは私への当てつけか？ あの自称都会派や私だけじゃなくて他にも何人か魔法使いがこの森に住んでるんだからな」

そろそろ夕刻が迫っているのもあるかもしれないが、それを抜きにしても暗い。しかも土が湿っているからなんとなく気持ち悪い。妖怪すらあまり近寄らないのも納得だ。

この瘴気に耐えられるのならばむしろ安全とも言えるだろう。茸の見せる幻覚もさとりの見せる物とは天と地ほども違う。頭を振ればすぐに治まる。

「それにここらの茸は魔法薬に使うには丁度良い物が多いんだ。特殊なモノばかりだからな。あ、その足元にある茸は踏むなよ。昔興味本位で触れてみた時にやひどい目に遭ったからな。靴の上からでも踏むのはやめておいた方が良い」

「何してるのよ貴方。……茸図鑑でも持ち歩いてみたらどうなの？」

「茸図鑑ん？　んなもんあっても無駄さ。昔香霖のところで見たことがあるが魔法の森の茸の大半は外の世界には無いらしいからな。てなもんで茸の作用は自分で確かめるしかないんだよ。でもまあそれも研究の一つさ。既知の事実を追い求めるなんてバカバカしいだろ？」

なんとという危険思考。忠告をしてくれるのはありがたいが素直に感謝することはできない。命を削り続ける事の危険性が分かっているのは流石人間の子供といったところか。

ある程度の安全が保障されている異変解決とは違い、一步誤れば即座に死に至る。

「……はあ。パチエが貴方を心配する理由が分かったわ。貴方はいずれその考えで命を落とす。その原因が茸なのか、それとも魔法実験の失敗なのかは分からないけれど、今のままの貴方なら確実に死ぬわ。貴方が死ねばフランもきつと悲しむわよ？」

開いた口を閉じさせる悪魔の一手。

人と言うのはいつでも自分の扱いが一番適当だ。自分の事を思ってくれる人なんていやしない。自分が死んでも誰も悲しまない。とそんなことを考えてしまう種族だ。

一人でも自分の死を悲しんでくれる人がいるのだと知れば、その無鉄砲さも死への渴望も多少は緩和され、あるいは完全に消え失せることもあるかもしれない。

今回はフランが、と言ったが魔理沙が死ねばパチエだってきつと悲しみはするだろう。口では散々文句を垂れているが、なんだかんだで話す相手が増えたのは嬉しいのだろう。たまの喧噪も非日常だと捉えて受け入れている節があるし。

私としては魔理沙が自分の考えを改めてくれるのなら何だって良い。姉として苦しめてきた自分が言うのもなんだが、もうフランが悲

しむ姿を見たくはないのだ。



「あらあら。レミアア……ではないわね。それにしてもこんな場所にお呼びでない蝙蝠が一匹？ 凡そ蝙蝠とは言えなさそうな翼だけだ」

「貴方が次の遊び相手？ お姉様を探している途中で迷い込んだけど……どこココ」

「ここは永遠亭。貴方たちのような血吸い蝙蝠風情が来て良いような場所ではありませんよ。ここに迷い込むこと自体愚かですが、遊び相手を求めるならば別の場所に行きなさい」

紅魔館を破壊した後にはランドールがやって来たのは迷いの竹林。彼女自身は疾うにこいしを見失っているが、こいしがここに着いても未だにランドールの近くにいたりというのは明らかかな事である。

そもそも迷いの竹林は自力で抜け出すことが不可能だと言われるほどに厄介な地形をしている。ここを抜けて偶然永遠亭までたどり着くというのは普通に考えてあり得ないことなのだ。

この竹林はいたずら好きの妖精すら迷わせる。博麗の勘でも迷子は避けられない。抜けられるのは長年住んでこの竹林を知り尽くしている者か、長年をかけて道を見つけた者かだ。

こいしの場合には後者にあたる。そもそも彼女自身自分が何を考えているかすら分かつていないのだから、ここに着こうと考えてランドールを誘導したわけではないだろう。ただ知っている道を辿っただけに違いない。長期の放浪も思いもよらぬところで役に立ったわけだ。

永遠亭から出て行けと言う永琳だが、当然ランドールが素直にいう事を聞くわけがない。抑圧され続けてきた彼女にとって多少のわがまは許されるべきだと、彼女の中で勝手にそれが肯定されてしまっている。

「お姉様知らない？ 館から出るためにお姉様をぶつ飛ばしたいんだけど。あ、でも貴方も練習台には丁度良いかもしれないわ」

「話の通じない子ね。典型的に目的と手段が入れ替わっているし……レミリアの教育不足か或いは……」

フランドールの中でレミリアをぶつ飛ばすという手段が目的に変わってしまったという事を指摘する永琳は、自分もまたフランドールの話を無視して自分の考えに浸っていることに気付いていない。話に通じないのはお互い様である。

「レミリア？ やっぱりあいつを知ってるのね。何処にいるのか教えて頂戴。さあ早く！」

永琳の口から出てきた姉の名前に興奮しているフランドールとは対照的に、当の永琳本人は敵意を向けられていても素知らぬ顔で考え事を続けている。

「……非常に珍しい妖怪の姉妹……吸血鬼にあるまじき特異な翼……内に秘めた狂気と計り知れない力………使えるわね。ウドンゲ！ ちよつとこつちへ来なさい！」

師匠からの突然の呼び出しに、またお叱りを受けるのだろうかとヒヤヒヤした面持ちの兎が顔をのぞかせる。自慢の長い耳は既に萎れて垂れ下がっている。

医者という他人の命を預かる仕事をしている者の弟子として働いているのだから、永琳が彼女、鈴仙を叱ることは多い。生半可な治療を施すことは許されないからだ。だからこそ彼女は永琳に呼び出された時点でお叱りを覚悟するのである。

しかし今回ばかりはそうでもないらしい。何故か不安を煽るほどの笑顔で、永琳は鈴仙に一つ頼みごとをする。それはこのフランドールを逃がさぬよう監視しておくことだ。

だがそこで鈴仙は違和感を覚えた。彼女の目にはもう一人の少女が映っていたからだ。

「師匠、見張っておくのはこの金髪の子だけで良いんですか？ あちらの子は……」

「あちらの子？ 何を言っているのかしら。能力の使い過ぎで幻覚で

も見えるようになったの？ それとも私を馬鹿にしているの？ 答えに困っては……分かつているわね？」

失言だったとその場に蹲る鈴仙とそれを睨みつける永琳という構図が出来上がる。激怒しているわけではなくとも注意力が散漫になっっている永琳と蹲って下を向いてしまった鈴仙。

驚くほど静かに、先ほどまでの興奮すらも消し去ったフランドールは部屋を出て行く。誰もそれには気づけない。

生まれて初めて無意識の能力を看破されたこいしは逃げの一手を選択したのだ。

しかしそれは結果的には正しかったと言えるだろう。そのままあの場にとどまっていれば鈴仙によって正体が暴かれ、永琳によってフランドール共々ちよつとした実験に付き合わされたかもしれないからだ。無意識に働く防衛本能が彼女らを救った形となった。

「ふう、危ない危ない」

「ちよつと古明地こいし、こっちは危ないじゃないの。迷子になりかけたし。ただお姉様の事は知っているようだったけど」

「まさか私の能力が見破られるなんて思わなかったんだよ。お姉ちゃんができえ私には気づけないのに」

この二人も結局は会話がつかない者同士。各々が好きに物と言う妹たちだ。次にどこへ行くか、そんなことでもすぐに揉めてしまおうだろう。

姉を探す妹たちと、妹たちを探す姉。舞台はついに禁忌の終着点、妖怪の山へと移る。

来るべき過労のツケ

紫さんがやって来た。なんと本日三回目。つい数刻前に更新したばかりの新記録をさらに更新してきた。年明けの彼女がここまで積極的に動くというのは今まで無かったことだ。大体毎年寝ているはずだし。

しかし暢気にそんなこと考えているような余裕は無さそうだ。彼女が動く原因を作っている妖怪が私の妹だからである。

正直な話、紫さんの能力を使えばこいしの場所の特定くらいなら楽だと思っていた。しかし実際はそうでもないらしい。意識と無意識との境界を弄つてもこいしの場所が分かるわけではない。そこにこいしがいれば、彼女がたとえ姿を隠していても見えるというだけらしい。

手当たり次第に幻想郷の各地を回ると言ってもあまりに非効率。神出鬼没対神出鬼没のいちごっこが始まるだけだ。ならば敢えてこいしを探さない方法ならどうだろうか。

「フランドールさんの能力によって被害を受けた場所なんかは無かったですか？」

「残念ながらまだ見つかっていないわ。強いて言うなら紅魔館かしらね。一応湖や森、山や沢なんかもくまなく探してみただけけど、それらしい痕跡は何処にも見つからなかった」

ふむ。つまり人や妖怪が滅多に立ち入らないような場所を重点的に探したというわけか。確かに館を抜け出して外に出るのが目的だったのならば、早々に連れ戻されないように人目の無い場所へ行くのが妥当だろう。

しかし彼女たちの本来の目的と言うのがそもそもズレてしまっているような気がしてならない。外に出るだけならば紅魔館を四散させる前に目的は達成されており、わざわざ自分から目立とうとするのはかなりの悪手。紅魔館の破壊はあり得ない選択だと言える。

初めはフランドールさんの外出に肯定的だった紫さんがこうも焦っているのは当初の予定と大幅にズレてしまったからだろう。

そりやそうだ。少なくともあの時の紫さんはフランドールさんの世界を広げる事の利点しか考えていないように見えた。深く物事を考えているようには見えなかった。

その原因は恐らく過労による疲労。年末から新年にかけて、月の時並みの忙しさがこの妖怪を襲っているはずだ。

しかも今回はあの時とは違い、すべてが紫さんの掌の上というわけでもない。動きの読めない二人の少女は簡単に彼女の手から零れ落ちしてしまう。

今の紫さんを一人で動かすのはあまり望ましくない。かといって彼女の式神を侍らせるのは逆効果だろう。主人が弱っている時の式ほど脆い物はない。混乱に陥って何もできなくなるのがオチだ。

「私が思うに紫さん、貴方は自分の考えに囚われすぎているのではないですか？ 今の私たちではあの子たちの真の意図を知る事なんて不可能なはずです。館から出たのちに新たな目的ができていても何ら不思議ではありません。目撃情報を聞くのは搜索の基本ですよ」

「……………」

「ああ、一つ言い忘れていましたね。こいしが姿を隠せるのは自分自身とそれに属する物だけです。確固たる自我を持っているフランドールさんはあの子の能力では消えないはず。フランドールさんの目撃情報なら何処かにあるかもしれませんよ」

私も知らないうちにこいしの能力が強くなっていたら知らないが。と言っても私としてはその可能性を考えたくはない。あの子の能力が強くなるという事は、覚妖怪からどんどん離れていってしまうという事に他ならない。

サトリの力を嫌ったあの子にとって私たちの種族は既に忌むべきものとなってしまっているかもしれない。それでも偶に帰って来てくれるという事は、まだ覚を捨てきれないからだと思う。既に覚妖怪ではなくなったあの子の最後の拠り所はきつと私。

だが、彼女が無意識に吞まれてしまえば覚妖怪であったことも、私という存在すらもその心から消し去ってしまうかもしれない。

だから私はこの可能性について深く考えないようにしている。考

えれば考えるほど不安になってしまいうから。

「そうね。まずは神社にでも向かおうかしら。あとはそう……さとり、一人借りても良いかしら？」

「ええご自由に。盗み聞きをするような鬼には多少の制裁も必要でしょう。……何、心配はいらないわ。勇儀には私から直接言っておきますから」

待ち合わせの場所を勝手にここに設定するのはどうしてなのか分からない。だがそのおかげで私は地霊殿から出ずとも勇儀に呑みのキャンセルを直接伝えることができるので今回ばかりは良しとしよう。

「ええ?! おいおい、お前まさか鬼か? 盗みと攫いは鬼の基本だろう? 頼むから勘弁してくれよお。呑みも無しでその上紫に攫われるなんて……あつおい紫い!」

あ……紫さんに無理矢理萃められてスキマに放り込まれてしまったようだ。無慈悲にもほどがある。と言えどもあれ以上喋らせても、どうせ勘弁してくれだの鬼として当然の事をしただけだの言い訳をするだけだっただろうから問題ない。

盗み聞きが多いのは萃香の欠点だ。便利な能力を持っているからこそ半ば癖になってしまっているのだろうが、彼女特有の強力な妖力が消えるわけではない。薄くなっただけでも不自然である。

「こいしとフランドールが見つかれば彼女は返すわ。彼女の能力があれば探索はかなり楽になるでしょう」

仮に見つけられなくて朝が来てしまったとしても、萃香がいれば雲を萃めて太陽を隠すこともできるだろう。彼女は今回の騒動に関してはうってつけの能力者だ。

一応レミアさんにもヒントを与えたつもりだったが、結局彼女を使うのは紫さんになった。だがむしろそれでよかったと思う。紫さんの頭について行けるのは地底では萃香くらいだからだ。今の疲れている紫さんにも彼女なら上手く対応してくれるだろう。

「そうそう、言い忘れていたわ。今の地底と地上の出入り口は結界で完全に蓋をしてあるの。一番の理由は紅魔館の三人衆が無関係な貴

方に手を出すことを禁じるためのものだったのだけれど、結果的には萃香に戻られても厄介だし一石二鳥になったわね。ではまた会いましょう」

勇儀が暴れて地上に出る可能性も考えれば一石三鳥かもしれない。致し方ない事だとはいえ、鬼は約束を反故にされるのを嫌う。地上からの不安要素は消えたが、それ以上の不安要素がまだ地底に残っている。

まったく、どこまで行っても私に追い風は吹かない。

いつも原因を作るのは私ではないのに、いつだって力ある者の自分勝手に巻き込まれているだけなのに。私には逆風しか吹かない。敵ばかりが増える。

だって私は覚妖怪だから。いつだって世界は嫌われ者に厳しい。弱者に容赦がない。

もう千年も前からそれを知っているのに、どうして原因が妹だったら悔しさではなく悲しさが込み上げてくるのだろうか。



「うわあ、本当じゃないの」

「だから言ったでしょう？　昼過ぎに本を読みに来たら既にこうなっていたの」

「私が昼前に通った時は普通に建っていたけど」

「何？　私を疑ってるっての？　巫女の勘も鈍ったものね」

瓦礫だけを残して原形を失った紅魔館の前で話しているのは森の人形遣いと麓の巫女の二人。

霊夢が地底に向かう途中に通った時にはまだ趣味の悪い館は何の問題も無く建っていた。しかしアリスが図書館の本を読もうと来た時には既に崩れ去っていた。この時間差は恐らく一刻も無い。

だがその一刻足らずの間に地上では様々な事が起きていたのだ。地底にいた霊夢は当然知らず、アリスも家にいたので異変に気付けた

わけもない。

「いやいや、いくらあんただからってねえ……疑わしきは罰せよ、よ。あんたなら紅魔館の破壊くらいできたんじゃないの？」

「確かにできるかもしれないけれど………つて最後まで聞きなさいよ。ホント、相も変わらせずせつかちねえ。確かにできるかもしれないけれど、私がこんなことをする理由は無いでしょう？」

疑わしきは罰せよを指摘しない辺り、アリスの霊夢観が分かるというものだ。彼女にとつての霊夢は古い友人であると同時に、おっかない人間でもあった。

友人であるとはいえ魔法使い^妖であるアリスに情けをかけるような真似はしない。彼女にとつては友人も見ず知らずも、相対すれば等しく敵である。そんな友人と長く付き合っているからこそ、こんな理不尽をもさらりと受け流せるのだ。

「パチュリーを倒して図書館の本を独り占めしたかったとか……」

「はあ、馬鹿馬鹿しいわね。そういう霊夢はどうなのよ。あんたもこのくらいならできるんじゃないの？ ほら、レミリアが鬱陶しかったとかさ。霊夢ならやりかねないわね」

「あのねえアリス、私は別に誰彼構わず攻撃するわけじゃないわよ？ あんたも知ってて言ってるでしょ。確かにあのチビ吸血鬼は鬱陶しいけどね、だからって館を壊すような事はしないわ。そんなことをしても私には何の得も無いんだから。私は魔理沙とは違って盗みの趣味は無いし」

紅魔館を破壊できるか否かについてはもはや答えるまでもないとしてスルーする霊夢。

自らの館を壊せる者たちが幻想郷には溢れている。きっとレミリアがそのことを知れば心の中で涙するに違いない。

「これ以上くだらない事を話しても埒が明かないわね。で、どうするの？ 館は妖精メイドを除いて無人。魔理沙も行方不明。図書館は無事みただけけれど、あのパチュリーでさえ外出中。どこに行つたかなんてまるで見当もつかないわ」

アリスがこの惨状を湖の上空から見た時、先ず一番に向かったのは

魔理沙の家だった。不仲ではあっても一応は同業者。しかも魔理沙は紅魔館の連中と仲が良いときた。初めに頼るには最適だっただろう。

だが彼女は家にいなかった。アリスは知らないが、彼女もたまたまと言うべきか必然と言うべきか、紅魔館の図書館にいたからだ。

魔理沙がいないと知って次に向かった先は紅魔館。もつと言えばパチュリーがいるはずの図書館だ。しかし彼女はフランドールを探すために外出中。

動かない大図書館だけではない。華人小娘も完全に瀟洒な従者も紅い悪魔も紅魔館にいる様子は無かった。

「頭が切れるくせにあんたはいつもどこか抜けてるわよね。あいつらがここにいないのはあのフランとかいう奴を探しに行ってるからじゃないの？ レミリアに言わせれば屋敷から出したことは無いくらしいの箱入り娘らしいし、どうせそいつが何かやらかしたんでしょね」

先ほどまであれほど頭の悪い会話をしていたとは思えない程的確な指摘をしてくる霊夢に博麗の恐ろしさを改めて感じるアリス。なるほど確かに生粋の箱入り娘が何処かに行けば家族総出で探しに行くに違いない。

「ああそう言えばそんな子もいたわね。話に聞いた事しかないと忘れていたわ。それにしてもフラン、フランねえ……その子の能力って何か知ってる？ 戦ったことあるんでしょ？」

「そんなの覚えてないわよ。名前もまともに覚えてないのに。レミリアの能力だって覚えてないのよ？ 一度会ったきりの奴の能力なんてねえ」

無駄な事に脳のキャパシティを割かないのが霊夢の良い所であり悪い所でもある。常に脳内を整理できているものの、今のような場面では全く使い物にならない。

ちなみに霊夢がレミリアの能力を知らないのは、レミリアが霊夢に言っていないから当然である。何にせよ自慢げにいう事ではないように思うが。

結局手掛かりらしい手掛かりを得ることはできなかつたが、アリスは特にこのことを問題視しているようではない。

「はあく、また厄介そうな異変だわ。でもなーんか引つかかるのよね。後ろで糸を引つ張られているような……あんだやっぱり何か知らないの？」

「そこで私に飛び火するの？ 私の糸で操れるのはあくまでも命の無い人形だけよ。それよりも良いの？ 早く解決に向かわなくて。手柄を誰かに取られるかもしれないわよ？」

「それは無いわ。きつと今夜は永くなる」

霊夢は今夜の事を話しているが未だに夕刻にすら到達していない。霊夢の勘はよく当たるが、百発百中というわけではない。

霊夢は何となくの勘で異変解決を少々先延ばしにしようとしているらしい。解決してくれる人がいるなら別にその人が解決してくれるも構わない。そんな心持ちなのだろう。残念ながらそれに釘をさす監視役の妖怪はここにはいない。

「あんたがそれなら別に文句は言わないけど。一応あんたの事は信じてるしね」

「それは博麗霊夢として？ それとも博麗の巫女として？」

「どちらも、と答えておきましょうか」

意地悪な質問にもすぐさま適当な答えを返すアリスと霊夢の関係はもはや親友と言っても過言ではないだろう。本人たちはあくまでもただの友人という体を崩さないが、それは人間と妖怪という種族の差があるからなのか。彼女たちにさえきつとよくわかつていないだろう。

「つまらないわね。ま、あんまりグズグズしていても紫あいつがうるさそうだしボチボチ行きますか。アリスもあんまりのんびりしていたら置いて行くわよ？」

「やっぱり、知っていたけれどあんたの手綱を握るのはどうやっても無理そうよね。絶対結婚できないわよ、あんだ」

あまりにも自分勝手な物言いをする霊夢に対する皮肉を口にするアリス。呆れて苦笑いをしてしまっているがそんなことを気にする

霊夢でもない。

結局は「あんたもね」と返してさっさと歩きだす。慌ててそれについて歩いて行くアリス。

何処へ向かうとも知らず足の向くまま歩き出した霊夢。方角的には人里か。特に考えるでもなく先ず人間の安全を確認する方へ向かうというのは流石博麗の巫女と言える。

はれない疑惑はない

「あやややや……困ったことになったわねえ」

そう言っ頭を悩ませているのは鴉天狗の射命丸文。最近はずぼしいイベントも無く、実際に直近の新聞の発行は間欠泉の異変解決となっている。

しかし彼女はもう一月以上も自分の新聞が発行されていない事に頭を悩ませているわけではない。様々なイベントが今日という一日集中しすぎて、何を取材すればいいのか、誰に取材すればいいのかを決めかねている間に夕方になってしまった事実には頭を抱えているのだ。

普段なら自慢の足の速さでどこへでもすぐに駆け付ける文だが今日ばかりは足が遅かった。いつもなら風の噂として運ばれてくる情報を整理して取材対象をピックアップするのだが、今日は関係の無さそうな事柄がほぼ同時に起こったせいで風の噂から得られる情報がかなり混同していたのだ。

巫女が地底へ向かったことと紅魔館が四散したことのどこに共通点があるのだろうか。

フランドール・スカレットが消えたという噂の出どころも彼女にはさっぱり分からなかった。数年前彼女に直接取材を敢行した文だ。彼女が地下に引きこもりがちだというのは当然ながら知っていた。

だからこそ彼女が行方不明だというのは信じがたかった。しかしもしこれが本当なのだとすれば、文が見つければ紅魔館に貸しを作ることもできるかもしれない。

文も数いる天狗らしく損得勘定で動くことが多い。ネタの宝庫としての霊夢とは違い、紅魔館は大きなイベントを起こすこと場所と捉えている彼女にとって、最速でそのネタを独占できるのは魅力的なのだろう。

「困るのは良いけどさ、それってわざわざ人の家に来てまですることなの？」

「引きこもり記者は黙ってなさいよ。そもそも大した取材もしないの

に新聞を書くなんて記者として恥ずかしくないのかしら?」

「まあ私たちは所詮情報部隊でしかないし? 新聞記者つてのもその延長だからね。っていうかあんだけ山を出て外部の情報を嗅ぎまわっている文の方がおかしいと思うんだけど」

妖怪の山に棲む妖怪はなるべく外部との接触を避けるべきだという封建的な考えを示すのは彼女の新聞『かしねんぼう花果子念報』を発行する姫海堂はたて。

幻想郷の各地を飛び回って記事を作る文とは正反対に、はたては自身の能力である念写をフル活用して家からほとんど出ることなく新聞を書いている。

文が指摘しているのはまさにその部分だ。対象の話を聞かずしてどんな情報が得られるのか、というところである。

それに対するはたての答えは山の組織の中では新聞など大した価値をもたないというものである。確かに新聞大会なるものは開催されているが、それさえも情報屋として嗅ぎまわっていることの延長に過ぎないという主張らしい。

「そんなことを言っているからいつまで立っても貴方の新聞は妄想新聞なのよ。あの巫女が山に攻めて来た時だって、私が呼ばれたのは大天狗様からの信頼が貴方より重かったから。どういう事か分かるかしら? もう今は山の外にも積極的に関わるべき時代なのよ」

記者としての矜持を持っている文からすれば、はたての主張は許しがたいものだったのだろう。なんとも醜い煽りを交えつつはたてに口撃する。

しかしこれに納得してしまったはたては何も反論できない。彼女に何かしらの役が与えられることはほとんど無いからである。

言葉に詰まった彼女を横目に、文は更なる追い打ちをかける。

「そもそも今日ここに来たのだって大天狗様からの言いつけがあつてのもの。貴方があまりにも家から出てこないせいで死んでいるかもしれないと心配されていたわよ?」

「え……………あの鞍馬様が?」

鞍馬と言えば新聞大会で優勝するような新聞を書いていることも

あり、毎度ランキング外であるはたてや、特に文にとっては憧れにも近い念を抱いている大天狗である。

「いえ、飯綱丸様の方ですが。とにかく大天狗様に気を遣わせるなど言語道断。貴方は少々生活を改めるべきよ。私の新聞を抜かせたら小言を言うのはやめてあげますが」

「言ったわね？ 私の念写に撮れないものなんて無いんだから。あんなに吠え面かかせて私はのんびり生きてやるわ！」

「まったく貴方という人は……ああそうそう。はたての念写、ちよつと借りてもいいかしら。何、これも山のためになる事ですよ。迷惑をかけた分取り戻さなければならぬでしょう？」

「ぐっ……まあ良いわ。それで？ 何を撮ってほしいのよ。あのスキマの家とか巫女の風呂とかならお断りだけど。殺されそうだし」

そもそも紫の家は次元の違う場所に存在しているため、はたての念写で撮れる限界を超えている。霊夢は別にエスパーなどではないので入浴は流出しない限りは大丈夫だろう。流出したらルール無用で間違いなく殺されるだろうが。

とはいえ文もそこまで非常識なわけではない。少なくとも今の今まで千年以上生きてこられていくくらいには常識的である。世渡り上手な文に限って自らを滅ぼす可能性のあることをすることは今後も無いだろう。

「……そうね、まずレミリア・スカーレットからお願いできる？」

「ふふん。そんなのでいいなら朝飯前よ………」と。ほら」

そういつてはたてのカメラが映し出した映像を見た文は思わず言葉失ってしまう。

得意そうにしているはたてを尻目にしばしの衝撃から立ち直った文が放った一言は、常人には当たり前のように感じてもはたてには理不尽に感じるであろう言葉だった。

すなわち数年前の写真は今出されても意味なぞ無いというものだ。

今はたてが念写によって呼び出したのは過去に文々。新聞に掲載されたレミリアの写真だった。

過去の写真を自らのカメラに呼び出す。はたてにとっては相手の

人相を知りたい時などに使う、最も手軽な能力である。

しかし今回の文の意図はそれではない。あくまでも今を写してもらわなければならないのだ。

「はあ？　そういう事なら先に言いなさいよ。このバカ鴉」

「貴方が勝手に先走っただけでしょうが。このスカポントン。良いから今の写真を撮りなさいよ」

「そっちは疲れるのよね。酒一斗で手を打つわ。ちなみにもう一人増やすごとに三升ずつ追加ね」

当然現在の写真を撮るとなれば先ほどのように楽なわけではない。できないわけではないが使う力が桁違いなのだ。

遠く離れた特定の何かを狙うという事の労力を考えれば、その見返りも決して法外とは言えないだろう。文が『まず』と言ったことから、要望が二人以上であると素早く見抜いていたことによる追加条件の提示。

文にも断る権利と言うのはもちろんあるわけだが、今は一刻も早く事件の真相に迫りたいというのが彼女の思うところだ。そのためならば酒の一斗三升くらいくれてやるという気分である。

彼女にとつても楽しみに置いていた酒が消えるのはなかなかつらいものがあるが、それ以上に今の彼女は好奇心に駆られていた。

頷いた文を見たはたてがニヤリと笑ってしばし瞑目すると、その手のカメラの画面にある一枚の写真が映し出された。

「次はフランドール・スカーレット。これで最後ですけど」

「もしかして文はあのお子様姉妹にご執心なの？　……って冗談だつてば。……はいこれね」

「……………助かったわ。では酒はまた届けておきましょう。今日はこれにて！」

「あちよつ……………はあ。あいつも一緒に酒呑んでけば良かったのに。忙しい奴ねえ。でも山の外、か。確かにちよつと面白そうかもしれないわ」



(ひどいお仕置きの末に)ようやく永琳からの誤解が解けた鈴仙は、既にあの二人がいなくなっていることに気づいた。

永琳の方も当然フランドールがいなくなっていることには気づく。

「で、例の子もいなくなっているのかしら？ ウドング」

「はい。恐らくもう永遠亭の敷地内にもいないかと」

波の反射などを利用すれば周辺の物の探索などはその場で行えるが、如何せん永遠亭は構造が複雑で広い。玉兎の中でもかなり優秀な部類に入る鈴仙であってもその全てを探知するのは不可能。

故に曖昧な答えとなってしまうたが、何故か永琳は鈴仙のこういうところを咎めるような事はしない。永琳のスイツチが何処で入るかは数十年共に生きているだけの鈴仙にはまだ分からない。

「それにしてもこの竹林を抜けられるとは……いえ、ここにたどり着いたのは確かだから……ウドング、竹林内で彼女らの反応を捉えることはできる？」

「いえ。障害があまりにも多すぎて。彼女たちの反応を捉えるには一晩では済まないと思います。月の技術を使った何かしらの道具があるのでは？」

「あるにはあるわ。でもあれはまだ改良段階。使い物にはならないわね」

成長があまりにも早い竹は波をあらゆる方向へ反射してしまう。しかも無作為に。玉兎の能力はあくまでも成長を拒む月での使用が想定されたものなのだろう。地上での索敵にはあまり向かないようだ。

ただし永琳もこれができると思って聞いたわけではない。元々できないうことは分かった上で聞いたのだから質が悪い。

鈴仙は、できないと答えるだけでも胃が痛むような思いをしているというのに、師匠であり薬師であり医師でもある永琳は弟子の体調を気にかけるつもりがないらしい。

「こうなったら姫に頼みましょうか」

輝夜の部屋に向かって歩き出す永琳。話の飛躍に追いつけない鈴仙は思わずポカンとしてしまう。永遠亭の中で、輝夜の能力は永琳の能力の次くらいには索敵に役立たない。

てゐの幸運を頼った方がよほど楽なのではないかと思う鈴仙であったが、師匠が何も考えずに動くはずはないのだと自分に言い聞かせて彼女の後を追う。

「輝夜、少し良いかしら?」

「ええ。どうしたの? 永琳」

「夜を止めてほしいのよ。あの夜のような半端な永遠ではなく完全なる永遠で」

この言葉に鈴仙はギョツとした。一晩では済まない搜索ならば永遠の一晩で済ませれば良いという新手の拷問をさせられると思ったからだ。

確かに永遠の時を使えば彼女らを探し当ててはできるだろう。それはもう竹林の外であつても。

逃げ出したくても逃げ出せない。逃げ出せば破門。二度と取り合つてはもらえないだろう。進むも地獄退くも地獄。弟子とはそういう板挟みに耐え続けるものだ。

しかし鈴仙の想像とは裏腹に、永琳の思惑は全く別のところにあつた。

「実験台にしたい子がいてね。逃げ出してしまったのだけれど、その子は日の光に当たると消滅してしまうらしいのよ。だから見つけるまでは夜で止めておいてくれないかしら?」

「あらあら可哀そうに。永琳に目を付けられるなんて同情を禁じ得ないわね。でもそんなことをすればまたあの異変の時みたいにならないかしら」

特別高貴な月の姫も、穢れに満ちた卑しい妖怪に同情できるほどには地上に染まってしまったらしい。喜ぶべきか嘆くべきか。少なくともお姫様とその付き人に嘆いている様子はない。

鈴仙の顔が別の意味で蒼白になりつつあることに気づいた者はいない。鈴仙もまた、たかが数十年ですっかり穢れに吞まれてしまつた

ようだ。

「今夜は別に月を奪うわけじゃないから、あの夜に来た者たちはむしろ来ないでしょう。あの時はあちら側で夜を止めていたし」

「確かにそうね。じゃあその子が見つかったら教えてちょうだい。朝に進めるから」

「ええありがとう。では行くわよ、ウドンゲ。早く行かないと竹林を出られるかもしれない」

できるだけそうなる前に見つけたいところではあるのだが、残念な事に、もう既に二人は竹林を抜けてしまっている。

暗闇が地上を支配する前に彼女らを見つけ出すことは不可能だろう。



「おーいさとり！ 萃香のやつは来てるか？」

ああ……やって来てしまった。私の命を吹き飛ばすかもしれない災厄が。できることなら居留守を使いたところだが、私がここを留守にすることなんて無いに等しい。

「まだ来てませんよ。と言うか……彼女なら今日は来ませんよ」

「ああ？ それ、どういう事だい？ 詳しく説明してくれよ」

場合によっちゃあいつをぶん殴ってやる。

心の声としてそこまで聞こえている。やはり鬼という生き物はおっかない。約束一つ破れば、その結果は私なら死を意味するのだ。

とりあえず誤魔化そうとして嘘を吐くのも無し。これは鬼の前では一番してはならない。相手にも都合が悪い場合はなおさらだ。多分消し飛ばされる。

「つい先ほどもここにいたんですがね。盗み聞きが紫さんにバレて地上に連れて行かれました」

「ほう、あの賢者殿にねえ。じゃあ仕方ないか」

「え？」

予想だにしていなかった返答に間拔けな声が出てしまう。勇儀の性格を考えれば、約束を破った相手には何が何でも制裁を食らわせるものだと思っていた。

そんな私を勇儀は不思議そうな顔で見ってくる。心が読めるからと言って他人の言うことまで完全に予測できているわけではない。特に今回は思い込みもあつた分、不意打ち感が否めない。

「そりゃ私だってあいつと酒を呑むつもりだったけどね、結局は盗み聞きをしたあいつが全部悪いさ。私ら鬼が盗んでいいのは酒と食べ物と人だけだ。金品は盗らないしそれ以外の物も同じだ。萃香は懲りない奴だから許してやってくれ。あとできついのを一発ぶち込んでおくからよ」

これが鬼の仲間意識というやつか。私は勇儀を侮っていた。もう千年の付き合いになるのに何も分かっていなかった。

鬼と言うのはただ約束に忠実でなければならぬものではない。とそういうことか。

「甘いよね、勇儀は」

「ん？ 五発くらい殴っておいた方が良いか？」

「ふふ……そういう事ではありませんよ」

私にも素晴らしい仲間がいる。そう思うとこれからの懸念が少しだけ薄れるように思える。

どう足掻いても逃げられない

アリスの家の前まで来たところでレミリアが急に立ち止まる。何事かと尋ねる魔理沙に対するレミリアの回答は、何とも怪しげな音が近づいているというものだった。

魔理沙には何も聞こえない。レミリアの耳を以てしてようやく聞き取れるほど小さな音なのだから、人間の彼女に聞こえないのは当然のことだ。

「怪しげな音ってなんだよ。具体的に何かないのか？　足音だとか咀嚼音だとかさ」

「いや、そういう類のものではないわね。でも恐るべき速さでこちらに近づいてくる。耳算であと7秒つてところね」

「ま、まさかまた隕石か何かなんじゃ……………」

耳算にツツコむことも無く純粋な恐怖心を見せる魔理沙。

彼女は数え切れぬほど妖怪を伸してきた少女であるが、恐怖を忘れた人間ではない。近づいてくる何かがいったい何なのか。得体の知れない物への恐怖は人間であるならば忘れることは無い。

今、魔理沙が最も危惧しているのは少し前に落ちてきたような隕石だ。その夜、幻想郷を滅ぼしたかもしれない規模の隕石が落ちてきていたにも拘わらず、彼女は全く気付かずに寢床にいたのだ。翌朝の新聞が無ければ知ろうともしなかっただろう。

故に彼女は恐れる。妖怪ならば戦えば良い。ルールに反してきてもレミリアに任せれば問題なく撃退できるだろう。

だが隕石はそうはいかない。巫女のように神に頼ることもできない。大妖怪たちのように規格外の能力を持っているわけでも、紅魔の魔女のように莫大な魔力を秘めているわけでもない。抗う術を持たない少女にとって、天災とは過ぎ去るまで待つしかない非情なものなのだ。

だがレミリアの方はと言うと何も恐れることは無いと思っただけである。暢気なのかと言えばそうではない。彼女にとって確信

に近いものがあるのだ。

前回の隕石は降るべくして降って来た。今回のように予測のできないものは隕石ではないと、彼女の頭ではそう処理されている。もし隕石だった場合は不死者を除き、皆等しくお陀仏であろう。

そのことをレミリアが口に出そうとしたその瞬間、驚異のスピードで近づいてきたモノが落ち葉を舞わせながら降りてきた。

「はあく、間に合いましたね。どうもお二方！ 清く正しい……って無視しないでくださいよ〜」

音の速さで飛んできた少女、射命丸文が幻想郷に棲む者たちに疎ましがられているのは周知の事実だ。本人は断固として認めたがらないが、彼女の新聞はどうにも信憑性に欠ける記事が多い。

人間にも配る新聞を妖怪目線で書いているのだからそう思われても仕方のない事だろう。しかも取材対象も大抵が人外であるためか、里の人間にとって興味のある記事と言うのが少ない。

結果、人間が注目するのは見出しと写真と初めの一、二文程度になる。それ以上は読む価値無しとして掃除に使われるのが関の山だ。

しかし彼女は決して悲観的ではない。自分の書いた新聞の現実を知っていてもだ。

彼女の標的は人間ではない。もちろん人間にも読んでももらいたいと思っっているが、毎日をせかせかと生きている忙しない種族に全てを読めというのは少々酷だろう。

対して妖怪は賢者を筆頭に暇な者が多い。その層に読んでももらえないならばたいした数もない人間など標的にする必要はあまりないのだ。ただ最近は何の賢者に『人間にもきちんと言情がいくような新聞を書け』と言われてしまったようで、今回の事件が収束した後はその事についても考えなければならなくなるらしい。

「……ちえ。胡散臭えやつばかりの幻想郷でも屈指の胡散臭さを誇る天狗は無視するに限るんだよ。なあレミリア、お前もそう思うだろうか？」

「ええそうね。それに今は忙しいのよ。来たところ悪いけど今は取材にも応じられないわ。あ、今紅魔館に行っても無駄よっ。」

「もちろん知っていますよ。フランドールさんが行方不明だとお聞きしましたが本当のとく……」

軽快に話し始めた文が急に口を噤む。フランドールの名を出した直後のレミアアの雰囲気の変化を敏感に感じ取ったからだ。幼い吸血鬼の倍以上を生きている鴉天狗にとっても、今発されている気は軽視できないものだった。

「ここからの嘘は禁物だ。貴様は何処でフランの話聞いた？ 正直に答えろよ？」

「……っ風の噂ですよ。私の風を操る能力を使えば遠く離れた場所の情報も入ってくるんですよ。私が毎回の事件に顔を出しているのもこの能力があるからです」

「嘘は吐いていないようだな。だが何故ここまで遅くなった？ その能力があるならば昼過ぎからでも行動を開始できただろうが」

「情報を精査していたんですよ。ブンヤにとって虚偽の情報を流すわけにはいきませんから」

嘘とも言えないがこれは真実ではない。彼女がここまで出遅れたのは取材対象と取材内容を決めかねていたからだ。情報の精査自体はかなり早い段階で終わらせていた。

「そのおかげで彼女、フランドールさんの居場所も分かりましたがね。ええ」

「何?! 今すぐ教えなさい。早く!」

「おっと、情報を渡すにはそれなりの対価を頂きませんか。割に合いませんよ」

「そんなもの後で良いだろう？ 今はあの子を見つけるのが先決だ」
「世界を知りなさい、ガキが。たかが五百しか生きていないくせに調子に乗るんじゃないわよ」

その声は先ほどまで丁寧で温和な口調で話されていたモノと同じとは思えない程に鋭く、冷たく、フランドールの話題について熱くなっ
てしまっていたレミアアの心に深く突き刺さった。

普段はペコペコしながら幻想郷中を飛び回っている文だが、彼女も幻想郷屈指の大妖怪の一人。誇り高い天狗は本気を見せることが無

い。だからこそこの言葉は文の実力を本当の意味で知らなかった二人に、今の自分たちが明確に下に見られていることを認識させた。

あるいはただ単純に先ほど黙らされたことに対する意趣返しの意味もあつたのかもしれない。

普段隠しているプライドをここに曝け出したのは、彼女が山の外の様々な人妖に会うことにより幻想郷色に染まってきたことの証なのかもしれない。

「くっ、くく……私はお前を随分見くびっていたようね。良いわ。フランを連れ戻せたらいくらでも取材させてあげる。すぐにでもしないなら館の修理を行っている間にでもすると良い。ま、私がおすすめるのは修理が終わって一段落ついた後だけだ」

先に折れたのはレミリア。ここで無駄に張り合っても余計に搜索が遅れるだけだ。自らの妹と友人の妹が関わっている状況下で、そんなことに現を抜かす事ほど愚かなことは無いと考えたのだろう。

文の見せた力の片鱗に驚いたレミリアに対し、文もまたレミリアの行動に驚いていた。

「ほう。ここまであっさり折れるとは。ですが双方にとってはその方がありがたいでしょう。取材はすぐにでも行いたいですね。このところ新聞を発行できていないですから」

ここで自らのプライドを押しとどめ、瞬時に双方にとっての利益の方向に思考を移したレミリアの判断は正しい。文は思いのほか合理的な判断を下すレミリアへの評価を少々改めることになった。

「そうだそうだ。そのことで香霖のやつが文句を言っていたぜ。俗世に興味の無いあいつにとっての暇つぶしは私らがお前のとこの新聞くらいだろうし」

「へえ。あの気難しそうな店主も意外と読んでくれているのですか。いやはやいやはや」

「まああいつは障子を破って投げ入れる方法には賛同できんようだったがな。あいつもお前の新聞の事は気に入っているらしいぜ。大きな鞍馬なんちゃらと比べても中身が薄くて考察のし甲斐があるとか何とか……」

「まさか『鞍馬諧報』と私の新聞が比べられることがあるなんて……！」

甚く感動している文の耳には都合よく入っていないようだが、中身が薄いというのは明らかに嫌味である。しかも霖之助は文々。新聞の内容に関しては内心でこき下ろしていたりする。

哀しいかな。彼が評価しているのは彼の暇を潰せるほど長時間考察ができるという点のみなのである。考察ができるとはすなわち事実が書かれているとは思えないという事でもあるのだが……。

「ちよつと、貴方の新聞の話はもういいかしら？ 取材は解決後すぐに、ね。さて、フランの場所を教えてもらおうかしら。当然嘘なんて吐いていないわよね？」

「そ、そうですね！ 早速行きましょう……妖怪の山へ………あ、そう言えばフランドールさんと一緒に覚妖怪のような者もいたような気がしますが、何か心当たりは？」

無意識が通用するのは生物に対してだけだ。無生物に対してはいしの能力も働かず、問答無用に写されてしまったのだ。

しかしフランドールを狙って念写した物に写っていた彼女はピンボケであり、文がこいしに会ったことが無いということもあって誰なのか、そもそも覚なのかさえも確実ではないのだ。

この情報により、フランドールとこいしが共に行動していることを知って安堵しているレミアア。

しかしこの情報に心当たりがあったのは当然レミアアだけではなかった。

「まさかさとりだというのか？ だがあいつは確かに地底にいたはずだ。いやしかし咲夜がフランから聞いた証言も………」

ここにきて再び、無実の少女に白羽の矢が立った。

「運命とはままならないものね。貴方にどうか、運命の加護のあらんことを」

ぼそりと呟かれた言の葉は誰の耳にも入らずに虚空に消えていった。



思いのほか穏便に終わった勇儀との談笑の後、流石に疲れたからと帰ってもらった。ここで酒でも呑まれたら洒落にならない。

だが疲れ果てた私を待ち受けていたのは穏やかな休息の時ではなく、更なる厄介の種となるべきモノの存在だった。

「はく、またあなたですか。そろそろいい加減にしておいた方が良くないですか?」

『やっぱり貴方はつまらないわね。普通なら仰天して腰を抜かすものなのに』

「生憎私は普通ではありませんし人間でもありませんから。私の前で幻影を語るなど千年は早いんじゃないですか?」

そう言う途端につまらなさそうな顔をする彼女。いや、つまらなさそうな顔自体は初めからしていたが、それをより一層深めた、と言うのが正しいか。

「私より若いくせによく言うわ。私の能力がまとも通用しない相手なんて貴女くらいのものよ。鬼でさえ私に気づかないのに」

「いえいえ、あれは気づいていても無視しているだけじゃないですかね。そもそもこの封鎖された旧地獄にUMAなど現れませんよ。……おっと失礼。貴方がそのUMAでしたね」

未確認であるからこそ十全に発揮できる能力。それが破られたからこそ旧地獄に封印された存在。私の最も会いたくない相手TOP5に堂々ランクインしている鵜こと封獣ぬえ。

正体不明をウリにする彼女にとって私ほど厄介な相手もまたいないだろう。彼女がいくら不明であろうとしても私はその内側を見ている。彼女がいくら自分を虎や蛇や鶏やなんかに見せようとしてもそう見えることは無い。

能力の面から見れば私が圧倒的に有利。では何故この妖怪を苦手としているのか。その答えはあまりにも単純なものだが厄介だからだ。

平安の大妖怪である彼女にとっては鬼の喧嘩ですら余興の一部。恐怖に陥れる対象である人間がいなくなったことで、彼女の悪行は地上にいた時よりもひどくなつた。さらには地霊殿にまでちよつかいをかけてくるようになった。

私と親しくない地底の連中のうちで私が生きていることを知っている妖怪はこの封獣ぬえだけだ。この妖怪が地底の連中からも疎まれているおかげで私の話が広がらないのは素直に感謝したいところだ。皮肉の報復が恐ろしいからしないが。

「貴方の旧友だとかいう二ツ岩大明神にでも変化の手ほどきを受けたらいかがです？」

「なんだ、地上に出ても良いの？ そういえばあいつらは最近出てつたんだっけ。どうして見逃したの？ 貴方なら止められたんじゃないの？」

「ええ確かに止めることも可能だったでしょう。ただあの時はそれ以上には忙しかったので手が回りませんでしたよ」

これは嘘。鬼との会話でもなければそこまで気を遣う必要も無い。私が彼女たちを見逃したのは崇高な目的を持っていたからだ。私たちが地獄に降りてきた少し後にまとめて墮とされてきた妖怪たち。その妖怪たちが救いたいと願った一人の僧侶を思うと止めることなどできなかつた。

多くの妖怪や人間にも好かれた、私とは正反対の外道者。紫さんが作り上げた今の幻想郷ならば彼女も受け入れられるだろう。

「確かにあの時の貴方は忙しそうだったわね。でもあいつらを見逃したんだから私も見逃すんでしょうね？」

「ええ構いませんよ」

こう言つた時の封獣ぬえの表情ときたら過去最高に間抜けだった。まさか私が二つ返事で承諾するとは思つてもみなかつたからだろう。歴史的な妖怪のこの表情を見ただけでも即答した意味はあつたといえる。

「ただ一つ、条件があります。……………彼女たちに協力する事、これが約束できるなら貴方を薄暗い地底から解放しましょう」

「なんだそんなこと。良いわよ。私もあいつらの動向には興味があるし」

今はまだ協力する気になっている。だがこれが退屈へと変わり、邪魔へと移るのも時間の問題に違いない。実際端からこの妖怪が彼女たちの計画に協力するとは思っていない。

ただ適当な条件を付けて、いかにも合法っぽく見せて地底から追い出したかっただけだ。

幸い今日、地上と地底の間の不可侵条項は撤廃された。紫さんへの心配をする必要も無い。

全ては私を不要な心労から解放するために。どうか出て行ってくれ。

この気持ちこそ

真つ先に人里へ向かった霊夢たち、フランドールとこいしを追って竹林を抜けてきた永琳たち、そして魔法の森を抜けてきたレミリアたち。この三組が里で出会うのはいわば必然であった。

「あら、こんな時間にも里の見回りかしら？ 殊勝なことね」

「何言ってるのよ。里には自警団がいるんだから私が見回る必要も無いわ。あんたたちこそこんな時間に薬を売りに来たのかしら？ なんと迷惑なことね」

「二人ともその辺でやめておきなさい。こんなところで言い争いをしていたらそれこそ迷惑だわ。私たちにも目的があるのだから油を売っている暇も無いのよ」

なるほど、とレミリアは思う。険悪な強者同士の会話に割り込める強さを紫は買っているのではないかと。弱者でありながら強者の間に割って入ろうとする。

怖いもの知らずとでも言うのだろうか。これはやはり彼女が元々人間だったが故の性質だろう。生まれながらの妖怪であるレミリアにはよくわからないものだ。

「貴方たちの目的って？」

「そうねえ。まずはパチュリーって魔女を探すところかしら。レミリアは何か知らないの？」

「私？ 私たちは生憎パチエの場所は知らないわ。フランを探すために手分けしてるから」

「もしかして……貴方が探しているのはあの金髪の子？ 背中に歪な羽をつけている」

「おそらくその子ね。という事は今永遠亭にいるのかしら？」

フランドールの居場所は文が伝えていたはずなのだが、貴重な妹の目撃情報が出た途端に、彼女の頭からその情報は吹き飛んでいた。

普段は不仲に見える姉妹も、実は姉の気持ちを理解できない妹と妹の気持ち理解できない姉のすれ違いによるものだ。

どちらも互いを嫌っているわけではない。むしろ唯一の肉親とし

ての愛すらある。それでも過去のことがあるせいで、どちらにとっても気まずい関係になってしまっている。

「いえ、彼女は既に何処かへ行った後よ」

「それが妖怪の山でしょう。永琳さんと鈴仙さんはフランさんの他に誰か見ていませんか？ 覚妖怪的な何かですが」

「覚妖怪はよく知らないけれど、ウドンゲが何か見たらしいわよ。そうでしょう？ ウドンゲ」

「はい。胸元に不気味な眼のような物ぶら下げた何ともよくわからない妖怪でした。私には見えてお師匠様には見えなかったですし……」

「ちよつとちよつと、この件にはさとりのやつも絡んでるの？ そんなの初耳なだけで」

「ちよつと黙っててくれ霊夢。これは私の予想だが、この件に関してさとり本人は関わっていないだろう。だが咲夜と文、そして鈴仙の証言から、少なくともさとりによく似た奴であることはわかる。となるどだ、考えられるのはただ一つ……」

レミリア以外、話を聞いている全員が唾を飲む。レミリアはそもそも初めから相手が分かっているので今更緊張することも無いのだ。しかし……

「そう、さとりの変装をした奴がいるってことだ。そもそも覚妖怪は心を読む妖怪だ。鈴仙にだけ見えて永琳には見えないようにするなんて不可能なはずだからな。きつとその手の能力を持っている奴が私らをかき乱して楽しんでいるだよ」

盛大にずっこけそうになったのを必死に耐えたレミリアは自分を褒めても良いだろう。

確かに魔理沙の話も分かる。事情を知らなければレミリアだってそれに納得したに違いない。

今回の異変について最もストレスを受けているのが紫であるとするならば、次点ではレミリアになるだろう。知っていても決して口に出すことができないジレンマ。加えて従者や親友たちが友に向ける憎悪も感じ続けなければならぬ。

全ては自分とさとりの今を守るため。バレた時点で即終了。レミ

リアは紫と霊夢にそれぞれ厳罰を与えられ、さとりは霊夢や乗ったレミリアの従者たちに何をされるか分からない。そしてそれは地底及び地上の崩壊をも意味するだろう。

死んだことになっていく古明地さとりという妖怪は、彼女を知っている強者たちからすればそれほど重要な妖怪なのだ。統治体制の崩壊と報復。

最悪の運命を握っているのはレミリアだ。彼女がそれを手放した時、幻想郷は音を立てて崩れ始めるだろう。如何にインチキな妖怪がいても、如何に強い人間がいても、それは止まらないだろう。

今のレミリアにかかっているプレッシャーと言うのはそれほどまでに重い。

「何にせよそいつらは今山にいるんでしょう？ その天狗が言う事が正しいなら、だけど」

「まさか疑っているんですか？ この場面で嘘なんて吐くわけないじゃないですか」

「妖怪なんて信用できないもの。ま、何でもいいわ。さつさとつ捕まえて化けの皮を剥いでやればそれで終わりよ。つたく、あんなやつさとりの真似なんかして楽しい事なんてないでしょうに」

「違くない。そうと決まればブンヤ、早く案内してちょうだい。取材が遅れるわよ？」

霊夢とアリスは初めの目的だった人里の安全を確認し、文を除くその他の四人も目的は一致することが分かった。結局はアリスの言った通り、喧嘩するよりは同じ目的に向かって共に行動することになった。

ただしそれはあくまでも妖怪の山へ入るまでの話であり、そこから先はまたバラバラに搜索競争を始めるようだ。

永遠亭組が勝った場合には普段のお仕置きも兼ねて、咲夜を被験者とする。

霊夢とアリスが勝った場合には紅魔館へ一食招待。

レミリアと魔理沙と文が勝った場合には魔理沙にだけ紅魔館へ三食招待。文は取材があるので特別な報酬は無しだ。

レミリアにとって、フランドールとこいしが早く見つかるならば誰が勝つても美味しい展開だ。僅かな食費など、妹の無事に比べれば些細なものだ。

所変わって風穴付近。そこにはおなじみの三人の姿があった。

「ここで確かに合っているんでしょね、咲夜」

「……ええ。間違いないはずです。今日の昼も訪れてその木に印も付けましたから」

「ならば問いましょう。ここが正しいとするならばどうして穴が無いのかしら？ 地底まで続く大穴ならば、近くに來たらすぐ分かるはずなのだけれど」

「それは……私にも分かりません」

「考えられる可能性は多くないわ。その中で最も有力なのは、貴方が私たちを違う場所に連れてきたというもの。木に目印を付けるのなんて貴方なら一瞬でできる。違って？」

レミリアはいない、紫もないという状況で、彼女たちは結局一番怪しいと思った妖怪に話をつけに行くことにしたようだ。しかし肝心の風穴が存在しない。

当然咲夜が別の場所に二人を連れて行ったわけではない。そんなことをするメリットは彼女には無いからだ。現在の風穴は紫によって隠されている。

地底は今一時的な封印状態なのだ。つまり、さとりは失念していたがぬえもまだ地上に出られていない。

「そんな、言いがかりですよ！ 美鈴もそう思うわよね？」

「ええ……確かにパチュリー様の言い分はどうかと思いますが、それでもここに穴がない事は確かなんです。私はどちらかと言えばパチュリー様寄りですよ、咲夜さん」

本当の穴の位置を知らない二人にとって、今見えている現実を信じるのが当たり前だろう。

それにいくらさとりを嫌っていたとしても咲夜はレミリアの従者。主人の友人を無駄に傷つけたくないのかもしれない、と疑われても反論できるだけの材料が咲夜にはない。

「ねえ咲夜、私たちも古明地さとりを殺そうという気はないのよ。せいぜい動けなくなる程度に痛めつけるくらい。親友を誑かした事を後悔させる程度に抑えるつもりよ？」

「……………」

咲夜は何も言えない。今の咲夜はさとりと同じだった。

真実を語ってもそれは他人にとっての騙りとなり、自らの言葉はどれも信じられることが無い。なんとも不条理。どこまでも理不尽。

「……………古明地さとりに傷をつけさせるわけにはいきません。お嬢様が彼女の友人であると断言するのならば……………私はお嬢様を信じます」

「ようやく本性を見せたわね。打ち倒してさっさと案内してもらおうわよ」

「本性、ですか……………ふふ、違いますね。私は自分の愚かさを知ってしまっただけですよ。さあ踊りましょうパチュリー様。久々の手合わせよろしくお願いします」



結局今日はほとんど仕事ができなかったが、今からしようにもこいの事が気になって手につかないだろう。こういう時には紅茶を淹れて読書するに限る。今は筆を進める気にもならないし。

読書を始めてから三十分程度経っただろうか。不意に扉を叩く音がした。この礼儀正しいノックはお隣かパルスィのどちらかだろう。時間的にはお隣の可能性が高いか。

「どうぞ」

「失礼します。実は報告がありまして……はい、何故か人面の虎が脱走していたので捕まえたのですが、抵抗するので檻にぶち込んでおきました。あんな珍しい動物いつから飼っていたんです？」

は？ 人面虎？ 人面犬とかでなく？

私だってそんなおぞましい動物を飼った記憶はない。そもそも地霊殿の動物は何処からか勝手に増えているのだが。それでもそんなにインパクトのある動物ならば忘れないだろうに。

「記憶にないし見に行ってみましょうか。お隣もついてきなさい」

お隣の心を読む限りでは本当に人面虎の姿を思い出しているようだ。でも間違いなく美味しそうではないと思う。人間要素は顔だけだからね。こういう時のお隣はよくわからない。

美味しそうだという事から連想して今度は夕飯の事を考えているし。なるほど今日は野菜炒めか。鳥のお空よりも猫のお隣の方が野菜が好きなのはどういう事だろうか。

「着きましたよ。この檻です」

「どれどれ……ってまたあなたですか。どうして甘んじて檻に入られていのです？」

そこには三十分ぶりに見る顔があった。

「甘んじてなんかいないわよ。その猫の力が思いのほか強かっただけ。と言うか貴方私を騙したわね」

はて、騙した覚えはないのだが……あ。紫さんが結界を張っていたことをすっかり忘れていた。忙しかったし仕方ないか。紫さんほどではないが今日の私はなかなか疲れていたし。

「ん？もしかしてさとり様の知り合いの方でしたか。これはこれですみませんでしたねえ」

「いやいやお隣が謝る必要はないわ。悪いのは此処に侵入したこいつだもの。で、封獣ぬえ、私はすっかり忘れていたようですが現在の地底は地上と切り離されています。こちら側の都合が済めばまた繋が

りますから、それまではこの檻にいてください。何、すぐに済みますし餌もきちんと出しますよ」

「餌って言うなよ……で、ここにずっといななければならぬわけ？ 正直普通に旧都にいる方が良いんだけど」

「それは流石に認識が甘い事です。一日二度も地霊殿に忍び込む不届き者を選択権など無いのです。安心しなさい。早ければ明日の朝にでも解放できるでしょう」

少なくとも紅魔館の方々と魔理沙さん、紫さんと萃香が動いている事は分かっている。紫さんと萃香だけでもオーバーキルの予感がするのに、それに加えてこれだけの人数がいるのならば少なくともフランドールさんの発見はすぐだろう。

後は何とか鈴仙さんに協力を仰げれば、彼女はあるいは紫さんや萃香をも超える最も強力な支援者になってくれるだろう。あそこの薬師を崩すのは骨が折れそうだが。

「ちえ、折角の地上生活もまだお預けか。まったく嫌な奴だよ貴方は」
「誉め言葉です。覚妖怪なんて嫌われてなんぼの種族ですから。そういう点では鶴も鬼も変わりませんけれどね。では後で夕食を持って来ますよ。行きましよう、お隣」

お隣が作らないと夕食もできない。お空も戒もそろそろお腹を空かせている頃だろう。

私が作ってもいまいちだがお隣の作ると美味しいごはん。

次に食卓にこいしが並ぶのは何時になるのだろうか。そんなことを夢想しながらテーブルにつく。

一人分空いた椅子。何故か無性に寂しくなる事が分かっていたならば勇儀を残していても良かったかもしれない。

「今日は助かったわ、戒」

「いえいえ。さとり様が忙しい時に代わりに仕事ができない式神なんて不要ですから。それに私は一応地霊殿の主らしいですし」

私は戒が真の意味でそうなってくれることを祈っているのだけだ。

まともだった彼女

東風谷早苗はひどく悩んでいた。この地にもようやく慣れてきた頃で、博麗のように妖怪退治にも挑戦するようになってからおよそ一年。

しかしまだ満足な成果を挙げられていない彼女は、彼女の仕える神々への信仰を思うように集められていないのではないかと、自分が彼女たちの役に立てていないのではないかと常日頃から悩み続けていた。

一年半前に見た本物の妖怪に、彼女はまだ幻想郷で一度も顔を合わせしていない。ともすれば邪神かとも思われたあの女性は、二柱に言わせればどうやら妖であつたらしい。

まるで彼女を馬鹿にするような技の数々。彼女の手によつていとも容易く起こされる奇跡。渾身の攻撃を躲して語り掛けるその余裕。そして二柱を同時に一つの空間に閉じ込める力。その何もかもが彼女にとって屈辱的だった。

しかし実際には彼女がまんまと騙されただけであり、神奈子も諏訪子もその妖怪に陥れられたわけではない。彼女たちはただ旧友、八雲紫の芝居に早苗の両神として協力しただけの事だ。

昔から彼女を見守り続けてきた二柱にとって、我が子同様の風祝を死地に赴かせる気はなかった。彼女が幻想郷でも生きていけるのか、紫はただ早苗にその試験を課しただけに過ぎない。

最中に見せた奇跡でさえ紫にとっては余興に過ぎない。神がかり的な能力を持つ紫に対して、現人神という半神はあまりにも力量不足だった。

外の弱い妖怪を相手にイキり散らしていた早苗に圧倒的な力の差を見せるといっても彼女たち三人の計画の内であった。

結果的にそれは成功し、彼女は幻想郷に行くまでのごく短い期間にも必死に修行をしていたという。最終的に負けたとはいえあの博麗の巫女相手にもかなりの奮闘を見せた。

今の彼女の目標は少しでも強くなつてかつての妖怪に一撃を入れる事。神奈子と諏訪子が未だに事実を語らず、さらに役者だったせいもあるが、早苗はただ只管に八雲紫という妖怪を嫌っていた。

名前はもちろん知らない。それでも守矢の神を拉致した挙句に手加減し、さらには煽つて何処かへ消えていった妖怪。事情を知ればまた何か別の感情も生まれるのかもしれない。

そうならないのは誰も彼女に真実を告げないから。二柱は面白がつて、紫本人は別に気にしていないから真実を語らない。

質の悪い大人のような子供も当然悪い。だが同時に早苗も悪い。彼女はあまりにも小説を読みすぎた。入念な計画的犯行こそが当たり前だと思い込んでしまったこともこのような勘違いの原因となっているのだろう。

全てが非常識なこの世界において、彼女の常識は通用しない。尤も、現在の彼女の思い込みは常識の範囲外であるが。

何とかして本気を引き出したい相手。早苗にとって最も憎き相手は今、守矢神社にいた。



萃香の調査により、少なくともフレンドールの方は山にいたことが分かった。彼女たちの狙いはますます読めなくなってきた。外に出た後、それ以上に何を望んでいるというのだ。

幸いと言うべきか厄介だと言うべきか、今夜は完全に凍り付いている。かつて私たちの作ったような半端な永遠ではなく、時を凍り付かせた完全な永遠。間違いなく永遠亭の連中も絡んでいると見るべきだろう。

しかしそれさえも何故だか分からない。時を夜に固定したのは恐らくフレンドールを日光に晒さないようにするため。レミアアの頼みか何かかとも勘繰ったがおそらく違う。あの永琳が個人的な他人の頼みを素直に受け入れるはずなど無いからだ。

彼女たちは地上に棲む者たちのいつさいを見下す地上人。裏を返せば身内以外に対しては誰にでも平等とも言える。

だからこそ彼女がレミアアの頼みを素直に受けるとは思わないのだ。彼女たちの間で何かしらの取引があったのかもしれないしそうでないのかもしれない。

唯一つ言えるのは、少なくとも永琳がフランドールを探すだけの理由を持っているという事。下手をすればまた下賤私な者に絡まれるかもしれない。それだけの事をしてまでフランドールを見つけない理由に心当たりはない。

だがそのことを尋ねるためだけに彼女を探すのも馬鹿らしい話だ。どうやら永遠亭にはいないらしい彼女を探すよりは居場所の分かっているフランドールを説得する方が早い。

散々文句を言いながらも戻れないと知るや否やきちんと協力してくれた萃香に連れられてやってきた場所は事もあるうに守矢の社であつた。

現在のフランドールがこいしの代弁者のような役を担っているのだと仮定すれば、こいしの目的はこの守矢神社ということになるのだろうか。

しかし何故？ あの異変の後、こいしが地霊殿に帰って来たという話はさとりから聞いていない。守矢が先の異変に関わっていることを知っての事か。それとも全く知らないが興味本位で誘導してきただけなのか。

無数にありそうな可能性も、彼女の思考の単純さを考慮すればかなり絞り込める。全ては会って話せばわかると、そう思っていた。思っていたのに。

「性懲りも無くまた他人の神社に侵入するなんて！ それも今回は境内ではなく拝殿まで」

振り返ってみれば大層怒った現人神サマのお姿があつた。

こうして面と向かって会うのもあの日以来か。神奈子と諏訪子の頼みもあつて、この子が妖怪退治に赴く際にはたまに見ていたりす

る。しかしそれはあくまでも一方的なもので、彼女が私の姿を見るのは此処に越してきて初めての事だろう。

だがここまで怒っている理由に心当たりはない。本殿と違って拝殿なんて人が入っても問題ないでしょうに。

「ははーん。全て納得がいきました！ お二方がこの時間に帰って来ていないのも全て貴方のせいなのね！ 今の私はもうあの時の私とは違いますよ。早くお二方を返してもらいますー！」

「ちよつと待ちなさい。それは誤解ですわ。私は彼女らを攫ってはいない」

「はー！ 誘拐犯は決まってそう言うのですよ。次は責任転嫁をするんでしょう？ ええええ分かりますよ。しかーし、そんな醜い言い訳もこの名探偵コチャには通用しません！ 来ないならこちらから行きますよ。いざ、尋常に勝負ですー！」

話を通じない。彼女たちからはとても頭の出来が良いと聞いているが、おかしな方向に振り切れてしまえばそもそも頭が回らなくなるらしい。

そもそも何故このように短絡的な思考に至ったのかを問いたいところだ。妖怪退治の腕は進化しても頭の方は退化してしまっただけはないだろうか。以前は私の課した試験をクリアできるだけの冷静な頭脳があつたはずなのだけれど。

「おい紫、まともに相手するのかい？」

「するわけないでしょう？ 早急に終わらせるわ」

まともに戦っても結果が同じなのであれば、無駄に希望を持たせるような事をする必要はない。今はまだ未熟なこの娘を沈めるのには一秒もいらぬ。



この瞬間、人間、妖怪、神、種族を問わず、山にいる存在の全てが一斉に同じ方向へ顔を向けた。

ある場所では

「い、今のはなんだ？」

「分からないけれど、あそこにフランがいる可能性はあるわね」

「そうするととても危険な状態になっているかもしれない。急ぎましょう」

またある場所では

「今のは……守矢神社の方向から？」

「まったく面倒くさくて人騒がせな連中だわ。行くわよ」

さらに別の場所では

「山にいるという天狗の情報が正しいのであれば今のはもしかしたら……」

「急ぎましょう！ 師匠」

誰もが嫌でも反応してしまう。それほど強大な力が山全体を駆け下りた。

目線の先へ急ごうとする者たちがいる一方で、当然その力から逃れようとする者たちもいる。

「今のは……パチュリー様、ここは危険です。今すぐに避難しましょう」

「そうね。というわけで一旦休戦よ、咲夜」

「ええ。元よりそのつもりです。私たちの本来の目的は妹様を探す事でしたし、ここで道草を食っている暇もありませんでしたね」

彼女たちだけではない。山に元々棲んでいる妖怪達の多くはひどく怯えて会話すらもままならないほどになっていた。

それもそのはず。普段の彼らは天狗という山を守る存在に頼りきっており、長く安全すぎる場所にいたせいで腑抜けきっていたのだ。

天狗に至っても下から上までてんやわんやの大騒ぎである。侵入

者に対する警告と排除を行おうとしていた上層部の者は皆、想定外の場所からの力に狼狽えるより他はなく、それ以下の天狗たちについては言うまでもない。

神の怒りかと震えあがる妖怪たち。

しかし悲しいかな、守矢神社の二柱は現在地上にすらいないのだ。



「そも、貴方は地上に出て何をしたいのです？」

「心を読めばいいんじゃないの？ いつもしているようにさ」

「そんなことをしてもつまらないでしょう」

心は読めているがそのまま私が一方的に話し続けるのは会話とは言えない。それにそのような事をして相手は何一つ楽しくないことも千年も前から知っていることだ。

それが分かっているても普段はついつい悪癖が出てしまう。私の周囲にいてくれるのはその悪癖を知って尚付き合ってくれる優しい者たちばかり。

しかしそれでも相手が会話を楽しめていないのは事実。私の方に問題があるのだから、友人のために癖を矯正したいと思うのは至極当然の事だろう。

その実験台として選んだのが封獣ぬえというわけだ。この妖怪にならいくら嫌われても何のダメージも無いし、地上へ解放してやれば二度と関わることも無いだろう。まさにうってつけというわけだ。

「いつもしているくせに」

「貴方には何度も言わなければ分からないのかしら？ それとも誰かに代弁してもらわなければ自分の心も分からないような残念な妖怪なの？」

嫌え。私をもっと嫌え。

私を嫌えば嫌うほど、私と貴方の心の距離は広がる。疎遠になれば再びで会おうともしないはず。嫌いな奴の話題など間違っても人前

で出そうとは思わないはず。

嫌でも付き合わなければならぬような紅魔館の方々とは違い、地上に出た時点でこの妖怪との接点は消え失せる。

莫大な数の経験に裏打ちされた答え。私の身を守るための最適解。私は嫌われることで敵を作り、あたかも死んだように見せかけることで、鬱陶しい襲撃の数々をゼロにすることに成功した。

数々の修羅場をくぐり抜けて得た結果。私の求めた結論。

私の味方は最低限で良い。この私を嫌わない者たちはほんの数人、両の指で数えられる程度で構わない。

心の底から嫌われて敵を作って、そしてその対価として安寧を得る。何とも歪んだ等価交換。嫌われる勇気に見合うだけのリターンがある。

一度超えた壁ならば、そこから先は何度だって超えられる。嫌われることを恐れたこいしも一度でいいからこの壁を超えられれば良かったのに。

しかしただ嫌われれば良いというわけではない。相手が自分を忘れてしまう程度に嫌われるのがコツだ。憎まれるほど、恨まれるほどになってしまえば逆にこちらの安泰は無くなる。

そのさじ加減。そこさえ上手くできれば、相手の心に惑うようなことにはならない。この妖怪にも上手く忘れてもらいたいところだ。

「本当、面倒くさい奴だわ。どうせ今は心の中でほくそ笑んでいるんでしょ？　なんだ、覚妖怪になるのも簡単じゃん」

「失望しましたよ、封獣ぬえ。大妖怪と言えども所詮は子供だましのいたずらで地底に落とされた残念な妖怪でしたか。これほどつまらない妖怪は記憶にも残りそうにありませんね。では」

踵を返して自室へ戻る。

だがしかしこの妖怪は私の思い描いた通りには動いてくれないらしい。

『私の記憶にも残らないのだから貴方の記憶からも私を消せよ』と暗に伝えたつもりだったのだが、彼女は思いのほかプライドが強かったようだ。何としてでも自分と言う恐ろしいモノを他人の記憶に植え付けたいらしい。

迂闊だった。もう少しこの妖怪の本質を見極めてから発言すべきだった。地底に落とされてからも八百年以上になるはずなのに、まだかつての栄光を忘れていなかったとは。

檻のある場所から私の部屋へ行くには途中に客間を通過するのが一番早い。だからいつもの通りに客間のドアを開いて中に入ろうとしたのだが、中を見た瞬間に私は思わず手で顔を覆ってしまった。

見慣れた顔が二つに見覚えのある顔が二つ。

どうやらお空が畏れ多くもこの神々を地霊殿内部に入れてしまったらしい。呆れたお隣に叱られているが本人は何が悪かったのかさえ分かっていないようだ。

肝心の二柱の方は何処か後ろめたい表情で少し俯いている。……ふむふむなるほど。

「お隣、もうそのあたりでやめてあげなさい。お空も反省しているみたいよ」

実際は全く理解不能といった風で反省も何もしていないが、これ以上彼女を責め続けるのも可哀そうだ。悪いのは隣にいる二柱のようだし。

お空にも私の意図は伝わったらしい。いかにもな表情でお隣に謝っている。こういうところは鋭いのにねえ。

「さてさて、私が問題視しているのは八坂様と洩矢様の行動の方なのですが……何か申し開きがあればお聞きしますが？」

なんとこの神々はあの時に地上に帰らなかったらしい。私が地霊殿エントランス付近まで見送った後、なんとそのまま旧都の方に足を運んで酒を買っていたというのだから驚きだ。

私の忠告を無視して地底にしばらく居座った結果、紫さんの張った結界のせいで帰れなくなったらしい。で、お空経由で地霊殿に来た、

と。はた迷惑な神様たちである。

「いや神奈子のやつが『地底は鬼の楽園だから美味しい酒もたくさんあるだろう』とか言ってるだろ？」

「な?! 諏訪子の方こそノリノリだったじゃないの。なんだっけ？」

『鬼の酒を呑んでみたい』だったかしらね?」

「初めに誘ったのは神奈子の方だろう?! 責任を押し付けようとしなさいよ」

「止めなかった諏訪子も悪いんだ。諏訪子こそ私に全責任を押し付けようとしなさいよわ」

「……………子供か? これでは昼間の威厳が台無しだ。しかしこのまま続けさせたら紅魔館だけでなく地霊殿までもが吹っ飛ぶ事態に発展しかねない。何とかして止めねばならない。」

「八坂様も洩矢様もどうかそのあたりでおやめください。これ以上続けるというのなら、昼の許可も白紙に戻します。それに八雲の力で空から八咫鳥を引きはがさせますよ」

地底での力関係は私〱二柱であることを明言する。あとは彼女たちの計画の脆弱性についての指摘も付け足す。

地底を利用したいのならばまずは地底の法に則ることだ。地底の主と言う権力が役に立つのはこんな時くらいなのだけだ。

こんな弱小妖怪に対してもきちんと過失を認めて謝ってくれるのだから悪い神様たちでないのは明らかだ。流星は高位の神の器とも言うべきか。

でも結局フランドールさんが連れ戻されるまでは地上に帰れない。封獣ぬえと言いつこの神々と言いつから地霊殿は保護施設になつたのだろうか。

でたらめ

圧倒的な力の奔流だけで早苗を沈めた紫。彼女の目的である彼女たちも当然そこにいた。

山の各地に散らばっていた者たちが次々と集合する。

守矢神社に初めに到着したのは魔理沙たち三人だ。それぞれが速さに自信のある者たちなのだから当然と言えば当然だろう。途中の哨戒が介入する暇も無いほどの速さで飛んで行つた彼女たちに追いつける者などいまい。

そこで彼女らが目にしたものは地面に倒れ伏す風祝とそれを見下ろす賢者、そしてその後ろで瓢箪を傾けている小鬼だった。

事情を知っているレミリアでも混乱するほどの状況だ。この場において魔理沙や文が混乱しないわけがない。

「おま、さっきのあれはお前だったのか?！」

「さっきの? はて、何のことやら」

魔理沙と文は先ほどの力の発生源が紫だったことに驚いている。文はそもそも紫が山を嫌っていることを知っているので、わざわざ来た理由をも不思議がっているのだろう。

しかしレミリアが驚いているのは全く別の事だ。レミリアは紫がさとり経由で動いているであろうことまで目星を付けている。その上で何故守矢神社を襲撃する必要があつたのか、だ。

レミリアは彼女と守矢の関係を知っている。特に早苗とはなるべく顔を合わせないようにしているらしいというのもさとりから聞いていた。しかし今は早苗の意識を刈り取って堂々と立っている。まるで私たちが来るのを待っていたかのように……。

「惚けるんじゃないぜ。背筋も凍るかと思つたくらい力だ。此処からしたかと思つて見に来てみれば早苗が倒れている。早苗を倒したのはお前だろ?」

「ああそのこと。ならば少しばかり邪魔だったので眠ってもらつただけですわ。私の計画に障害は要らない。それだけの事です」

「お前っ！ それだけの理由で……………」

「ええ。それだけの理由で。たかがこれしきの事で気を失ってしまうなんてあまりにも未熟だと思いませんか？ ああご安心なさい。この子は二日もすれば目を覚ますでしょう。ですがもうここに用はありません。では行くわよ萃香」

「はあく。いつまで経っても勝手だねえ。わたしやお前ほど難儀な奴を他に知らないよ」

文句を言っても協力を惜しまないのは早く帰りたいからに違いない。



伊吹萃香も八雲のスキマに入って何処かへ行ってしまった。魔理沙は憤慨しているし、天狗も早苗を気遣うようにチラチラ見ている。

しかし何かが引つかかる。脳を支配する大きな違和感。気づけない方がおかしいほどに大きいように思えるが、どうしてもそれが何なのか分からない。

「くっそ、絶対あいつらが犯人だ。なあレミリアもそう思うだろ？

あいつらがフランのやつを攫ったんだ」

「……………それよ。そうに違いないわ」

それだ。八雲が動くのは確実にフランとこいしを探すため。お供に鬼を連れていたのは人探しに便利だからだろう。そんな奴らが無駄な場所に足を運ぶなどあり得ない。

そうだ。フランとこいしは確実にここにいた。少なくとも早苗が倒される前まではいたはずだ。

「あいつが犯人だとすれば全て説明がつく。紫なら物の破壊なんてわけないはずだし人を攫うのだって容易にやってのける。しかも自由自在に出たり消えたりすることも可能だ。普通に考えりや分かるはずなのにどうして気づかなかったんだろうなあ」

八雲紫はこの場から撤退した。それが示すことはただ一つ、少なく

とも姿の見えるフランの方は確保したのだ。鈴仙と永琳の証言から察するに、こいしはおそらく自分自身しか姿を隠せない。

となるとフランは常に見える状態だったはずで、あの八雲がそれを見逃すとは思えない。あいつの事だから私たちが動いていることも当然承知の上だっただろう。だからこそ余計に分からない。私たちもじきに見つけることになったであろうフランをわざわざ連れ去った理由はなんだ。

先ほどの魔力の一時的な解放も本当に早苗を眠らせるためだったのか？　むしろフランたちの魔力の残滓を打ち消すためと言われた方が納得できる。

ともすれば早苗の近くにいたフランたちをも一網打尽にするつもりで放ったものだったかもしれない。あいつの心なんてさとりでも理解できないんだから私が理解できるはずもなしか。

「ちよつと待って魔理沙、それ本当なの？」

「ん？　おおアリスたちか。本当も何もあいつが自分の口からそう言ったようなものだけ。ほらそこに早苗が倒れているだろ？　それもあいつが邪魔だったから気絶させただけなんだとよ。私たちが来た途端に逃げてったよ。萃香と一緒に」

「なんだって？　萃香がどうして地上にいるのよ。あいつ、地底から滅多に出てこないわよ？」

「そんなこと私に聞かれても知らん。大方戦闘要員か何かだろ。妖怪の山はあいつ一人で潰れるって聞いた事あるし」

伊吹萃香の本気は見たことが無いが、普段飄々としている天狗が目に見えて青くなっているところを見ても嘘ではないのだろう。あの時の一本角の鬼も顔色一つ変えずに目にも止まらぬ速さでフランの右腕を折ったらしいし。

どちらの方が強いのだろうか。今度さとり会った時にでも聞いてみるか。

アリスは紫がそんなことをするとは思えないと主張しているし、魔理沙は聞いてもいなくせに決めつけるなど反論しているしであの

二魔女は大層熱くなっている。

霊夢はと言うとそんな二人と関わるのが面倒になったのだろう。こちらは天狗と話をしている。内容はあちらとほとんど変わらないがこちらはどちらとも冷静である。

「で？ あんたはどう思うのよ。真実を見抜く目から見て紫の言動は怪しかったの？」

「実際にどうかと言われると確かに怪しくはありません。しかし彼女が犯人である可能性は限りなく低いと見て良いと思いますよ」

「それまたどうしてなのよ。怪しいんなら犯人なんじゃないの？」

「ぶっちゃけ彼女が犯人ならば私たちの前に姿を見せる事はしても伊吹様と動いていることを表には出さない筈です。力の放出から私たちが到着するまでには十秒程度のタイムラグがありました。それまでずっと早苗さんを見下ろしていたと考えるのは些か不自然です。遅かれ早かれ山の天狗たちがやってくるのは目に見えていますから」

流石は第三者の目線で記事を書かなければならない天狗だ。それとも長く生きてきた中で身に付けたものだろうか。魔理沙よりも格段に広い視野で物事を捉えている。

主観まみれだと聞いていたこいつの新聞も読んでみれば案外面白いかも知れない。次に出る新聞は読んでみても良いな。

まあ実際に天狗の言う通り、この場であいつが姿を見せる必要性は感じない。全員が一堂に会している場ならまだしもいたのは私たち三人だけ。しかも惚け方も露骨すぎる。

普通ならば自分が犯人だと言っているようなものだと思われる台詞でも、あいつが言うのと逆に犯人だとは思えなくなる。どうしてあそこまで胡散臭くなれるのだろうか。

「あらあらあら、貴方たちはあの時から何も変わっていないわねえ」

ようやく最後の一組が到着だ。

そういえばパチエたちは何をしているのだろうか。地底に押しかけようとしているなんてことはまさか無いでしょうがあの子たちの事だからどこで油を売っているか分かったものではない。

空間掌握に魔法に気なんていう探索にはびったりの能力者たちの

はずなのに目的を忘れて遊んでいるなんてことは……無いと信じた
い。

「そりゃ頭脳派とパワー派だったら相性は良くないでしょうね」

「そもそもこいつは手癖が悪いのよ。すぐに他人の物を盗もうとする
んだから」

「いつも言ってるだろう？ 死ぬまで借りてるだけだ。永劫を生きる
お前たちにとっては一秒も数十年も等しくゼロだ。わかったか？
つまり一瞬たりとも借りていないことと等しいんだよ」

「毎度毎度屁理屈ばかり。借りているのかいないのかすら分からなく
なっているじゃないの」

「……………本当に仲が悪いのね」

これも一種の風物詩よね。普段はパチエと魔理沙が口喧嘩してい
るのもよく見るし。魔理沙ももう少し態度を改めたら魔法談義も
捗って上達も早まると思うのだが。

強者に対しても強気で行く姿勢は見習うべきところもあるかもし
れないが、魔理沙の場合はそれが行き過ぎてしまうように思う。恐れな
い心が窃盗を良しとしているのならばそれは残念でならない。蒐集
癖が悪い方向へ向いてしまったか。

パチエもアリスもきちんと断りを入れればもう少し快く貸してく
れると思うのだけれど、騒がしい方が飽きがこなくていいから私は今
のままでも一向に構わないと思う。それになんだかんだ言っても
そうなった時に悲しむのはその二人のような気がするし。

「お、お師匠様……………あそこに、あそこにいるのは…………」

「ウドンゲ、貴方だけではなく私たちにも見えるようにしなさい」

明確な命令。できるかできないかではなくささせる。月の頭脳と呼
ばれながらも弟子にだけ見えて師匠には見えないというのが思いの
ほか悔しかったのだろう。それこそ一度逃がしてしまうほどに。

鈴仙が早苗の方へ歩いて行ったかと思えばその手前で急に屈んだ。
やがて手を伸ばした先、彼女の指先が触れているところから次々と輪
郭が現れてくる。

数秒の後、私たちの目の前に現れたのは早苗とほとんど同じ姿勢で
気を失っている少女。

思いのほかさとりと瓜二つな少女、古明地こいしがそこにいた。

特徴的ながらも固く閉ざされたサードアイ。それを見てようやく、
心を読めない覚妖怪というものを理解した。

しかしさとりに言わせればこいしはもはや覚妖怪ではないナニカ。
妖怪が自らのアイデンティティを捨て去って新たな能力を得た稀有
な例の体現者。自らの妹でありながらその心が他の誰の心よりも理
解できない無力感を覚えさせてくれる妖怪。

昔さとりからそんなことを聞いていた。姉として誰よりもこいし
を愛しているはずなのに、彼女と過ごす時間は誰よりも少ないと嘆い
ていた。明確な血のつながりなど無い自分がこいしの姉であつてい
いのかと不安があつてもいた。

その時は何故さとりがそのような話題を振つて来たのかを私は理
解できていなかった。しかし今、古明地こいしという妖怪を、彼女の
現れ方を目の当たりにしたことで今更理解できた。

普段から常に目視できる状態でどこへフラフラ出て行くわけでも
なく、そして何よりも明確なスカーレットの血族であることが約束さ
れた姉妹である私たち。

どうして報われない姉妹がいる隣でくだらない喧嘩などできるの
だろうか。どうしてあの子に不満を抱いていられようか。私たち姉
妹はこんなにも恵まれていたのにどうして……どうして妹思いのさ
とりが報われないのだろうか。

きつとこいしだつてさとりの事が好きでたまらないだろうに。

運命とは本当に残酷な物。そう思わずにはいられない。



場が騒然とした。鈴仙の能力によって完全に波長をずらされた少

女の姿は魔理沙の自論が完全に破綻したことを物語っている。と同時に咲夜から聞かされたフランドールの話が真実でなかったことも。

目の前の少女は確かに覚妖怪であったがさとりではなかった。意識と無意識。ピンクと緑。正しく対極に存在する哀しき姉妹。

やがて目を覚ました妖怪少女。ほとんど人間である早苗とは違い妖怪であるこいしは妖力に中てられた後でも比較的回復が早い。

しかし早苗と同じ基準で考えていた者たち以外もその早さには驚きを隠せない。人間として強い力を持っていて神の血も引いている早苗でさえ二日かかると言われていたのだ。いくら妖怪と言えども僅か数十分で目を覚ますまでに至るといえるのは驚異的である。

上半身だけを起き上がらせてふと周囲を見渡したこいしはいつも通り、感情の読めない^{虚無}ニヒルの笑みを浮かべる。

誰からも注目されない彼女を誰もが注視している。かつてこいしがこれ程までに注目されたことはあったのだろうか？　もしかしたらまだ心が読めた時にはあったのかもしれない。その時はきつと憎き覚妖怪として。

「あ、さっきのうさ耳のお姉さん？　やっぱりったりじやなかったのね」

一番に目に入ったのがよく目立つ耳をしている鈴仙だったのだらう。しかも唯一彼女の能力を破った者。覚えていないはずが無かった。

鈴仙からしてみれば彼女の存在がはつきりしたことで師匠からのお咎めも無くなったので感謝さえしているだろう。

「……あ、貴方たちはこの前お姉ちゃんと遊んでいた二人ね。地底にいたよね」

「あー？　私はあんたなんて見てないけど。萃香みたいにコソコソ覗いてたってわけ？」

「萃香？　うー、ダメダメあの鬼は。いっつもお姉ちゃんに迷惑かけてるから。勇儀の方がまだマシだよ。そんなこと言ったらパルスィの方が良いけど。あ、でもやっぱり一番はお隣ね」

「…………お姉ちゃんと言うのはさとりのことでもいいのかしら?」

いい加減話がつながらないと悟ったのかアリスが別の話題へと切り替える。

「そうそう。私は古明地こいし。お姉ちゃんのペットが強くなったから私のペットも強くしてもらえるようにここに頼みに来たの」

「で、紫にやられたってわけね。それでこいしちゃん? 私たちフランドールって子を探しているんだけど何処にいるか知らないかしら?」

「うーん、フランちゃんならさつきまで一緒に……………ああ! いないわ。折角良い遊び相手が見つかったと思ったのに」

こいしがフランドールを唆して無理矢理にでも外に出した理由。それはあまりにも単純で幼く、しかし普段から誰にも認知されないせいで遊ぶ相手も里の子供たちくらいであるこいしにとってはとても重要な事だった。

こいしだけがいてフランドールはいない。この状況を怪しんでいるのはレミリアだけだ。こいしが倒れていたという前提があるのなら、紫がこいしも同時に連れ去らなかつた理由が分からないのだ。レミリアの中で、紫の得体の知れなさがまた一段階上昇した。

実際に紫は境界を弄ればこいしを視認する事も可能だ。だが彼女はあえてフランドールのみを連れてこの場を去った。こいしをこの場に残した理由を知る者は彼女しかいない。

「何でも良いけれど他人の家を破壊するのはやめてもらいたいものね。フランが消えたのも貴方のせいなのだから修繕費は地霊殿に請求しておくわ」

「ええー? またお姉ちゃんに迷惑をかけちゃうの? 遊びたかっただけなのに」

今更目的がころころ変わっている事にツツコむ者はいない。幻想郷で生きていくにはこのくらいの適応力が無ければならないのだ。

遊んでほしいのならばと魔理沙が口を開く。

「遊び相手なら私になってやるよ。流石にさとりより強いってこたあ無いだろうからな」

「教えてあげる。お姉ちゃんは確かに強いけど絶対に私には勝てない。絶対にね」

「そう言つて飛び上がったこいしとそれを追いかける魔理沙。」

雲間からようやく覗いた月を背に光の花が咲く。花火のように美しく儂く、そして残酷に。

もつと広い世界を

「そう、それでいざ帰ろうと思ったたら帰り道が閉ざされていたわけですか。強大な神である貴方たちなら妖怪の張った結界如き簡単に破れないのですか?」

「馬鹿言うんじゃないよ、地底の主さんよ」

「古明地、もしくはさとりで呼んでくれませんか?」

第三者に地底の主と呼ばれ続けたらやめにくくなってしまいうだろう。無駄に長いし。そりや都合よくその言葉を使う事はある。地底の主と呼ばれる者を敵にするという事は鬼を敵にすることと同義だと思っっている妖怪が大半であるのが現実だから。

そういう時には喜んで使わせてもらおうがそれ以外の時には極力使いたくない。

そもそも私は主人やら統治者やらという言葉が好きではない。弱いのに権力だけはある自分が許せなくなりそうだから。

レミアさんや紫さんのようにきちんとした実力があつた上で権力の上に座しているなら何も問題ないだろう。だが私は違う。数々の妖怪から幾度となく反乱を受けるほど、上に立つ者として認められていない妖怪なのだ。今までは勇儀や萃香、お燐にこいしなんかがいだから無事だっただけ。それでも皆主は私以外に考えられない、と口をそろえて言う。

不思議なものだ。弱者を守るのが鬼の生き方ではないはずなのに。強者と争い続ける事こそが彼女たちのあり方だとそう思っているのに。

目の前の神様たちは国を治める長とも呼ばれた程の存在。そんな存在に『主』なんて呼ばれるとむず痒くなる。私の気持ちなんて誰にも分からないだろうけど。

「じゃあさとり、馬鹿言うんじゃない。確かに結界とは界を隔て、結びつけるためのもので妖怪とは頗る相性が悪いものだ。しかし紫の能力はこれに特化し過ぎている。奴は結界を幾重に張ってもその内側の領域に入る事すらできるのさ」

「そうそう。あの子に境界はない。紫を神域から拒むことはできないしどれほどの距離を隔てても意味はない。月の連中は紫に一杯食わせる術を知っているようだけどね、あそこに住んでいる神々は私らとは格が違いすぎる。到底真似できないね」

月が紫さんを阻めるのは不浄の者と明確に隔てる必要があつたからだろうか。紫さんでさえ解くのに時間のかかるほど強力な結界。確かにそれだけの技術があれば先ず不浄の者が月の都に侵入することはできないだろう。

それほどまでに高貴な神々が住む場所なのだ。地上の穢れに満ちた神々にはそんな結界は張れないらしい。

「時にさとりよ、不思議に思ったことがないかい？ どうして幻想郷では冥界や地獄が一般の人にも知られているのか、と」

思わず首をかしげる。冥界や地獄があるなど当然の事ではないか。むしろ無ければ死者の魂は何処に向かえば良いというのか。

「うーむ、これは外で暮らしてきたからこそその感覚か……。実は外の世界では冥界や地獄が一般的では無いんだよ。死者数だけで見ればこと外では桁違いだ。だがその実態はよく知られていない。冥界そのものを知らない者も多いくらいだ」

まさか嘘だろうと言いたくなるが、八坂様の顔にも心にも嘘は映っていない。

私が地上にいた千年前の事など流石に思い出せないがその時はまだ冥界も地獄もまだ一般的に存在していたはずだ。私たちは地獄を目指して降りてきたくらいだし、幻想郷ができたのも精々五百年前。外の世界ではたった五百年の間に忘れ去られたという事なのだろうか？

「人々が愚かにも口伝するのは天国と地獄ばかり。天国というものはここで言う冥界のことだ。地獄はお前も知つての通りだろう」

なるほど、それは愚か。そう言えば外の世界では妖怪どころか神すらも忘れ去られたのか。そんな者たちが救いを乞うのが唯一絶対神のキリスト教。一番身近な八百万は眼中にないらしい。

だから天国と地獄なのか。修行すれば天界にさえ登れる可能性が

あるのにも拘わらず、人々は天国こそが至高だと考えてしまうのか。「話を戻そう。この幻想郷ではまずあり得ないことがある。それは分かるだろうか？」

ええ貴方の心を読めば。

「生者が死者の国へ自由に行ける事ですか」

だが確かに、これは当たり前のような気がしていたがよく考えればおかしなことだ。死者と生者の間には確固とした境があり、何人たりともそれを超えるのは許されていない筈。

ところが私は生きてまま地獄に出向き、今の幻想郷では冥界の桜が有名な花見スポットにさえなっているという。

「その通り。これはあくまでも不可逆であったはずなのだ。お盆の時期だけ顕界に帰ってくる。それが世の理だった。本来黄泉に干渉してきたのは死を超越した閻魔か死神、あるいは妖精くらいだったはずだ。ところが今では外の世界でも地獄と言えば生きて鬼が死者を痛めつける場所だと認識している。これを可能にしたのが……………」

「ゆか…………八雲というわけですか。しかしどうして？」

「紫は元々その境界を超えられた。おそらく千年近く前に鬼が急激に増えたから閻魔から要請でもあったんじゃないか？ 結局は地獄どころか冥界や天界、魔界まで繋いだらしい」

丁度千年近く前と言えば私が地底に降りてきた頃であり、その少し前には人間が大規模な鬼退治を成功させていた時代でもある。ここがまだ地獄だった頃か。

ん？ それよりも聞きなれない単語が。

「魔界？ 何処かで聞いたような気がしなくも無いですね。どんな場所なんです？」

「いや私も詳しくはないけどね、なんでもたった一人の神が作った無限の広さを持つ世界と聞いたことがある。その名の通り魔法が発達している世界だろう」

「そういえばむかし昔に人間を魔界に封印したって話も聞いた事があるね。私らの住む場所からは遠かったから詳しくは知らないけど……………なるほど。こちらも千年少し前、と。そのころには既に繋

ぎ終えていたという判断で良いだろう。何故つないだのか、そこは分からない。冥界は恐らく幽々子さん関係なのだと推測できるが、こちらも推測の域は出ない。

紫さんは普段胡散臭くて考えが読めない上に思わぬところで常人のような思考になるから余計に読めない。表情を読むことを得意とする私でもここ百年くらいの紫さんの表情は読み切れないことが多い。薄ら笑いの仮面の下に何を隠しているのか。一体どこまでが貴方の思い通りなのか。本当に底の知れない濁った沼のような存在だ。「あらゆる世界を繋ぐメリットと言うのは何なのでしようか」

「紫が幻想郷を創ったのは幻想の存在を守るためだ。千年前から五百年前までの間、これは人間が妖怪を打倒することに成功した時期だ。しかしその五百年ほど前に仏教が伝来してからは、我らが神道の地位は既に危ぶまれるようになっていた。

そして決定的だったのが今から五百年前のキリスト教伝来だろうね。幻想郷創造の決め手になったのがおそらくこれだ。神道どころか仏教すら存続を危ぶまれるかと思われた。それに付随する冥界や天界も同じくだ」

なるほど。外の世界で最も広く信仰されているのがキリスト教。それを弾き、はるか古より存在する神々を保護するための領域。それが幻想郷だと。

だがまだ私の質問には答えていないだろう、と目線で訴えかけると、八坂様はそれを酌みとったようにで紅茶を一口啜ってから再び話し始めた。

「実を言えばそれまでもかなり希薄ではあるが現世とその他の世界は繋がりがあった。紫の干渉できない神の国がその一つだったが、その他にも紫と閻魔だけが入れる死者の国もあった。

ところが人間に最も近かった異界と言えばやはり地獄だ。人間は封印術を使ってこの生死の境界を越えて見せた。魔界の時も同じだったろう」

そういえば地獄だった時代にも度々封印された妖怪が墮とされてきたことがあった。今地霊殿にいる鶴もそうだし、この前まで地底に

いた舟幽霊たちもそうだ。

「しかしこれはあくまでも人ならざる者たちにしか有効ではなかったようだ。人間は死ななければ死の世界へ行けないが、そうでなければ手順を踏めば界を渡る事も可能。この手順を簡略化したのが紫だったわけだ。鬼を地獄に送ることに成功したのならばあとは人間のみを拒む結界を張って異界への入り口とすれば良いだけのこと」

「つまり彼女は妖怪を人間から逃がしたというわけですか。人間が力を得始めたと見るや即行動に移すその姿勢は見習うべき箇所もあるやもしれませんね」

という事は私たちの行動がもう少し早ければそもそも地獄への道が無かったという事か？

いや、あの時代になつていたからこそ地獄という存在とその場所を正確に知ることができていたとも言えるのか。となると行動があれより早かった過去など無かったと、そういう事だ。

「その通り。幻想が消されていく中で最も頼りになつたのが旧地獄となつたこの場所と紫が創つた幻想郷だった。世界を繋ぐメリツトは逃げ場を増やせることだったんじゃないかと思うよ。今人間にも冥界や地獄が開かれている理由は知らないがね」

「なるほど。大変参考になりました。それより洩矢様は………：おやおや。八坂様もお休みになりますか？」

洩矢様の方を見れば、先ほどまで起きていたように思ったが既に寝息を立てていた。大方酒が入ったせいで眠たくなってしまったのだろう。

一泊は確定だと思つていたので一応部屋は用意しておいた。というか戒にももらった。

「そうさせてもらおうか。部屋は？」

「お燐、案内頼めるかしら？ ……ありがとう。個室なのでゆっくりお休みくださいね」

私は今日できなかつた分の仕事を進めるとしようか。流石にこんな夜中である今から来訪する不届き者なんていないだろうし、今度こそ捗りそうだ。今更一日くらい睡眠が無くても身体への影響はさし

て出ない。夜の方が屋敷も外も静かだし集中できる。



「なあ紫、お前の事だからこいしちゃんがいした事も分かってたんだろう？ なら何故一緒に連れて来なかったんだい？」

そうすれば古明地も安心できて私も今頃は地底で酒を？めていたかもしれないのに。

そもそもこいしちゃんではなくこの吸血鬼の妹を攫ってきたことの意味が分からない。連中の様子を見る限りこの子を探していたはずだ。この子をその場に置いてこいしちゃんだけを連れ帰っていたら今頃はあちらもちちらも目的を果たせていただろう。

古明地ならまず間違はなくそうしたはずだ。あいつは極端に面倒ごとを嫌う。自ら突っ込んでいっているように見えてもだ。だがこの妖怪は違う。

「何故ってそりやあねえ……面白くないでしょう？ 他の誰でもない、私の掌の上で踊ってくれるから楽しいのよ。更に役者は多いほど良い。山は今頃どうなっているでしょうね」

私たちは根本的に考え方が異なる異端児。他人の気持ちを考えてない悪趣味妖怪。それが八雲紫という妖怪だ。初めて会った頃と比べてもほとんど変わっていない。

しかし変わらないのは妖怪の特権。私も勇儀も古明地も昔から何も変わっていない。たかが千年程度で変わる妖怪の方が珍しい。今でもそう思う。

だが古明地の周りだけはこの千年で大きく変わっている。こいしちゃんは瞳を閉じ、お隣もお空もいつの間にか人型になり、拳句の果てには式神まで現れる始末だ。

中心にいる古明地だけが変化せず、周りだけが大きく変化する。あいつは不思議な奴だ。見ていて飽きることが無い。紫とは別の意味でおかしな妖怪だと言えるだろう。古明地のやつは紫ほど悪趣味で

はない分付き合いやすいし。

「あんたは相変わらずだね。でも本来の目的を忘れてるんじゃないか？ 私たちの目的はあくまでもこいしちゃんを見つける事だったんじゃないのか？ それが結局あの子は野に放ったままだ。古明地に何か言われても私は知らないよ」

「あらあらそれはまた恐ろしい事ね」

紫はおどけるだけでそれと言った反応を見せない。つまらない。もう少し私の望む反応を見せてほしいものだ。

私は酒の席を没収されて来ているのだからその褒美くらいはあつても良いんじゃないのかね。いや確かに私も悪い事はしたけれど。「でもね、さとりは私にこいしを見つけてくれと言ったに過ぎない。地霊殿に連れ戻すことはきつとさとりもこいしも望んでいない。それは萃香も分かっているでしょう？ あの子が怒るとするならばそう、このフランドールをうっかり殺めてしまったら私を許さないでしょう」

「まさかお前……………」

「うふふ、するわけがないでしょう？ 流石に地霊殿と紅魔館を同時に相手取るのは手に余りそうですもの。いくら両者の関係が良くないと言ってもねえ……………共通の敵がいる場合にどこまで団結されるかは想像もできないわ」

思わず絶句してしまったがどうやら軽い冗談のつもりだったらしい。まったく心臓に悪い奴だ。五年は寿命が縮まった気がするよ。

とはいってもこいつならやりかねないから初めは本気にしてしまつたのだ。他人に嫌われることを何とも思っていないこいつのあり方は古明地にも似た所がある。

あくまでも似ているだけで同じなわけではない。実際に古明地の方は嫌われる事に対して、諦めから何も思わなくなつたのだろう。それに耐えられなくて瞳を閉ざしてしまつたこいしちゃん比べると古明地の精神力がよくわかる。

紫の場合は本当に、ただ嫌われる事に無頓着なだけだと思う。自分自身であり、他者からの評価など歯牙にもかけない。そんな奴。

だから時に冷徹になり、時には恐怖するほどの愛を持って全てに接している。これだけを聞けばこいつが誰にも縛られずに自由に他者を引つ掻きまわしているだけのようにも思える。

だが実は同時に、紫は決して他者に心を許さない。いついかなる時でも相手を警戒し続けている。だから千年来の友人である古明地に対しても心を閉じ続けているし、それ以上の付き合いがある私に対しても平気で隠し事をする。

だからほとんどの者には信用されない。まったく損な性格をしている大妖怪だよ。

「私を……………殺す？　そ、そんなことをすればお姉様が許さないよ」

「ふふふ……………そのお姉様も既に私が殺していたら、どうするの？」

「っ！　私が、お前を殺してやる。この手で、確実に」

「その辺でやめときな、紫。そんなお遊びをするために起こしたんじゃないだろう？」

本当に。何やってるんだこいつは。自ら嫌われる事に生きがいを感じるおかしな性癖を持っているのなら全力で距離を置きたいところなのだが。

わざわざ起こすだけ起こして煽るたあ何とも大人げない。相手は三分の一も生きていない子供だというのに。

「だって面白いもの。普段は……………ふふ、忘れてちょうだい。コホン、とにかくくえー……………そう、レミリアは別に殺していませんわ。今も何処にいるとも分からない貴方を探しているのでしょ」

だからそんな言い方をすると……………

「へえ？　私を人質にしているの？」

ほら言わんこつちやない。この子は別に日本語の言葉遊びなんて得意でも何でもないだろうに。紫は普段から古明地と遊んでいるから分かっていないかもしれないが、こいつの胡散臭さと誤解を招く言いかたのせいで大概は言葉遊びとして通用しない。

紫との付き合いが短ければただ単に喧嘩を売っているようにしか思えないと思う。つまり喧嘩を売られたら精神の幼いこの吸血鬼は

当然それを買うわけで……………。

ため息が出る。これはどう考えても盗み聞きの対価とはならない。酒宴の不参加だけでも私にとっては大ダメージだったのに……………面倒くさいことこの上ない。

重ね続けた罪の形

こうなるから嫌だった。こいつは何時だつて不安定な者の心をぐちやぐちやに混乱させて愉悦に浸るような奴だ。それが悪いとは言わない。愚かしい他者を見て優越感に浸る事は誰しもがすることであり、私だつてそれを楽しんだ時期があつたのは確かだ。

しかしこいつの場合はそれよりもはるかに質たちが悪い。こいつが見下すのは弱者ではなく今まで上に立つて来た強者たち。もつと言うならばこいつが興味を示さなかつた強者。

何ともみつともない称号だが性格の悪さだけで見れば超一級品だ。今更ながら自分が何故こいつを嫌っていないのかが分からなくなる。性格はもちろん、言動から何からすべてが胡散臭い上に自分を見せない狡猾さまで併せ持つ。

私たち鬼とは完全に相性が悪いはずの存在。それでも私は何故かこいつを嫌っていない。むしろ気に入ってさえいるくらいだ。それはきつと強さによるものではなくそのどこまでも妖怪らしいあり方によるものだろう。

「能力は使わないのかしら？ ほら、私の身体は無防備よ？」

どこまでも自分勝手。ゆつたりとしていながら決して相手にペースを握らせない立ち回りはいつかの西行寺幽々子を想起させる。流石は親友と呼ばれる間柄。似なくても良いところまでそっくりだ。

「二度も同じ手に引つかかる馬鹿が何処にいるのよ」

対するのは悪魔の妹。さつきから紫に散々遊ばれている可哀そうな強者だ。世間を知らない子供に世界の広さを教えてあげるのも年長者の務め、なんて言って……私にやただ虐めているようにしか見えないけどね。

紫に誤算があつたとするならば、それはフランドールが思いのほか冷静だったことだろう。バカみたいは無謀な事を繰り返すわけではなくきちんと理性を保って攻撃しようとしている。まあ全部いなされているが。

流石にこれ以上続けても埒が明かないと判断したのだろうか。彼

女の顔に諦めの色が出た。

「……………ああ〜もういいわ。降参降参。そもそもどうしてお前は私の邪魔をするのよ」

「はて、邪魔と？ 貴方は希望通り館を出たんじやなくて？」

「私の……………望み？ 私は別に外に出たいわけじゃなかった。私の世界は紅魔館の門の内側だけで良かったはずなのに……………どうして？

どうして私は外に出たの？ 分からない。知っているのに知らない誰かのせい……………私は何を邪魔された……………？」

やはり、この吸血鬼もこいしちゃんの事を覚えていない。きれいさっぱり忘れるわけではないが記憶に彼女は残らない。本当にただ嫌われないための力。

嫌われないと同時に好かれもしない。今のあの子を本当の意味で愛せるのは古明地とお燐だけだろう。私たちはもちろん、お空や戒のやつもきつとあの子を愛せない。

古明地こいしという覚妖怪を唯一覚えている古明地と、こいしちゃんに最も気に入られている初めのペットであるお燐。真の意味で古明地こいしという少女を知っているのはこの二人だけだ。

私や勇儀もこいしちゃんが目を閉じる前から知っている。それでも目を閉じた彼女の事を一時的に忘れてしまったほど、私たちはあの子に入れ込んでいなかった。会って百年以上が経っていたにも拘らず忘れてしまった。

こいしちゃんを記憶に留めるには二つの方法がある。一つ目はあの子を決して忘れないほどに愛すること。これはもはやできないので実際はもう一方の方法で覚えておくしかない。

もう一方とは言うが、こちらは難易度がガクッと落ちる。ただ第三者から彼女の名を聞く。それだけで古明地こいしという存在は記憶に残ってくれる。私や紫が覚えているのはこれのおかげだ。そしてフランドールが覚えていないのもこのせいだ。

「やはり、覚えてはいないか。最終手段ね。専門家に診てもらいますわ」

「何？ 私を医者にも連れて行くつもり？ まあ確かに私の頭は少

しおかしいからね。どうせお姉様たちは此処にたどり着けないんだからどこへ連れて行こうと構わないわよ？」 賢者さん」

狂っているなと思わずそう思った。自分の頭のおかしさを自覚しているのもある意味で頭がおかしいのだ。そして先ほどまでの空気がまるで嘘だったかのような切り替えの速さ。

自身の感情を一過性のものだと切り捨てる。まるで先ほどまでのフレンドールが今のフレンドールとは別人であったかのようにふるまう。感情がまるで彼女の頭についていっていない。これこそ狂気と呼ぶにふさわしい。



綺麗だと、美しいとそう思った。同時に汚いと、醜いとそうも思った。あの子の放つ光の一粒一粒があの子の儂さを表しているように思えて、どこか切なくなつた。

あの子が何度か見せたハート型の弾幕。よく観察すればあの子のサードアイの管もハートを形作っている。

本来の感情も分からない虚ろな微笑みと強調されるハート。弾幕は確かに美しい。それでもその裏に隠れているであろうジレンマを思ってしまうとどうしても醜く思えてしまう。

あの子は瞳を閉ざして以降決して誰かを好きになる事は無かつたしこれからもあり得ない、とはさどりの談だったか。誰をも好きにならないのに強調するのは愛の象徴。

一方的で決して還元されることのない想い。これはあるいは自らへの皮肉かもしれない。あるいは得られぬものへの憧憬かもしれない。あまりにも惨めだと思ふのに、彼女の笑顔からは何も読み取れない。感情を乗せない笑顔とは対極の笑顔を見せる少女が彼女の後を追っている。

「へっへっへ、まだまだこんなもんじゃないんだろ？ さどりのやつはもつと強かつたぜ」

少し、ほんの少しだけ苦しそうな顔をしつつも遊んでやるからには、と笑顔を絶やさない魔理沙のあり方には素直に敬意を表すべきだと思う。曇った夜空に星をばらまきながら小さな子を楽しませている彼女はまさしく魔法使いと呼ぶにふさわしい。

「おかしいな。私はお姉ちゃんに負けたことなんて無いのに」

さとりは心を読める相手ならばほとんど無敵を誇る。能力で抉り出したトラウマと彼女持ち前の器用さによってあらゆる弱点を突く事が可能だからだ。特に精神的に脆い妖怪を相手にする場合はまさに独壇場といった様相になるらしい。

だが逆に言えば、心を読めない相手や精神に絶対的な強さを持つ人間を相手にする場合には途端に勝ち星を計算しにくくなるということだ。

後者の場合でも本気の殺し合いとなればさとりはまず負けないだろう。人間の肉体は脆いからだ。殺すつもりで相手をするなら精神に付け込む前に想起してトラウマをぶち込めば良い。

前者ならばさとりはまず勝てないと言える。読心に頼りすぎている彼女は心を読めない相手への対策がない。普段は強力な後手で勝利するが、このような相手になればずっと相手のターン状態になってしまう。だからさとりはこいしにも八雲にも勝てない。

これが真実。さとりが魔理沙たちを相手にしたときはまだ彼女にも打つ手があった。しかしさとりがこいしを相手にする時は打てる手がない。そもその前提が違うのだ。

力とは単純に測れるものではない。私はさとりには勝てないだろうがこいしにはおそらく勝てる。と言ってもスペルカードルールに落とし込めばさとり相手でも勝機が見え、逆にこいし相手には敗北も色濃く見えるようになる。それがこの遊戯の面白さか。

「お姉ちゃんは私と遊ぶときだけ手を抜いてくれてるのかな。そう言えはこの前はいつ帰ったんだっけ」

「おいおい、家出娘か？ そりや見過ごせないな。子供なんだからとつと帰って安心させてやった方が良くないんじやないか？」

貴方が言える立場でもないでしょうに。でもまあ冷静に考えれば、

おそらく前回こいしが帰ったのは一月前の異変時なのだろう。

さとりはもう半年帰ってきていない、などと当たり前のように話しているがよく考えれば異常な事だ。私の場合はフランが二日でも帰ってこなければ幻想郷中に搜索願を出すだろう。三日顔を合わせない時があつても、一週間顔を合わせない時はない。

やつぱり貴方はいけない子よ、こいし。貴方のお姉ちゃんがどれほどの気持ちで帰りを待っているのか、妹がいない方が日常となつていくことがどれほど辛いのか、貴方には永遠に分からないのでしようけれど。

『季節が移れば場所も移ろう。移り虚ろう貴方の場所は私には指定できないわ』つてお姉ちゃんが言つてたけどどういう意味だろうね？』

「それは……無理して帰ってくることは無いって言つてるんじゃないか？ 移ろい続けるお前の場所はさとりには固定させられないってことだろ」

「お姉ちゃんというのが古明地さとりの事であるのなら、私はむしろ古明地さとりの嘆きを表していると思うけれどね」

声のした方へ振り返るとなんとパチエ、美鈴、咲夜の三人が立っていた。ついさっきまではいなかったはず。となれば少し離れた場所で八雲紫の力の開放を感知したのだろうか。

何故かパチエと咲夜は肩で息をしているが、二人とも特に外傷らしい外傷も見当たらないし何も問題ないだろう。

「あ？ そりやどういふ事だよ。今のどこに嘆きがあつた？」

「やれやれ……答えだけを求めて過程をすつ飛ばすのは三流のすることよ。そも私の推測が当たつていふという保証も無い。答えが知りたければ自分で導きなさい。自分の納得できる説明でね」

「かー、頭の固い奴だ。私にやお前らほどの時間は許されてないんだよ。答えを求めて何が悪い」

悠久の時間を持つパチエと数十年程度の時間しかもたない魔理沙。命短し求めよ答え。魔理沙の場合は答えだけを求めすぎているから毒キノコを誤つて食べてしまう事にもなるのだろうか。

しかしパチエはそんな魔理沙を無視してこいしに話しかける。他人の気持ちに何一つ理解を示そうとしないのは我が親友の欠点とも言える。パチエにも会話する気があるときはきちんと気遣ってくれるけれど。

「ところで貴方のお姉さんは古明地さとりで合っているのかしら？」

「そうだよ。覚妖怪の最後の生き残りらしいね。私はもう覚じゃないし……うーんでも、いや〜どうなんだろうね」

「種族を変えたというの？ ……まさかあり得ない……でもそうね、おもs……」

「そこまでよ、パチエ。ここでその子に手を出せば古明地さとりからどんなしつぺ返しが来るか分からない。興味があつても手を引きなさい」

怖いのはさとりだけではなく地底の鬼どもや八雲紫もだ。敵となれば方に一つも勝ち目はないだろう。確かに妖怪がアイデンティティを失って別の妖怪に変じるというのは非常に珍しいが、たかがパチエの興味一つでそんなハルマゲドンを起こされは困る。

流石のパチエもここで手を引かないことのデメリットは理解しているはずだ。目の前にいるのはあくまでもさとりではなくこいし。憎悪する対象とはなり得ないのだから。

「お姉ちゃんが怒ると勇儀も萃香も何もできないからね。怖いよ………あつ、え？ 何？」

話している途中だったにも拘わらず唐突にこいしの姿が消えた。一瞬鈴仙の能力の効果が切れたのかとも思ったが、消える直前のこいしの焦りようから察するに本当の意味でこの場から消えたと考える方が妥当。

思い当たる節はあれども場所は分からない。搜索開始からおよそ半日。私たちは遂にフランとこいし両方の手掛かりを完全に失った。「……帰りましょう。これ以上いても天狗が来るだろうし、ここにあんたの妹がいる気はしない」

「ちよつと待ちなさい。ここにフランドールがいないと断言できるわけではないんでしょう？ それならば隅々まで探すのが筋つても

じゃないのかしら?」

「探したいなら探せばいいじゃない。少なくとも私は意味ないと思うってだけ。ほらアリス、行くわよ」

口惜しいが霊夢の言う通りでもある。ここにフランがいるとは思えない。何のつもりかは知らないが、フランは八雲紫によって攫われただろうから。そしてこいしも。

「そのあたりでやめておきなさい、パチエ。フランは確かにここにはいないと思うわ」



ペンが紙の上を走る音だけがしている空間に突然騒音が混じる。振り返らずともわかる。またまた来客だ。しかもこの登場の仕方は紫さんで確定。

「こんな時間に何の用ですか? 紫さん……と珍しい顔が一人」

紫さんとフランドルさんがいて萃香がいないという事はおそらく既に旧都の方へ帰してきたのだろう。良い判断だと思う。できるだけ早く帰す方が下手に暴れられる心配もしなくてよくなるし。

「そう邪険にしないでちょうだい。一応起きているのを確認してから訪ねているのだから」

余計に嫌だ。私生活を自由に覗けるといふ発言に対して、確認したうえで訪問だったなら仕方ないという人がいるとは思えない。紫さんはもう少し他人の感情というモノについて考えてみるのも良いのではないだろうか。

私よりもはるかに多くの人妖と話をしなければならぬ立場だと思ふのに、こんなことで大丈夫だろうかと心配してしまう私はお人好しなのだろうか。

「……はあ。それで結局何の用なんです?」

「流石に分かっているでしょうけどこの子に関するお願いに来たのよ。心の専門家である貴方なら何か分かることもあるでしょう」

心の専門家か。随分と久しぶりにそう呼ばれた気がする。確かに私は専門家とも呼べるほど他者の心については理解しているが、だからと言って何でもできるわけではない。

特に紫さんが求めてくるものは偶に規格外に大きなこともある。今回はそうでもないようだが。

「なるほど。……お久しぶりですね、フランドール・スカーレット……フランドールで良い？ 分かりました。貴方は私を覚えていないでしょうが……おや、覚えていない？ ほう、これはまた……」

前회会った時とは随分と雰囲気の違いが彼女だが、私の事はきちんと記憶しているらしい。あの時の私は勇儀に指示を出していただけの付属品でしかなかったのに。無駄に悪意をばらまいていたから記憶に残っていたのかもしれない。

しかし纏う雰囲気は変わっても心の歪みは大して変わらない。むしろこいしとの邂逅の記憶が微妙に残っているせいで余計に不安定になっている。

「危険ね」

「え？ それはどういう事かしら。まさかまだ暴れ足りないとも言えるの？」

「いえ、違いますよ。この子の心は今、あまりにも不安定すぎる。下手を打てば今すぐにでも消滅してしまうかもしれない程に存在が揺らいでいると言っても良いかもしれません」

この子に元来備わっている不安定な心。そこに付け込んだこいしとその記憶の一部を失っているフランドール。不安定からより不安定に。

危険だ。

心が存続を左右する私たちにとって不安定な心というのは本来それだけで危険な物なのだ。ここまでフランドールが495年間も生きてこられたのは、その不安定を崩す者がいなかったからだろうと推測できる。誰も会いに来ない地下への幽閉は実に正しい判断だった。レミリアさんは当然そんなことを気にしていなかっただろうが、これも彼女の持つ運命力の結果と言えるだろう。

しかし今、私の妹によってその均衡は崩されている。瓦解するかしないかというギリギリの状態。

「本当に危ない。もしこのまま明日の朝を迎えていけば……フランドールは自身の感情に押しつぶされていたかもしれない」

原初の恐怖の一つ、不安。今のフランドールはそれに支配されている。自分が自分であると認識できなくなった時に妖怪は死ぬ。私だってそうして何匹も殺してきたから知っている。

記憶の喪失というのも普通の妖怪にとってはかすり傷にもなり得ない。新たに生まれた自分を自分と認識できるからだ。こいしの事を忘れても普通は痛くも痒くもない。自分本位の妖怪にとっては他者を忘れる事など日常茶飯事だからだ。

しかしフランドールにとってはそうではない。知っている者ばかりの領域に突如として現れた部外者。既知の領域を踏みにじる未知の少女。しかし既知となった少女は再び未知の領域へ逃げてしまった。フランドールはそのことを記憶に残してしまったのだ。

不安定は突き崩され、フランドールは不安の支配する海へ真つ逆さまに落とされた。

「その言い方、まだ助ける方法はあるという解釈で良いのかしらね？」
「当然です。フランドール、貴方を救うのにそれほど大きな犠牲は必要ないわ。ただ一つ、思い出せば良いだけです。紫さん、こいしをここに連れ戻せますか？ あとは……」

あの子はあまりにも自由に生きすぎた。何も考えず他人の領域に踏み込んで、荒らすだけ荒らして去ってしまった。それは決して許されない事。

これに関しては私も悪い。あの子を縛りたくなかったからと甘やかしすぎた部分がある。私もあの子も罪を重ね続けた。そして遂に贖う時が来たようだ。

苦勞など無く

「うわわっ……あれ？ お姉ちゃん？ どうしてここに？」

フランドールを救うための簡単な方法。それはこいしの存在を再認識させて忘れないようにすること。そのためにまずはこの部屋に強力な結界を（紫さんが）張り、そして場所の分かり切っているこいしを（紫さんが）連れてきたのだ。

つまり全て紫さん頼みの作戦であるが、彼女としてもフランドールが消滅する事態は避けたいところだったようで、快く協力してくれた。肉親を失った者は人間妖怪に限らず理性を飛ばしてしまうものだ。それがレミアアさんという力ある妖怪になれば被害は計り知れないだろう。

「あらこいし、ここは地霊殿の私の部屋よ？ 私がいるのは当たり前のことでしょう？」

「うーん？ あ、ほんとだ。ここお姉ちゃんの部屋じゃん。じゃあどうして私がここにいるの？ さつきまで賑やかな人間さんたちと遊んでいたはずなんだけど……あ、フランちゃんもここに來てたの？ 奇遇だね」

ああ駄目だ。本当にこの子は人の話を聞こうとしない。興味の対象もコロコロ変わるから何かに着目して話をしてもすぐに話題が逸れてしまう。あの紫さんでも困惑してしまうほどに自由を極めているのだから私に御せるはずもない。

「フランドール、この子が私の妹の古明地こいし。無意識を操る妖怪ですよ。貴方のよく知っている妖怪です。仲良くしてあげてくださいね」

とりあえず急なこいしの登場に困惑しているフランドールの心を安定させるために紹介してあげる。これでフランドールにとってのこいしは既知の領域に収まるようになるはずだ。そして後半にはちよつとした暗示をかけておいた。

精神が未熟であるからこそ暗示には簡単にかかるし効果も大きい。心が分からないこいしや紫さんに対してはまったく効果が期待でき

ないのが玉に瑕だが。

「古明地こいし……そう、貴方だったのね。薄暗い地下から私を引張り出したのは……」

それだけ言うとすぐにフランドールは寝てしまった。もうすぐ日も変わろうかという時間。本来ならば吸血鬼の活動時間の真っ只中であるが、今日一日で相当様々なことがあって疲れたのだろう。精神的な負担も多くかかっていた。できればもう少し話しておきたかったけれど。

「眠ってしまったわね。なんだかおかしな勘違いをしていたようだけれど貴方が何かしたのかしら？」

「まさか。私はただ言葉が自然に馴染むように多少の暗示をかけたくらいです。特別催眠をしたというわけでも洗脳をしたというわけでもありませんよ。そんなことをすればレミリアさんたちから何をされるか分かったものではありませんからね。で、その肝心のレミリアさんたちの様子は？」

私がこいしと共に紫さんに連れて来てほしいと頼んだ関係者。それが紅魔館の住人のうちメインの四人。彼女たちには真実を知ってもらう必要がある。レミリアさんは知っているはずだが他の三人はこいしの存在すら知らなかったはず。だからこそ私を疑ったのだろう。

当然嫌悪している私への当てつけもその中には含まれているのだろうが、それは私が彼女たちを呼ばない理由にはならない。本来の私は嫌悪されてしかるべき妖怪だからそんなものにいちいち注意を払っているわけにもいかないのだ。

たとえば嫌われていても、憎まれていたとしてもそれを気かけずに他の者たちと同列に扱う。それは傍目には聖人のようにさえ見えるかもしれない。しかしそうではない。私は決してそのように徳の高い崇められるべき存在足り得ない。

嫌われるべくして嫌われ、憎まれるべくして憎まれる。それは私のせいでもあるが種族のせいでもあるのだ。私を嫌わない者たち、言葉は悪いがそれこそが異常者なのである。幸いこの辺りに異常者が多

いだけで、旧都や地上に行けば健常者だらけで倒れてしまうかもしれない。

紅魔館内では例えばレミリアさんは異常者。それに付き従う者たちは健常者としてみることが出来る。フランドールは完全な例外。誰かを見て『好き』や『嫌い』といった感情を全く出さない。あるいはそのような感情はとうの昔に捨て去ったものなのかもしれない。

そういう目で見てもフランドールはこいしと似ていると思う。こいつはよく『好き』という言葉をお口にします。私に対して。お隣たちペットに対して。パルスイたち友人に対して。

それはきつと嘘ではない。だがきつと本当でもない。こいつは心を閉ざした時に半ば感情を失った。何をしても楽しくない。何を見ても美しいとは思えない。孤独を寂しいと感じることも、誰かに憤ることとも無い。どうして私をまだ姉として認識してくれているのかが不思議なほどにこいしは空っぽだ。

フランドールは心が読めるこいしのようなもの。だが心が読めるということはすなわち読み取れるだけの心と感情を残しているという事でもある。そういう点ではフランドールはこいしと絶対的な差異を持っていてというわけでもあって……………。

「何か深く考え込んでいるようだけれど、レミリアたちの方ならそろそろかしらね」

ああそういうえばそんな話をしていたところだった。私から聞いていたのにそのことを忘れて思考の沼にはまってしまうとは情けない。私も今日様々なことがあったから疲れているのだろう。

「今は順次解散していつているようね。私が消えたうえにこいしも消えたからでしょう。」

霊夢とアリスの目的は紅魔館が破壊された原因を探る事。フランドールに行きついた時点で既に目的は達成していた。永琳たちの目的はフランドールを捕まえて研究する事。フランドールが消えたと分かれば目的も消滅。射命丸の目的は紅魔館への独占取材のためにフランドールを連れ戻すこと。これもフランドールが消えたから消滅。

厄介なのは魔理沙ね。彼女はレミリアたちと目的を同じくして動いているから紅魔館組と離れてくれない。そこさえどうにかすればレミリアたちも攫えるはず」

想定よりもはるかに多くの人物がこいしの遊びに付き合ってくれたようだ。だが利己的な理由であつたりもするため感謝できるかといえはそうでもない。こいしの事が分かつていた者などほとんどいなかったはずだし。

「それにしても魔理沙さんを何とかする、ですか。貴方は本当に……」
「それが最善であるならばどんな汚れ役でも担うのが管理者のあるべき姿だと思わない？」

「分かっているもできる者などほとんどいないのですよ」

地底の管理者の側面も持つている私の場合はその汚れ役を担う前に逃げてしまった。自分を犠牲にして他人を救う事など弱い私にはできなかったのだ。

紫さんは強い。いつだって自分を犠牲にしようとする。その結果誰からも避けられようが、彼女は自分のすべきことを分かっているからそれをやめない。本当に不遇だと思う。常に利己的に他者を弄んでいるように見えて、その実第一に考えているのは常に幻想郷の未来の事だ。

しかし誰もがその表面しか見ようとしさない。心は読めなくても大事にしていることなんて少し話せばわかるというのに誰も深く関わろうとしない。昔は私もあまりの胡散臭さに敬遠しがちだったのだけれど。

「あらあら、やってみれば存外簡単なものよ？　少し待っていてちようだい」

言うが早いか姿を消してしまった紫さん。そう言えばもう結界は解かれていたつけ。ここにずっと居られても邪魔だから鶴はさつさと地上に出てもらおうか。相互不可侵の破棄が決まったのもまだ今日のことか。本当に今日は長いし疲れた。



こいしが何処かへ消えてしまったことにより異変の収束を予感したのか皆が次々と帰って行ってしまった中、フランの行方を追っている私たちだけが取り残されている。それでも今の私たちにフランの居場所を探し当てる術はない。当てはあっても確定ではない以上下手な行動もできない。

「ん？　なんだ紫じゃないか。神奈子たちに早苗の事を謝りにでも来たのか？　残念ながらあいつらは二人とも留守にしているみたいだけだな」

そんなとき、静かな境内に魔理沙の声だけが響く。音もなく現れたのは彼女の言う通り八雲紫だった。フランとこいしを攫ったであろう張本人。その意図はよくわからないがおそらくさとりも絡んでいるのだろう。

「あの二柱に用事はありませんわ。むしろ用事があるのはそちらの四人。魔理沙はもう帰っても良いわよ。月姫は永遠の術を解いた。すぐに月は傾き始めるでしょう」

なるほど。夜を止めていたのは彼女たちだったか。てっきりまた八雲紫が止めているのかと思っていたけれど。

「帰って良い、だと？　私は紅魔館の奴らに貸しを……つと手伝うために動いているんだ。お前に指図される筋合いはないぜ」

「夜は妖怪の時間。人間はそんな当たり前のことも忘れてしまったのかしら？　愚かしい。いくら力を得ても所詮は人間でしかないというのに」

瞬間、八雲紫から尋常でないほどの力が噴出した。魔理沙が「こりやインチキだろ……」とつぶやくのも納得できるほどの感じたこともないような妖力。かつての私はこれとやり合おうとしていたのかと思うと寒気がする。

「これが戦場ならば相手を見誤った時点で死あるのみですわよ。あらもう寝ていましたか」

今回は先ほどとは違って外に妖力を漏らさないよう結界まで張る

徹底ぶりだった。いったい何時張ったのかはまったく感知できなかったが。

「いいのか？ 幻想郷の賢者が弾幕勝負を無視するなんて」

「私からは一切の攻撃もしていませんもの。弾幕を撃つまでもなく落ちてしまったならばそれは勝負でも何でもないでしょう？ 故にルールを破っているわけでもない。違って？」

「ルールは破らずともマナーは悪いと思うがね。で？ 何の用なのよ。お前の事だからただの暇つぶしに魔理沙を気絶させた可能性も捨てきれないけれど、今回はそうでもないみたいだし何か用事があつて来たんでしよう？ もしかしてお前が攫ったフランを返してもらう条件でも提示しに来たか？」

この妖怪のすることは全くもって理解できない。如何に非道な事をしようともただの暇つぶしだった、で済ませるような奴だからだ。自分のしたい事に忠実であるという点で見ればこいつほど妖怪らしい妖怪もそういないだろう。

人間にとつては迷惑でしかない上に私たちにとつても迷惑かつ厄介な存在だ。しかも隔絶した力を持っているせいで下手に抗えない。「マナー違反……なるほど。確かに様式美は大切ですね」

素晴らしいながらも倒れた魔理沙を淡々と回収する八雲紫の思考はやはり読めない。本当に様式美を大切にしようという気があるのかどうなのか。謎は深まるばかりだ。

「まあ良いか。で、ここにきてわざわざ魔理沙一人だけを家に帰した理由は？」

「彼女がいると面倒になりますからね。さ、私について来ればフランドールはお返しするわよ。どうぞついておいでなさいな」

「……………ちよつと待っていないさい。少し私たちだけで話し合うわ」「どうぞどうぞ。でもお早めにね？ 時間の猶予はそれほどないですから」

この提案を怪しいと感じたのはどうやら私だけではなかったらしい。そりゃそうか。そもそも胡散臭さがマックスな奴の口からこんな胡散臭い言葉が出てきたのだから警戒するのが私一人であるわけ

がない。

「どうするの？ レミィ。紫の提案に乗るメリットは？」

「フランが返ってくることでしようね。私たちの一番の目的はそれだとあいつも知っているんでしよう」

だからこそこの提案。今の私たちは弱みを握られている状況だ。フランを返すことによって私たちに恩を売ろうとしていると考えることもできそうではあるが、彼女が私たちに恩を売る理由が分からない。

「提案に乗った後、フランドールが返ってこない可能性は？」

「おそらくないわね。八雲紫はそんなに安い挑発をする妖怪じゃない。約束を破る可能性は破棄して良いと思うわ」

それよりも警戒すべきはその対価。あちらは私たちの望むものを持っているが私たちの方は持っていない可能性が高い。しかしここで断ればフランが返ってこない可能性も非常に高い。フランを攫ったのは間違はなく八雲紫だからだ。

どうするべきか。乗っても断ってもデメリットが大きいのであれば、せめてメリットも大きい方を選ぶべきか？ それともいかにも怪しい提案をここで断ったうえで多少の時間をかけてでも安全にフランを取り戻す方法を探すべきか？ 分からない。

「残念。時間切れ」

だがよく考える暇もなく、一分ほど話し合っただけで中断させられてしまった。これは『早め』で済ませて良いレベルではない。まともにも考えも纏まらないままに、私たち四人は不気味なスキマへ吸い込まれてしまった。

墮ちるといふ感覚もほんの一瞬のもので、次の瞬間には既に掃除の行き届いたこじんまりした部屋に連れられていた。しかし他には何の特徴も無いような平凡な部屋で、ここが何処なのかを判断する材料は見当たらない。

しかし咲夜はそうでもなかったらしく、ここが地霊殿であると断定した。何でも消えた私を探している間に地霊殿の隅々まで見て回ったようで、この部屋は昼間来た時にも何も無かったらしい。よくそこまで覚えているものだと感心してしまう。

確かに言われてみれば真冬だというのに気温はかなり高いように思う。図書館にかけられているような魔法かとも思ったが別にそうでもないのだろうか。地霊殿に魔法が使える者はいなかったはずだし。

「フランドールはいない。紫も何処かへ消えている。まさか古明地さとりが嵌められた？」

「まあ落ち着きなさいパチエ。むやみに他人を疑うのもどうかと思うよ。それに地霊殿という事はこいしがいる可能性も高い。そうなれば彼女と一緒にいたはずのフランもこの辺りにいるかもしれないわ」
本当にパチエはさとりの事となると急に思考が短絡的になる。そう言えば少し前にさとりが恋と呪いの類似性についての話をしてくれたっけ。恋は盲目。となれば呪いもやはり盲目なのだろうか。進む道が恋でも呪いでも私は家族を応援してあげるが、まあ恋の可能性はゼロに等しいだろう。

さとりなら『同性同士の恋なんて非生産的で馬鹿らしい』と断じそうな気もするし。私は別にどうでもいいと思うけれど。恋仲になるような人がいるならばそれが同性でも異性でも素晴らしい事だとは思ふ。私は異性に恋したいけれどね！

しつかり者の中間管理職さとり

封黙ぬえのことはお隣に任せた。彼女なら一応面識があるし、私が直接行っても嫌な顔をされるだけだろうから。神様たちはまだ屋敷の中にいる。眠っているところを起こすのは流石に悪い気がするし、何よりも神の怒りに触れるのが恐ろしいからだ。

彼女たちの神社の巫女は心配しているかもしれないが、そんなものは私の憂い事とは比べようもない。強いのだから心配するだけ無駄だと思うけれども。

「ねえねえお姉ちゃん、私の話聞いてる?」

「ええもちろん聞いているわよ。本当に色々なことがあったのね。多くの人妖と関わっているようでお姉ちゃんも嬉しいわ。でもねこいし、今回のように他人に迷惑をかけるような事はできるだけしないでもらえるともっと嬉しいわ」

「えー。お姉ちゃんも楽しんでくれると思ったのに。それにフランちゃんも閉じ込められているのは可哀そうでしょ? ねえ、私はそんな可哀そうな籠の中の鳥を解き放つてあげたの。えらいでしょ」

「そうね、とつてもえらいわ。こいしは本当に優しいのね」

私の心配事といえはこのこいしのことだろうか。地上で散々騒ぎを起こしたというのにその自覚が一切ないんだから。私がこうして甘やかしてしまっているのも原因の一つではあるかもしれないがこうしてうして話ができることも少ないのだからたまには、ね。

「ほらこつちにいらいっしやい、こいし。良い子の頭を撫でてあげる」

たとえ心が読めなくなってもこいしが私の妹である事実が変わらない。肉親ではないだろうがそんなことは関係ない。今私の掌に頭を押し付けてくるこの子がいる限り、私は自分の存在を証明し続けられる。心を保っていられる。

「んふふ……やっぱりお姉ちゃんの膝が一番だね」

「あら、他の人に膝枕をしてもらったことがあるの?」

「みんな私がいることにも気づかないんだもの。つまらないよね」

「そうね。こんなに可愛い子がいるのに気づかないなんて皆損してい

ると思うわ」

かく言う私も気づけないのだが。それにしてもこいしが私の質問に答えてくれないせいで私の心配がなくならない。まさか誰彼構わず膝に乗るような子ではないと信じたいのだけれど。もしかしたら普段も気づかぬうちに私の膝に乗っていたりしたのだろうか。

ああ、こいしの能力を看破できる玉兎や紫さんが羨ましい。心を読むことしかできない私とは違って様々な事に活かせる能力で、しかもこいしを見つけられるんだもの。私の能力も便利だから悪いわけじゃないけれどね。

「やはり貴方たち二人は仲が良いのね。姉妹仲が良いのは悪い事ではないわ」

「紫さんですか。入ってくるなら無断で入らないでと何度言えば良いのか……貴方に何を言っても無駄なんですよけれど」

もう随分昔から言い続けてきた事だ。勝手に屋敷に入るだけならまだしも、勝手に部屋を覗いたり入ってきたりするのとは別だろうと。勇儀でさえノックしてから入ってくるというのに。

別に勝手に入って来られて困ることは無い。疚しいことなど何もないから。精々執筆中の小説があるくらい。だがそれでも他人の自室に勝手に入って良い理由にはならないだろう。地上でも地底でも常識で語ることが如何に無駄な事なのかは嫌と言うほど学んできたけれど。

案の定、紫さんは表情一つ変えずに「よくわかってるじゃない」なんて口にする。よくわかってるのではなく諦めているのである。そのところをよくわかってほしい。

「はあ……まあいいでしょう。レミアアさんたちも一緒かと思いましたが、もしかしてまだかかりそうなんですか？」

「いえいえ。もうレミアアたちは地霊殿に連れてきたし魔理沙は彼女の家のベッドに寝かせてきたわ」

寝かせてからベッドに放り込んだら。しかも手荒な方法で。紫さんならば能力で強制的に眠りに誘う事もできそうなものなのに、どうして遠回りしたうえで嫌な目で見られる道を選ぶのか理解に苦

しむ。

それでも彼女がその行動をとるのならば、きっとそれが彼女にとって、幻想郷にとつて最善なのだろうと思う。彼女の見えている世界を私は見られないから予想でしかないが。

「では他の部屋に閉じ込めている、とそういうわけですか」

「そういう事ね。変に暴れられても面倒だったから」

「地霊殿への印象がさらに悪くなるということまでは考えてくれないんですね。まったく、どこまでも貴方らしいですよ」

「あら嬉しいわ。そんなに褒めてくれなくても」

本当にこの妖怪には敵わない。微妙な微笑みを崩さずに言うところがまたいやらしい。皮肉の言い甲斐がないというのはなかなか面白くないからだ。

「はあ。レミリアさんたちをこの部屋まで連れて来てください。歩いて、ですよ。もてなす準備があるので………間取りが分からない？

お燐でも連れて行ってください……いや、戒の方が適任ですね。戒を案内役にしてください」

お空は寝ているだろうが戒ならばこの時間はまだ起きているはずだ。お空は休めるときにしっかりと休ませてあげなければ再び熱くなった地獄跡の世話がままならなくなる。随分と健康的な時間ではあるが原因である二柱も寝ているし暴走されては止めることも難しい。

お燐に案内役を任せると変に紅魔館の者たちといがみ合い始める可能性がある。こういう時には中立を保つてくれそうな戒が最適だろう。そしてお燐にこいしの相手を任せている間に私がもてなしの準備をするのが良いだろう。

結論から言うとこれは最適解ではなかった。むしろ程遠かったようだ。いつも戒を見ているせいで失念していたが、彼女はあくまでも私の式神として刷り込まれた人格を持っている。つまるところ私の

悪口をたれるような者が相手になると相性が最悪なのだ。

藍さんが紫さんの悪口に怒るのと同じ。言う方は軽い気持ちで話題に出したとしても式神に対してそれは通用しない。ただ主人を貶されたという事実が残るだけだったというわけだ。

結局は何故か部屋の場所を知っていた咲夜さんが案内役を担ってくれたらしい。珍しく紫さんも疲れたような顔をしていたから随分と戒が迷惑をかけてしまったのだろう。戒にはもう寝るように言っておいた。これ以上この空間にいても双方の邪魔になるだけだろうから。

「あの子が随分迷惑をおかけしたようで……」

「あの式神だけじゃないでしょう？ 貴方の妹とやらにも今日一日随分と迷惑をかけられたわ。親友の妹が行方不明になる事の意味が貴方にはわかるかしら？」

こりやまずい。パチュリーさんの怒りが既にかなりのものになっている。それも当然と言えば当然だ。私だって同じ立場ならば文句の一つや二つで満足はしないだろう。こいしは常時行方不明だし咲夜さんには邪険に扱われるけれど。それらは何も今日始まったことでもないから立場はまったく異なることになるのだが、それでも言いようのない不安というのは分かるものだ。

「それは本当に申し訳ないと思っっていますよ。ですがこいしの行動を制限することなどできないのです。それは妹を甘やかしているだけ？ 違いますよ。私ではない第三者でも……そう、貴方でもこいしの行動は縛れません。縄をかけてもいつの間にか消えてしまうでしょう」

本当にこいしをある一定の場所に縛りたいのならば今のこの部屋のようにこいしが逃げ出せないような結界を張るほかない。そんなことをすればこいしは誰にも会えなくなってしまう。心を閉ざしたこの子は寂しいだとか虚しいだとかいう感情を持たないから発狂することは無いだろう。

だが私はきつと姉としてこの子のそんな姿を見ていられなくなる。だからそんなことをすることは無い。これが姉として妹を甘やかし

ているということになるのならばパチュリーさんの言っていることは正しい。だが本当に閉じ込められている妹を見て何も思わない姉がいると思うのか。レミリアさんでさえフランドールの状況を憂いていたというのに。

「とはいっても悪いのはやはりこちら。ほらこいし、きちんと謝りなさい。迷惑をかけてごめんなさいって」

「そんなもの別にいいわよ。どうせその子もどうして自分が悪いのか分かっていないんでしょうし、私としてはフランが外に出るきっかけを作ってくれたのだから感謝すらしているわよ？　まあ少々強引だったとは思うけどね」

妹を持つ姉同士であるが故か、初めからすべてわかっていたが故か、レミリアさんは特に謝罪も必要ないという。パチュリーさんや美鈴さんも謝罪を欲しているわけではないらしい。どうかこれ以後自分たちに関わらないでくれと心の中で訴えてくるに留まってる。

だがそれはおよそ不可能だ。地底のワインは全て紅魔館に頼り切っている状況。外から取り寄せたワインを紫さんに売ってもらうとなれば地底の税金の引き上げを行わなければならなくなる可能性も高い。かといって仕入れる量を減らせば今度は鬼が恐い。

「この子は人付き合いなんで知りませんし覚えませんからどうか許してやってくださいね。ですがこちらは紅魔館から多大な恩恵を受けている身。何もお詫びできないのは申し訳ないので紅魔館の修復でも鬼たちに手伝わせますよ」

私はしないが。私が行ってもただ足手まといになる未来しか見えない。

「いくら地底の主だからといっても貴方の独断であるの鬼たちが動くのかしら？」

「ええ。むしろ独断だからこそですよ。民主主義的に決定するということになるのなら地底が潰れます。あとついでに地上も」

鬼たちを動かそうとするならば報酬を用意しなければならぬ。あまりに単純だと思うだろうが万人にとつて最も効率よく人を動かすのは割のいい報酬なのだ。地底にいる妖怪達にとつてのそ

れはすなわち酒である。仮に民主主義的に決定しようとするれば地底の総意だという名のもとに大多数が参加したがるに違いない。酒は実質タダで呑めるからだ。

こうなってしまうっては收拾がつかない事態に陥ってしまうので、こは鬼だけに絞って動かす。鬼だけならば何とかなるだろうし、鬼も昔とは変わった久々の地上を楽しめるはずだ。

修復中に呑まれては作業が進まないかもしれないから、修復が終わった後に地上で宴会でもしてくれればいい。妖怪の集う宴会に参加する者は特別鬼に恐怖することも無いだろう。

それに鬼の集う地上での宴会は萃香の悲願でもあったはず。今回もこいしの搜索を手伝ってくれた事だし、私からのちよつとしたサプライズとでも思ってくれればいい。

「? まあ何でもいいわ。館の修復を手伝ってくれるのなら大歓迎よ。パチエの魔法も万能というわけではないし。いつ頃から始められそうなの?」

「早ければ明日……いや、もう今日ですか。鬼は作業が速いので明後日には完成するんじゃないですかね」

普段はほとんど使わない時計もたまには役に立つものだ。地底にいる限り時間なんて気にする必要もそれほどない気がしていたが、地上との関係が深まるのならば時間を気にして動かなければならなくなるかもしれない。面倒くさいことこの上ない。

くり返す嫌いがある

「勝手な事を言っでごめんなさいね」

紅魔館だったものに帰って来てすぐ、レミイの第一声はそれだった。しかし急にその一言だけを言われても私たちには何のことかさっぱりである。レミイの心の内なんて彼女ともう一人しか知り得ないのだから。

「さとりとの話の時の事よ。貴方たちはこいしにも謝らせるつもりだったんじゃないの？」

「なんだ、そんなこと。初めは確かにそのつもりだったわ。でも諦めた」

想像以上に厄介だったのは姉ではなく妹の方だった。ここでも同じであるが、妹を見れば姉が如何にまともであるのかがよくわかった。

自分が悪い事をしたとは塵とも思っていない目。そもそも成り立たない会話。あれに謝らせようとするのが如何に無駄なことか。性格と能力に難があるというのはフランドールと似ている点だが行動力が桁違いだ。

結果、彼女はただ善意のつもりで迷惑をかけ、それが迷惑であることを理解しようとせず、反省することも開き直ることも無かった。あれは姉とは異なる意味で厄介な存在だ。

フランドールもそうだが彼女たちと会話しようとする、私たちが棲む世界とは一線を画しているような微妙な違和感が積み重なる。古明地こいしはその最果ての存在。フランドールへ抱く違和感を極限まで積んだようなもの。

然るに私は謝罪させることを諦めた。彼女とまともに会話することすら到底できないだろうと判断したからだ。古明地さとりはそんな私の気の変化に随分と早い段階で気づいていたようだが。

あとは一日中あちこちを飛び回って疲れたというのも大きい。普段から運動をしないからとは言うけれど、むしろ魔法使いとして身体が強い方がおかしい。私の場合は持病の問題もあることだし、それが

無ければきつとアリスよりは動ける。

「……………はあ、もう駄目。疲れたわ。地下は無事だったから私はもう寝るわ」

魔法使いには食事も睡眠も不要だと言われている。実際にその認識は間違っていない。普段動かない魔法使いならば自前の魔力だけで賄える。しかし疲労というものは確実に蓄積するもので、今日のように一日動き回れば疲れて眠たくなることもある。

疲れたから寝るなどいつ以来だろうか。ああ、きつとまた小悪魔に茶化されてしまう。『生粋の魔法使いである貴方様も疲労には勝てないのでですね』なんて。本当に小悪魔小憎らしい悪魔だわ。



パチエはその性質故にほとんど睡眠をとることが無い。だから彼女が寝る時には相応の疲労が蓄積されているのだろうと考えられる。確かに今日は昼から大騒ぎだったし、最後には彼女の嫌いなさとりと対面することになったせいで精神的にも疲れていたのだろう。

彼女がほとんど寝ないせいで、彼女が寝る時に小悪魔が散々煽り倒すというのも最早何度も見た光景となった。本当に仲のいい主従だ。感覚としては咲夜が私の紅茶に変な薬草を入れたりするのに近いかな。今日もまた彼女たちの声が聞こえてくる。なんだ、パチエもまだまだ元気じゃないの、と思っけていても五分もすれば静かになっているけれど。

紅魔館が建っていた瓦礫の上。今この場にいるのは私と咲夜だけだ。

パチエと小悪魔は地下。美鈴は門の前。フランは紅魔館が再建されるまでの間地霊殿で預かってもらうことになった。さとり曰く精神へ強力な負荷を受けた状態のフランの経過観察をしなければならぬらしい。

「しかし咲夜も変わったわね。貴方なら真つ先にさとりに斬りかかるかと思っていたわ」

「あの場には古明地さとりの他にも何人かいましたし、そんなことをすればお嬢様の、延いては紅魔館の品位を疑われたでしょうから」

つい半日前はそんなことも気にせず八雲紫と私の前で彼女にナイフを投擲していたくせに。たった半日あれば変われるのが人間の強みか。いったい何が咲夜を変えたのかは私の知るところではないが、あまりにひどかったさとりにへの嫌悪が少々でも和らいだのであればこれからの紅魔館と地霊殿の関係もよりよくなるかもしれない。

「お嬢様こそ妹様のことは良かったのですか？ 古明地さとりが妹様に何をするか分かったものではありませんよ？」

「私はさとりを信用しているからこそ預けたのよ。仮に相手が八雲ならば断わったでしょうね。貴方も心の底では分かっているんでしよう？ さとりは決して私たちに害をなす妖怪ではない。その上で彼女を嫌うのは個々人の自由だから口出しはしないけれどね」

「そうでしょうか……いや、きつとそうなのでしようね。しかし私から彼女への感情が消えることはあり得ません。心を読まれる不快感というのは確かに存在しますから」

結局彼女は性格ではなく能力故に嫌われる。生まれ持ったその能力だけが理由で。いや、散々人を煽ったりするくらいだから性格も良いわけではないのだが、やはり嫌われている主な理由は心を読むという凶悪な能力だ。

私だつて心を読まれることが好きなのではない。さとりがどこまで読めるのか分からないが、会話の中では常に先を読まれ続けると考えていい。そんな状況でまともな会話なんてできるはずもないだろう。

咲夜たちはきつとその部分をひどく嫌っているのだろう。全てを見通されているという拭い去れない不快感。八雲紫にもどこか通ずるところがあるが、あちらは単純に性格が最悪だから私は嫌いなのだ。何故さとりが彼女を嫌っている様子がないのか、私には不思議で堪らない。

「心を読まれるのが嫌なら妹のこいしの方はどうなの？」

「どうでしょう。私にとって彼女は本当に赤の他人でしかありませんから好きでも嫌いでもありません。強いて言うなら哀れ、でしょうか。彼女が能力を失った理由と現状。そのどちらもが哀れでならぬいですね。お嬢様はどう思っているんです？」

「私？ 私もそうねえ」

こいしが本来の能力を失って今に至った経緯は先ほど聞かされた。私は既に知っていたから二度目だったが何も知らない咲夜たちに向けての話だ。

心を閉ざしてからは何処へともなくフラフラと行動する日々。帰る事もほとんどなく心配しても当人はそれに気づいていない。

古明地こいしという少女の心は脆すぎたのだ。さとりが現在進行形で耐え続けているような他者からの大きな嫌悪を背負えるほど彼女の心は強くなかったのだ。

「哀れ……確かにその言葉が一番しっくりくるように思うわ」

好きでも嫌いでもない。誰も彼女を好きにも嫌いにもなれない。彼女が選んでしまったのはそんな道。嫌われることは無くなった。しかしその対価として支払われた彼女の未来はあまりにも……。

私たちに散々迷惑をかけてなお恨む事のできない妖怪。彼女のせいでフランが生命の危機に陥ったという話もさとりから聞いた。それでも憎めない。不思議な娘だ。

「さて、私たちももう寝ましましょうか。朝起きれなくなっちゃうわ」

「ふふ。吸血鬼なのにおかしな話ですね」

「仕方ないわよ。もうすっかり幻想郷こゝろに馴染んでしまったから。あ、そうだ。明日というか今日の昼間で良いからブンヤに取材の許可を伝えに行ってもらえる？ ……ありがとう」

形は違えど確かに彼女の情報のおかげでフランを見つけ出し、連れ帰る事も可能となった。約束は約束だ。きっちり守る。

それに昼からは紅魔館復興のために鬼がやって来るはず。射命丸の方から解決後すぐの取材を取り付けたのだからまさか断るようなことはしないだろう。これは面白いことになりそうだ。



レミアアさんたちが帰宅し、漸く長かった一日に区切りがついた。彼女たちを帰す関係上この部屋の結界が解かれたわけだがそんなことをすれば当然簡単に出入りできるようになるわけで、気づけばこいしは何処かへ消えていた。

この部屋にいるのはまだ帰っていない紫さんと私の二人だけだ。

「紫さんも冬なのに大変でしたね」

「本当に。それにまだしなればならないこともあるし、今年の冬眠は諦めるほか無さそうね」

「しなければならぬこととはいったい何なのか聞いても答えてはくれないのでしょうかね」

「そりやそうよ。貴方に隠し事のできる稀有な存在である私が、わざわざ秘密をばらすなんてもつたいないことをするわけがないでしょう?」

則ち私に関係する隠し事ですかそうですね。紫さんが私にしてほしいことなんて私にとって碌なことが無いから困るのだ。決闘法の考案とか成り代わりとか。とにかく私の胃に優しくない場合が多い。

「はあ。次の胃薬は少し多めに仕入れてくれるとありがたいです」

「安心なさい。今回は貴方だけではないし、胃薬もよく効く物を用意しておくわ。それに今回はちよつとした実験のようなものですぐに終わるはずよ」

なんと私以外にも巻き込むつもりなのか。

「それは勿論私以外の誰かにも伝えてあるんでしょうね?」

「そんなはずないじゃない。ま、貴方が気にすることでもないわ。断るか了承するかは二択の話ではないもの」

問答無用に巻き込むだけか。いつもの紫さんらしい強引な方法だ。それが敵を増やすことになっているというのに紫さんは気にしようとしな。

考えられる理由は主に三つ。紫さんにとって嫌われても良いくらいの木端であるか、これ以上嫌われようが無いほど嫌われているか、あるいはそんなことをしてもなお紫さんを嫌うような事をしないからだ。

私の場合は三つ目か。互いの苦勞を知っているせいで嫌おうにも嫌えない。私とまともに会話してくれるだけでもありがたい存在ではあるし、彼女に助けられたこともある。それ以上に振り回されているように思うがなんだかんだで悪い関係ではないだろう。私の他に萃香もよく巻き込まれているような気がするがそちらの関係も悪いようには見えない。

今までの経験から推察するに、紫さんは一つ目と三つ目を好んでいるように思う。二つ目といえ文さんが巻き込まれていたことがあったつけ。だがすぐに思い浮かぶのはそれくらいでその他は捨て駒を作ったりしている。

「無理矢理連れて来られた誰かが私と行動するんですか？ それはかなり危険だと思いますが」

「そのあたりは恐らく問題ないわね。私に対しては一方的な嫌悪感を抱いているようだけれど、今まで見てきた感じだとその他の人妖には比較的温厚なもの。それにいずれ彼女と貴方は関わることになるでしょうからね」

この発言から恐らく二つ目の方法だろうことは分かったが、彼女の言っていることはますます分からなくなってきた。察するに今は私と関わりが無いが後々関わりが生まれるであろう人物……可能性は無限大だ。

「いったい誰なんです？ 私と関わるなんて相当な変人だと思いますが」

「それは暗に私を揶揄しているのかしら？」

「まさか。そんな意図があったわけではありません。ただ珍しいなと。で、誰なんです？」

「言う訳無いでしょう？ これ以上詮索されても困るし話題を変えましょうか」

それを相手の目の前で言うか。せめて心の中で言ってほしいところだ。紫さん以外なら心の中で言っても分かるからいつもと大差ないのだが、声に出して言うのはどうなのだろうか。

「ところで……、と切り出された話題は先ほどまでのものとは90%ほど異なるものだった。」

「貴方のところの式神はなっていないわねえ」

おそらく紅魔館組の発言に噛みついたときの事を言っているのだろう。彼女のために何か言ってあげるべきなのだろうが事実だから何も言い返せない。

「貴方のところの式神が優秀過ぎるだけでしょように」

そもそも術者の実力の違いが大きすぎる。紫さんが適当な式を打つても戒のようにはならないだろうし、私がいくら頑張っても藍さんのような式神は生み出せない。現実には平等などではなく非情なものなのだ。

藍さんも少々堅苦しいところがあることや、元の妖怪も九尾なんて言う馬鹿げた力を持っているせいで高圧的な態度をとるところは難点か。でも本当に欠点などそのくらい。

「頭も良いですし実力も十分。彼女一人いれば地底は回せるんじゃないですか？」

「無理ね。あの子は確かに私の式だから賢いし力もある。でも本当にそれだけ。今日だって異変解決について行きたいというからちよつとしたテストをしてみたんだけど、驚くほどひどいものだったわよ？」

「いったい何をしたんです？ 何をやらせてもそんなにひどい結果を出すとは思いませんが」

紫さんの自画自賛は無視して素直に疑問に思う事を尋ねる。藍さんといえばまさにオールマイティ。何でもそつなくこなすイメージしかない。

「異変解決に一番大事なのは実力でしよう。これは藍も持っているわ。でもその他にも大事な要素として機転が利くかどうかというのもある。如何に思考にロックをかけずに周囲を見られるか。これが

あの子には決定的に足りない。頭が堅すぎるのよ」

すなわち柔軟に物事を考えられるかどうかのテストをしたわけか。だがそれは式神にとっては非常に難しい物の一つ。基本的に主人からの命令通りの動きしかしない式神にとって、その範囲外から投げられた物は意味の無い物だとしか認識しない。

演算能力は幻想郷随一の式神であつても機転が利くかどうかは全く別の話。そこを紫さんは試したというわけか。本当に式神に厳しい妖怪だ。

ほらこれ、と言つて投げられた紙を見てみれば、おそらく藍さんへテストとして課したのであろう歌が一つだけ書いてある。

——八雲立つ 雲間抜ければ 夏は来ぬ 惑い止まれば 春はまだ来ぬ——

「なるほど。これはまた露骨な……………」

そもそも注視すべきは初めの『八雲』と『夏』と『春』だろう。

八雲は十中八九紫さんあるいは藍さんのこと。何故夏の後に来るのが春なのか。それはおそらく今が冬だから。春の後の『来ぬ』はまだと書いてあることからして打ち消しの『来ぬ』となれば対する夏の後の『来ぬ』は『来ぬ』。つまり夏は来たとなるはずだ。

『八雲立つ』が本来の意味で使われているのならば……

「本当に貴方は自分の式神に厳しいですね。心の底から意地悪です。これは式神には導けてはならない答えであるはずでしょう？ 答えを教えれば異変解決に連れて行ってほしいと言ったことすら忘れるかもしれませんね」

「まあ私はあの子を連れて異変解決に乗り出すことなんて無いから良いのよ。答えを教えるつもりも無いわ。だってこんな式神の存在を危うくする歌だと知ったら、ねえ。何をされるか分からないもの。明日の朝食が無くなるかもしれない」

「それで済めばいいですけどね。そうなくても貴方の事ですから無理矢理命令して作らせるんでしょうけど」

さとりと休暇 復興と拒絶

大騒ぎだった昨晚とは打って変わって静かで優雅な朝。すっかり夜行性から昼行性へと変化してしまった私の身体だが、まだ薄暗いこの時間は一日で一番好きな時間帯だ。休む夜でもなく、日光の照る昼でもない。夏ならばこの国の暑さを忘れられるほど涼しい。今の時期は寒すぎて部屋の小窓から外を覗くほかないし、そもそも今は自分の部屋すら無いけれど。

まだ日も出ていないしすることも無いから地上に出てみるということも通りおかしな動きをしている美鈴が視界に入った。

静か、本当に静かだ。それも当然のこと、紅魔館近辺で騒ぐようにする愚かな妖怪などいないし、この時間はまだ妖精メイドたちも咲夜も眠っている。今日はパチエも眠っているはずだから今起きているのは美鈴だけか。昼間寝る分を夜に回せば良いものを。

しかし彼女もこの時間は好きらしい。多少寒い方が身体を動かすには都合が良いとか何とか。私の部屋の窓からは丁度門の前辺りにいる美鈴が見えている。今は動き回っているから何ともないのだろうが、普段はよくもまああんな寒そうな恰好で外に突っ立っていられるものだ。私だったら凍えて死にそうね。……その前に焼け死ぬか。

「おやお嬢様、おはようございます。この時間に起きているなんて珍しいですね」

ああそうか。この時間はいつも咲夜が来るまで部屋でぼんやり考え事をしているから、美鈴は私が普段から早起きなのを知らないのか。

「おはよう美鈴。私はいつでも早起きよ。それにしても日本の冬の朝方は思いのほか寒いわね。雪遊びなんて私にはできそうもないわ」

「雪遊びもなかなか楽しいですし元気いっぱい妖怪たちと遊べば身体も温まって丁度良いですよ? ……………あ」

「はあ。すっかり門を守ってくれるのなら私からは何も言わないこと

にするわ。ただし咲夜から何を言われても私は一切の責任を負わないわよ」

まったく。昨日は昼寝、普段は雪遊びか。美鈴の実力を知っているからこそ余計に残念な事だと思ってしまう。だが本来自由気ままに生きるはずの妖怪を契約で縛っているのはこちら側。少しくらいは美鈴にも楽しみがあつて良いだろうというのが私の意見。

対して美鈴の実力を知っている咲夜からは普段からそれを発揮しないで咲夜の仕事を増やしているようにしか見えないのだろう。咲夜も毎日忙しいのだろうから美鈴を叱りたくなる気持ちはよく理解できる。

「う………本当にすみません」

「別に謝ることも無いわ。謝るならいつも迷惑をかけている咲夜にね？ それより今日は門番の仕事もしなくて良いわ。どうせ鬼たちが何人か来るでしょうから」

「紅魔館の修復ですか。私たちも何かお手伝いした方が良いんですねえ」

建築のいろはも知らない私たちではただ足手まといになるだけだろう。精々労つてやるとかその程度の事しかできない。

『いらぬいらぬ。手伝いなんて無くたって今日中には終わらせてやるさ』

しかし私がそういうよりも先に見えない者の声が代弁してくれた。目には見えないが確かに感じる力。聞き覚えのある声。

「お前は……萃香か」

「いかにも。こうして話すのは久しぶりかねえ、吸血鬼の嬢ちゃん……レミリアと言ったかな？」

霧が萃まった先に現れたのは私と変わらないくらいの小鬼。おそらく直接話すのは何度も続いた宴会の異変以来か？ 姿だけは昨晚も八雲紫と一緒にいるところを見たが。

それにしてもどうやら私の名前は覚えているが、美鈴の名前は思い出せない様子だ。さとりととの関りも少ないからだろう。

「こんなに早く来てももてなせないよ」

「その辺りは問題ないさ。ちよいと館の具合を見に来ただけだから。この程度なら今日一日あれば終わるだろうからそうだね、あんたらは神社で宴会の準備でもしておいてくれよ。鬼も土蜘蛛も酒は大好きだから多めにね？」

鬼以外にも地底から来るのがあるのか。往き来が自由になったからこそ幻想郷にも新しい風が吹くのかもかもしれないが、それと同時に厄介ことも多くなりそうだ。

「じゃ、私は一刻ほど後にまた来るよ。それまでに持ち出さなきゃならないものは持ちだしておいてくれ」

「分かったわ。荷物を持ち出して宴会準備、と。でも現場監督は必要でしょう？ 私と咲夜は残ることにするわ」

天狗の取材も受けないといけないしね。別に神社に行つてからでも構わないのだが、敢えて鬼のいる現場で行うのだ。その方がきつと愉快だから。そう、ただそれだけの理由。私はこう見えて存外悪趣味なのだ。



結局紫さんが帰つた後は一睡もせぬまま仕事をこなすことになった。別にこの程度は慣れているから大した問題も無い。何日もぶつ続けでしようとは思わないが。

普段一日かけてゆるゆるとやっている書類整理も、皆が寝静まつた静かな一室で黙々とこなせば二、三刻で終わらせられる。普段からこれができるばもつと趣味に使う時間も増やせるはずなのだけけれど。

睡眠時間を削って書き上げた書類のチェックは普段よりも厳重に行わねばならない。怨霊の数の変化量はきちんと告げられただけの量なのか、熱源の温度は適切に管理できているか、税金に狂いは無いか。

特に是非曲直庁へ送らなければならぬ分は相手も厳格だから注意せねばならない。紫さんに送る分は多少緩くても許されるが。

「おーい古明地、入るよ」

「ちよ、ま……はあ」

こちらの手元にはあまり一般住民に見られるのは好ましくないような書類が山積みにならされているというのに。断ってから扉を開けて入ってくるまでの間が無さ過ぎる。声をかけてくるようになっただけマシだと思ふことにするか。

「どうでした？ 地上は」

「うーん、まあ変わらずかねえ。好きに出られるようになったのは嬉しいが棲む場所は地底で良いな」

「頼んでいたことはきちんとしてくれたんでしょうね？」

萃香には早朝からお遣いを頼んでいた。萃香の能力を使えば容易い地上の偵察だ。

「当然。鬼は約束を破らんよ。先ず妖怪の山だが……」

ふむ。山は昨晚変に紫さんが全体を震撼させたことと地底が解放されたことにより警戒態勢が強まったか。天狗の習性を考えればそうなることも想像に難くない。既に鬼の一匹が山に棲みついているとも知らずに鬼に怯える様は滑稽だけれど。

里はまだ変わりなし。まだ稗田に話も行っていないのだろう。

結局この条項撤廃に過剰に反応しているのは現状山だけだと見ることが出来る。それはそうか。紫さんの話と萃香の話によれば鬼など忘れられて久しいようだし。萃香や勇儀と関わったごく一部の者たちだけが鬼の恐ろしさを知っている程度か。

となると土蜘蛛や釣瓶落としなんかも忘れられているのかも。変に関わってきてほしくないし覚は忘れられていても良いけれど。

それにしても私が地上にいた頃はどこに行っても人々を怯えさせていた妖怪たちが忘れられているなんてねえ。少し面白いかも。稗田の完全記憶の話も交えて一冊書いてみてもいいかもしれない。

「助かりましたよ萃香。そうだ、そろそろ朝食ですが一緒に食べていきますか？ ……ええお隣の料理は美味しいですよ。分かりました。そう伝えておきましょう……え？ 勇儀たちも？ まあ良い

でしょう。今日協力してくれる礼として。私もお燐を手伝いに行きますので、萃香は勇儀たちを呼んできてください」

ただでさえ今朝は守矢の二柱とフランドールもいるというのここからさらに増えるとなると流石にお燐一人では可哀想だ。料理はそれほど得意ではないがこうなってしまうては致し方なし。ちよつとくらい味付けが微妙な物が混ざっていても誰も気づきやしないだろう。

「八坂様、洩矢様、起きてください。もう卯の刻ですよ」

朝食の用意も概ね終わったので二柱を起こす。戒は勝手に起きてくるしお空は既に起こしている。流石に客人よりも後に身内を起こすような事はしない。

「ううん？ ふわあ……こんな時間に起こされるのは外にいた時以来ね。もう早苗の通学も無くなったし、最近では八時起床だったからまだ眠いわ」

この神様たちの風祝も外では大学とかいう学び舎に通っていたらしい。寺子屋をもっと大規模にして高レベルにした物らしいというのは本で読んで知っているが実物を見たことは無い。

大多数の人間が教育を受ける機会を得た時代に喜ぶべきか嘆くべきか。嫌と言うほど教え込まれる現実と科学の妄信によって子供たちは純粹さを忘れ、私たちのような存在を自分の中から消してゆく。全てが人間にとつて都合の良いように作り変えられた世界だ。

「おはようございます。食堂までの案内はその山犬に頼んでいるのでついて行ってくださいね。私はまだ起こしに行かねばならない子がいるので」

「分かったよ。親切にどうも。……ほら、諏訪子もさつさと起きな」



「凄い手際の良さ。見る間に館が修復されていくわね」

「そうですね。正直鬼と土蜘蛛の建築技術というものをナメていました」

流石に壺や絵画といった物は再現できないが、外観だけならばまだ昼すぎだというのに既に元通りに近い。後は部屋を区切って私たちの方で調達してきた備品で内装を整えればほとんど問題なく暮らせるようになるだろう。

報酬としての酒と宴会が絡んでいるとはいえ本当に恐ろしい速さで館が建てられる。

「そういえば射命丸はまだ来ないの？」

「それがですね……どうやら今日は腹痛が酷いようでして『またの機会に』とのことですよ」

「約束を破っておいて次なんてあるはずないじゃないの」

あの天狗なら鬼にビビリ散らしてでも取材を強行するかと思っていたがそうでもなかったらしい。千年も昔の種族の差というモノに縛られている奴らは大変だ。

「まあまあそう言ってあげないで頂戴。天狗も天狗なりに胃を痛めているんですよから」

「……………どこから湧いて出てきたんだ、八雲紫」

「私は何処からでも湧いて出られますわ」

扇子で隠している口元はきつと嗤っているのだろうと容易に想像できる。目が笑っていないなくても口元は常に笑っているように見えるその不気味さも嫌われる理由の一つなのだろう。実際に私も常に余裕ぶっている表情をされるのが嫌いだからこの妖怪が嫌いなのだ。

「で、何をしに来たのよ。まさか冷やかに来たわけでもないでしょう？」

「半分正解。冷やかに来たのよ。といっても本題はまた別にあるのだけれど」

こいつと話すと毎度頭が痛くなる。絶対にこちらにペースを握らせないような、本題を後出しする話し方をするせいだ。それに今回のように存外子供のようないた事をする時があるのも頭

痛の原因になる。

「フランドールを地霊殿から連れて帰ってきましたわ。といつても眠っています。この子の管理はきちんとする方が良さそうね。では私は急いでいるので」

そう言ってきた時と同じ唐突さで消えてしまった。肝心のフランは今日に入る場所にはいない。という事は地下室のフランの部屋まで送り届けたという事か？ 確かに日光が危険だとはいえあの八雲紫がそこまで気を利かせるか？ 少し気にかかるな。

「咲夜、地下室にフランがいるかどうかだけ確かめに行ってくれない？」

「はい……………確かに妹様はいらっしゃいました。彼女の言った通り寝ておられました」

「そう」

考えすぎか。

夜も更け、少なくとも見た目は完璧に戻った紅魔館の完成祝いと異変の解決祝いということで神社で開かれた宴会も既に盛り上がりを見せている。

幾度となく行われてきたこの宴会でも新顔というものは毎度ならずともおり、今宵のそれには地底の妖怪達と我が妹フランが当たる。

地底の妖怪達は酒を浴びるように呑んで笑い合っているが、フランは誰に挨拶に行くわけでもなく只管咲夜の持つてくる料理を食べて、時々血を飲んでいただけである。

「フランは誰かと話さなくても良いの？ ほら、魔理沙もあそこにいるわよ？ 気の合いそうな妖精たちだってあつちで騒いでいるし……………」

「もう、うるさいな。この宴会だってお姉様が勝手に連れてきただけでしよう？ 私が何処で何をしても勝手じゃない。それに妖精ごと

きと話が合うですって？ 馬鹿にしてるの？ そもそも私はこんな騒がしい所に来るくらいなら部屋で本でも読んでいた方がマシだったわ」

「そんな……私はただフランにも友達ができたらと思って……」
「だからそれが迷惑だと言っての。お節介って知ってる？ 私はお姉様に何も頼んでいないし頼もうとも思っていない。お姉様が勝手に私を連れて来て勝手に輪に入れと言っているだけ。本当に自分勝手だよ。友達なんて私には必要ないわ」

妹のためと思つてやつてきた事は全てお節介だったのか……？
フランに自由の翼を与えるために私は知らずフランを縛り付けていた？

駄目だ。どうにも頭がフワフワして考えがまとまらない。咲夜の制止の声も振り切つて神社の裏手に回る。あそこよりは静かなここならば酔いも収まってくれらるだろう。

夢だと思おうにもフランのはっきりした声が脳内で再生される。
お節介だと、自分勝手だと私を責める声が。

『お姉様つて本当に自分勝手よね。もっと他人の事も考えてほしいものだわ』

手ごろな石に座つて頭を抱える。聞こえてくるこの声は実際に言われているものなのか？ 幻聴か？ それとも私の耳が良すぎるのか？

分からない、何一つ。私がここにいるべきなのかどうかもはや分からない。もしかして私がない方が紅魔館もスムーズに回るのではないかとさえ考えてしまう。まるで自分のものとは思えない思考のズレ。少しの違和感。それに気づいたとき、フランの声とは別の声が私を呼んだ。

『拒絶された者たちの楽園においてなお拒絶された吸血鬼。拒絶されたそのさらに先の世界を見せてあげるわ』

声と同時に訪れた抗いようのない浮遊感。いくら羽ばたいても飛べない空間を落ちて、落ちた先にいたのは……

「さとり……と早苗、だっけ？」

「やはり最後は貴方でしたか。嫌な予感はしていましたが的中するとは」

「どういう事？ それにここは何処なの？」

「ここは嫌な息苦しさを感じる。まるでヨーロッパにいた時のような。」

「ご明察。ここは外の世界です。ヨーロッパではなく日本の、ですがね……………何故、ですか？ 彼女が言うには休暇の一環らしいですよ。日ごろから疲れているでしょうから、なんて言ってます」

理解しようにも考えが追いつかない。つい先ほどまでは確かに神社で宴会をしていたはず。だが何故か今は外の世界に連れ出され、しかもそこにはさも当然のような顔をしているさとりと少々困惑気味の早苗がいる。夢、にしてはあまりにもリアルだ。

「残念ながら夢ではありません。貴方は間違いなくレミア・スカーレットであり、ここに存在しているのです。私の分かることをある程度で良いならお話ししましょう。そこから先の行動はまた考えれば良いでしょう。幸い外に詳しい早苗さんもいますからね」

時空旅行と宇宙人

「そういえばレミリアさんもここに飛ばされる前に何か言われましたか？」

「ええ。確か『拒絶されたそのさらに先の世界を見せてあげる』だったかしらね」

早苗さんと同じ文言ではなかったか。そう言えばレミリアさんはここに来る前にフランドールにひどい事を言われたと心の中で嘆いていたっけ。まったくフランドールもどこまでも素直じゃない子。いや、他人との付き合い方や距離感が分からないのか。そう言う意味では幽閉していたレミリアさんにも非はある。

せめて誰か傍に寄り添ってあげられるような人がいればあの子の心もあれほど不安定ではなかったろうに。

「私もという事は早苗も何か言われたの？」

「はい。私の場合は『手間のかかる大きな子供のいない世界を見せてあげる』でしたね。別に神奈子様たちの事を疎ましくなんて思ったことは無いのに」

三日は目覚めないであろう衝撃から無理矢理起こされた早苗さんは未だに精神が不安定なまま。昨晚の記憶は失っているようだが、それを上書きするように目覚めた時にいなかった八坂様たちへの不審感が募っている。

本当に彼女は汚いやり方をする。勝負には美しさを重視させたくせに彼女自身の普段のやり口はひどくいやらしいものだ。

「さとりさんは？ 何か知っていたようでしたがどうです？」

「私ですか？ 私はただ『休暇をあげる』とだけ。この紙きれと共に飛ばされたんですよ」

そう言っただけで彼女たちに見せたのは今回の件に関する情報の一部。書いたのは私自身。何故か。それは彼女の計画をこの二人に悟らせないためだ。

私も貴方たちと同じ被害者ですよ。私はその紙に書いてあること以外は知らないですよ。とそう思わせる必要がある。確かに彼女

は私に休暇を与えると言いはした。それは嘘ではない。だがそれは私を外に送り出すための表の理由。

ただ外の世界に出るだけならば彼女一人でも可能だ。現にしょっちゅう外の世界に出かけては舶来の物を土産に持ってきたりする。しかし今回ばかりは彼女が外の世界に出ることは不可能だった。正しく言えば、今私たちの飛ばされた世界に来ることは不可能だったのだ。

彼女はその理由をドツペルゲンガーのようなものだとした。同じ世界に全く同じ物が存在できないのと同様に、根が同じならば他人のように見えてもそれは成り立ちうるのだという。

訳が分からないと言った私に対して彼女は心底面倒くさそうな顔をしながら、しかし懇切丁寧に教えてくれた。

タイムマシンがあれば過去と現在、未来を往き来できると人間は夢想する。しかし本当にそうかしら？ 未来には未来の、過去には過去の自分がいるはず。その自分は現在の自分とは異質な存在だけれども自分であることに変わりはないはずよ。ではその自分に会ってしまった場合、消えるのは相対的に過去の自分かしら？ それとも未来の自分かしら？

ええそう。この質問は破綻している。質問ではなくそもそもその前提が。だってそうでしょう？ 過去が消えても未来が消えても、どちらにしてもその者の存在は消滅してしまう。つまりは同じ世界に同一の存在がいる場合、両方が同時に消滅してしまう事になる。

未来から過去へ渡つても、過去から未来へ渡つても、同じ世界の時間旅行をしようとするれば必ず消滅する。タイムマシンなんて人間の夢ではない。

もしかしたらタイムマシンを発明した未来では増えすぎた人間を減らすために上手く使っているかもしれないわね？ 何と言っても対消滅時には莫大なエネルギーが取り出せるから。タイムマシンを動かすのに必要なエネルギーはきつと人間二人分の質量から得られるエネルギーよりも少ないでしょうから都合は良いかもしれないわね。

実際の対消滅とは異なり時間旅行してきた者が反物質になるわけではないから消えるのはその者だけ。なんて都合の良くてクリーンなエネルギー資源……え？ この話に何の意味があるのか、ですって？

ああごめんなさい、本題を忘れていたわね。

貴方たちに行ってもらうのは外の世界。だけれども守矢がいた世界とは少し違う、そこからはほんの少しだけ未来の世界。そこに答えがいはずよ。行ったことは無いけれどいたことはあるから分かるの。ふふ、夢の中でしか時間旅行なんてできないと本気で思っていた幼い頃に、ね。

では行ってらっしゃい……ええそうよ。これはあくまでもただの実験。でも安心して頂戴。失敗などあり得るはずも無いし、一定時間たてば勝手に戻ってくるから。貴方一人ではないわ。仲間道連れは多い方が心細くないでしょう？ ……失礼ね。私はいつでも正直よ。ではまた会いましょう。

本当に勝手。だが彼女がここに来られない理由は分かっていた。俄かには信じがたい事であるが、彼女の次元になるともはや深く考えることすら馬鹿馬鹿しくなる。未来の世界に居る過去の彼女。

私の想像など軽く超えてくるような突拍子もない事実。これが私たちを送り出した裏の理由。レミアさんと早苗さんはこれを知ってはならない。そう言われたわけではないが何となく私の直感がそう言っている。だからフェイクの紙きれを作ったのだ。私の筆跡を知っている者ならば容易に見破れるだろうがそれでもなければ効果はきちんと発揮されるはずだ。

誰かを騙すのが好きなわけではないが時にはこうして他人を騙すことも必要になってくる。そこに罪悪感なんてものは抱かない。だって早苗さんたちに紙を見せる前に私の分かる事がある程度で良いなら話すと伝えておいたから。

だがレミアさんも早苗さんも、ここがただの外の世界ではないことにじきに気づくだろう。二人ともごく最近まで外にいたのだから。いくらなんでも僅か数年でここまで環境が変化することはあり得な

い。

「『普段疲れているでしょうからたまには休暇をあげましょう。場所は外の世界。帰る時間まで精々楽しんで頂戴』ですか。さとりさんって普段何をされているんですか？ 宴会などでも見たことはありませんが」

「そりや普段は地底で仕事をしていますからね。地上に出てくること自体滅多にないですよ。ああそうそう、貴方のところの神様たちは昨晚地底に泊まっていたので早苗さんが目覚めた時にいなかったのはそのせいでしょうね」

本当は早苗さんが起きたタイミングならば既に地上に帰っているはずなのだが。

「そうだったんですか……ってあれ？ 私神奈子様たちの事さとりさんに言いましたっけ？」

「言い忘れていましたね。私は古明地さとり。ただのしがない覚妖怪です。聞いたことないですか？ 心を読む邪悪な妖怪ですよ」

うん。間違つてはいない。覚なんて伝承でも猿みたいな姿で書かれるほどおぞましいものであるし性格は自分でも悪いと思うもの。結局可愛いのは自分の身と、それと家族。私に比べて周囲が強すぎるからこそ守りたいものが少ないのかもしれないが。

「へえ。心を読むなんて便利ですね。私も心を読めれば相手の事を理解しながら布教できたんでしょうかね」

『心を読むのは便利そう』もう何度も聞いてきた台詞だ。私の能力を聞いた者の最初の発言は大体これだったと思う。そりやこの能力は汎用性も高いし便利ではある。実際に何度も能力に命を助けられてきたのだ。

その点で感謝すべき能力ではあるのだが、私にとっては同時に憎むべき能力でもあるのだ。心を読むなんて能力が無ければこいしを失う事も無かった。しかしああ、世界とはどこまでも理不尽なものだ。きっとこの能力が無ければこいしと出会って共に過ごすことも無かったのだろうから。

「さあどうでしょうね。心を読む者は概ね嫌われる傾向にありますか

ら、信仰集めは余計に苦勞したのではないでしょうか」

「どんな能力でも当たり前の事だが、心を読む能力も例外なく使い方次第でメリットにもデメリットにもなる。まだ二十年弱しか生きていない人間が他人の悪意を直に感じながら信仰を集めるといのはおよそ不可能だと私は思う。」

特に外は幻想がかなり薄まってしまっていた世界。宗教というのはただ胡散臭いものだと一蹴されるようになってしまった世界で布教しようにも、それこそ鬱陶しいと思われて終いだ。その感情を複数人から直接読み取って、それでも尚活動しようと思えるほど強心臓な人間は恐らくいない。

人の、妖怪の悪意を千年以上読み続けてきた私でも継続はできないだろう。心が折れるのが先か世界を諦めるのが先か。こんな能力は人間が持つべきものではない。

「ところで早苗さんはここが何処か分かりますか？ 如何せん私の土地感には平安で止まっていますので」

「それは流石にあてになりませんねえ。でも私もほとんど長野県から出たことないですから変わらないですよ？」

そう言いながらも周囲をきよろきよろと見渡して特徴的な建造物を探しているようだ。だが残念な事にこの辺りには何も無い。木も草もほとんど生えていない荒涼とした風景が広がっているばかり。

「流石にここまで何も無いというのは不思議ですねえ。山奥というわけでもないですし……放棄でもされたんでしょうか」

「どうなんでしょうか。ですが人がいる気配は何処にもなさそうですね。目立った建物も無いようですし、少し移動するべきですかね」

「でも大丈夫かしら？ 私たちが出たら人間は阿鼻叫喚になるんじゃない？」

「そのあたりは問題ないでしょう。何せ私たちは幻想の存在。私たちを視認できる者がいたとしても既に神隠しにあっていると思いますよ」

時代も時代だし私たちを視認できる者は外にはもうほとんど残っていないに違いない。唯一の例外は過去の紫さんくらいか。早苗さ

んたちがいた時代でさえ力ある神の存在を否定されていたくらいなのだから今はもつとひどいだろう。

「確かに。じゃあ面倒ですし飛んでいきましようか。低空なら飛行機も飛んでいないでしょうし」

確か飛行機の飛行高度はだいたい10km程度のはず。空港がすぐ近くにある気配もないから相当な異変がなければ飛行機とはかち合わないはずだ。

それにしてもあんな鉄の塊が空を飛ぶなんて思いもしなかった。昔から空を飛べる人間は少数ながら居たし、きっと数百年間の人間の憧れがようやく実を結んだのがあれなのだろう。本によれば最高速度は音速とほぼ同じ。なんと鴉天狗とほとんど同じ速さで人間が空を移動する時代なわけだ。この時代ではどんな風になっているのか。

五百メートルほど上昇すれば周囲もかなり見渡しやすくなる。元々周りに建物が無かったこともあり、人間が多く住んでいるであろう明るい場所を探すのに苦労はしなかった。

「ここから西ね。かなり距離はありそうだけれど早苗の体力はもちそう？」

「任せてください！ 運動全般はいつもクラスで一番でしたからね！」

随分と誇らしげに話しているが、残念ながら私たちはどちらも学校のクラスという単位における人間の身体能力など知りはしない。ただ彼女の現人神という実態から察するに、幻想の薄れた人間の中ではずば抜けていたことだろう。丁度幻想郷の人間の中での霊夢さんのように。

早苗さんのよくわからない規準にレミリアさんも困惑していたようだが、一先ずここは無視することにしたらしい。そんなわけで少々長い（といっても二時間程度の）空の旅が始まった。

外に出て多少力は弱まっているが空を飛ぶ程度の力の余裕はある。というよりも能力が弱まっていると言った方が良いか。不用意に心を読まなくて良い分気は楽だが、普段に慣れているせいで少し不安も

感じてしまう。

やはり幻想の終焉が近い場所。私たちにとっては地獄よりもよほど地獄に近いだろう。



「ねえ知ってる？ メリー」

今日は5分7秒遅れて到着した宇佐美蓮子に呼ばれた少女メリー——マエリベリー・ハーンが遅刻の忠告をするまでもなく、蓮子は興奮した面持ちで話し始めた。

メリーの方も友人の性格をよくわかっているらしく、今自分から何か言っても聞いては貰えないだろうとあきらめた様子で話を聞くことにしたようだ。

「何のこと……ああもしかしてあれ？ 最近目撃されたとかいうUFOのことでしょ」

「そうそう！ さっすがメリー、話が早くて助かるわ」

「でもどうせ見間違いか何かよ。航空自衛隊基地の跡地でつても胡散臭い原因なんだけど」

近頃航空自衛隊の基地があつた場所付近にて監視用ドローンが捉えた映像。それが現在の世間を賑わしていた。これに関しては大きく三つに意見が分かれており、

一つ目は本当に得体の知れない飛行物体であるという意見。

二つ目は跡地であることを利用した何者かによる、監視用のドローンを使った悪質なトリック撮影であるという意見。

三つ目は——これが一番有力だとされているが、そもそも監視用ドローンというのが前時代の遺物のようなものなのだから何かしらの不具合だったのだろうとする意見だ。

世間はこれで片づけようとする。自ら厄介ごとに巻き込まれる事態を避けたいがために大衆の意思に沿おうとするのだ。しかしここにいるオカルトサークルの二人組にそんな意思は無かった。

メリーも口ではこう言っているが、実際にはかなり興味を持っている。だからこそ蓮子に聞かれた時にもすぐ思い至れたのだと言える。「ふっふーん。メリーがそう言うと思つて資料は集めてきたわよ。ほら」

「これは……………」

蓮子のタブレットに映し出されたのは出回っていた映像よりも画質が数段上の画像や短い動画。

「こんなものどこで？」

「秘封？ 楽部なんだから情報の表ばかり見ているようじゃ駄目よ？」

この手のちよつとばかり怪しいサイトに潜ればいくらでも……は言い過ぎだけれど報道されているものよりは上質な情報が手に入るのよ」

つまるところ違法にも近い方法で情報を集めているのである。そもそも結果を暴こうとしたり、オカルトに傾倒しすぎることは法によつて禁止されているのがこの時代。メリーも蓮子に注意できないほど十二分に法を破っているのである。

「とまあざつとこんなものね。これらを照らし合わせれば、この未確認飛行物体は空自の基地跡から飛び立ち、かなり低い高度を高速で進んだことになるわ。そしてこの映像のココ、よく見て」

「生身の……人間？」

「そう。でも生身の人間がこの速度によるGに耐えられるはずが無い。だから宇宙人じゃないかと私は思うのよ」

「つまりUFOではなくUMAつてこと？ でも飛んでるからUFOなのかしら」

「そんなことはどうでもいいのよ。メリー、土日空いてるわよね？」

ならよし。これが降り立ったのはかなり近いはず。多分大阪辺りじゃないかしら。久しぶりのサークル活動ね」

蓮子は未知との遭遇を想つてワクワクしているようだが、逆にメリーは一抹の不安を抱えていた。蓮子が言った『人間が耐えられないほどの強力なG』を耐えられるような身体を持つ生物ということになれば、それはかつて夢の中で見た兎のような化け物や炎を噴出した女

性よりも恐ろしい何かなのかもしれない。

人間と妖と神及びそれらの中間の子

「1時56分4秒——メリー、何か手掛かりは見つかった？」

「いえ特に。結界の歪みも感じられないし境界も見えないわ。蓮子こそその情報は確かに間違っていないのよね？」

例の未確認生命体を調査するために早速大阪へと出張つて来た二人だが、丑三つ時近くになっても何の成果も得られていないのが現状である。それもそのはずで、ここでの目撃情報があったのは既に三日前。既に対象が移動しているという可能性はかなり高いのだ。

二人もそのあたりの事はよくわかってる。それでもここにやって来たのはメリーの能力を応用して追跡できないかを試すためである。人為的な結界の歪みが発見できればそれを辿れるのでないか、という仮説だ。結果は失敗。そもそも結界の歪みを見つけることすらできなかつた。

「私の情報を疑うという事は国家を疑っているのと同じよ？ まあ国が信用できないのは否定しないけどね」

「別に……そういう訳じゃないわ。でもこの生命体Xに関して何かしらの大きな力が働いたのは確かでしょうね。あまりにも異常すぎる」

既に高速地下鉄道が実現しているこの時代、旧型の旅客機は運航を停止している。京都―東京間以外の移動についても地上で各都市を繋ぐリニア新幹線が発展している時代に飛行機を利用するのは国家間や離島からの移動か、それか相当遠くに移動する時くらいである。

しかし空は相も変わらず領空問題で荒れている。領空監視用にくつものポイントが設けられ、空の監視体制はかつて数多くの飛行機が飛んでいた頃よりもはるかに厳しいものになっている。

だからこそ低空を飛行していた謎の生命体は様々なカメラに捕捉され、四日前に突如報道されたUFOを皮切りにして複数の箇所から次々と同じような報告が上がった。目撃情報が出たポイントを追うことで、徐々に首都に近づいていたことも分かっている。しかしその後三日前に大阪付近で目撃されてからは全くもって情報が出なくなってしまうた。

今やそれを気にかけているのはメリーと蓮子だけという状況。十数年経っているならまだしもまだ精々三日。七十五日どころではない速さで噂は消滅した。これを聞けば『異常すぎる』というメリーの表現にも納得がいくだろう。

「でも、だからこそ気になるわよね。国が存在を忘れさせるほど危険な物だった可能性。あるいは普通の人間の記憶には残らないようにする技術を持っている可能性。メリーの目に映らないのも不思議なのよねえ」

「まあね。あとは全て私の見た夢だったという可能性もあるにはあるんだけど」

メリーの夢はもはや現実との区別がほとんどつかない次元にまで到達してしまっている。しかしこれに危機感を覚えているのはメリーではなく蓮子の方であり、メリーはただ便利なツールだという認識しかない。

夢の中でなら何にでもなれ、さらに夢の中の物を現実に持ち込むことすらできる。それはいわば神の所業。人間にできることの範疇をはるかに上回っている。

いつか自分から離れてどこか手の届かない場所に行ってしまうのではないか。そんな不安。しかしそのことをメリーに直接言うわけにもいかず、その話題になる度に蓮子はただ微妙な顔をするだけだ。

「ん？ 蓮子何か言った？」

「いいえ。何も言っていないし聞こえてもないわよ」

メリーの覚えた違和感。何かが確実に声を発したはず。まだまだ暑さの残る秋口であるにもかかわらず、メリーは思わず来る身震いを止められなかった。今までのメリーは自分の目を絶対だと信じて疑ってこなかった。これさえあればいかなる境界をも暴くことができる。

だから今回は何かの間違いだっただろうと結論付ようとした。しかし直後に再び声が聞こえた。何も無いはずの空間から、今度はより鮮明に。

『そう。未知への恐怖こそ人間に必要なもの。その感情を忘れるべきではないのです』

「こんばんは。こんな夜更けにこんな場所でいったい何をされているんです?」

「ひっ!? あ、あああ貴方はいったい……?」

今度の声は蓮子にも聞こえたようで、情けない声を出しながらも相手の素性を探るといふ最低限の行為だけはできた。

気配もなく急に後ろに現れた少女は見たところ彼女らと同じくらいの年頃だ。長髪がよく似合うだけの普通の少女にこれほどまでに二人が驚いたのは不意に声をかけられたからなのか。それともこの二人だからなのか。

メリーの見る夢の中でも肝試しの墓場でも、恐怖という感情を一切見せずに只管興味のままだに突っ切つて来た蓮子がこれ程までに驚き、怯えるのは恐らく後にも先にも今回ばかりだろう。

「そ、そんなに驚かなくてもいいじゃないですか。私はただの人間ですよ!」

自らを人間であると主張したことに違和感を覚えたのは蓮子もメリーも同様である。見るからに人間であるにもかかわらず人間を主張する。それはつまり、目の前の少女が人間以外の知的生命体をよく知っているとも言え換えられるのだ。目の前の少女は確実にただの人間ではない。人外か、あるいは二人と同種が存在かであろう。

「じゃあそっちの二人? はどうなのよ。貴方の連れにしては物騒だけれど」

「二人? 何言ってるのよメリー。このニンゲンさんはどう見ても一人じゃないの」

「え?」

メリーにだけ見えていて蓮子には見えていない二人。突然現れた目の前の少女もメリーの方を怪訝そうな顔で見つめている。

二人には見えていないようでいて、しかしメリーの目にははっきりとその姿が捉えられている。幼い子供のようだが明らかに明らかな異形。その片方が、まるで狙い通りと言わんばかりに口元を歪ませ

た。



想定より少し時間はかかってしまったが、何とか目的の市街地周辺に到着した。しかし流石に人通りの多い所に着地するわけにもいかず、結局この時間は人の少なそうな神社の裏手に降りることになった。

「しかしやはりと言うべきか……まあ人間が妖怪に体力で勝るはずもありませんね」

やはり人間の体力を妖怪基準で考えるべきではなかった。出発前は自信满满だった早苗さんも目的地に到着する頃には疲れ果てて寝てしまった。最後の方はレミアさんに背負われていたくらいだし、流石に幻想郷の巫女二番手と言えどもこの距離は厳しかったようだ。

ただずつとこのまま放置しておくわけにもいかない。紫さんの話が確かならばここは相当に技術の発展した時代。神社であるにもかかわらず神の気配が全くしないほどに幻想の薄い世界。何かしらの対策を練らなければ最悪消滅まで見えてくるか。流石にそうなる前に回収してくれるだろうがあまり楽観的になりすぎない方が身のためだ。

「そりゃ守矢の風祝といっても霊夢とも数段違うしねえ。で、これからどうするの？　ここにずっといるわけにもいかないでしょう？」

妖怪にとつて神社は相性が良くないから、と。

確かに普通はそうだ。この神社の注連縄は既に結界としての効力を失っているようだが。

「とりあえず早苗さんが寝ている間に服を調達しましょう。冬用の服のままこの季節に来てしまいましたから」

「早苗を連れて行かない理由は何かあるのかしら？」

「巫女服の人が町中を歩いていたら不自然極まりないでしょう？」

多分この時代には既に巫女すらほとんどいない。神がない神社

に巫女がいる理由がないから。レミリアさんはここが未来だとは知らないはずだからこれで誤魔化すほかない。どうせすぐに嫌でも気づかされるのだろうか。

「確かにそうね。でも大丈夫かしら？」

「……………ああそのことです。まあ問題ないでしょう。私たちの事が見えないという事は何かを盗られても気づけないということですから、よほど大きな物や目立つ物でもなければ騒ぎにもならないでしょうね」

見えないとはそういう事。人間は見える物こそが正しいと考えがちだ。空気のように、確かにそこにあるのに見えない物など掃いて捨てるほどあるというのに。自然現象と偶然によって全てを解決した気になっているのが外の世界。その偶然の産物である私たちが何かを盗ったとしても誰も何も分からないだろう。

「盗んだりなんかして大丈夫かしら。万が一見つかったら危ないわよね？」

流石良い所のお嬢様は言う事が違う。それとも自身が過去に外で暮らしていたことによる経験則か。

「問題ありませんよ。法とは人間が人間を抑止するためのもの。私たちが何をしても法では裁けないのです」

「つまり……………」

「私たちにとっては幻想郷と同じ、無法地帯です。幻想郷と違ってこちらの人間には制限があるので治安は随分良いでしょうけど」

幻想郷は人里以外では窃盗など日常茶飯事だと聞いている。殺人だって妖怪によって日常的に起こるもの。そんな場所で長年生きていたのに今更人間のための法に従おうなどという気は起きない。私としてはむしろ毎日のように様々な被害に遭っているであろうレミリアさんがまともな感性をもっていることに驚いた。

「さて、行きましようか。早苗さんが目覚める前に明るい街へ小旅行と洒落込みましよう」

「……………驚くほど様になっていないわね」

「私はただの統治者でしかありませんからね。紳士淑女の作法など分

「からないんですよ」

そんなわけで早速人のいる場所にやって来たわけだが、私の予想通り、私たちを視界に入れられるような人間はここにはいないらしい。人間からは見えないということに対してレミアアさんも初めこそ疑心暗鬼になっていたが、人間の目の前で大きく手を振ってみても何も反応が無かったことから信じざるを得なくなったらしい。

まあ私たちが人間から見えるのならば、わざわざ結界を張つてまで隔離する必要はなかったのだから当り前である。レミアアさんの基準で言う人間というのが幻想郷の人間たちであるから信じられないのは分からないでもないが。

「うわ……眩しいわ。天狗の写真機でもあんなに眩しくないのに」
「人間は天狗や吸血鬼とは違って極端に夜目が効きにくいからでしょうね」

昔の人間は闇夜の恐怖を凌ぐために灯をつけた。そしてそれが妖怪を、延いては神秘を滅することに繋がっていった。しかしこの時代は何故こうも明るくしているのだろうか。既に名のある神秘はほとんどが消えるか幻想郷に封じられているはず。

もはや人間が恐れるべきものは大いなる自然くらいしかない。町を点々と照らすだけの灯りだけでも妖怪に対する効果は大きいはずなのに。

「ふうん。でも不思議な気分だわ。昼間のように明るいのは一切のダメージが無いというのは。どういった仕組みなのかしら」
「さあ、どうなんでしようね」

ただの電気にしては眩しすぎる。魔力を使えば再現できそうではあるがここはそんな力を嫌う外の世界。私には何が夜をここまで明るくしているのか判断することは不可能だ。

「でもきつと大多数の人間も知らないと思いますよ」

時代が進んでも場所が変わっても夏の暑さは変わらない。回らない頭をリフレッシュするためにもまずは手ごろな洋服店に入ること

にした。

違和感と非常識と違和感

「早苗さん、起きてください。朝ですよ」

明るくなつてそろそろ神社にも人が来始める時間であろうに境内には誰一人として姿を見せない。やはりここは時代に取り残されただけの廃神社だったか。一応誰か来ても良いように裏手に回っていたが、この調子なら堂々としても問題は無さそうだ。

目覚めた早苗さんに昨夜頂戴してきた洋服を渡し、レミアアさんには日焼け止めを塗ってやる。吸血鬼に対する日焼け止めにとどの程度の効果があるのかは知らないがどうせタダなのだから試してみるだけ試してみれば良いという考えである。

「うーん……洋服を着るなんて随分と久しぶりです。違和感しかないですね」

はるか昔に和服を着なくなった私と生まれた時から洋服だったレミアアさんにはよくわからない感覚だが、逆に私たちが和服を着ればきつと同じように思うのだろう。

「それにしてもさとりさんは随分と手が早いですね。まるで初めから分かっていたかのような……」

「いえいえ。外の世界における私たちのような存在がどうあるべきかを考えた結果ですよ。私たちの姿が一般人に見えないのは既に分かり切っていることですし。ほら、先手必勝というでしょう？ あちらに何か感付かれる前に手を打った方が何かと楽なので」

思いもよらなかつた鋭い身内切りに対して咄嗟に早口で言い訳をしてみました。この人間はまさか覚妖怪の弱点を知っているのではないかと一瞬疑ってしまったが、本当にただ気になっただけのだ。

不意打ちこそ覚妖怪に対する有効打。敵対している状況ならば素直に称賛ものなのだろうが、今回は一応味方同士なので褒めるわけにもいかない。凶星だし。

「ま、私は何でも構わないけれどね。対策は早めにするに限るし……つてあれ?! なんか焦げ臭いわね」

「あー……レミリアさん、早急に日陰に入った方が身のためかと」

どうやら日焼け止めは吸血鬼には効果がないらしい。少し考えてみれば当たり前のことで、日焼け止めというのはあくまでも人間が日光に含まれる紫外線から肌を守るために使うものである。対して吸血鬼は日光に当たると焼けこげるのであつて紫外線に当たると焼けこげるわけではない。やはり日光そのものを遮断する陰を作り出す必要があるようだ。

「これで動き回ればかなり楽だったんですけど。仕方ないので日傘で移動しますか」

「え。さとり、貴方いつの間にかこんなもの貰つて来てたのよ。私ですらさつぱり気付かなかつたわよ」

「常に最悪を想定して動くのが当たり前ですよ。そもそも日焼け止めに関しては人間の生み出した物ですから効き目がない可能性の方が高かつたですし。……ああええ、傘は自分でさしてくださいね。面倒でしょうが咲夜さんはいませんので。それかレミリアさんだけ夜になるまでこの神社にいても良いんですよ？ 私と早苗さんは少々街を散策しますが」

レミリアさんは変なところでプライドの高さが出てしまうからなあ。流石に数時間もこんな辺鄙な場所で待つよりはマシだと納得してくれたが。

「日傘なんてさして歩いていけば人の多い場所には行けませんね。大阪の喧噪なんて憧れだったんですが」

「そもそもレミリアさんの羽があるので室内でも人が多い場所は難しいでしょうね」

私たちにも一応当たり判定はあるが、外の人間から見た私たちはこいしの能力を突き詰めた結果のような存在になると推測できる。見えないが触れることはできる。しかし触れたことには一切気づくことができない、と。

加えて私たちは人間の作った赤外線センサーに反応しないことも昨夜のお出かけから分かっている。体温はあるが人間の機械には感知できないズレがあるらしい。多くの妖怪が現れては消えている現

代ならではなのだろう。

目に見えず、触れたことに気づかない程希薄で、赤外線センサーに反応しないという事は赤外線カメラも気にする必要はない。加えて『物』は私たちが身に付けると同時に人間からは視認できなくなる。これだけ聞けばいくら人間の多い場所に行っても問題なく行動できるように思うだろう。そして実際にその通りではある。

レミリアさんの羽に進路を邪魔されたとしても、された本人は邪魔されたという認識すら得られない。ただ真つ直ぐ歩いている自覚しかないのだ。日傘にぶつかっても、サードアイに触れても、それがわかるのは私たちだけだ。

しかし私は早苗さんの言葉に乗った。人の多い場所には行けないという意見に同調した。

簡単な理由である。私の能力と大衆は絶望的に相性が悪い。ある程度の指向性は持たせられると言えども能力の完全な遮断は不可能だ。大量の人間たちから噴き出すゴミ屑のような負の感情を読み続けるのはさすがにゴメンである。

幸いレミリアさんは私の言葉を信用してくれるし、早苗さんも妖怪の言葉として多少疑う部分はあっても概ね信じてくれている。私にとってはあるがたい限りだ。だが早苗さんには妖怪を信じることの危険性というモノもまた教えなければならぬ。

まだ幻想郷に来てから浅い彼女は妖怪について詳しく分かっているわけではない。地上に住んでいる妖怪ならまだしも、地底に閉じ込められたような凶悪で醜悪な妖怪達は基本的には信じるべきではない。当の本人である私が言っても説得力はないかもしれないがそれでもだ。

妖怪の皆が皆、私の周囲にいる者たちのようにいい奴なわけではない。むしろその逆。妖怪は主に人を騙し、喰う存在。信用とは対極にあるはずの存在。だからこそ早苗さんは危うい。その境界線がはつきりと付けられていない。

確かに危ういが恐らく彼女を心配するには及ばないだろう。彼女は真に信じるべきものを心の中に宿している。それを自覚している

し知覚している。

神が信じる者の前に姿を現すのならば、彼女に災厄が降りかかるような事は滅多にないだろう。

心配するだけ無駄だが、それはそれとして信用すべき対象を知らなければならぬということである。私はそこまでしてやるほどお人好しでもないが、きつといずれあの凶々しい神様たちが教えてくれるのだろう。

この娘が神として生きるのであればその長い生を生き抜くために妖怪の持つ善性と悪性をきちんと理解させねばならないし、人間として生きるのであればなおさら死なせるわけにもいかないはずだ。

そんなことを考えながら街に降りてきたのはいいものの、結局人通りの多い場所にしか目ぼしいものはないし、レミアさんの日傘はこちらら視点では非常に不便であるし、流石に眠たくなったようなのでレミアさんは一足先に神社へ帰っていった。

かつては天下の台所とも呼ばれたこの場所に静かで落ち着いた空間を探すのはなかなか難易度が高かったか。人はどこに行っても多い。むしろ何故こんな都会にあのような寂れた神社が残されていたのか。それが甚だ不思議でならないほどだ。

「さてさて、レミアさんも帰ってしまったことですし、少しばかり人の多い場所にも行ってみますか？」

「え？ 良いんですか?!」

「ええ。勿論です」

そもそも貴方の心を読んだうえで提案しているのだから。

幸い私は小柄だし、レミアさんのように大きな翼を持っているわけでも邪魔な日傘をさしているわけでもないのです。どんな場所に行ってもそこまで困らないはずだ。

人ごみはなるべく行きたくないのだが、ただ私の心が多少汚されるだけであの神様たちへの貸しが作れるのなら安いものだ。

「それなら大阪駅に行ってみたいんですね。電車の数が物凄いという噂ですし」

人間（河童も然りだが）の技術発展に些かの興味もない私にとつてはどうでもいいことであるが、元現代つ子にとつては大きな憧れがあるらしい。だがここが大阪駅に近いのかどうかはよくわからない。早苗さんも来たことが無いので土地勘に頼ることもできない。

「一先ず大阪駅への行き方を誰かに聞いてみましょうか。そもそもここが何処だか分かりませんし迷子にでもなったら悲惨です」

方向音痴である、ないにかかわらず知らない地を歩く時には誰かに道を尋ねるのが吉だ。死神や紫さんのような一足飛びの移動方法があれば一番楽なのだが生憎と私や早苗さんにそのような能力はない。まあ早苗さんの能力なら……うげ、それは流石にやめてくれ。

「早苗さん、それは流石に世間が混乱してしましますよ」

大阪駅にだけ雷を落として場所を特定しようとするなんて恐ろしい人間だ。およそ普通の人間の思考とは思えない。だからこそ幻想郷にやって来たのかもしれないが、よくそんな発想のできる頭で二十年弱も外で暮らしてきたものだ。

ひよつとして彼女の周りにいた人間たちも相当にぶっ飛んでいたのだろうか。それとも周りには誰もいなかったとか……あまり深くは考えないでおこう。

「あらそうですか？ 分かりやすいと思つたんですけど残念です。あ、それなら局地的豪雨を降らせるといふのはどうですか？」

「奇跡はそう易々と起こすべきものではありませんよ。他人への迷惑も考慮して行使するべき神の力です。今晴れているのに急に雨が降れば傘が無くて困るでしょう？」

この娘はぶっ飛んではいるが常識が無いわけではない。むしろ幻想郷の鬼畜な者たちに比べればかなり常識的な部類に入るだろう。この程度の説得で納得してくれるのが良い証拠だ。博麗の巫女ならばそんなもの知つたこつちやないなんて言いそうなものだから。

「なら仕方ありません……あら？ あそこにあるのは電車の駅では？ もしかしたらここがどこか分かるかもしれません。ちよつと行つてみましょう」

ぐるっと回つて来たから気づかなかつたが場所としては神社のほ

ぼ真西か。結果論だが先にこちらに降りて来ていればもつと早かったのに。

「流石、都会の線路は全て高架なんですかね」

それは知らない。そもそも電車など実際に目で見たことも無いのだ。

「うわー！ 見てください！ リニアですよりニア！」

「おお！ あつという間に見えなくなっちゃいました」

「え？ もう次が来たんですか?!」

「リニアがあんなに静かだなんて！ 私もつとうるさいものだと思つてましたよ。都会では一体どんな技術が……」

……先ほどから早苗さんが一人で勝手に盛り上がってしまった。リニアなど初めて聞いた言葉であるし、そもそも物理は完全に門外漢である私にとってみれば早苗さんの感動が何一つ理解できない。

だがずっとこのままにしておくと一向に先に進めないので無理矢理現実に取り戻して駅名及び周辺地図を見に行くよう伝える。年頃の女の子が一人で（この時代の人にとっては当たり前の光景を見ながら）目を輝かせていることに対して白い目で見つめる人も出てきた事だし。

何とかして早苗さんを移動させた先にあつた駅名は『旧住吉神社前駅』

なるほど。私たちが根城にしているのは住吉神社の名残というわけだ。かつて相当の権威を持っていたからこそ形だけはまだ残っていたと、そういう事なのだろう。

しかしこの駅名を見て瞬時に表情を変えたのは早苗さん。流石は神に仕えている者と言うだけある。まさかこのような形で時間軸のズレに気づくとは。

「まさか……………」

「ええ。貴方の予想通りです。ここは貴方の過ごしていた世界と同じ時代ではなく、それよりもはるかに技術が発展した未来。貴方も薄々違和感を覚えていたでしょう？　あまりにも妖怪の気配が無さ過ぎると。……はい、私は気づいていました、というよりも昨晩の散歩で気づきました。ここは貴方が想像しているよりもはるかに治安が良く、しかし危険極まりない場所です」

人間同士の安全は確かに守られている。相互完全監視社会。どこに行っても誰かの目が付き纏うと考えて良いほど窮屈で安全な社会。だが私たちにとっては存在すら消滅しかねないほど危険な場所なのだ。

ま、半分くらいは脅しだから実際はそこまで急がなくても問題はな
いだろうが。能力が行使できなくなればいよいよ危ないだろうが今のところその兆しはない。

「貴方が過去に生きていた者であること。それをこの時代の人間に悟られてはいけません。混乱どころの騒ぎではない、研究の対象にされかねませんから」

「さとりさん、貴方はどうしてそこまで冷静でいられるんです？　タイムスリップというのは不可能だとも言われている未知の技術。それを自覚していてなおどうして私が自分で気づくまで黙っていたんです？　貴方はいったい、どこまで知っているんですか？」

「さあどうなのでしょう。私の眼は未来を見透かすためではなく現在と過去を覗くためにあるので。未来を視るのはレミリアさんの得意技でしょう？」

今、この瞬間、私は早苗さんの中で『信頼できる者』から『警戒すべき妖怪』へと変わった。それでいい。人間も妖怪も、上辺だけの私しか見られない者たちは決して私を信用してはならない。

未来の少女と過去の少女

全国各地を高速で繋ぐ都市間リニア新幹線の他にも京都と東京を直通で繋ぐ卯酉新幹線ぼうゆうというものがあるらしいと知ったのが今しがた。なんとこの新幹線は京と江戸をたった53分で繋ぐとかなんとか。

初めは未来に来たことを俄かには信じられず、確信を得た後も私を警戒していた早苗さんはこれらの情報が集まるにつれてどんどんと私への警戒心を失くしていった。いや、これでは言い方が正しくない。私への興味を失くしていったというのが正しい。もはやこの娘の頭の中は超高速鉄道の事でいっぱいになって私への警戒に割くりソースが無くなっているだけなのだから。

さらに私は何ら不思議に思わなかった事だが、早苗さんにとっては京都が日本の首都になっているというのが最大限の驚きであつたらしい。古来から神の末裔として継がれてきた帝。その住まう都市として発展してきた京が首都になる事に何の驚きがあろうか。

私はむしろ辺境だと思っていた東京方面に首都がおかれていた現代(?)に異常さを感じていた。しかしその辺りは生きてきた時代による感覚の違いだろう。そもそも千年前の地上しか肌で感じたことが無い私にとって京に都があるという事が当たり前だったというだけのこと。

日本の中心が東京だった早苗さんにとって現在の状況が異常であることはまあ分からなくもない。その東京がもはや片田舎的存在になっっているのならなおさらだ。

外の世界の事を全く私だって知らないわけではない。時折迷い込んでくる怨霊、紫さんから貰った本。その他様々なところから外の情報は得ていた。だから東京に首都があることは知っていたし、そこを中心に日本が、人間が回っていることも当然知っていた。

人間は移ろいやすい生き物だと思っていたがここまでだったとは思わなかった、と知った当時はそう思った記憶がある。しかし考え直してみればこれはただの遷都でしかなく、人間が幾度となく繰り返し

てきたことを千年の時を経て再度行っただけなのだ。結局還都したという事は、神の血が東京を好まなかったということの表れなのかもしれない。

この世界に放り出されて早五日目の晩。早苗さん就寝後のレミリア——よく話をするのに敬称など鬱陶しいと言われた——との会話もすっかり毎晩の習慣と化してしまった。

私を恐れていた頃とは随分と関係が変わった。レミリアはあの頃前面に出していた偉そうで強がっているような態度を出さなくなっただし、私の方も地底の連中と同じくらい気軽に彼女と話せるようになった……と思う。

私には見えない物を見て、私には築けないような人間、妖怪関係を築いているレミリアとの会話は新鮮で楽しい。しかし笑顔で話す裏側で常に抱えている不安。それを表面化してあげた方が良いのか、それとも気づかないふりを続けてあげるのが良いのか。

レミリアをここに飛ばす理由にも利用された、彼女の中では重大な悩み。すなわち妹との付き合い方。第三者から見た結論から言ってしまうえばそれは悩むだけ無駄なものなのだ。

フランドールは本当に不器用な子で誰との付き合い方も身に付いていない。それもそのはず。唯一の肉親であり、一番長く生を共にするはずの姉が彼女を避け続けてきたからだ。それが彼女の心を歪ませ精神を不安定にした。そして今のレミリアにその自覚はないのだ。

レミリアはフランドールの異常が生まれつきだと思いついでいる。彼女が妹を知った時には既に狂っていたから。だから避けた。自分を守るためのその選択は決して間違いだとは言えないが失敗ではあった。未来を視るというレミリアの能力は完璧ではないからだ。

そこからどうして今の関係に至ったのか、どうしてフランドールが自ら地上に出られるほど自由を与えられたのか、そこまで深い事は私には読み取れない。聞こうとは思わないし無理矢理呼び起こす気も

さらさらないので知りようもない。

だが確かに今の二人の関係は悪くないと言えるだろう。少なくともレミリアはフランドールへの後ろめたさを思いやりという形で無くそうとしているのが見て取れる。フランドールにある程度の自由を与えている事然り、先の騒ぎの後に彼女を叱らなかつた事然り。

対するフランドールの方はと言うと、表面上は頑固にもレミリアを許そうとしていないように見える。心の中では既に決着している問題を今なお引きずっているように見せているのは彼女なりの照れ隠しか。するだけ無駄な心配を姉にさせ続けているというのに。

そんな私の考えも余所にしてレミリアはこれからのことを話す。所々に混じる幻想郷のシステムへの愚痴、親友への愚痴、従者、妹、人間……あらゆる物への愚痴をこぼしながらもまんざらでは無さそうに楽し気に話す。

しかしそんな平和っぽい空間も今夜は長く続かなかつた。普段ならぐつつり眠っているはずの早苗さんが不意に起きてきたからだ。

「秋の夜長なのだから人間である貴方はもつと寝ていても構わないのよ?。」

レミリアはそう茶化すが早苗さんはいたって真面目な表情を崩さない。尤もレミリア自身もその緊張を読み取った上で場を和ませようと考えての発言だったみたいだが。

「何者かの結界への干渉を確認しました。目が覚めてから即座に修復しましたが相手は既に結界内に入り込んでしまっています」

早苗さんの結界は所謂人避け。普通ならばここに近づいた時点でここへの用事すら忘れて入ってこないようになっていた。

それが暴かれた。博麗大結界のような性質をもつ結界ならまだしも、人避けという明確な目的を持つて張られた結界に抗う形で侵入してきた者は只者ではない。

しかも相手はおそらく人間。妖怪はいくら強力であってもこの時代に生きながらえていないだろう。生まれては消える儂い者たちだけがしぶとく根付いているだけで、固定の形と概念を備えた妖怪達は

軒並み消滅するか幻想の郷に逃げたかしているはずだ。

「どうやらあそこにいるのがそうみたいですわね」

そして人間だというのなら少しかだけ心当たりがある。未来に生きる過去の彼女。結界を無意識的に暴いてきたのか、何かを探しているようではあるがこちらに気づく様子はない。

しかしまさか二人組だったとは思ってもみなかった。これだけ幻想が消えてしまった世界に人間の能力者がまだ二人も存在しているとはね。

「八雲紫……？」

「いえ、違います。あの妖怪ならばもっと邪悪な雰囲気醸し出しているはず」

早苗さんの中での紫さん像がひどすぎる。先日も彼女に無理矢理気絶させられたそうだが、どうにもそれだけが原因の恨みではないようだ。敵愾心という方が正しいような激しい敵意を抱いているのが分かる。

比較的妖怪にも温厚であるはずの早苗さんをここまでにさせた紫さんの行動が知りたいものである。どうせ碌でもない事をして嫌われた結果なのだろうが。

二人組は段々とこちらに近づいてきているがまだこちらに気づく様子はない。

「相手の動向も探りたいですし早苗さん、あの二人に声をかけてきてもらえませんか。私たちが声をかけても聞こえないかもしれないので」

「構いませんよ。となるとさとりさんとレミリアさんの事は私からも見えない体で良さそうですね。変な会話になりそうですし」

流石。この辺りの頭の回転は速い。まあ実際、紫さん似な人間の方は少なくとも私たちの事が見えると思うのだが、それを前提に会話を続けると齟齬が生じるかもしれない。それならばいつそのこと初めから何も知らない神社住みの少女を装う方が双方にとって損はないだろう。

早苗さんと共に私たちもは人間に近づいて行くが、私たち程暗闇に

慣れていない彼女たちはまだ私たちに気づいていない。それでもメリーと呼ばれていた少女には私たちの声が聞こえていたようで、どこから聞こえたのか分からない声に怯えているのが見て取れる。

何故か尋常ではない程に怖がっているが、私たちにとってはそれほどでも怖がられる方が都合が良い。早苗さんが声をかけて初めてこちらの存在にも気づいたようで、声が聞こえていたはずの少女も驚きと恐怖が入り混じったような顔をしている。声が聞こえていなかった方も不意な声掛けに恐怖が隠せていない。

……なるほどなるほど。ここまで近づいてようやく十分に心が読めるようになった。どうやらマエリベリー・ハーンの方は妖怪である私たちの事も視認できていているらしい。早苗さんの怪しい発言を気にしながらも明らかかな異形である私たちを見て目を見開いている。

対する宇佐見蓮子の方は私たちの姿は見えていないようだ。早苗さんの方だけを見て怯えている。早苗さんもなかなか悪くない演技でマエリベリー・ハーンの不安を増幅させている。

「異常者は健常者と同じ空間で生き続けられないのです。そして貴方は間違いなくこちら側の存在でしょう？」

薄く微笑みながら揶揄うようにそう告げる。辛いだろう。苦しいだろう。でもここで越えなければ彼女らに未来は無い。ここで簡単に揺らいでしまうようならば二人で生きていくべきではない。趣味は悪いが試させてもらおう。その覚悟が如何程のものなのか。自分が世界にとつての異物であるという自覚。それを自分の脳がどこまで認められるのか。

迷いなさい。悩みなさい。その決断に正解はないのだ。きつとどちらを選んでも後悔してしまう。

どちらを選んでも不正解だが必ずどちらかを選ばなければならぬ。『どちらを選ばない』も当然不正解になり、時にはそれこそが最悪の結果をもたらすことさえある。

「それでも……それでも私は蓮子とこの世界で生きていきたいのよ」
レミリアには問題なく聞こえたようだが、私は読心の助けを借りて

ようやく聞き取れたほどに非常に小さな声だった。それでも彼女は宣言したのだ。きちんと決断した。

「ん？ メリーなんか言った？」

「う、ううん。何でもないわ。少し夜風に当たりたいから蓮子は先にホテルに戻っていてくれない？」

少々苦しい言い訳。宇佐見さんの方もそれに気づかない程鈍感ではない。だがそれを指摘するほど無神経でもない。これこそまさに親友と呼ぶにふさわしい関係なのだろう。

全てを理解することはできずとも深く追及しない。それは無関心故ではなく相手の事を思うが故。

「美しいわね」

そしてそのあり方が私にとっては果てしなく眩しい。自分の方から心の距離を取ってしまう私には決して築けない関係だから。羨ましい、とは思わない。日陰を好む花が決して向日葵を羨まないように、陰を好む私が陽に生きる者たちを羨むことは無い。

だがそのあり方は、私のようなズルをする手段がなくとも言葉無しに通じ合う関係性というのは美しいと思うし素晴らしいと思う。

一先ず宇佐見さんは先にホテルに帰ることになったが、彼女の中にはもう一つの大きな問題がある。そう、早苗さんの事だ。

明らかに不審な人物ではあるが一応話は通じる。彼女の中での早苗さんはおおよそ人ではないナニカとして認識されており、共にいるのは危険だというまともな思考も残っている。

一般人なら（こんな時間にこんな場所にいる時点で一般人ではあり得ないが）早苗さんという危険物から離れることを第一に考えるだろう。それが健常者の思考。私はどちらかと言えばマエリベリー・ハーンの方が異常者に近い思考を持っていると考えていた。能力や経験も考慮しての事だ。しかしどうやらそうではなかった。より異常な思考を持っているのは宇佐見蓮子の方だった。

自らの好奇心に忠実。忠実すぎるがゆえにいずれ取り返しのない失敗をしそうな気さえする。

なんと彼女は早苗さんともう少し話したいなどと抜かしてそのまま連れて行ってしまったのだ。

……いやこれは面白そうだからとついて行った早苗さんも悪いのだが、それでも明らかに不審者を前にしてもう少し話したいと言ったり、明らかに不気味な神社に親友を一人残すことに躊躇いが無いという事に関しては絶対に宇佐見さんの方がおかしい。

とまあ色々想定外の出来事はあったものの最終的には幼き日の紫さんに会って話すという目標は達成できたわけだ。私の中で勝手に立てた目標だが、そうでもしないとただ無為に過ごすだけになってしまうから。

「正直助かりましたよ。彼女……宇佐見蓮子さんがこの場に残っていれば混沌を極めることになったでしょうからね」

「ええそうでしょうね。でもどうして蓮子には貴方たちの姿が見えなかったんでしょう。あの怪しいヒトは見えていたのに。グルだと思っていたけれど実は赤の他人だったり？」

「いえいえ。彼女は私たちの……身内？　のようなものですよ。彼女は正しく『人間』なのであなた以外の目にも止まったのでしよう」

ここはきちんと誤解を解いておかねばならない。早苗さんの演技が迫真だったせいで私たちとは無関係な他人だと疑われていたみたいだし。

それにしてもこの娘がああなるのかと思うとなかなか複雑な気分だ。今日の前にいる少女は何処までも純粹。故に染まりやすくもあるのかもしれない。私の知っている彼女は底の見えない闇のような存在。易いと言えども流石に染まりすぎでは？

いったいどこで道を踏み外したのだと考える暇もなく彼女の心の声私に届いてくる。喧しいほどの疑問の嵐だ。

「私たちが何者なのかについて深く知る必要はありません。どうして今貴方が考えていることが分かっているのかについても。不気味？

気持ちが悪いです？　ええそう思っただけでしょう。恨むなら私に話しかけることを選んで貴方自身を恨みなさい。私は能力の従うまま

に話しているだけなのですから。え？ いやいや、私の隣にいる吸血鬼も先ほどの風祝も私と同じ能力は持っていませんよ。貴女だつて連れの方と同じ能力ではないでしょう？ 能力は各人に固有なものです。なるほど。能力者の絶対数が少ないから知らなかったのですね。これから生きていくなら知っていて損はないですよ。なにせ……………」

「その辺にしておきなさい、さとり。あちらさんも顔を青ざめさせているわよ…………つてあら、逃げ出しちゃったわね」

いけない。あれほど純粹に妖怪を知らない者は久々だったからついつい嬉しくなつて話しすぎてしまった。結局不気味な印象を植え付けただけで終わってしまった。それにしても…………

「天鳥船…………ですか」

彼女はやはり幻想に愛されているようだ。

休暇期間と三半規管

「へえ、天鳥船神社に鳥船遺跡ですか。もっと詳しく教えてくださいよ」

「それは構わないんだけど……貴方ってこんなことも知らなかったの？ 専門家が馬鹿にしてたから割と有名だと思っていたのだけけれど」
「私はずつと山奥で閉鎖的な暮らしを強いられてきましたから世間に疎いのです。この場所が住吉神社だったというのも最近知ったばかりでして……はは」

メリーと別れてから、蓮子はまだホテルに戻ってはいなかった。流石に怪しさ満点の早苗を自分の泊まる部屋に連れ込むのは気が引けたからだ。蓮子一人で使う部屋ならあるいは連れ込んだかもしれないが、蓮子もメリーもまだ大学生。その資金力では一人部屋など夢のまた夢だった。

結局は天鳥船神社から少し離れた住吉神社の一角で談笑しているのである。談笑とはいっても基本的には蓮子から話題を出し、早苗がそれに反応するという形式だ。早苗はさとりからの忠告により下手な事を言えないので自然とこうなっているのである。

「ふうん。そっちの話も気になるけどまあ良いわ。さつき貴方がいた場所、あの神社には特殊な結界があるの」

早苗は下手な事を言えない。それと同時に蓮子もまた下手な事を言えない立場にいる。公になってしまえば確実に処罰が与えられるであろう愚行を幾度となく繰り返してきているからだ。今回の話題というのも本来ならば誰も知らない、知ってはならない極秘事項にあたる。

放棄された人工生態系。その中に生きる数多の動植物と危険極まりないキマイラ。そして中に設置された鳥居。何故か想定されていた軌道を外れて勝手にラグランジュポイントへと移動してしまつた衛星トリフネ……………

蓮子はその全てを早苗に話したわけではない。部分的にかいつまんで伝えた。早苗のことを九割がた人外であろうと考えてはいるも

の、本当に世間を知らない田舎娘である可能性も捨てられはしないからだ。しかし今時世間一般が知っている事も伝わらないような田舎に住んでいる人々などいえないと言えるほど都会化が進んでいるのでやはり早苗は怪しく映る。

もし早苗が今知ったことをオープンなネットワークに乗せて発信してしまえば、それを教えた蓮子への厳罰は免れない。良くて退学処分だろう。

蓮子もそれを分かっているはずなのだが教える口が止まらない。興味のある分野について深く知りたいという早苗の思いは蓮子自身よくわかるものだからだ。

「人工物が人知を超えた挙動をする。人々はそれを単なるバグとしか認識できないんですか……」

嘆くような、呆れたような早苗の言葉に対して蓮子は、ならば早苗はどう考えるのかと問いかける。それに対し、早苗は自信満々にそれこそ神の力だと唱えるが、今度は蓮子が呆れる番だ。今時神の力などという馬鹿げたものを信じるような奴はいないからだ。

全ては科学で解決できる。人知を超えた物などあり得はしない。計画が失敗すればそれに見合うだけの根拠があり、コンピュータ内部でバグが発生すればそれが分かるのだから。

「ならば何故、未だにその動きが謎のままなんでしょう？ バグが見つからない、科学的にも説明できない事象がそのトリフネには起こっているのでしょうか？」

「バグが見つからないと言っているのも所詮は国際機関が表向きに発表しているだけかもしれない。表の情報に踊らされるしかない私たちにはどう足掻いても知ることのできないものじゃないかしら」

蓮子はあくまでも早苗の自論に納得しようとしなない。自分たちの目という非科学が最も身近に存在しているというのに、それでも彼女は科学の枷に囚われている。彼女は何処までも非科学を科学で説明しようとしてしまうのだ。

「現実から目を背けるべきではありません。超常的な現象は常日頃から起こり続けています。量子コンピュータでも追いつけない先にお

わすのが神という存在なのです」

「神という万能物を持ち出して理論を破綻させようとする方が現実を見ていないのではないかしら………いやまあ私はその手の存在を完全に否定したいわけではないけれど、科学的に証明するのが私たち物理畑の人間の性だから。気分を害したのなら悪かったわ」

互いに譲れない者同士の会話。下手を打てば修羅場にもなりかねない状況を穏便に収めようとするのは流石年上か。

「……いえ、こちらこそ熱くなり過ぎましたね。こんなの慣れっこになっっているはずなのに申し訳ありません。私も理系ですから蓮子さんの気持ちは分かりますし」

早苗自身も外での生活が長かったために神の否定という侮辱にも近い行為に対しての耐性は幾らかついてはいるつもりだった。だがしかし、一度幻想郷という『神が当たり前前に受け入れられる土地』に行ってしまったがゆえにその落差が測り切れなくなっていた。

慣れは人を狂わせる。一度体に馴染んでしまった感覚は簡単には拭えないのである。今回は蓮子の氣遣いに助けられたから良かったものの、まったく早苗の思いを理解できない相手だったらどうなっていたか分からない。

暫く無言の空間が続いたが二人とも次第にほとぼりが冷めてきたようで、蓮子の一言を皮切りに、先ほどまでの掛け合いがまるで嘘だったかのように和やかに会話を始めた。

「貴方も理系なのね。それでもそこまで神に執着するという事は何かあったの？」

「ええええ。私は神社の風ほ……巫女ですから神の存在を誰よりもよく知っているのです」

蓮子には「巫女」という言葉がどこかとても遠い時代の言葉に聞こえた。現代ではもう既に滅びかけているからだ。それは何も巫女だけではない。観光名所と呼ばれるような、よほど大きな寺社でもなければ神仏に仕える職は追いやられてしまったのだ。

しかし当然ながら早苗はそのことを知らない。蓮子が早苗の出自を勘違いしてしまうことになるのも仕方ないことなのだろう。

「じゃあ貴方はもしかして神の遣いだったりするのかしら？」

「神の遣い……。まああなたがち間違っただけではないでしょう。私は蛇でも蛙でもありませんけど」

蓮子にとっては冗談のつもりで放った言葉だったろう。或いは半ば本気だったかもしれない。蓮子の中では早苗が人外である可能性が極めて高いからだ。

だからこそ生真面目な顔で答える早苗にどう返せばいいのか迷ってしまった。そもそも否定されるだろうと読んで適当な話題作りでしようとしていたのに、全く別の方向から答えが来たことで話題をどうつなげようとしていたのかすら頭から吹き飛んでしまった。

「蓮子ー！ー！早く！ 逃げるわよ！」

そんな蓮子の戸惑いを救ったのはいつも通りの親友だった。と言っても彼女も恐怖から逃げてきただけなのだが。ちなみにメリーの逃げた先に蓮子がいたのは運命のいたずらである。

疾走してきたメリーが蓮子の腕を掴んで急いで去っていくのを早苗はただポカンとして見送る事しかできなかった。

「やれやれ。貴方が過剰にビビらせたからよ、さとり。分かっているの？ 折角久々に出会った客人でもあったのに」

「……ええ、分かっていますからそう何度も言わないでください」

さとりとレミリアもメリーを追って来ていたようだった。彼女らにとつて人間の疾走が遅すぎただけなのだが。

「喧嘩ですか？ するなら余所ですてくださいね」

既に時刻は午前三時。ぐっすり眠っていたところを起こされた早苗にとつてこれ以上の迷惑は避けたいところだった。

「まさか。私とさとりが喧嘩するのは世界が終わるときだわ」

「あらあら。それではこれから何度世界が終わるか数えきれないでしょうね……。いや何、冗談ですよ。それで、まだ朝早いですが早苗さんはもう起きることにしたのですか？」

さとりにとつては一生に付してもらえれば良い程度の冗談のつも

りなのかもしれないが、この場にいる二人にとっては何とも反応しがたい微妙な空気を生み出す冗談にしかならなかった。これはさとりが他人を和ませる冗談を苦手としているというのが一番の理由だが、二人からの古明地さとりという妖怪への評価も関係している。

早苗にとってのさとりは吸血鬼のレミリアと対等以上に会話する上位の妖怪であり、レミリアにとってのさとりは敵うはずのない相手として勝手に認識されているのだ。

さとりがこれに気づいていないはずはない。ただ誤解を解くのを面倒がついているだけだ。今まで幾度となく同じような誤解を見てきた。数百年の付き合いがある友人たちでさえほとんどは未だに誤解したままであることを考えれば、今ここで誤解を解こうとしても無駄だと思ってしまうのは致し方ないだろう。

結局この場の空気を和ませることができないと悟ったさとりがまた適当な話を振った。今の相手の求めている話題を自然に提供できるといえるのは一つ、さとりの長所と言えるだろう。たまに一方通行的な話し方をしてしまう事はあれど、基本的には聞きに徹することもできる。おそらくは面倒ごとを避けるために身に付けた処世術に似たものだろう。

「はい。目が冴えてしまったので。早起きは三文の徳とはよく言いますし悪い事でもないでしょう」

急な話題の転換に戸惑いながらも今の自分に合った話題ならば即時の受け答えに支障はきたさない。早苗自身もこの微妙な空気を生み出す原因になったことを気にかけていたようなので、さとりからのパスには素直に感謝しているくらいだ。

「所詮三文程度の徳にしかならないんですけどね。まあ昼も夜も寝ていない私よりはよほど徳を積んでいるでしょう」

……早苗はさとりからの気遣いに感謝していたのに、さとりは空気を読むのが絶望的に下手なのかもしれない。心を読むのは得意。それをもとに相手の望む話題を出すのも得意だ。しかし能力に頼りすぎるがゆえに、普通の会話の中で空気を読むという行為が苦手なのかもしれない。

結局は彼女の自嘲によってまたもや微妙な空気が流れることとなってしまう。普段のさとりは頼りになる地底の主かもしれないが、今のさとりはただのポンコツである。何の役にも立たないどころかむしろ空気を悪い方向へ持って行っている。

早苗が『さとりさんって実はKYなんですか？』と遠慮がちに問うのも、さとりがその意味を理解してシヨックを受けるのも、もはやレミアでなくとも想像に難くない未来だった。

初めに異変に気づいたのはここら一带に結界を張っていた早苗だった。ただ神社の屋根の上に座って秋の明け方を眺めていた三人。その静寂を壊したのは早苗の一言だ。

「また結界が破られている……いや、揺らいでいる？」

そう、早苗が張っていた結界が突如として揺らぎだしたのだ。早苗の持つ強大な霊力と神の血による加護があるため、生半可な事で彼女の張った結界は揺るがないし崩れない。

「!? ま、周りの景色が……いっ……いっ……うっ」

三人のいる場所を中心として結界の外側の景色が歪み、グルグルと回ります。

初めに音を上げたのは最も三半規管が弱いレミアだった。普通に考えれば高速で飛び回っているのもむしろかなり強いだろうが、話の進行の都合上弱い設定にしているほどなくしてさとりも地面に倒れ込んだ。妖怪は人間に比べて感性が鋭すぎたのだ。

徐々に速くなる周囲の回転。しかし果たして本当に周囲が回転しているのだろうか？ 実は結界内だけが高速で回転しているだけなのではないだろうか？

やがて自身も倒れ込むその刹那、早苗はこの感覚を思い出した。つい数年前に一度経験したこの気持ちの悪さ。自分たちが現実から透けて上書きされるような違和感。

今、天鳥船神社は永遠に幻想に封じられた。

2XXX年のある日の早朝。制御不能とされていたトリフネから内部生態系に関する大量のデータが送信されてきたというニュースが日本だけでなく世界中を駆け巡った。その中に奇妙な形態の生物を示すデータは一切無く、ただ順応過程の動植物に関する予測とその一致・乖離に関するものだけが入っていた。

住吉神社の一角が不自然なまでに均されているがしかし、これに何かを思う者などもはやいない。もう誰も天鳥船神社がここにあつたことを覚えてはいない。

ただ一人を除いて、誰も。

美しき死の幻想（ネクロファンタジア）

それが現れたのは普段なら誰も寄り付かないであろう場所、旧血の池地獄の畔であった。

あまりにも静かに現れ、あまりにも自然に風景に溶け込むそれは血の池地獄をよく知る者にさえも違和感を覚えさせない程であり、たまたまそこに居合わせた二人組も特に気にすることなくそれに向けて歩き出した。

『そろそろ地上に戻らないとまた何か言われそうだけど』

『これ以上長居はできないし最後に少し神頼みでも試してみようか？』

『馬鹿。私たちが頼るのは決して神などではないのに……まあこの際ついででしようかね』

「おはよう、さとり。お疲れ様」

最後に見たグルグル地獄から目覚めた先にいたのはレミアアでも早苗さんでもなく、この世界にいるはずのない紫さんだった。目覚めたつもりだったが、実はまだ夢から覚めてはいないらしい。

「ここから、現実逃避しては駄目よ。貴方たちはあの時代から何故か勝手に帰って来た。私の想定よりもはるかに早く」

「……紫さん？」

「ええ、私は八雲紫。他の誰でもないしこれは夢でもない。いい加減現実を見なさいな」

頬を抓る。痛い。どうやら夢にしては出来すぎているようだ。

サードアイを紫さんに向けてみる。何も読み取れない。いつも通りだ。

地面に触れてみる。冷たい石畳ではなく、柔らかな布が手にあたる。私はベッドか何かに寝ているらしい。

周囲を見渡す。見慣れた私室が目に映る。寝ているのは自分のベッドか。

サードアイにも触れる。気持ち悪い。手にあたる感触も、サードアイが触られている感覚も、どちらも私の嫌いなモノそのままだ。

………流石にこれは現実と認めざるを得ないか。

「あの、聞きたいことが山ほどあるのですが……」

「先にこちらの質問に答えてからでお願いするわ。これは結界維持をする上でも特に急を要することだから」

今まで見たこともないような真剣な表情でこちらを見つめる紫さんを前に、私はそれ以上の言葉を続けられなかった。

違う。

聞きたい事はたくさんあるが、その思いを上書きするかのよう——まるで誰かの感情が割り込んでいるかのよう——私はこの妖怪の話を聞かなければならないと思わずにはいられなくなっていた。ある種、強迫観念とも呼べるものが私の口を止めた。

嫌に神妙な面持ちをした紫さんは私ですら読めない所から切り込んできた（紫さんの心は読めないから当り前だけど）。

「貴方たち三人、どうやって帰って来たの？ それぞれいるべき場所に送り返してはいるけれど事情はまだ聞けていないの。教えてくれるわよね？」

「はっ？」

は？ 訳が分からない。私たちが独力であの時代から帰還できるのであればわざわざあのように面倒な手順を踏む意味はなかった。あんな不明瞭な説明を二人にすることもなかった。

「紫さんが私たちを帰したんじゃないんですか？ 私はその認識だったのですが」

「違うわ。断じてそれは無い。私は一週間ほどあちらで過ごしてもらうつもりだったもの。しかし実際はその半分ほどで帰って来た。あちらからこちらへの移動に私の介入は全くないのよ」

「私だつて全く知りませんが。そもそもあの二人にはこの旅行の真相すら悟られていなかったし、今すぐ帰りたいたいという思いはあの二人の心には無かつた……つて、あれ？」

まるで金縛りにあつたかのように身体が動かせない。先ほども感じたような、思考に割り込まれる違和感を再び覚える。

「いつたい何が」

「悪いわね。疑いたくはないけれど、貴方がまるっと本当の事を言っている保証は全くないもの。少しだけ、貴方の記憶を覗かせてもらわよ」

私のアイデンティティの否定にもなり得ることをこの妖怪は平気で言う。しかしそれを指摘する前にまた暗転してしまう。

目を開けるとそこはすっかり見慣れてしまった神社の境内だった。しかしそれを認識した直後にまた周囲の景色が歪み、回り始めた。

もう何度目かの暗転が入るかと思われたが、今度は意識が浮上するように引き戻された。しかし気分は最悪だ。今日だけで何度吐き気を催しただろうか。

引き戻された後の視界には暗転する前と同じ、私室が映っている。しかし先ほどまでとは決定的に異なる点が一つ。先ほどまでの緊張感はどこへやら。

「泣いているのですか？」

「……は？ 私か？ 貴方の、気のせいよ。そう。昔の名を思い出したくらいで泣くわけではないでしょう？」

これ以上触れるな。言外でそう言われているような気がした。ヒトには誰しも触れられたくない秘密や過去がある。弱みがある。紫さんもやはり、所詮妖怪でしかなかったのだ。

紫さんの心に生まれた一瞬の隙。忌々しい事に私の能力はそれを目ざとく発見してしまった。

苦悩。 歡喜。 悲嘆。 寂寥。 後悔。 希望とそれを塗りつぶす絶望。

あり得ないほど負の感情が渦巻いている。どうして……どうして

こんな心をしているのに笑えるんだ。どうして泣くことを自分自身が許していないんだ。どうして、どうして。

「紫さん……………」

「言わなくても分かるわ。でもそう…………貴方は見てしまった。知ってしまった。それについて何かしようとは思わないわ」

複雑な気分を余所に何処かホツとしている私を気にすることも無く彼女は話す。もう既に心は読めない。

「私はね、いつかこうなるだろう事が昔から分かっていた。1000年前、貴方に会った時から」

「……………」

「貴方は…………さとりはどんな私でも幻滅せずに受け止められるかしら？」

「……………ええ。私と貴方は友人なのですから」

「全てを知る覚悟があるのならばベッドから起き上がって三步進みなさい。無いならばそのまま布団をかぶって寝てしまいなさい」

そう言うが早いか紫さんは自慢のスキマテレポートで何処かへ行ってしまった。

覚悟など聞かれる前から決まっている。私は彼女をもっと知らなければならぬ。かつて疎んだ彼女に迫らなければならぬ。

素早くベッドを抜け出して三步前に進む。すると何の変哲もなかったはずの床が抜けたような感覚に陥った。落ちた先は何度か見たことのあるスキマの中。数多の瞳が不気味に私を覗き込む。この空間には重力が働かないのでこれ以上落ちることもない。

不思議な浮遊感に身を任せつつ周囲を見渡すと、少し先に大小二つの人影が見えた。もう迷う事は無い。その影に向かって飛んでいく。

近づくにつれ小さい影は一度だけ見たマエリベリー・ハーンの後ろ姿。大きい影は滅多に見ることの無い、紫さんの後ろ姿であることが分かった。

「紫さんー！」

呼ぶと紫さんの肩がピクリと震える。確かめるようにそうつとこちらに振り向く様はあまりにも艶めかしくて同性の私でもドキリと

してしまうほどだった。

しかし同時に今の紫さんはそれほど弱々しいのだとも言える。

「ありがとう、さとり。もし貴方がマエリベリーの名を呼んでいたら私の存在は消えていたでしょう」

紫さんの指さす方を見てみれば、先ほどまでいたはずのマエリベリー・ハーンは何処にもいなくなっていた。つまり逆だったかもしれないってこと？ そんな大役を私に？ そもそも私が来なければどうなっていたというのか。

「貴方の覚悟は理解できたわ。私だけが知る、永遠に劣化しない心の封印を今解く。妖力を籠めて、私に光弾を一発撃ちこみなさい。遠慮はいらないわ」

いくら紫さんの頑丈な身体とは言えど妖力を籠めた弾を受け止めて無事で済むとは思えない。私の躊躇を読み取ったのか、紫さんが補足する。全力でなくともわずかな力を籠めてくれさえすれば良い、と。

その言葉に甘えさせてもらい弾を放つ。それが紫さんに着弾すると同時に空間が眩い光に覆われた。

「私、八雲紫はかの者に歴史を晒す。合言葉は……『宇佐見蓮子』」
奪われた視界の中、紫さんの声が高らかに響き渡る。

歴史？ 合言葉？ 私の中で渦巻き肥大する疑問とは裏腹に光は収束する。

「ようこそ、私の歴史へ。心より歓迎いたしますわ」

そこから早かった。私の疑問が消えることは無かったが、紫さんはそれを気にすることも無くマエリベリー・ハーンの記憶を次々と私に見せた。

一番最後は私たちから逃げ出した直後の彼女の姿。走って逃げる彼女を見送って映像は唐突に終わった。

「お疲れ様。この記憶を引っ張り出せたのは、私が蓮子を思い出せた

のは貴方のおかげだった。貴方はまだ何も理解できていないでしょう。今こそ全てをお話しますわ。さあ、サードアイをこちらへ向けなさい」



八雲紫はその昔、境界を見ることが出来る程度の力しかもたない人間だった。初めの頃はそれが当たり前だった。だがいつからか夢の中で不思議な体験ができるようになり、いつからか夢の中の物を現実を持ち出すこともできるようになった。

蓮子の心配を余所に、メリーは自分の能力でできることが増えるたびにただ歓喜していた。能力の強化が妖怪化を加速させる原因になる事を知らなかった頃である。

「何度か幻想郷に迷い込んでいたから妖怪は見たことがあった。竹林の蓬莱人や玉兔、そして紅い屋敷の従者と主人……ええ、私は私になる前から彼女らを知っていたはずよ。実際はこの記憶を封印していたから初対面同様だったけれどね」

メリーは自分がもう戻れない場所まで来てしまったことを自覚した後、八雲紫として生きることになる前に記憶を含めマエリベリー・ハーンという少女のほとんどを封印した。全ては未練を断ち切るため。

彼女はまず初めに自身の名を封じた。もはや人として生きられない彼女にとっては何より邪魔なものだったから。次に何より大切だった親友の名も、顔も、性格も、思い出も、全て封じた。それこそが一番の未練になるから。

「ええ。戻れないというのは比喻でも何でもない。私はかつての自身の能力によって夢の中で過去に迷い込んだ。それまでも何度か同じようなことがあったからその時も別に焦りはしなかったわ。でもあの時はそれまでとは全く状況が異なった。私の精神は、身体はこの世界と完全に親和してしまった。決して後には戻れない。覚めない

夢の始まりよ」

記憶を封じた彼女はしかし、全てを封印しきることができなかった。妖怪として目覚めたばかりだった彼女の力不足故だろう。そのうちの一つが今回さとりたちをあの時代へ送り出すきっかけになったもの、未来に生きる『誰か』の姿である。

「私は知りたかった。もう1200年以上も心の中に自分の知らないモノが存在していた。何か足りなかったの。だから貴方たちを橋渡しにした。有り体に言えば利用した。不快でしょう？ 目がそう言っているわ」

だが彼女はそうしなければ封印を解くことができないことも分かっていた。記憶を封印した事実、何かしらの合言葉が必要な事、手掛かりは未来にあることまでは覚えていたからだ。

問題はどうかやって未来に行くか。それを探すのに長年費やした。時の境界は禁忌であり、紫でさえ容易には触れ得ぬものだった。

「カギになったのは東風谷早苗の能力。あの子自身の持つ奇跡の力を利用してもらったわ。無許可だけれど気づいていないから大丈夫でしょう。そして送り出すメンバーは初めから決まっていたわ。マエリベリーの拙い封印は貴方たちの事を忘れさせてくれなかったから」

自分の事と友人の事ばかりを気にし過ぎた弊害か、彼女にとってトラウマにもなり得たさとりたち三人の事は封印損ねていた。すっかり頭から抜けていたからだ。それを思い出したのは初めてさとりに出会った時である。

その時の紫の動揺ときたら、今では想像もできないだろう。表情だけで心の内が読まれていたくらいである。

「貴方に初めて出会った当時、まだ妖怪化してから二百年程度しか経っていない私にとって貴方はトラウマを想起させる化け物にしか見えていなかった。実際そんな妖怪だったと知ったのはその直後のだけだ」

心を見透かしてまくし立てる小さな妖怪。心を読ませまいとしても何となく読まれているような感覚に陥っていたものだ。紫は

懐古する。

「出会ってすぐは貴方を懐柔しようと考えた。……高圧的だったって？ それはまあ私自身も妖怪となつて強くなつていたから仕方ないわよ。元々は地底を地上から切り離してしまおうと思つて向かったわけだし」

結局第一の目標はすぐに達成できた。地底と地上の不可侵条項を締結することによつて、地底は地上と切り離された。さとりを懐柔することは叶わなかったが、結果的にはより良い関係を築けたと言えるだろう。

「貴方がどうだったかは知らないけれど、少なくとも私は貴方をできる限り刺激しないように気を付けた。貴方が厄介なのは知つていたから。でもレミリアと早苗には少々強く出たわ。精神が幼くて捻りやすかったからかしらね」

レミリアには武力で、早苗には精神的な弱みを利用して自身の事を強く印象付けた。結果的に両方に嫌われることにはなつたが、それと同時に頭に残ることにもなつた。八雲紫には絶対に敵わないと思わせることで後の計画にも投入しやすくなつたのである。

「私は別に嫌われたくて嫌われているのではないわ。性格だつてそう。本当ならばもつと柔らかい性格でいたいものよ」

しかしそうはなれなかつた。知らない世界に一人飛び込んで、何も知らないままに生き抜かなければならない過酷さ。ぬくぬくと生きてきた時代には考えられなかつたような残酷な世界に足を踏み入れてしまったからだ。

そこで生まれたならばその環境が当然のように生きられたのだから彼女が違つた。記憶の全てを封じられてはいなかつたからである。

初めは虚栄だつた。弱者とみられないように、元から持っていた能力と変化した能力を駆使し何とかして生き延びた。彼女の能力は使うたびに新しい可能性を見せ、彼女を高めへと導いていった。一時は全能感が彼女を支配したほど、できないことは無いと思わせるような力だつた。

高度な能力の使用によって彼女の内包する妖力量は急速に成長し、能力の強さだけでなく妖怪としての格をも押し上げた。

「強がっているうちに、死にたくないと思っっているうちに私は本当に強くなってしまう。同時に直感的に悟ったわ。私たち妖怪に寿命という概念は意味を為さないのであろうことを。……何故って？ 簡単よ。妖怪となった私の一番初めの友人は萃香だったもの」

紫は数十年かけただけで地上最強とも呼ばれた鬼の実力に並び、当時四天王の一角でもあった萃香から直々に力を認められた稀有な存在である。まさに鬼才とも言える才能を以て強くなったのだ。そしてそこから百余年。出会ってから一向に成長しなかった萃香はその他の鬼たちを引き連れて地獄に降りて行き、紫は名実ともに地上最強の妖怪となったのである。

「月面戦争の話は一度したわね。あれが私の驕りだったことも話した。でもそれが地底に赴くことに繋がった、という話はまだだったわね」

地底を地上から切り離し、あわよくば萃香を地上に戻そうと考えていたのである。最強と称された自分が負けたという事実が許せなかったからだ。その時には既にそう思えるほど強い自分に慣れてしまっていたのだ。

月に二度目の敗北を喫さないために萃香という強力な助っ人を引き抜いたうえで邪魔くさい地底に蓋をする。当時の彼女にはそれが最適解に見えていた。結局それはさとり邪魔され、月面戦争のリベンジは千年の後に延期されることになったのだが。

「あの時の私は本当に人間的だったわ。黙って萃香を連れ去った上で黙って蓋をすれば良かったんだもの。閻魔にはお叱りを受けたでしょうけど妖怪にとつてそんなこと取るに足らないことなんですよのね。そして、そこから先はもう貴方も知つての通りよ」

さとりにとつても紫にとつても、過去千年間で最も長い時間を共有している友人は互いになるだろう。しかしそれだけの長い時間を共に過ごしてきたというのに、紫は今の今まで一切心を見せてこなかったのだ。

「貴方を信用していなかったわけではないの。むしろその逆。誰よりも信用していると言つても良い。でも何かきつかけがないと。急に心を開いても不自然でしかないでしょう？ 言い訳？ 確かにそうかもしれないわ。何はともあれ今回ようやくきつかけができた。幼い頃の記憶を取り戻せし、何より尊かった我が友人の顔も名前も思い出すことができた」

今の紫ならばそれらを思い出してしまつても迷う事は無い。選択肢などもはや存在していないから。あの頃に戻る手段はもうないから。

「寂しい。悲しい。虚しい。恋しい……そんな感情はもう何処かに置いてきてしまった。或いはそれをひた隠して気づかないように振る舞つていただけかもしれない。ねえさと、貴方が私の心に見た物を教えてはくれないかしら？」

精神的に弱かったからこそそれを隠蔽するために心に蓋をした。さとりにさえ読めないように固く閉ざした。記憶を消し、未練を断ち切ることで彼女は自分を保つた。

それが暴かれた今、彼女の心は彼女でさえ完全に理解できるものではなくなつてしまつている。自分の事は自分が一番よく分かつていると常日頃から言つている紫も、今この時ばかりは心の代弁をさとりに委ねた。

苦惱

「妖怪になつた時、どう生きていけば良いものかひどく思い悩んだものね。あの頃はまだ弱者でしかなかつたもの」

歓喜

「とても懐かしい感覚だわ。全てが上手く行くように感じた。結局のところは後悔に入る前の全能感でしかなかつたけれどね」

悲嘆

「心の異物に気づいたときには一時悲しみに暮れたこともあつたわ。思い出したい事をどうしても思い出せなかつたんですもの。あの子のこと」

寂寥

「これは悲嘆のあとにきた感情だったでしょう。一時無気力にもなった私を力試しやお酒で救ってくれたのが萃香だったかしらね」

後悔

「今となつてはなくなつてしまつたわ。この世界は本当に私を受け入れるためだけに存在している、そう思うほどに私はこの世界を好きになつてしまつたから」

「過去を懐かしいと思いはする。蓮子に会いたいと願いはする。でもそれは叶うことの無い幻想でしかないわ。私はマエリベリー・ハーンではなく、この世界と共に生きていくことを選んだ八雲紫。記憶が全て戻つた今も、この世界を愛する心に一点の曇りもないしあの頃に戻りたいとも思わない。それは貴方が一番よく理解できているでしょう？ さとり」

紫はこの世界を見て、触れて、感じて、心の底から好きになつてしまつた。忙しない世界で親友と二人で旅をする。それもきつと楽しかつた事だろう。それを忘却してしまつた彼女の心を埋めたのが深い愛情だつたのである。

かの時代で受け入れられなかつた能力はどこに行つても受け入れられるようになり、生き延びるための力はいつしか世界を守る力に変わった。

「この記憶を今思い出せたのもきつと必然だつたのでしよう。貴方たちが想定よりはるかに早く帰つて来たのも私が記憶を取り戻していれば理解できていたでしょうけれど残念ながら思い出したのは今。貴方たちが自力で戻つて来た方法に心当たりがあるから教えてあげるわ」

そう言つて紫が懐から取り出したのは『天鳥船神社』と書かれた扁額。

「これがあつたのは血の池地獄跡。貴方たちが倒れていた場所よ。この扁額は貴方たちと共に時代を渡つて来た。これは私の仮説だけれど、貴方たちはおそらくこの神社の幻想入りに巻き込まれたのでしよう。事実、あの夜以降天鳥船神社は跡形もなくあの場所から消えてい

「たんだもの」

封印されていたからこそ風化せず鮮明に蘇る記憶。彼女はさとりたちから逃げ出した翌朝、一人で再び同じ場所を訪れたが、そこにはただ平らな土地だけが残されていたのだった。蓮子に聞いてもそんなものがあつた記憶はないと言われ、そもそも大阪に来た目的さえ忘れられていた。

大阪付近の天鳥船神社をインターネットで検索しても一致する記事は見当たらず、似たような名前の分社だつたと思しき神社がぼつぽつと出てくるだけだつた。

「幻想入りしたものは永遠に人々の記憶から消え去る。当時はその事を知らなかつたから自分が恐ろしくなつた」

自分にだけ見える妖怪。自分だけが覚えている場所。自分だけが体験できる夢。もうそのころから自身が人外めいていることにも薄らと気づいていたのだろう。

「貴方の記憶を覗いてみて初めて分かつたわ。神社が幻想入りした絡繰りの原因となつたのは貴方たち、特に早苗の行動による。ただでさえ人が忘れかけていた神社にさらに人除けの結界を張つたみたいね。そしてその時代の博麗大結界がそれを感知したんでしょう。神社は未来の幻想郷に飛ばされているはずよ」

しかしさとりたちはその時代の幻想郷に同一のものが存在している。幻想入りする建物の中にいるが同じ時代には飛ばすことができない。さとりたちだけがこの時代へと飛ばされて戻される……それははずだつた。

「不可解なのはこの扁額とそれについてきた鳥居。これらだけが時代の壁をすり抜けてこの時代に飛ばされた。悪いけれど調査のために血の池地獄は一時封鎖させてもらうわよ。……何？　いつもの私に戻つたって？　もう私の記憶に関して話すことは無いんですもの。長旅で疲れているでしょうからもう寝た方が良いわ……休暇中に溜まっている仕事？　まだ貴方たちが出発してから現実時間でまだ半刻も経っていないから安心なさい」

話すことを話してスッキリした紫とこんな状況下でも溜まってい

る分の仕事だけはこなそうとするさとり。本題が終わればすぐに頭を切り替えるという点でも二人は案外似ているのかもしれない。

紫の能力によって眠りに誘われたさとりを元居たベッドに戻して紫は独り言ちる。

「初めに貴方がマエリベリーの名を呼んでいたとしても私が消えるなんてことは無かったわ。これは貴方が見たあの子の姿をもとに生み出した幻影でしかないのだから。貴方がいつたいどんな顔をするのか気になったただけだけれど、思ったより悪くなかったわね。……ありがとう、おやすみなさい」

現実時間での数十分。それだけの間にさとりたち三人は外の世界を観光し、紫は過去を暴くことに成功した。紫にとって全てが計画通りとはいかないが、その計画よりもはるかに大きな収穫を得ることになった数十分間であった。

なおこの後レミアと早苗が経験したことは全て夢の中の出来事ではしかなかったとさとり経由で説明してもらうことになるのは別の話。鳥居の調査を言い訳にして説明を他人に丸投げする賢者に呆れ返る覚妖怪がいたとか何とか。

残酷な世界 ※読みたくない方はスルーしてください

「異常者は健常者と同じ空間で生き続けられないのです。そして貴方は間違いなくこちら側の存在でしょう？」

笑みを零しながらそう告げる。私は性格が悪いと自覚している。真実を突きつけて現実を直視させることに少なからず愉悦を覚えてしまう質なのだ。

実は彼女の相方である宇佐見蓮子も一般人から見れば異常者の類だ。そしてマエリベリー・ハーンもその事は誰よりも理解しているはずである。だがしかし、私の言葉に今この場で咄嗟に反論することはできない。宇佐見蓮子（と早苗さん）が見えないし聞こえない事を知ってしまったから。

こんな事をすれば後で紫さんに何を言われるか分かったものではない。私が行おうとしているのは幻想郷の禁忌とされている妖怪化の扇動に等しいからだ。正直に言えば別にする必要も無い。この娘の心は理性の枷を外せばすぐにでも妖怪へと変じそうなほどに揺らいでいるのだから。

幻想に触れても悲鳴をあげないほどには慣れている。外の世界に居ながら目の前にある異常を黙止できるほど感覚が麻痺している。放っておいてもいずれは妖怪に近い存在へと変じていくだろうという確信はある。

それでも『唯一無二の親友と貴方とでは生きるべき世界が違うのだ』というのを直接的に伝えて絶望を味わわせてしまう。妖怪とは本質的に悪なのだ。いくら普段温厚を装っていても、人間を虐めて愉しみたいという本能とも言うべき部分はどんな妖怪でも変わらない。

それがフランドールや宵闇の妖怪のようにむき出しなこともある。所詮妖怪は妖怪としてしか生きていけないのだ。

「この時代に生きていることが間違っている。過去はきつと貴方を飲

迎えるでしょう。世の中の最も偉大なナニカとして。さあ、想像してみてください。誰よりも強く、誰よりも賢く、誰よりも権威がある自分自身を」

今にも崩壊しそうな精神を繋ぎとめているのは親友との絆か。美しいものだ。壊してみたらいったいどんな表情を見せてくれるのだろうか。

しかし、続く言葉はレミリアに阻止された。

「貴方らしくもないわ、さとり。普段の貴方ならもっと冷静なはずでしょう?」

「分かってないですね。この娘はこの時代に存在してはならないモノなのです。私たちの姿を見てもそれほど驚かない。それどころか自分と友人の差異にも鈍感。もはや人間として生きるべきではないでしょう」

神になれる器でもない。もはや妖怪となる以外に生存する道はないとここで敢えて断定する。私たちの会話は当然彼女にも聞こえているので、彼女の中の不安は大きくなる一方だ。しかしそれで良い。彼女の中で感情が揺らぐほど彼女の中の妖怪の部分が勢力を増す。

もしここで彼女が人間として生きる道を選んではまえば紫さんが消えてしまう可能性すらある。未来を変えて過去を正常にするためには彼女を妖怪に墮とすしかないのだ。

「残酷なものね」

「ええ。私たちは今、決して触れてはならないはずの禁忌に触れているのですから」

たまらず逃げ出した彼女を眺めながらレミリアの呟きに応じる。

時を渡り、その先に干渉する。唯一絶対神が存在すればそれだけでも私たちが本当の地獄に落としただろう。それほど罪は重い。だが彼女が私たちがこの時代に送り込んだ、その意図を考えれば今の私の行動もあるいは運命に定められたものなのかもしれない。今の私がいるからこそ過去に彼女が存在できているのだと。

彼女の意図するところは私には量り得ない。だからこそ自由に動くことができるのかもしれないし、下手に運命に抗う事がないのかも

しれない。



「どうです、感動的でしょう。今の貴方がいるのは私のおかげかもしれませんか？」

「話を聞いた限り、痛む心が貴方であればもう少し感動的に聞こえたかもしれないわね」

さとりが一通りの事情を語り、紫が過去を思い出した。

しかしさとりには一つ気になる事がある。マエリベリーがどのようにして過去に渡ったのか、という点だ。紫の話によれば夢の中でいつの間にか迷い込んでいた、ということらしいのだが、それでは明らかに説明不足だ。

そもそも夢の中で過去に迷い込んで目覚めて現実に戻っていたというのを幾度も経験している彼女のことである。精神だけでなく肉体までもが過去に渡ってしまうためには、たまたまでは済まされない何かがあったに違いない、というのがさとりの考えである。

「貴方は何か隠しているでしょう？ だからこそ曖昧に話を終わらせた上で今心を閉じて私の能力を遮断している。違いますか？」

「何も違わないわね。貴方の推測は正しい。私は人間として決して許されることの無い罪を犯した。だからこそ人間としての生き方ができなくなったのかもしれないわね」

さとりの推測に対し、紫は逡巡もなく是と答える。そこまで見透かされるのは彼女にとって想定内だったのだろう。それほど彼女が古明地さとりという妖怪を買っているとも言える。

「でも私がそれを明かすことは無い。これは私の、私だけの罪でなければならぬから」

八雲紫には誰にも言う気の無い秘密があった。と言っても先刻思

い出したばかりの秘密だが。

くく

まだ八雲紫がマエリベリー・ハーンとして生きていた頃、彼女は自分の人生を大きく狂わせることになる妖怪と出会った。それがさとりである。

幼く、害も無さそうに見えるそいつから放たれた言葉は何よりもメリーの心を深く抉った。自分の生きる意味さえ否定されたような息苦しき。好き放題言ってくるその口を塞いでやりたかった。一発お見舞いしてやりたかった。

だができなかつた。そいつの言う通り、メリーと蓮子の生きる世界の違いを自覚してしまったからだ。メリーの見えている物が蓮子には見えていないということを目に見える形で実感してしまったからだ。

『自分は本当に人間なのか？』よぎってはならない疑問が頭をよぎる。普段の彼女ならば決して抱かなかつたであろう自分自身への不信任。自らの存在の否定。妖怪的な本能の赴くままに行動していたそいつがそれを見逃すはずはなかつた。

そいつが自分にかける言葉は果てしなく厳しかったが、それと同時にそいつの見る世界への憧れが募った。何故か甘美な響きに聞こえてしまった。

手を伸ばしてはならないという理性。見知らぬ世界へ足を踏み入れてみたいという本能。対立する二つの感情に挟まれてどうしようもなくなつた彼女ができたことはただの現実逃避。逃げることによつて選択を後回しにしたに過ぎない。

後回しにして恐怖から逃げて、しかし本当の恐怖はその先にあつた。

「ねえ蓮子……昨日のあれ、何だつたと思う？ 天鳥船神社にいた人」
ただの興味だつた。蓮子にも唯一見えていたという、メリーたちと

同年代ぐらいの女性について彼女がどう思ったのか、それを知りたかっただけだった。

しかし蓮子から返って来た答えは髪を梳かしていたメリーの手を止めるのに十分な威力を持ったものだった。

「何言ってるのよメリー。天鳥船神社ってあれでしょ？ 航海安全祈願か何かでトリフネに内蔵されてる社。メリーなら夢で行けるかもしれないわね。まさか夢と現の境があやふやになって来たとは言わないでしょうし」

彼女の背中に嫌な汗が走る。背中だけではない。こめかみの辺りからじわりと滲み出る冷や汗を止める術はなかった。頭を冷やしてくるなどと適当な言い訳をして部屋を出る。向かう先は勿論住吉神社だ。

大きな鳥居をくぐって人っ子一人いない境内を進む。昨晚とは打って変わって見える境界の量が異常に多い。

夢なのか、現実なのか。ここまであやふやになったと感じたことは今まで無かった。そこにはいつも蓮子という証人がいたからだ。蓮子と一緒に夢のような出来事を経験した時には必ず蓮子を同じ夢に誘っていた。蓮子が夢に出てくる時にはいつも同じ夢を見ていたはずなのだ。

何かがおかしい。自分の体験も、蓮子の言葉も、そして今日の前に広がっているこの光景も。

絶句。まさにそれだった。昨晚まで古びていながらもすっかり建っていた天鳥船神社は跡形もなく消え去り、不自然なまでに平らな土地が残っているばかりだった。参道の石畳は途中で切られたかのように砂の地面へと変わり、階段は切り立った崖へと延び、鳥居のあった場所には場違いな竹が生えている。

天鳥船神社は確かに無かった。そしてこれが彼女を不安にさせた。何故ならば、確かにここに何かがあったということは明らかだからだ。メリーはそれを覚えていて蓮子は覚えていない。そもそも何故ホテルに泊まっているのかさえ忘れた様子だった。

呆然としながらそこに突っ立っていた彼女は思い出してしまった。昨晩目の前で言われた言葉。誰も認識してくれない現実で投げられた言葉。

『異常者』まさにその通りね。何もかも間違っていたのかもしれない。私はきつと、あの子の横に並び立って良い存在ではなかったんでしょう。

………私が消えてしまえば………あの子は私の事も忘れてしまうのかしらね」

蓮子だけでなく世界全体から彼女の存在は消滅するのだろう。そう考える始めるや否や急に頭が熱を持ち、今まで考えもしなかったような思考がムクムクと湧いてきた。

(誰からも忘れ去られてしまうのならば、今の私が何をしたとしても関係ないのではないか?)

彼女が無事にこの世界から消えられる保証はないが、何故か彼女はそれができるのだと信じて疑わなかった。今だけの解放感、全能感に中てられているだけなのかもしれない。頭に冷静な部分が残っていれば抑止できた思考なのかもしれない。

しかし、今の彼女を止めるものは何処にも無かった。思考の暴走に水をかける理性は影を潜め、肉体の暴走に口出しして静止させてくれる親友はここにはいない。

彼女が手を突き出した先、まるで初めから分かっていたかのような手つきで空間をなぞった先に新たな次元が現れた。蓮子に言えば面白かったかもしれない。論理的にははるか昔に証明された超弦理論。しかし未だに観測するまでには至っていない四次以上の高次元空間。メリーは今、全ての人類の夢とも言える超空間に手を伸ばしたのだ。そして、それはもはや彼女が人間を超えた存在になってしまったのだということの証明にもなる。

一抹の寂しさを感じながらもそこそこの諦観を抱いて目の前に開いた空間の中に手を伸ばす。中に何かが入っているかもしれないと思っただけだ。当然何も入っていないのだから何も入ってはいない。

当たり前かと入れた腕を抜こうとした矢先、制御しきれなくなった空間が急に閉じてしまった。今しがた初めて使用した境界操作の能力。操作自体に不自由は無くともその力の大きさに慣れているはずもなかった。

「痛っ！……っであれ？」

痛いと感じたのも束の間、まるで嘘だったかのように切れて無くなっていったはずの腕先が生えていた。

（高次の空間に切り離されたから三次元に戻った時には影響が無かったのかしら）

この力と性質を応用すれば自分は同時に二箇所が存在できるのではないか？ そのような常人ではあり得ないような思考も出てくる。境界をくぐることによって全く別の場所へ瞬間移動ができることは過去の経験から既に知っていたからであろう。

入り口を目の前に作り、出口を少し離れた場所に作る。やり方は教わらずとも分かっていた。腕を入れてみると離れた場所から腕だけが現れる。手を振れば思い通りに手を振る。何とも不気味な光景だが、今の彼女は興味が先走っていた。

今度は自らの意思で境界を閉じる。少し先では持ち主を失った腕が地面に落下する。そこから身体が生えれば仮説は当たったのだが、残念な事に落下した方の腕は光の粒となって霧散し、無くなっていたはずの腕が自分に生えていた。一瞬消えてまた生える。

（古のドッキリみたいなものに使えそうね。そうと決まれば……）

現在時刻は午前七時四十分。月曜日だということもあって駅前では通勤通学の人々でごった返しているが、生憎と今から起こる阿鼻叫喚を予測できるような者はここにはいない。

七時四十五分。本当に一瞬の出来事だった。その場に居合わせた目撃者が二桁以上いたにもかかわらず、その全ての証言は事件の惨状から見て取れる情報以上の物を引き出さなかった。

曰く『急に目の前の人の首が飛んだ』

次に来るリニアを待っていた人々の列の一角。少なくとも三十人

の首が一瞬で吹き飛んだ。切り取られた首から血は噴出しているが、飛んだはずの首が何処にも見当たらない。足の踏み場もないほどの血と吐瀉物の海で隠れているわけでもない。

駅に設置された複数台のカメラを確認しても犯人らしき人物は一切映っておらず、スーパースローで見ても首の行方は追うことができない。当然こんな映像を放送に乗せることはできないので、顛末だけを聞いたような事件に特に関係の無い者や遺族たちは警察に無能のレッテルを貼り、目撃者たちは精神病に罹る者が後を絶たなかった。

一方そのころ、別の場所では少女が一人慌てふためいていた。

「ど、どうしよう。これって確かこのホテルの最寄り駅よね……。何故か一人でこんな場所に泊まりに来ちやうし帰ろうと思ったらなんか事件が起こってるみたいだし。……。最悪だわ。」

とりあえず教授には休みの連絡を入れておいて……。適当に観光でもしたらタクシーでも捕まえて帰ろうかな」

そして元凶の少女も。

「このサイレンはもしかして……。ああ！ どうして消えてくれないの?! 早く消えて元あった首に戻りなさいよ！ 戻ってよ！ ねえ……。！」

彼女の目の前には三十余りの生首が無造作に転がっている。どの誰とも知らない男女の首。光となって消えるはずだったそれは、数分が経過した今もまだ彼女の前に転がっている。彼女の悲痛な願いも虚しく、それらが消えてくれはしない。

「……逃げなきや。証拠が残らないように」

ハツとしたようにそう言う彼女こそそくさと生首たちをスキマに押し込み、吐き気を催しながらも自分も中に入り込んだ。

彼女は自分の能力だけでなく自分自身をも誤解していたのだ。彼女の腕が急速に再生したのは彼女が妖怪となってしまうたからである。切り取られた腕が消えたのは世の理故である。全く同一なモノ

は同じ時空間に存在してはならないという絶対的な掟がある。

彼女は全てを間違った。余り有る強大な力を手にし、その勢いのまま余興のつもりで数多の命を奪った。彼女の初めての殺人である。これから幾度となく行っていくであろうその初めてのとなった大量殺人は幸か不幸か、彼女の心をより妖怪へとシフトさせた。

永遠の未解決事件を置き土産にして彼女は旅立った。

と言ってもスキマの中で必死に嘔吐をこらえながら横になっていただけである。



く 独白筆記帳 く

夢。恐ろしい夢だと思った。夢の中で目が覚めるなんてことはしよつちゆうあったし、その場所が見知らぬ森林だったりすることもはや慣れていたけれど、目を開けていきなり三十余の生首が自分を見つめている光景は流石に見慣れていなかった。

死んでいるはずのそれはしかし、私を取り囲んでじつと見つめていた。まるで私を恨んでいるかのように。いえ、実際恨んでいたのでしょう。

夢の中だという確信があった。明晰夢はそれまでもよく見ていたから違和感は何も無かったわ。でもいつもと決定的に違うモノがあった。私は基本的に悪夢を見なかった。夢の中で怖い思いをすることはあっても、それはいつも何かしらの冒険の結果だったから。

でもあの時は初めからホラーだった。急いで立ち上がって逃げ出そうとしたわ。でもできなかつた。首だけのくせにどこまでも追いかけてきたの。今の私なら瞬時に動かぬ物体へと変えられたでしょうけれど、当時の私の心は恐怖が支配していて逃げる以外の選択肢を思いつかなかつた。

走り続ければ当然疲れるものよ。ついに立ち止まってしまった私はもはや歩くことも叶わないほどに疲弊しきっていた。もうどうにで

もなれと思つてへたり込んだけれど予想に反して首たちは何もしかけてこなかった。見た目通り攻撃手段を持つていなかったんでしよう。何故追いかけて来られたのかは知らないけれど。

襲つてこないと分かれば恐怖は幾分和らいだ。同時にこの世界が自分の元居た世界とは全く同じではないと悟つた。明らかに人の手が入っていないような天然の森なんて存在しているはずがなかったもの。その時も私はこれが夢の中の出来事であると信じて疑いはしなかった。夢の中で怪我をしたことがあるくらいにリアルな夢は見慣れていたから。

夢でないとは自覚したのは数日経ってからようやくだったかしらね。それまでずっと生首とにらめっこをしていたように記憶している。不思議とお腹は空かなかった。

あまりに長い夢によく違和感を覚えた。そんなときに現れたのが腹を空かせた人喰いの妖怪。名前は忘れたわ。もうとうの昔に死んでしまったし。

どうやら生首たちが発する血の臭いに釣られてやってきたみたいだったけれど、その中心にいた私には大層驚いたみたいね。見たことも無いほど力の強い妖怪だ、と言われた。周囲の生首も、私が人間を食べた後の残骸だと思つていたみたい。

あちらはあちらで衝撃を受けていたけれど、私の方も少くない衝撃を受けていた。何となくそうじゃないかと思つていたところに決定打をぶち込まれたからね。

『妖怪』

衝撃的ではあつたけれどそれを否定する感情は湧いてこなかった。何故かすんなりと納得することができた。私はいつ人間をやめてしまったのかしらね。どのタイミングで妖怪へと変じてしまったのかしら。さどりに諭された時はまだ人間だったはずなのに。

生首は全部彼にあげた。あれらに付き纏われるのも精神衛生上よくなかったし丁度良かったわ。何故か滅茶苦茶に感謝されたけれど私は何もしていないし、それどころか厄介ごとを押し付けただけ。

妖怪にとって人間は食料。それを痛感した。妖怪になって三十年は
まとも人間なんて食べなかつたけれど。いつの間にか関係の無い
話題になってしまった。

今日はさとりのおかげで様々な事を思い出せた。記憶を記録として
したためているうちにまたそれに付随する記憶が思い起こされた。
自然に零れた涙などといったいっつぶりだろうかと思う。

全てを捨てたつもりだったのに思い出してしまった。あの子との、い
つまで経つても褪せない冒険の記憶。願うなら、今日は夢の中で未来
へ戻ってみたいものだ。それが不可能だと分かっているからこそ、こ
うして記録に願望を映して満足することしかできない。虚しいもの
ね。

東方星蓮船

暗雲広がる幻想郷

「おはようございます！ さとり様」

「おはよう、お空。今日も元氣そうで何よりだわ。お燐もおはよう」

この子が元氣なのはいつも通りで良いとして、お燐はどこか浮かないというか疲れたような顔をしている。最近はずんぴフェアリーたちがまったく働かなくなっただけで彼女の負担も増えており、それが原因となっている。

私に挨拶だけしてキッチンに向かおうとするお燐を引き留め、代わりに今日は朝食の準備を戒に頼むことにする。過労で倒れられたりなんかしたら私が悲しくなるから。

「今日は一日休んでいなさい。貴方の分の仕事は私が代わりにしておいてあげるから」

「そんな……でもあたいの分の仕事って結構大変ですよ？」

何、昔は私一人で全てをこなしていたのだから問題ない。ペットが増えたのと怨霊が増えたのでどれほど労力が変わっているのかは分からないが。それに最悪戒もいる。私の隠居のためには全ての仕事をいずれあの子一人にしてもらうことになるし、今の内から少しずつ慣らすのもアリだ。

お燐が最近疲れ気味な理由は先の通り、ズンピフェアリーの怠慢が原因だ。妖精のこなしていた分の仕事に加えて妖精たちを宥めなければならぬのだからそりや疲れる。

では何故最近妖精がまともに働かなくなったのかと言えば、地上から落ちてきたとある木片が原因である。私から見れば何の変哲もない木片でしかないそれはしかし、ズンピフェアリーから見れば奇怪な飛行物体に見えているらしい。ズンピフェアリーだけではない。お空やお燐、戒、パルスィなんかもそれが木片であるとは認めなかった。

その形が面白かったのか珍しかったのか、妖精たちはすっかりその物体に気を取られて遊ぶようになってしまったのだ……というのを

昨晚知った。お燐の顔色が悪い事を問いただして聞き出した。妖精の様子になって興味が無かったから全く気づけなかった。主人として恥ずかしい。

とにかく今日はお燐を休ませ、妖精から木片を取り上げたうえでしっかりと仕事をこなせるように催眠をかけなければならぬ。お燐は妖精に催眠をかけることを嫌がるが、一度屋敷の仕事をやらせて例の木片の事を忘れさせるのが一番早い。

催眠をかけてしまえば碌に指示を出さずとも今日一日分の仕事くらいはまともになしてくるだろうし、お燐の仕事を肩代わりする私も少し楽ができる。

で、問題はこの犯人だ。視覚情報を誤魔化してその正体が判らないようにするという点で見れば能力者に心当たりがある。この冬に地底を抜け出していった封獣ぬえだ。だが何故彼女の能力のかかったものが今地底にあるのかが分からない。

地上からの宣戦布告のつもりか？ いや、そんなはずはない。彼女は誰よりも地底の厄介さを知っているはず……その上で挑発するような奴ではあるけれど。だが違うだろう。となるともう真意を推測することも不可能なのでまた紫さんが来た時にでも聞いてみるか。

食事中もそんなことを考えていたからか、お燐からは逆に心配されることになってしまった。情けない。とりあえずお燐には一日休暇を与え、温泉に行くも勇儀たちに会いに行くも自由としておいた。

のだが今お燐は私の膝の上にいる。仕事をするのに邪魔になるから退きなさい、と言っても『何をしても自由って言ったのはさとりだろう？』だなんて言っていて退いてくれない。

「そんな所にならずといってもつまらないでしょう？ たまには遊びにでも行ったらどう？」

『なんだかんだあたいはいつも遊んでいるようなものだからねえ。こうしてさとの膝の上でのんびりするのも悪くないよ』

はあ……。こういう時のお燐は本当に猫らしい。只管に自由気ま

ま。私の家に棲みつく前のお燐はこんな感じだったつけ。もう出会った当初の事はあまり鮮明に思い出せない。

薄情だと思われるかもしれないが、私のペットとの出会いなんてだいたいそんなものだ。そもそも妖怪化する前提で飼い始めているわけではないし、行き場を失った子たちの保護の延長線上でしかなかったわけだから。まあお燐は出会った当時から人語を解していたし半分妖怪化していたけれど。

そう思うと私も長く生きてきたものだ。たかが千年と言いはすれどその間に地上から逃げ、地底を任せられ、今ではたくさんのペットたちを飼うようになった。ただの獣が妖怪になった者もいくらいるほどの年月をここで過ごしているわけだ。

お燐はそういった獣たちの初めの一匹だ。まだこの屋敷を私一人でやり繰りしていた頃だったか。これに関してはお祝いに赤飯を炊いたからよく覚えている。

『どうしたのさ、なんか遠くを見つめてるけど』

ああいけない。懐古していたら手が止まってしまっていた。昔を懐かしむのは良いけれどせめて今日の分の仕事を一通り終わらせてからにしなければね。

今日の分は……ふむ、酒税をもっと下げるとな。確かに最近は急激に酒の価格が上がっている。地上で価格が上がればそこから仕入れている地底はもろに影響を受ける。地底で造っている酒も多いが、こちらも地上から輸入した酒の価格上昇に伴って値を上げてきた。

結果として今の地底は数か月前に比べ、格段に酒を入手しづらくなっているのだ。この状況が芳しくないというのは私も自覚している。今何とかなっているのは勇儀や萃香など力のある鬼が旧都を纏めていることと、戒が地底の主として居座っているからだろう。旧都の妖怪の多くは戒の元部下たちだし、彼らは戒が操り人形になっていることも知らないから。

酒の値段は上がっている。だがこれ以上酒税を下げるのは現実的

ではない。現在は如何なる種類の酒であっても税率は一律5%としているからだ。あまりに破格であるが、酒好きの多い地底においてはとにかく安く美味しい酒が命なのだ。

その他消費税、住民税諸々なんかは1%しかとっていないし、本当に地底は税金が低すぎるくらいなのだ。その徴収した税金もほとんどは地上から酒を輸入するのに使うし。

つい最近まではこのような税制でも全く問題が無かった。こんな文句が全く出てきていなかったわけではないが、出していたのは本当に下の下、賭場に入り浸っているような連中ばかりだった。ところが最近ではほとんどの店で酒の値段が倍近くにまで高騰し、今まで普通に酒を買って呑んでいたような妖怪達からも不満の声が出ている。

ここまで急激に酒の価格だけが高騰した理由は私には分からない。地上、もつと言うなら外の世界で何かしらの異常事態が起こっているのかもしれない。幻想郷の酒も多くは外の世界由来のものだし。

とにかく今の地底は酒を買いたくても買えない者が多数いる状態だ。皆が皆萃香のように自前で酒を用意できるはずはないから当たり前なのかもしれないが。貧富の差が地上程ではないとはいえ、やはり生活を優先するために娯楽を泣く泣く諦めている者が現在非常に多い。

下手な暴動が起こってしまう前に何とかしなければならぬが税率を落とすわけにはいかない。どうにかして地底産の酒の価格を落とすしかないのだ。非常に不本意だが輸入する酒を規制するか。

「お燐、パルスイを呼んできてもらえるかしら？ あ、他の奴らは呼んでこなくて大丈夫よ。彼女だけ連れてきてちょうだい」

ぞろぞろついて来られたら鬱陶しいし邪魔にしかならぬだろうから。

お燐が人型になって部屋を出て行くのを見送ってから引き出しの中を探る。下から二段目、バインダーに挟んだ書類の中に目的の紙もあった。『外来酒一覽』地上から仕入れている酒は全てこれにまとまっている。最終更新日は三週間前。ブランドーを追加した翌週だ。確か地底では大して人気が出なかったので翌週に削除したのだった

か。

ブランデーに限らず洋酒は地底ではあまり人気が無い。値段に対して味が釣り合っていないという意見のようだが、そもそも彼らの舌は数百年以上日本酒を味わい続けてきたのだから合わないのは当然である。

地底で出回っている洋酒の一つは紅魔館のワインだ。これは紅魔館との直接取引によって買い取っている物なので他に比べて格安なのが良。外の物価の影響を全く受けないので安定的な供給を見込める。何故か最近では取引価格が上昇しているが恐らく不作だったりののだろうか。自家栽培の欠点だ。

その他はかなり強い酒。そもそも深く味わう必要のない者たちにとつては辛ければ辛いだけ刺激があつて良いところがある。やはり馬鹿なのではとも思うがどうなのだろうか。これも一種の酒の楽しみかたなのだろうか。

「久しぶりね。お元気がしら？」

つらつらと考え事しているとふと声をかけられた。声の主が誰かなんて聞くまでもなく分かっている。この部屋にノックもせず、それどころか扉を開けもせずに入ってくるような知り合いは一人しかいないからだ。

「丁度良かったです。少々お願いしたいことがありますね」

背を向けたままそう返すと「つまらないわねえ」と言われてしまった。仕方ないじゃないか。昔はこの登場の仕方にひどく驚いていたが、今となつてはもはや慣れたもの。声をかけられた瞬間にビクリとするだけだ。

「で、私にお願いしたいことは？」

「少し仕入れるお酒の種類を減らそうかと思ひましてね。ここ最近では値段が跳ね上がったせいで不満の声も大きくなつてきているので」

紫さんもなるほどと唸る。酒の価格の高騰は紫さん自身も気にしていた様子である。しかしそれにしても顔が暗すぎる気がする。気づいていたならそれまでだと思つていたが何か問題でもあるのだろうか。

それを尋ねてみると紫さんからは思いもよらない答えが返って来た。曰く「高騰している理由が分からない」とのこと。

「確かに外で価格が上がれば幻想郷での酒の価格も上がるわ。でも今回は違う。外での価格変動はほとんど無い。にもかかわらず幻想郷ではどこを見ても高値が付けられているの。初めは私の関与していない所でぼったくっているのかと思っていたけれどどうにも違う。拳句の果てには人里と関係ないような紅魔館でも酒の価格を上げました。……不作？ そんなものあそこには無縁のものでしよう。門番の能力と魔法とで嚴重に管理されているのだから」

私の予想が根底から崩れ去る音が聞こえるようだった。紫さんにさえ理解できないようなことが今幻想郷で起こっている？ 外での物価には全く関係が無く、飲み屋や酒屋の結託というわけでもない。不作でもなかった紅魔館ワインの値上げがその確たる証拠となった。「地底でも酒の価格が上昇しているんでしょう？ 恐らくそれは地上からの酒の仕入れを減らしても変わらないわ。原因は私の方でも探っておきましょう。」

ところで話は変わるのだけれどこんなもの見なかった？」
続きが気になるころではあるが紫さんが動き出したのならば解決はそれほど遠くないだろう。

次いで紫さんが懐から取り出したのは見覚えのある木片。当然知っているのでポケットから出して紫さんに渡す。これは地底にあるべきものではないはずだ。

「ありがとう。……そろそろ霊夢も動き出してほしいところなのだけれど。幻想郷が春になるまでまだもう少し時間がかかりそうかしらね」

やはりよくわからない。しかし仕入れ量を減らしても現状に変化がないのだとすると……パルスィは呼ばれ損になってしまう。申し訳ないし昼食でも御馳走するか。

黒き太陽

満月にはまだ遠い月を眺めながら咲夜の淹れた紅茶を啜る。ここ最近何かがおかしい。私の周りだけでなく人里周辺もだ。あの伊吹が出てきていた時のような異様な空気が幻想郷中を包んでいる。あの時は彼女の関係者以外では私が気づくのが一番早かったと聞いているし、おそらく私はその手の脅威に対して敏感なのだろう。

私だけが気づいていて他の者は気づいていない。いや、違和感自体は覚え始めていることだろう。何せ最近の宴会の頻度はガクリと落ちた。酒が買えないせいだろう。その事に対して霊夢も魔理沙も不満たらたら。解決に乗り出さないのはこの事態を異変だと思ってもいないからだ。困ったものである。

カップを置いてホッと一息つく。即座に継ぎ足そうとする咲夜を制止して月を眺める。今日は三日月だ。

「あと12日……かしら」

「何か言いました？」

「いえ、何も」

満月まであと12日。恐らくそれがリミットになるだろう。酒が遠くなったことによる妖怪の暴走。最も力が強くなる満月までに対処できなければ人里に被害が出始めるだろう。既に湖の妖精たちは荒っぽくなり始めているし、里に住む妖怪にもストレスが溜まってき始めているらしいことも聞き及んでいる。

山も酒が自前で用意できる天狗や河童なんかを除けば酒の供給を人里に頼っているような妖怪ばかりだ。天狗が何とかしてくれるだろうという樂觀ではいけない。捨て身の覚悟ならば弱い人間でさえ脅威になり得るのだから。

「そろそろ冷えてきたし中に戻りましょうか。それと……明日にでも久々に宴会でも使用と思うから霊夢たちにも伝えておいてちょうだい」

お節介かもしれないが、彼女が気づけない以上誰かがガイドを引いてやらねばならない。正しい道に進むために彼女を導いてやらねば

ならない。彼女は強いが万能ではないのだから。



「いったいこれはどういう事なの？ お燐」

呆れ半分に私がこうしてお燐を問い詰めているのは彼女が連れてきた者たちが原因である。パルスイだけを連れてきなさいと散々言ったにもかかわらず結局はキスメと萃香がいなくらいでほぼいっつも通りの面子が揃っているのだ。

普段ならばもつときつい言葉で反省させているところだが、今日はお燐に休みを与えていた手前そう強く出ることもしかない。ボラァンティアという名の時間外労働だから。

「ああ、お燐は謝らなくても良いのよ。悪いのは後ろにいる奴らだものね」

しょんぼりしているお燐にそう声をかける。実際は勇儀たちの同行を断れなかったお燐の優しさが悪いのだが今はそれを言うべきではない。優しさを咎めるのもどうかと思うし。

「おいおい、ひどい言われようだね。私たちだつて用事があつたから来たつてのに」

確かにここは用事が無ければ特に来たい場所でもないだろう。陰気臭いし怨霊も地底の中では別格に多い。怨霊に関しては本来は全部ここに収容しておかねばならないのだけれど。そのうち四季様が咎めに来そうだ。

「用事？ 酒以外に貴方たちの用事なんて……」

「これや」

彼女が手に持っている物は私が先ほど紫さんに渡したのと同じ物、木片だった。勇儀が紫さんから譲り受けたというのは絶対にあり得ない。となると地底にあった物はあれ一つではなかったのか。

「それ、どこで？」

「さあねえ。旧都に行きやいくつかあるみたいだが見慣れない物だつ

たんでさとりにも見せておいた方が良かったよ。しかしその反応、心当たりがあるようだね」

狭い世界で生きている弊害か、旧都の事情は詳細には知らないし情報が回ってくるのも時間がかかる。そのギャップを突く意図は無かっただろうが、奇跡的に上手くはまったおかげで地底の対応が遅れた。犯人が分かっているだけに惜しい事だ。

勇儀が持っているもの以外にもまだ同じ物があると聞いて少し嫌気がさした。しかも先ほどから頭の片隅にある違和感が拭い去れない。

この屋敷で回収した木片は一月以上前からここにあった。旧都の方にも恐らく同時期からあったのだろう。しかし勇儀が気になると言って持つて来たのは今日。私がこの屋敷の物を回収したのも今日。紫さんがそれ関連で降りてきたのも今日だ。

今日一日で立て続けにこの木片関連の事が起こっている。ずっと前からあったにもかかわらずだ。頭が痛くなってきた。

「とりあえずそれが地底にあるのは好ましいことではありません。貴方たちの視覚情報を騙す類の術がかけられていますし危険ですのですぐに全部回収してもらえませんか？」

面倒だと渋っていた勇儀だったが私の回収してくれたらお礼に良い酒あげる、の一言で颯爽と去っていった。これにはパルスイもヤマメもあきれ顔だ。分かる。単純すぎていつか詐欺師に引っかけりそうだから。心配なのは詐欺師の方なのだけだ。

戒に昼食の準備を任せて私は一人で一度部屋に戻る。先ほどの違和感とは別に引つかかることがあったのだ。

私の背丈の倍以上ある本棚には私が集めた様々なジャンルの本が置いてある。その一角、私を書いた本とは別にもう数十冊小さめのノートが入っている。私の日記帳だ。見開きで一週間、一冊で一年分の日々の出来事が綴ってある。

探すのは一月半ほど前……あった。丁度私が例の木片を見つけた日だ。取り留めもない一日として書いているが、今改めて読み返すとかなり異常な日である。そしてそこから三日後か。酒が急に高く

なつたと勇儀からの文句が入ってきている。

そうだ。木片が現れたのと同時に酒が高くなった。果たして偶然といえるだろうか？ 紫さんにさえ解けない不可解な問題。私自身何がどうしてこうなっているのかは分からないが、この二つの間に何かしらの関係がありそうだと推測できる。勇儀が回収してきてくれたあとどうなるか。

そんなことを考えながら、皆のいる部屋に戻る途中で厨房を覗く。「急に人数が増えてごめんなさいね。私も何か手伝った方が良かったら？」

「いえ、大丈夫ですよ。さとり様が催眠をかけた妖精たちが想定以上の働きをしてくれているので、むしろ人手が余っているくらいです。昼食を運ぶのは……勇儀様が帰ってこられた後ですネ」

戒にはたくさん迷惑をかけているけれどあまり労ってあげられない。この子がそれを拒否するからというのもあるが、予想以上に何でもできるようになってしまったからというのもある。様々な仕事を任せて軽く礼だけ言う、なんてことがかなり多い。

「ありがとう、助かるわ。そうね、今夜寝る前に私の部屋にいらっしやい。………ああいえ、説教とかではなくお礼よ。毛づくろいしてあげる」

部下への労い。ついでに式神お人形のメンテナンス。メインがどちらかなんてどうか私に聞かないでくれ。どちらの割合が高くあつてほしかなんてのは明白だが、実際にどちらの割合が高いのかなんて分からない。皮肉なことに私は自分の心が一番理解できないのだから。



「疲れていますわね」

私がそう言うのと目の前の少女は憎々しげに睨みつけてくる。決して私に敵いはしないのに、いつそ清々しいくらいに遠慮なくビシビシと敵意を向けてくる。

やがてそれが無駄だと悟ったのか、大きなため息を一つ吐いたのちに首肯する。

「誰もこの事態が異変だと思いやしない。霊夢でさえ……霊夢でさえだ。私はもうどうすればいいのか分からないよ」

本当に憔悴しきっているようだ。私自身は内容が内容だけにこうなっても仕方がないと考えていたが、あくまでもそれは私が霊夢を見てきたが故のもの。たかが数年間、特に異変時の霊夢ばかりを見ているような者にとって今の状況は頭を抱えなくなるのだろう。

しかしよく考えてみてほしい。今回の異変の性質は過去萃香が起こしたものによく似ている。あからさまに紅い霧が出たり春になっても雪が降っていたりといった異変らしい異変ではなく、何かよくわからないが宴会が続いていたり、酒が買いにくくなったりしているという気づきにくい異変なのだ。

前者ならば霊夢に限らずただの人間であつても容易に異変と認識することができる（月を隠す術の時は人間には感知しにくかったようだけれど）。だが今回のような異変は一見するだけでは内容にたどり着けないのだ。そしてその手の異変の場合、解決は私たち事態を知る者が動き出さねば始まらない。

萃香の時は彼女自身が最終的に霊夢たちの前に現れてくれた。それはつまり、あれほど彼女の妖気が濃くなつても人間側がそれを理解できなかったからに他ならない。目に見える異変以外を異変と認めるのはなかなか難しいということである。そしてその黒幕を追う力が彼女らには無いということでもある。

「目に見えない何かを指さしてそこにいると主張しても誰も信じないのと同じこと。彼女たちにとって異変とは目に見える形になつていくところから始まるのですから。ですが幻想郷はおろか地底にまで拡大してしまったこの異変を何とかして解決させなければならぬ」というのは私も貴方と同意見ですわ」

私と同意見だと言ったのが相当嫌だったのか、疲労の中でも顔を顰めているのがよくわかる。当然気づいていないふりをして話を続けさせてもらうのだが。

「そこで私考えました。それならばいつそのこと目に見える物で霊夢たちを釣れば良いのではと。餌はこれ」

傍から見れば色とりどりのUFOにも見える不思議物体。今は込められていた力を上書きして消しているの、ただの木の破片に見えるはずだ。

「私にはただの木屑にしか見えんがね。これを餌にして誰が喰いつくというのか」

「ああそうでした。貴方の目は物の過去ではなく未来を視るのですたわね」なんてわざと大袈裟に言ってみる。どうせ嫌われている身。彼女の見た目的にも煽り倒して泣かせてやるくらいが丁度良い。

次いで私が取り出した物を見た彼女は目を丸くして低く唸っている。知らなければUFOに見えるのだから、この木片と青色のUFOが同じ物だなんてそりや思えないだろう。

「この木は一応宝船の破片。この物体も同じ。これを集めれば宝船が完成する、と霊夢に言えばどうなるかは分かるでしょう？ 解決は時間の問題ですわ」

この木片と酒の値段の関係。それはここ一週間の地底での観察から明らかになった。さとりが関係を指摘した時はそんな馬鹿な、とも思ったが、現にこれを全て回収しきった後の今の地底では適正価格で呑めるようになっていたのだ。

ただし関係があるというのが分かっただけで、木片がどのような力を持っていたのかについては分かっていない。ただ集めて無力化すれば効力を失ってくれる。それだけしかわかっていないが、異変解決にはそれだけわかれば十分なのだ。

「そんなちんけな欠片ごときが原因だなんて馬鹿馬鹿しい。とお前が相手でもなければ言っていたかも知れん。何か根拠があるんだろう？ いや、私に話す必要はないよ。知るだけ無駄なことだ。私はこの異変が解決されればそれで満足だからな。私以外の損得など勘定するだけ時間の無駄になる。お前はそう思っていないだろうがね」

よくお分かりで。私はとにかく相手の損得、というよりは損を計算するのが好きだ。相手にとって嫌な事をするというのは戦闘にも通

ずる所があるからかもしれない。或いは全く別の感情に突き動かされていくからかもしれない。

「貴方以外ならば、家族はどうなるのかしらね？　もしかしたら貴方の家族……そう、あの陰気臭い魔女なんかはこれを所持しているかもしれない。今すぐ捨てるように頼んだ方が良いのではなくて？」

「は、馬鹿馬鹿しい。私が何でもお前の言いなりになるとでも思っているなら勘違いも甚だしいよ」

「へえ、言うようになったじゃない。さとりになにか吹き込まれてもしたのかしら？　幼子の一人くらい私の相手でもないけれど……」

外から帰ってきたらやたらさとりと親密になっていた。そこから生意気具合もうなぎのぼりになったが実力が追い付いていない。所詮は口だけのおこちゃまであることを教えてあげても良い。そう思っただけの口を開いた直後、誰もいないはずのこのテラスに突如として聞き覚えのある声が響いた。

「やめておけ小童ども。無駄に争っているといざという時に力を使えぬぞ？」

振り返った先にいたのは背の高い女性。立派な翼に星の散りばめられたマント。霊鳥路空その人であった。

しかし声は同じでも言葉遣いが全くと違っていいほど違う。纏っている力も普段の妖力ではない。

「霊鳥路空ではないわね。八咫鳥か？」

「いかにも。吾は天照様に仕える八咫鳥である。汝等が醜い言い争いをしてきたから気になって覗いてみれば……嘆かわしいことよ。小娘の主が泣いて悲しむかもしれないぬ」

八咫鳥を見に宿している時の空とは全く異なる。喋り方も、力も、知性も。全てが格上で勝負すらさせてもらえないだろう。同じ土俵に立つことすら許されない絶対的な強さの境界がここにある。

「何故八咫鳥がここへ？」

「吾は小娘の主から嘆願されたのでここにいます。かの娘には吾も良くしてもらっているからな。信者には報いるのが神というものよ」

「さとりの願い？」

「然り。それだ、その木を一つ寄越すがいい……よし。ではまた会おうぞ」

思わず手渡ししてしまう。とても反抗する気が起きなかった。幾百年ぶりに感じた恐怖。あれが……あれこそが神格。神奈子や諏訪子よりさらに上位に存在する神の威厳。さとりはそれをお遣いに使うというのか？

あれが暴走すれば止められる者は幻想郷にはいない。癪なことだが神々の住まう土地である月まで行かねば対抗できる者はいないだろう。

何故さとりがそれを一つだけ求めたのか、その真意を問えぬままに彼女は姿を消してしまった。

未だ頭を抱えて蹲っているレミリアを置いて、私もスキマを開く。数刻もすれば咲夜がレミリアを回収しに来るだろう。私は今日ももう寝てしまいたい気分だ。

ヘルズ・メス

「ありがとうございます。私が言ってもきつと断られていたでしょうから」

地霊殿に戻って来た八咫鳥からお願ひしていた物を受け取る。普段からお空にも八咫鳥にも悪い扱いはしていないためか、こういった簡単なお願ひならばこなしてくれるのがこの神のありがたいところだ。

神を使い走りにするなんて罰が当たると言われるかもしれない。だがそんなものは私にとってどうでもいい事だ。私はこの神を信仰しているわけではないしむしろ嫌っているくらいなのだから、それをひた隠している時点で十分に私が罰を受ける理由になるのだ。未だにそうなっていないのは偏に八咫鳥が私の思いを誤解しているからである。

信仰とは誠複雑なもので、神を思う心があればそれは信仰として流れてしまう。信仰を失うというのは信者が消えるというわけではなく、その神の存在を信じる者がいなくなることなのだ。私が彼女を嫌い続ける限り、彼女には信仰心として流れ続ける。抜け道のような非道な信仰。神が許しているならばそれで良いのだろうか？ 良いのだ。神が満足しているならばそれで良い。

私に罰が下ったとしてもそれは端から想定しなければならなかったもの。既に覚悟を決めておかなければならないものなのだ。

何故わざわざ神の怒りを買うような真似をしているのかと問われども立派な答えは持ち合わせていない。ただ憎いからだ。かつてのお空を奪われたからだ。本来憎むべき相手は八咫鳥ではなく守矢の二柱の方。八咫鳥は彼女らに降ろされただけの被害者に過ぎない。

それだけならば私だって八咫鳥を恨みはすれど憎みはしなかっただろう。私が不快な思いをしているのは、彼女がお空の意思とは完全に別にお空の身体を使っているからだ。彼女の身体の主導権を他者が握るなど到底許されざる行為である。

しかし私も同罪である。そんな八咫鳥の行為を見て、それでも表面

に怒りを出すことなく利用しているのだから。なんと都合の良い女なんだと自分でもしばしば思う。憎んでいる相手に勝てないとみるや媚び諂って表向きには文句ひとつ言うことが無い。本当に、最低だ。

私は誰かに罰してもらいたいのかもしれない。断罪して地獄に放り込んでもらいたいのかもしれない。頭の片隅では死んでしまっても構わないと思っているのかもしれない。

独善的な偽善者。私は本当にペットたちに慕われても良い存在なのだろうか。いつそのこと殺されてしまった方が地底は上手く回ってくれたりしないだろうか。ならないだろうな。私は地底のあり方を変えすぎた。

「誰かが私を断罪してくれないかしら」

ぽつりと呟いた言葉は誰にも聞かれることなく闇に溶けるだろうとそう思っていたのに、あの方が恐るべき早さで私の前に現れた。

「断罪をお望みならば私がしてあげましょう、古明地さとり」

「四季様……お久しぶりです。どうもお変わりないようで。というより何処から入って来たんですか？ 屋敷の鍵も部屋の鍵もかけているはずですが」

断罪してくれるならこの人だとは思っていたが、まさかこんな夜中にたった一人の呟きのために来るなんて。真の地獄耳ここに見たりといった感じか。いやそれよりも暇を持て余していたのか。閻魔としてどうかと思うが。

「鍵など私たちに対しては無力でしかありません。私には怠惰ですが優秀ではある部下がいますからね」

死神の小野塚小町だったか。一応彼女の事を認めてはいるのか。来るたび愚痴を言っているから険悪なのかとも思っていたがどうやらそうでもないらしい。四季様の心は読めないが、表情から読み取る限り彼女の事を自慢げに思っている……のか？ 多分。

「まあそのような事はどうでもいいのです。本題の前に古明地さとり、一杯いかがですか？」

この方が酒に誘うなんて珍しい。酒と一緒に愚痴も多くなるだろ

うことを考えれば今夜は長くなりそうだ。

「そうですね、一杯だけいただきましょう。肴は何も用意できませんがね」

どのような話をするのかは分からないが、最悪の場合を想定するならば怨霊管理に関する私への長々とした説教コースか。善意100%で言っている分余計に厄介なのよね。悪意の一欠片でも籠っていたら遠慮なく拒絶できるのに。



映姫が言うに今の幻想郷は霊の数が明らかに少ないらしい。数年前の花の異変の時とは真逆の事態だ。死者が激減しているというのは本来喜ばしいことのように思えるが、地獄など生と死を管理する者たちにとってはそうではなく、むしろ危惧すべきことなのだ。

死者と生者の霊が釣り合ってこそ本来の輪廻が成り立つ。六十年に一度の回帰を除けば死者は少なくともいけなく多くてもいけない。

今の状況を地獄からの観点で言うならば「多くの人間に死んでもらわねばならない」ということである。

「今週死ぬはずだった人間が今ものうのと生きて里で暮らしている。それだけではなく本来まだ生きていくべき妖怪は次々と死んでいる。これは由々しき事態なんですよ」

十王が管理して定めた死者のために裁判の時間を作っている映姫たち中間管理職の閻魔にとって、その死者が彼岸に訪れない、或いは余計な死者が溢れているというのは迷惑でしかないのだ。そしてその事態は十王たちにとっては迷惑以上のものになる。

たった一人が予定通りに死なないだけでも地獄は上から下まで迷惑を被る。幻想郷ではそれが今月だけで十数人。逆に妖怪は二百を数える魂が肉体を離れた。

緊急でもその全てを裁かなければならないのが映姫ともう一人の

閻魔である。閻魔だけではない。生者をそれとなく死へ誘う死神や此岸と彼岸を結ぶ死神も混乱を極めている。それも見事なまでに幻想郷だけだ。

映姫が愚痴をこぼしたくなるのも当然だろう。他の閻魔たちは普段通りの業務を行えているのに幻想郷を管理する映姫たちだけは人間に狂わされているのだから。

「死ぬべき者は早く死ななければならぬというのに、いったい何様のつもりで生を謳歌しているというのか……」

「それ、閻魔の貴方が言っても大丈夫な事なんですか？ 普段は生き方について説教している貴方が」

さとりの疑問も尤もである。いつもならば小うるさく徳を積む生き方を説いて回っているというのに、その映姫自身が他人に死んでほしいと言っているのだから。映姫の心が読めないさとりにとって彼女の言葉は冗談か本気か分からない時がある。普段の映姫は冗談なんて言うような性格ではないのだが、今回の発言はもしかしたら酒が入って気が大きくなっただけによる冗談の可能性が捨てきれないわけだ。

さとりは悩んでいるがしかし、当の映姫の方は全くもって冗談を言ったつもりも無く、いたって真面目な話をしているつもりである。厳格な裁定者である彼女が酒に飲まれるなどあり得ないことなのだ。「私が説教をするのはあくまでも生きるべき者たちに対してです。死んで輪廻を回すべき者たちに対して慈悲など不要な物。死ななかつたり予定外に早死にしたりされるのが我々にとって一番厄介なのです。ところで古明地さとり、今何故人間の死者が激減しているのか、その理由は分かりますか？ 妖怪が数多く死んでいる理由でも構いませんが」

当然さとりにもそのような事態の心当たりがあるわけがない。地上で起こっていることについては基本的に紫が持つてくる以上の事は知らないからだ。紫から『最近人間が死なないのよね』だとか『最近妖怪がよく死んでいるのよね』だとか聞いていたのなら別だっただろうが、残念ながらそんなこともない。

相手が映姫でなければ心を読んで言い当てることも可能だっただろうが今回はそういうわけにもいかない。結局さとりは少し考える素振りを見せた後に首を横に振るしかなかった。

「酒。……………ああいえ、酒が欲しいのではありません。この問題の原因が酒なのです。話が読めないといった顔ですね。時に貴方は飲酒のリスクを知っていますか？」

「成人病、でしたっけ」

成人病。近年では生活習慣病と呼ばれている、様々な生活習慣の悪さから発生する疾患だ。飲酒もその原因の一つであることは広く知られている。もともと妖怪には全く縁のないものなので知っている者は幻想郷中でもほとんどいない。

「ではその成人病で死ぬはずだった者たちが価格の高騰で酒を買えなくなつて死なずに済んだということなんですか？」

「そうではありません。死ぬはずだった者たちはそのほとんどが女子供で占められています。恐らく酒の力による暴力が無くなったのでしょうね。不思議な事に悪酔いするまで呑む者ほど貧乏ですから買えなくなつて悪酔いも無くなったのだらうと見ています」

映姫の予想としては酒癖の悪い者による家庭内暴力が激減したということである。家庭内だけでなく、人里内での酔っ払い同士による喧嘩も無くなった。

では人里は治安が良くなったのか？　というと実はそうでもない。里周辺に棲んでいるような妖怪達は酒の調達を里で行っている。妖怪によつては酒が日常の娯楽に不可欠と言つても良いほど重要なものである場合もある。高騰とはつまり彼らにとつて供給が断たれることとほぼ同義。

結果的に本来暴れてはならないはずの人里の中で妖怪が暴れだし、人里の自警団或いは竹林に住んでいる自称妖怪退治屋に退治されてしまう。本来暴れる必要の無かつた場所で暴れてしまい、退治されて死んでしまう。

人里は以前よりも一層危険な場所になってしまっているのだ。人間同士の争いは減つたが妖怪の暴動は止まらない。

現在の人里は常に自警団が見回りを行っており、妖怪を見つけ次第退治するという、今までにないほどの厳戒態勢が敷かれている。元々人里に住んでいた比較的友好的な妖怪たちもいくらか誤退治されてしまい、運よくそうならなかった妖怪たちも里から逃げ出してしまった。

「本当に人間とは恐ろしいものです。一度やる気になってしまえば里の外の妖怪まで無差別に退治しだすですよ。里の周辺の妖怪というのは比較的弱くて人間に友好的な者が多い。退治するには恰好の相手なわけですよ。それも知らずに人間が妖怪退治をすると人里では誉めそやされる。それに気をよくした人間がまた無害な妖怪を退治する……負のスパイラルが続くほど私たち地獄の仕事は増えてしまふんですよ。あゝ、もう嫌だ」

少し酔いが回って来たのか口調が粗雑になっているように思うが、言っていることは間違っていない。増長した退治屋が余計な妖怪退治まで行ってしまうているのは事実だ。

「それでしたらそろそろ片が付くはずですよ。よほど怠惰でもなければ明日にでも巫女が解決に乗り出すはずですよ」

ここで断言できないのが普段の霊夢の怠惰さを物語っている。異変に対してここまで暢気に構える博麗の巫女など今までいなかっただろう。全てが遊びで片付くようになってしまったが故か、異変解決に乗り出しても頭は春のままであったりする。緊張感が全くと言っていいほど無いのだ。

「はあ。今代は本当に腰が重いですね。人妖のバランスが崩れて一番困るのは彼女だというのにそれすら理解していない。まったく八雲紫は彼女に何を教えたんでしようか。いえ、あの妖怪に何か期待する方が無意味でしたか。とにかく片付けてくれるのなら大いに結構。この話は終いにしましょう。」

これ以外にも貴方とも少し話したいことがあって来たのです。最近脱走している怨霊が多いと聞きましたよ、古明地さとり。その辺りどうお考えで？」

ようやく愚痴が終わったと思ったのにまさかのダブルパンチであ

る。さどりの夜は長そうだ。知らぬ間に朝が来て誰かが部屋をノックするまで映姫の説教は止まらないだろう。

とうの昔の封印

霊夢と魔理沙、そして早苗が空へ飛び立ったのを見送ってから私も行くべき場所へワープする。昨夜の事の真意をさとりにも問わなければならぬ。何故彼女自身が集めて私に渡したはずの木片を一つだけ持って行ったのか。わざわざ八咫鳥を寄越してまで回収したかった理由とは。

この時間ならばもうさとりも起きているだろうと踏んで部屋にそのまま繋げたのが拙かった。何とか外へ出る前に踏みとどまったが、白黒はつきりつける閻魔は目ざとく私を見つけると、説教の矛先を私にまで向けてきたのだ。

四季映姫。公平に白黒つける能力は彼女の仕事柄最適なものであるが私にとっては相性が最悪なものになっている。私の能力は物事に境界を作るわけではなく、物事の境界を曖昧にして操るというものだ。対して閻魔の能力は物事に決して交わることの無い境界を作つて二分するもの。

境界とは本来、物同士の間立つものであり隔てるものだ。その概念を閻魔は打ち壊してしまう。物事を『白』と『黒』というたった二色に塗り分けて決して交わらせないような境界を生み出すのだ。あるいは境界ではなく間隙と言つても良いかもしれない。

私が昼と夜の境界を弄るときは基本的に黎明または薄暮にある境界線をどちらかへ動かす。私の能力下での昼と夜は、その二者がアナログに変化する一般的なもの。しかし閻魔が昼と夜を能力によって区別する場合、昼という塊と夜という塊に完全に二分してしまう。デジタルな変化しか許されなくなるのだ。その過程をすつ飛ばすような変化さえ許すのが閻魔の定義する境界。私が弄ることのできる境界を作ってくれないのである。

境界を作っているように見えて実際は曖昧にしているだけなのが私。閻魔の世界では曖昧が許されないから私とは相性が悪い。折角曖昧にした境界を彼女に定義されてしまうと私にとっては不都合で

しかない。

だから見かけた時にはすぐに逃げるのが常だったし今回も見つかる前にずらかろうとしたというのに……まったく、ついてない。

「丁度良い。八雲紫にも言っておきたいことがあったのです。貴方はいつも私を見るや姿を消してしまいますからね」

よく見ると仁王立ちしている閻魔の後ろにさとりが正座させられているのが分かった。今にも口から魂が抜け出していきそうに白目を剥いている。さとりがここまで酷い有様になっている事からかなりの長時間説教されていたのだろうという事が容易に想像できるというものだ。同時に次の照準が自分に合った事への恐怖が生まれるわけだが。

「貴方はいつもいつも私を見るたび脱兎のごとく逃げているでしょう。そのくせやらねばならない結界管理となれば己の式神に大方任せて自分は寝ていたりする。そう、貴方は少し怠惰がすぎる。古明地さとり、貴方もですよ。怨霊が逃げ出しているのはあの火車が管理しきれないほど多くの面倒を見させている貴方の責任です。そこに自分の都合など関係ありません。与えられた仕事、引き受けた仕事はきちんと責任を持って行うべきもの。部下の失態は上司の責任です」

「お、じゃああたいが昼寝をしても映姫様の責任になら……きゃん！」
正直助かった。どこから入ってきたのかはあえて聞かないけれどこのタイミングで来てくれたのは非常にラッキー。閻魔の長い長い説教をさらに長引かせることにならないのであればこのサボリ神は意外と優秀である。閻魔に遠慮なく口答えできる数少ない人物の一人だから。

「小町……貴方も私の説教を聞きたいの？」

「いやいや、違いますよ。そろそろ交代の時間なんで呼びに来たんです。映姫様も裁判に遅れたくないでしょう？」

グッド。いや、今回はこの死神がいい仕事をした。二交代制の良い所は説教の時間が確実に有限であることだ。さとりは恐らくその時間いっぱいくらいまで説教されてきたのだろうが私はまだ来てすぐ。私の来るタイミングがもう少し遅ければ鉢合わせずに済んだと

考えれば少し残念だが、鉢合わせてもこの程度ならばまだ耐えられる。

既に意識が行方不明のさとりにには申し訳ないけれど私は心から死神に感謝しておこう。

「おや、もうそんな時間だったんですね。八雲紫、古明地さとり、次は是非もう少しゆっくりお話ししましょうね」

流石裁判長。事実上の死刑宣告のような言葉を残して二人は瞬間移動してしまった。

閻魔の死神が帰ってしばらく、気絶しているさとりを眺めている私という歪な構図が火車の誤解を生んだりしたがそれを何とか解いて、当のさとりとそのペットは朝食を食べに行ったというのが現在の状況である。

私も朝食と一緒にどうか、と誘われはしたが丁重に断っておいた。私がいたら食卓が微妙な雰囲気になる事間違いないだし、今はなんとなくあの地獄鴉に会いたくなかったからだ。

それにしてもさとりの部屋はいつ来ても本だけが多い。本と紙、インクやペン類以外の物がほとんど無い。仕事も趣味もこの一部屋で全て完結してしまえるようにだろう。彼女が地霊殿に缶詰になる前からこんな感じだったような気がするので、彼女にとっては外に出られるも出られないもほとんど関係なかったのだろう。だからこそ自身の死の偽装をあれほど簡単に飲んだのか。

それ以外にこの部屋にある物といえば寝具と簡単な紅茶セット、それと額縁に飾られた数枚の絵くらいのものだ。

その絵の中でも最も古いのはさとりが火車と旧都を見て回っている物。まだ彼女が旧都に行けていた頃を描いたこの絵は二百年ほど前からずっと飾ってあるような気がする。この部屋にある絵を描いたのは確か全て橋姫だったはずだ。さとりは絶望的に絵が下手だったはずだから。

飾ってある絵のほとんどはさとりではなくペットたち。さとりが

描いてあるのは先ほど述べた絵と集合写真のような大きな絵の二枚だけ。こいしが描いてあるのはその大きな一枚絵にのみ。

これが私にはずっと不思議だった。何故さとりはこいしよりもペットの絵をたくさん飾っているのか。いつだったか聞いてみたことがある。その時には確か『絵の中にいないからこそ、もしかしたらそこにいるかもしれないと思わせてくれそうじゃないですか』と言われたっけ。

姿が見えないだけで実は全ての絵の中にもいるかもしれない。さとりはそう思うために敢えてほとんど描いてもらっていないのだという。確かにあの子の事だから何処かで見つめているのかもしれない。それでも絵の中にさえそれを求めてしまおうさとの如何に悲しい事か。

机の上にも一つ小さな写真立てが置いてある。入っているのは絵ではなくこの部屋唯一の写真。写っているのはピンボケだが見る者が見れば辛うじてこいしとフランドールであることが分かる。最近の文々。新聞から切り抜いたものなのだろう。なんだかんだ言っさとりもこいしの写真を常に目に付くところに飾っているのか。

「ああそれは二月前の新聞から取って来たものですね。あれを期にあなたの子にも友人ができないものかと思いましたがねえ」

気が付けばすぐ後ろにさとりが立っていた。もう朝食を食べ終わったのか。この部屋には時計が無いから慣れていないとそのあたりの感覚が狂ってしまう。

「まああの子の性質上仕方ありませんかね。さて、今日紫さんがいらっしやった理由は？」

机の上に置いてあった数枚の紙とペン及びインクを仕舞いながらそう尋ねてくる。私がここに来た理由はどうせさとりにも明白であろう。

「例の木片のこと」

「そうでしょうね。昨日貴方に渡して昨日取り返したんですからそこを疑問に思われても不思議ではありません。あれが異変解決の鍵になると言ったのは他でもない私です。しかし今回の異変は完全に

解決させない方が良くと私が勝手に判断したので一部回収することにしたんです」

この木片が幻想郷中を震わす異変の原因になっているのは既に証明されたし、力を上書きしてしまえば見た目だけではなく効力も完全に消えることが分かっている。今さどりの手の中にあるのは既に何の力ももたない木片。何故そんな物を求めたのかが分からなかったからこうして訪ねてきたのだ。

「これにはもう力がない、と思っていませんか？」

「あら、違うのかしら？」

「はい。確かにもうこれには正体不明の力も酒の価格を上げていた力も付与されていません。しかしそれらとは全く関係の無い力……法力が籠められているんです。力のある妖怪にとつては取るに足らないような微小なものですがね」

そう言えばさどりはそのあたりの力にも敏感だったつけ。それにしては法力……法力か。こうして隔離されてからは忘れてしまったような力だ。霊力とも神力とも異なるもので使えるのは仏僧たちのみ。神道ばかりだったこの地にも仏教が入ってくるか。

「私にはこの法力に心当たりがありませんね。ごく最近まで地底に囚われていた舟幽霊や入道使い、彼女らはある僧侶を救うために地上へと出て行きました。正確には宝船と共に地上に打ち上げられたんですけど。これはその宝船の欠片。そう紫さんにも説明しましたね？」

あれは本当に宝船の破片だったのか。てつきり霊夢たちをやる気にさせるための方便か何かだと思っていた。

「彼女らが宝船をある程度修復させると籠められた法力が働いて僧侶の元にたどり着くはずです。彼女らの発言からしてこれは間違っていないでしょう。問題はその後。完全に修復させてしまうと僧侶が完全な力を持って復活するかもしれない、という事を私は危惧しているのです」

「それにどこか問題が？ 仏教が神道を押しのけると？」

「いえ、それは別に私には害が無いので。彼女らが救いに行ったのは過去に人間によって魔界に封印されたという大魔法使いでもありま

す。もしかしたら人間に強い恨みを持っているかもしれない。そんな者が完全体で復活すれば人妖のバランスは崩れるかもしれない。彼女を慕っていたのは悉く妖の類でしたし」

なるほど。僧侶であるが同時に魔法使いでもある、か。人と妖のどちらに味方をするかによって対応は大きく変わるだろう。

それにしても魔界に魔法使いを封印するとは地獄に鬼を封印するのと同じ。親和性がある分封印自体は簡単だが、中で成長すれば手に負えなくなるほど強くなることもある。その可能性を度外視してまで封印された僧侶。確かに危険だ。

「これらは何処まで行っても私の推測の域を出ません。魔界にいる僧侶の封印が解かれるところまでは確実にしようけれど、それ以降はその僧侶次第です」

「えらく詳しいのね。貴方が彼女たちの脱出の手引きをしたとかではなくて？」

少し揺さぶってみる。実際に話を他の者から聞いただけではそこまで詳しい情報は得られまい。何か彼女たちと強いパイプがあったと考えるのが妥当。むしろそうでもなければ彼女らの計画が全て筒抜けになっているということ、今回の大掛かりな異変に対して管理がお粗末すぎると言わざるを得ない。

「実はこの宝船の破片が不思議な力を秘めていたことも知っていたのではないの？」

さよりの目が泳いでいる。明らかに指摘されなくなかった様子だがここまであからさまに反応するのも珍しい。慌てているふりをし、逆に私を泳がせている？

しかし私が思案している間もさよりの気まずいような表情は変わらない。じつと見つめられている居心地の悪さからか、さよりは漸く意を決したような表情をすると大きく息を吐きだして話し始めた。

彼女らは間欠泉が噴出した時に勝手に勝手に出て行ったのだが、さより自身が地上に送り出した彼女らの協力者もいること。木片に付与されていた能力はその協力者の手によるものであろうこと。

「私は彼女の事が好きではありませんし彼女も私の事は嫌っています

が協力者であったことは認めますよ。異変解決者が彼女の能力を追っている以上どこかで戦う事にもなるでしょう。私では到底彼女の事を形容できませんのでそこで知ればいいと思いますよ。鵜、大妖怪の一角です」

かつて平安京を恐怖に陥れた妖怪だったか。正体不明こそをアイデンティティとする妖怪で、実際に本来の姿を見た者はいないと言われている。人によって違った姿を見せるという事は非常に捕捉しにくいということにもなる。

鵜が大妖怪として恐れられたのは最も単純な正体不明への恐怖を煽ることができたから。隣にいる人が本当は鵜かもしれない。人間不信をも加速させる能力は幻想郷の人里にとっても非常に厄介になるだろう。

「結果論ですが鵜の協力があったからこそ彼女らは解決者にそれとなく木片を集めさせることができたのでしょう。船は必ず魔界に辿り着きます。人間が空飛ぶ船を止めることは不可能ですからね。法力で守られている船に我々妖怪が干渉することも不可能です。我々にはもう聖人の復活を止めることはできません」

だからこそその木片一つだったのか。復活を妨げることとはできなくとも万全で復活させないように。確実に人間側が打ち倒せるように。

本当にこの小さな欠片で何かが変わるかは分からない。誰も保証してはくれない。もう一度封印することになるのか、それとも共に幻想郷で暮らす者となるのか。まだ何も分からない。

落ち込む大妖怪

さどりの見立て通り、ナズーリンや寅丸星をはじめとした聖輦船乗組員によつて聖白蓮は長年の封印から解かれた。正確には霊夢たち人間の協力があつたからこそ白蓮を解放することができた。尤も人間側は協力したつもりでもなかつただろう。だが彼女らが集めた飛倉の破片が白蓮の解放に必要な不可欠なものであつたことは疑いようもない事実なのだ。

知らぬ間に妖怪に味方をする者の復活の片棒を担がされていたことを知つた霊夢は不機嫌になり、復活した者が魔法使いであつたことを知つた魔理沙は興味を持ち、それまで妖怪と連戦してきた早苗は何か新境地を開いたようであつた。

三人がそれぞれ違う思いで対峙した白蓮戦。流石の大魔法使いでも三人相手にスペルカードルール下での戦いを挑んで勝とうというのは些か浅慮だつたと言わざるを得ない。

初戦でありながら霊夢たちに苦戦を強いたというのは白蓮のセンスだろう。だが、結局は経験と努力の差が大きく響く形となつた。

白蓮が敗れ、聖輦船が命蓮寺として運営を始めることで異変は終了したかのようになつた。人里には活気が戻り、適正価格になつた酒を買いに来る妖怪たちも次第に戻つて来た。数日も経てば以前までと何ら変わらない平和な人里がそこにはあつた。

しかしその平和に納得できない者が一人。

「だーれも私の正体不明に腰を抜かさななんてつまらないわ。私のおかげで僧侶が救われたといつても過言じゃないのにあいつらは感謝の一つもしやしないし」

封獣ぬえである。彼女はもとより白蓮の復活に協力するようにさとりから指示を受けており、彼女にしては珍しくその通りに行動していた。さどりのことは大嫌いなぬえだが再び地上を拜めたのは彼女からの貸しがあつたため。小さな借り一つ返さずして何が妖怪か、というプライドがあつたからこそ逆に素直に行動したのだつた。

指示通りに彼女なりのやり方で異変の規模を大きくし、解決者が元

凶に迫り着くよう仕組んだ。ぬえは村紗たちの話を盗み聞きして、どうすれば白蓮が復活するのかを知っていたからだ。全てを理解できずとも大雑把な流れを理解すれば白蓮は復活させられる。それさえ終われば彼女は何にも縛られることが無くなるのだ。

彼女は船をバラバラにして正体不明の種を仕込み不思議なものに群がる人間の習性を利用してそれを一か所に集めさせた。本来ならば船の欠片を幻想郷中にばらまく必要すらなかった。ただ静観していれば勝手に白蓮は復活してくれただろう。

しかし彼女はそんな退屈な手段を好まなかった。ただ平凡に過ごすだけの日常のどこに面白みがあるうか。どうせなら自分も一枚噛んでやろうと思ったのがこの異変の始まりだったのだ。

白蓮は確実に復活させなければならぬが事を大きくして幻想郷中を震撼させてみたい。その結果が例の木片である。

実はこの木片、正体不明の種の他にも酒の売買を抑制させるような術が仕込まれていた。様々な妖術を使いこなす彼女は流石長年を生きた大妖怪らしい。後にその規格外さが紫や隠岐奈からひどく警戒される事にもなるのだがそれはまた別の話。

宝船をバラバラにするだけでは単なる邪魔でしかないが、この術を仕込むことよって村紗たち仏教徒へも貢献したことになるだろうという彼女なりの自己満足だった。とはいえその術しかかけなかったということは、ぬえが仏教に対してその程度の知識しか持っていないということでもあるのだが。

彼女の術は正常に働いた。酒の売買は大幅に減り、禁酒が当たり前になった。

結果だけを見れば彼女は目的のために非常に献身的に動いたし、白蓮復活にあたって大きな貢献をしたと言えるよう。

しかし彼女は報われなかった。自分の能力は人間相手にも驚かれることが無く、折角追加した妖術も誰にも気づかれることなくいつの間にか効力を失っていた。

誰もぬえの暗躍に気づくことは無い。昔ならばそれでよかったか

もしれない。妖怪の仕業だとバレてしまえば退治という名目で消されてしまっていたからだ。

だが現在の幻想郷はそうではない。よほど規則に反するような事をしなければごっこ遊びで勝負するだけ。負けてもそれ以上の事をされはしない。地上に出てまだ日は浅いが、ぬえはそれを理解していた。自分の存在が知れ渡っても構わない。真の姿さえ秘匿できれば正体不明は保たれる。

それに幻想郷が彼女を恐れるならば、という前提があることが彼女を苦しめた。過去都を恐怖に陥れた手法ではもはやこの人間は動じない。それほどまでに人間が妖怪慣れしている土地なのだ。

ならばどうすれば自分を恐れてくれるだろうか。そんなことを考えながら、彼女の身体は自然と知り合いのいる方へ向かっていった。

半刻ほど後、地底にある屋敷の一室では少女が頭を抱えていた。

「あの異常事態の真犯人は貴方だったんですか。私が出した条件は……ああ、覚えていたうえでの行動ですか。本当に質が悪い。あれのせいで地底がどれほど混乱に陥ったのか知っていますか？ 知らないでしょうね。敢えて内容を言う事はありませんが私が疲れてしまう程度には大変だったんですよ」

ぬえの話を聞いたさとりは当然初めに文句を言う。一応建前上は村紗たちに協力することを条件に地上へ出したのだから、彼女たちの計画を邪魔するように動いたぬえに呆れていたというのもあるのだろう。彼女の行動によってさとりが受けた精神的な被害も少なくない。

しかしさとりが本心から怒っているのかといえれば別にそうではない。なまじ他人の心が読めてしまう分、ぬえに特段の悪意があったわけではない事が分かったからだ。ぬえはただ単純に、彼女の恐ろしさを人間に知らしめつつ目的を達成したかっただけだった。

こういうのばかりだ、とさとりは思う。紫にしても映姫にしてもぬえにしても、悪意のほとんど無い迷惑が彼女を襲い続ける。彼女の心

労を慮ることのない波状攻撃が彼女を苦しめ続ける。

だがさとの疲労のピークが徐々に近づいていることには本人ですら気づいていない。それほどまでに彼女は疲労に慣れてしまっているのだ。彼女の周りにいるのが強者ばかりだということ、自分でできる仕事はあまり他人にやらせないことなどがその原因であろう。

その性格についてはお隣にも一度怒鳴られたことがある。ペットに怒鳴られるほど重症であり、その時はさとりもできるだけ他人を頼ろうと心に決めたはずなのだが結局はあまり変わらない。未だに地霊殿に舞い込む仕事のほとんどはさとりがこなしている。

疲れているのにそのように見せていないというわけではない。限界近くまで疲れているのにそれを自覚できないのだ。そのくせペットの疲労には気づいて休むよう言いつけるのだからまったく皮肉なものだと言わざるを得ない。

「私が疲れていることに驚いているようですが、別にそれほど珍しい事でもありませんよ。私は常に心労に苛まれているようなものですよ」

地底のトップが実は一番心労の絶えない地位であることを知っているのはごく少数に限られる。地上でも同じ現象が起こっていることを知っているのは紫によほど近い者たちだけ。地底と地上のトップ同士で胃薬同盟なる同盟を組むほどに他者からの胃への攻撃は激しい。なおこの名称を使っているのはさとりの方だけである

「それよりも貴方の事です。貴方の動機は分かりましたし不本意ですが納得もしましょう。しかし場合によっては私が今の貴方の願望を認めることはできかねます。単刀直入に問います。貴方は今度は単独で異変を起こそうというのですか？」

それがさとりにとって最も望ましくない展開だった。今までの不満をぶつけるために異変を起こすとすればルール外で戦いを挑む可能性もないわけではない。ぬえが元々地底にいた妖怪だという事が割れてしまえばとぼちちりを喰らうかもしれない。

そんなことは流石に御免だ。だからこそここでぬえに釘を刺しておかなければならないと考えたのだろう。

しかしぬえはそんなことを考えていない。そんなことをしても苦労と結果が釣り合わず、自分ばかりが割を食うであろうことは分かり切っているからだ。彼女はさとりが想像していたよりもはるかにしたたかな性格であるようだった。

「なるほど。彼女らの異変の後始末に乗じて自らを……。恐れてもらうのには一番手っ取り早いのは人間を殺すことです。これは今の幻想郷の規則的に難しいですがね。これでなくとも人間から恐れられる条件は存外に単純なものです。自らを認知させればいい。いつそのこと正体不明の仮面を脱ぎ捨ててもいいんです。貴方は誰よりも不気味な能力を持っているんですから」

人間は確かに正体不明に怯える。しかし此度の異変の時の正体不明は幻想郷の住人たちにとっては理解しがたいものであったり不明過ぎたりした。正体不明の物体にぬえの影を見ることができるものが一人たりともいなかったのだ。

さとりが言いたいのはそこをもっと明確にすること。ぬえが術を施した物であることを理解させれば恐れは自然とついてくるだろうということだ。幻想郷では「全く得体の知れない物」が溢れているがゆえにそれ単体では人々を脅かせることが難しい。

例えば吸血鬼が紅い霧を幻想郷中に撒いたとして、何も知らない時の人間はこれを異常気象か何かだと捉えるかもしれない。或いは誰かが悪戯にばら撒いたと考えるかもしれない。しかしこの段階では原因が一切分からず、幻想に慣れている人間は「不気味だなあ」で済ませてしまう。

ここで元凶が吸血鬼であると判明すると人間の中で犯人像が一気に明瞭になる。異常気象の可能性が消滅し、この広大な土地を覆うほどの霧を発生させることのできる存在、ここでは吸血鬼への恐怖を覚え始めることだろう。

ぬえは相手が自分を知らないからこそ本領を發揮できる妖怪であるが、幻想郷のような環境ではそれが枷になってしまう。だからさとりはそれを捨ててしまえばいいと言っているのだ。アイデンティティを失くせと言っているのではない。根底を変えずに、表向きの生

き方を変えろと言っているのである。

ぬえでなくとも幻想郷では生きるためにアイデンティティのほとんどを失っているような妖怪がたくさんいる。その最たるものは吸血鬼や人喰い妖怪の類だ。里の人間を襲えない彼女らは自らの存在意義をギリギリで繋いでいるだけ。それらに比べればぬえの直面している問題なんて小さなものだろう。

「ずっと正体不明でありたいならば貴方の居場所は何処にもないでしょう。外の世界で暮らして消滅を待てばいい。ですがそうではないんでしょう？ 地上で暮らしたいのならやはり生き方を考えなければなりません。貴方なら容易に答えに辿り着けるでしょう」

ぬえは言動が幼く見えることもあるが決して頭は悪くない。さとりや紫をさえ騙し通せたのは能力の強さだけではなく彼女の賢さあつてのものだろう。

「そうそう、地上に戻るならこれも持って行ってください。もう地底には不要ですから」

さとりから手渡された木片にはぬえも見覚えがある。ぬえはそれに正体不明の種だけを仕込むと地霊殿から去っていく。

その真意を唯一理解するさとりもやれやれと頭を振りながら自室に戻っていった。

大規模な異変はもう解決されたというのに安寧はまだ訪れなさそうだ。

ちからと力

平和になった人里に近頃とある噂が立った。毎晩丑三つになると不気味な声と共に大小さまざまな浮遊物体が現れるというのだ。しかも同じ日の同じ場所で複数人がそれを見た場合であっても人によつてそれが何に見えるのかが異なるという。

噂とは言うが実際のところは都市伝説に近い。そもそも丑三つ時なんて人間にとつては最も危険な時間帯であり、その時間に起きているような人間は普通いないからである。人によつて見え方が違うというのも灯り一つない夜中ならば別に不思議ではないだろう。

稗田家当主は少なくともそう考えていた。都市伝説に夢中になるのも悪くないがあまり熱くなりすぎると都市伝説が具現化する恐れもある、というのは過去の自分が既に証明してきた事だ。そうして生まれて定着するような妖怪は少ないものの、全くいないというわけではない。

妖怪を無駄に増やしても何の利益も無い。だから今まではてんで相手にしてこなかった。だがそうも言っていられない事情というのはあるもので、今代の彼女の友人がその話を出してきた時には注意せざるを得なかった。

彼女の友人というのは貸本屋の一人娘、本居小鈴のことである。表向きは一人娘としてよく店番を任されている快活な少女、裏の顔は人並外れた妖魔コレクターだ。小鈴がその手の話に食いつくであろうことは阿求も分かっていた。

そんな友人が今日もまた朝早くから稗田の屋敷にやってきた。阿求は朝から騒々しい小鈴に半ば呆れながらも手ずから紅茶を淹れてやるのだ。

「今日は店はいいの?」

「定休日。忘れたの? 阿求もボケてきたんじゃない?」

「ふふ、そうかもしれないわね。もうあと二十年は生きられないでしょう」

「御阿礼だっけ。私にはよくわからないわ」

「分からなくてもいいわ。小鈴はまだ十年余りしか生きてないんだし」

「阿求だって大して変わらないくせに」

「……そうかもね」

阿求にとつて軽口を叩き合える友人である小鈴の存在には大きく助けられている。阿求は百数十年に一度転生する御阿礼の子の九代目。前世の記憶もわずかながら保持している。

妖怪への対抗策として纏められる幻想郷縁起。その重要性故に御阿礼の子は非常に丁重に扱われる。実年齢的には大人であっても身体は子供。どうしても身体の方に精神が引っ張られてしまうこともある。そんなときに孤独でないというのは精神的な健康にも繋がるのだ。

事実、過去には箱入り娘として育てられたこともあったが、その代は二十を数える前に病死している。心の健康を考える上ではやはり他者との交流が大切なのだ。

しかし過去を振り返っても小鈴ほど稗田に近づいた者はいない。同年代だとはいえここまで遠慮なく踏み込んでくるような者は今までいなかった。それが阿求にとつては新鮮で嬉しかったはずだ。毎度毎度特別扱いを受けている彼女が初めて友人を得たのだから。同じ目線で話ができる相手が九代目にして初めてできたのだから。

小鈴は阿求を見た目相応の年齢として見る。阿求が前世、或いはさらに前の記憶から情報を引っ張り出してきたもそれを素直に信用しようとはしない。誰もが彼女を御阿礼の子としてフィルタを通すところを小鈴は通さない。そのフィルタを持たない。それが阿求には心地よいのだ。

あるいは小鈴は全てを分かっている自分を特別扱いしないのかもしれない。

阿求は時々そう思うことがある。というのも、小鈴は阿求のことを記憶力が良くて短命な一般人として扱うスタンスをほとんど崩さないのだ。まるで阿求を人間として見ることができるのは彼女だけだ

とでも言うように。

小鈴だけが阿求を等身大の少女として見る。そこに立場や能力は全く考慮せずに。

——阿求は今まで生きてきた中でこんなものを扱う妖怪を見たことあったりする？

だからこそ今回小鈴が持って来た物とそれについての彼女のそんな質問に、阿求は一瞬狼狽えてしまった。彼女が持って来た物は鮮やかな赤に光る円盤型のUFOだった。外の世界では未確認飛行物体としてSFや雑誌などに登場するそれが小鈴の手の中にあっただ。当然阿求は理解不能である。このようなUFOなど今代になって初めて知ったもの。いくら記憶を掘り返しても出て来ようはずもない。

小鈴は阿求を等身大の少女として見るが、阿求は自らを大きく見せるような言動を多くとる。今しがた彼女が狼狽えたのもそのせいである。小鈴にダサイ姿を見せるわけにはいかないという矜持が返事を遅らせた。

「どうしたの？ 阿求……あ、そっか。UFO使いなんて最新の妖怪は流石の阿求でも知らなくて当然か」

矜持。それは大いに思考の邪魔をする。今も阿求の頭の中では小さな葛藤が起こっている。

前八代を合わせれば既に二百年以上を生きている阿求にとって、その十分の一も生きていない少女からの『阿求でも知らない』という言葉は彼女の矜持を随分と傷つけた。

だがそれを顔に出すほど彼女は子供ではなかったし、短気でもなかった。平穩に、冷静に、ただ心を落ち着けるのに少々時間を要しただけで。

「そもそもUFOのことなら小鈴の方が詳しいんじゃないの？ ほら、鈴奈庵には外の世界の雑誌とか置いてたわよね」

記憶力に関しては阿求は絶対だ。彼女が言うのだから鈴奈庵にはUFOに関連する雑誌があるということである。おそらく香霖堂か

ら貰ってでもきたのだろう。

「言われてみればそうだったかも。……あれ？ 誰か来たみたいだけど」

「そう言えば今日だったわ。幻想郷縁起のために妖怪に話を聞かせてもらうけどせっかくだから小鈴も聴いてく？」

今代の阿求はこのような形態で縁起を纏めているが、先代までは人伝での噂、特徴を纏めるだけだった。阿弥までの縁起はそのような形態だったので確実性に大いに欠ける。それは阿弥の書いた慧音の項と実物の慧音を見比べても一目瞭然だ。

あまりに役立たない物を書いていたと自覚できた今代、人間と妖怪の距離が縮まったのをきっかけに妖怪からも直接話を聞くことにしたのだ。挿絵が入っているのもそのためである。

「私が聴いても良いような話なの？ 幻想郷縁起って阿求の一番大事な仕事だと思ってたけど」

「特に今日来られる方は特別危なくもないしむしろ温厚だと聞いているわよ？ 私の仕事だといっても別に秘密裏に行っているような事ではないし、製本した後は鈴奈庵でも写しをとることもあるでしょう？」

今日やってくるのは最近人里付近に寺を構えた仏僧、聖白蓮だ。妖怪を護るために動いていると言いつつ人間に敵対するわけでもない。全ての種族を分け隔てなく、広く受け入れる姿勢は人里でも噂になっており入信者も徐々に増えているらしい。

元々妖怪に興味のある小鈴は阿求の許可が出たので残ることにしたようだ。この決断が結果的に良い方へ向かったのだから運命は本当に読めない。

部屋に通された白蓮は、阿求の他に小鈴がいるという想定外の出来事に対しても全く動じることなく丁寧に挨拶して入ってきた。この辺りに彼女の人の良さが現れていると言えよう。相手が誰であっても基本的に対応を変えない。

そのまま小鈴を脇において始まった阿求の質問攻めに対しても真

撃に対応していた白蓮だったが、手持ち無沙汰になった小鈴が取り出したUFOを見るや否や表情が険しくなった。もちろん阿求も小鈴もそれに気づかない程鈍感ではない。

「このUFOがどうかしたんですか……？」

「UFO？ いえ、それはUFOなどではありません。あなた方からした未確認飛行物体unidentified flying objectという点で見れば確かにUFOなのかもしれませんが、私から見れば明確に識別可能な飛行物体です。あれは飛倉の破片です。ある程度歴史に造詣が深ければご存じかもしれませんね」

「飛倉？」

同じ言葉を発したが阿求は驚いたように、それに対して小鈴は頭の上に疑問符を浮かべている。妖魔本を好んで読む小鈴はそのような単語を今まで一度も聞いた事すらなかつたのだから仕方ないだろう。

「飛倉伝説ははるか昔の僧である命連に深く関係するものよ。実際に飛んだのは倉本体ではなく彼が使っていた鉢だと言われているけれど」

よくわかっていない小鈴のために阿求が簡潔に教えてやる。その伝説が作られた当時も数十年の誤差はあれど生きていた阿求。当然覚えていたのである。

「よく知っていますね。流石は噂に聞く稗田家当主。ですが間違いもあります。人々は命連を気味悪く思うあまり、倉という大きな物が飛んだという事実を包み隠しました。倉を飛ばすよりも鉢を飛ばす方がはるかに簡単ですからね。彼らは嘘を吹聴して命連の神聖さを奪おうとしたのです」

まさか、と阿求がつぶやくのも無理はない。何せ彼女は当時を生きていたにもかかわらず、そのような捏造されたという話をどこでも聞いた事が無かったからである。もちろん数代経る過程で切り落とされる記憶は少くないが、飛倉の話を知っているのにそれに関する正確な情報が欠如しているというのは些か不自然だろう。

完全に話についていけなくなった小鈴を置いて白蓮の話は続く。

「命連は非常に優秀な僧侶でした。彼の法力は一時的にはあります

が一般人にすら飛行能力を与え、身体能力を向上させます。そしてこの飛倉にもそれが込められていたんです。もう随分と時間が経ったのでそれほどの力はありませんが……小鈴さん、それを宙に放つてみてくださいませんか？」

小鈴が手を離れたUFOは重力に任せて落下するわけではなく空中に浮遊し続けている。阿求と小鈴からは本当にUFOのミニチュアが飛行しているようにしか見えない。

「それが命連の遺した僅かな法力です。私があの子を感じられる物はもう命蓮寺には残されていません。まだこの幻想郷を漂っている僅かな量の破片だけが彼の力を保存しているのです」

命蓮寺に残っているものなど本当にただ名前だけだろう。彼の遺産は白蓮の封印と共に全て消え去った。飛倉の燃料も既に全て白蓮の力に置き換わってしまった。ぬえが改めてばら撒いたいくつかの破片だけが命連の法力を保持している。

「失礼なことをお聞きしますが白蓮さんと命連さんはどういった関係で？ 先ほどから聞いているとどうにも他人とは思えないのですが」「ああ、言いそびれていましたね。命連は私の弟です。私は彼に法力を教わりましたし、彼を見て仏僧になろうと思いましたが。そして今の私が魔法使いとしてここにいるのも彼の影響です。死などという絶望を二度と味わわないために、私は不老不死となったのです」「人里での貴方は八苦を滅したとも称されているようですが？」

自分で聞いておきながら涙必至であるはずの白蓮の話に同情もせずに取材の方へ舵を切ろうとする様はいかにも阿求らしいといえげそうなのだが、弟の死まで掘り返された拳句大した反応も得られなかった白蓮は些可哀想である。

こういうところが阿求の冷淡だと言われる所以である。無駄に蓄えている知識から相手の話題に合わせながらも、あくまでも彼女の主な目的は失わない。それが非常に腹立たしく、手を上げようとする妖怪もいる。白蓮も内心では気を悪くしているだろう。しかし、それを表には出さない程度には彼女にも心に余裕があった。阿求の質問が、今日ここに来た目的と密接に関わるだろうことを理解できたからで

もある。

「八苦を滅したのは魔法使いとなつて後のことです。私は人間のうちにそれらを克服できるほど見上げられるような僧ではなかったのです。私が人間の頃に克服できたのは生苦、病苦、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦の五つだけ。その他は全て不老不死になつてようやく克服できました」

一度老いぼれた身体を魔法によつて若返らせ、死の恐怖を乗り越えた。五蘊盛苦も散々魔界に封じられているうちによりやく理解できた教えだ。人間として死を待っていたならばこれらの苦しみに打ち克つことはできなかつただろう。

白蓮は独自に苦を乗り越えて新境地を開いた。それは仏教の目指すところの一つであり、彼女自身の優秀さを証明しているといえるだろう。

しかし本当に彼女は仏教徒として正しいだろうか？

そうではない。白蓮自身もそれを自覚している。輪廻と転生。その二つから完全に外れてしまった彼女はもはや真つ当な仏教としてはいられない。

許されるために彼女は永遠にも近い年月、祈りを捧げ続けるのだろう。

「これで聞きたかつた事は大体聞き終えましたかね。お疲れ様でした」

「はい、そちらこそご苦勞様です。飛倉の破片は私の方で持ち帰つてもっ」

「ええ。元々貴方の所有物であるようですし問題ありません。しかし一言申し上げるとするならば、丑三つ時にそれをばら撒いて里を混乱させるのはやめていただきたいですね」

当然白蓮に心当たりがあるはずがない。破片を幻想郷中にばら撒いたのは彼女ではなくぬえだからだ。そして長い年月を地底ではなく魔界で過ごしてきた彼女はぬえの事など微塵も知らない。阿求と小鈴がUFOと呼称する理由も初めは分からなかつたくらいだ。

「私が？　あり得ません。何処かに命蓮寺の名を穢そうとしている不埒者がいるようですね。私の方でも調査して見つけ次第説教しておきましょう。仏様の教えは誰をも救ってくださいますから」

まるで自分にも言い聞かせるようにそう言うと彼女は席を立ち、一礼してから阿求の部屋を後にした。彼女自身に救いを見出すために。また自らの寺の名を穢そうとする者を改心させるために。

今日はさとりの日

人里で阿求と白蓮が話し合っている頃、ここ博麗神社でも気怠げな巫女と澆漉な魔法使いが談笑していた。

「霊夢は知ってるか？ 最近また例のUFOが頻繁に出現するようになったらしいぜ。それに今度は里でしか目撃が無い。なんだか奇妙じゃないか？」

「あーそれね。知ってる知ってる。人里から調査の依頼も来てたし……何？ 調査？ そんなのまだ行ってないわよ。里は少し遠いからね、買い出しのついでにでも行こうと思ってるわ」

あまりに暢気な霊夢の様子に魔理沙は思わずこめかみを抑えてしまった。先日大きな異変を解決したとはいえ、それに付随するような内容の異常事態が幻想郷に再び起こっている以上は即座に解決に向かうべきである。特に今回は人里への影響が出ているというのだから尚更だ。

しかし霊夢は未だに出発の準備もしていないありさまだ。巨悪に対する人里の平和はこのダラけきった巫女に左右されているというのに、本人が一番それを深く考えていない。

それは何故か。霊夢が即座に行動を起こすか否かは彼女が独自に定めている脅威度で測っているからである。紅い霧を出すことや満月を隠すこと、怨霊が湧き出ることなどは早急に対処しなければ幻想郷のバランスを崩壊させかねないものだった。逆に冬があれば延びたのは、寒くても生活できないことは無いからである。

これはあくまでも彼女の経験と勘による境界線の引き方であるが、今まではそれで問題なくやって来られたし、今後も長く利用されるものだろう。

だがそんなものを魔理沙は知らない。彼女の目にはただ人里からの要請を無視している怠惰な巫女の姿が映っているだけだ。霊夢の中の基準とはつまるどころ彼女のなかでしか基準として成立してないわけであって、そのラインがもう少し低く設定されている者からは、危険な域を超えてなお行動に移さないダメ人間と見られてしまう

わけだ。

魔理沙はそのラインを里の人間たちと同程度まで比較的低く設定している。それは彼女が人里の出身だからというのもあるのだろう。博麗神社に訪れる猛者たちの中では彼女が一番人間であった。

「そんなことだからこの神社にまともな奴が来ないんだよ。今までは神社が一つだったから良かったが、最近できた守矢に命蓮寺は既にくの信仰を集めているそうだけ？　これもきつと信仰への考え方の差なんだろうなあ？」

「あー、もう！　分かったわよ！　そうと決まればさっさと行くわよ」

霊夢にとって人里への脅威度よりも神社への信仰の方が行動の理由になる。元々少なかった参拝者が新興宗教団体の増加に伴ってさらに減ってしまう事を示唆すれば彼女は勝手に行動してくれるようになる。霊夢と古くからの付き合いがある魔理沙だからこそ、彼女の扱いは人並みをはるかに凌ぐほど手慣れているのだ。

もちろん、信仰に関する話題を出せば霊夢のやる気に変化する、というのは神社に度々訪れる妖怪にも広く知れ渡っていることである。しかし霊夢を素早く行動させるにはそれだけでは足りない。彼女の説得に重要になるのは劣等感である。

博麗霊夢は強い。妖怪からも人間にカウントされないほどにその強さは群を抜いている。だからこそ自分に自信を持っているしプライドも高い。他の人妖と魔理沙との相違点はその霊夢のプライドを傷つけることなく刺激できること。

強く責めすぎず、やんわりとライバルの存在を仄めかすに止める。霊夢が彼女らに劣っている、と直接的に言ってもただ単純に彼女の癪に障ってしまうだけ。その塩梅がなんとも難しいのである。

しかし魔理沙もそれを意識して発言しているわけではない。長年の付き合いの中でいつの間にか身に付いていた話法だ。魔理沙にとっては妖怪よりも怒った霊夢の方が数倍恐ろしいように感じているからである。

「ほら、魔理沙も！　さっさと準備しなさい。あいつらになんか先を越されないんだから」

もう手遅れだろう、という言葉を喉元で噛み殺して魔理沙も追従する。

丑三つ時にはまだほど遠い夕暮れ。博麗の巫女の重い腰はようやく上がった。

「早くも霊夢が動き出したわね。ただし解決はどうなるかしら。相手は平安の大妖怪でしょう?」

「ええ。封獣ぬえ……恐ろしい力を秘めた正真正銘の化け物ですよ」

博麗神社とは離れた場所である地霊殿。ここでも話し込む二人の姿があった。普段ならば紫が訪れてさとりが渋々ながらもてなすという形式で話し合いが行われているが、今回はさとりの方から紫を呼んでの話し合いである。

内容はつい先日再び小さな異変を起こすと勇んで出て行った封獣ぬえについて。どうせ巫女の前に敗北するだろうと高を括ってはいえるものの、一応地上を管理している紫には危険度の高い妖怪が出て行ったことくらい伝えておくべきだと判断したからである。

紫も鶴という妖怪を知らないわけではない。その昔、まだ紫が生まれて百年も経っていない頃に都で猛威を振るっていたとされる妖怪だからである。しかしその当時はまだ山奥の集落を襲っては人を喰うような生活をしていた紫にとって、その妖怪については噂以上の事を知らないのだ。

曰くその鳴き声は人間が病になってしまうほど不気味であり、鶴は丑寅の方角から煙に乗ってやってくる。見る者見る者が全て違う姿として喧伝するせいで誰も本当の姿を知らないとされる妖怪だ。

「それは彼女の能力の部分でしょう。能力だけでも確かに強力で恐ろしいものです。しかし彼女の本領はそこではありません。彼女の本当に恐ろしいところは様々な妖術を使いこなすことのできる器用さと妖力の量でしょう」

「妖術? 藍が使うような種類のものかしら? それとも妹紅が使うようなものかしら?」

「妹紅さんについてはよく知らないですが、少なくとも藍さんの使うようなものではありません。彼女が使うのは神の域にも到達し得る力……境界も後戸も、彼女は無意識のうちに利用しているんです。それだけに危険な存在と言えるでしょう。彼女はそれらを使うことはできても制御ができないのですから」

ここで初めて紫の背筋に寒気が走った。基本的にはスキマ妖怪としての自分しか弄れないような境界や、後戸の国の神である隠岐奈しか弄れないはずの扉すらぬえは無意識で利用しているのだということを知ってしまったからだ。

さとりが化け物と言いたくなるのも理解できる。一介の妖怪が、劣化版とはいえ紫や隠岐奈と同じ力をセンスだけで行使しているという事実。それだけで頭痛の種になるには十分だった。

「そんな危険な妖怪だと分かっている地上に逃がしたというの？」
「そうです。ええ、言いたい事は分かりますよ。彼女が地上で何かしでかした時の責任についてでしょう？ もちろん彼女が地上で何か深刻な被害を齎したならば責任は私に追及して頂いても構いません。彼女の心を信じてしまった私が悪いということでしょうから」

ぬえによる被害は全て地霊殿負担で賠償される。逆に言えば、彼女自身がどんなことをしようが自分への金銭的損害はゼロで済んでしまふ。

「ぬえ自身もそれを分かっています。彼女が何か過ちを犯せば私から彼女にきつい説教をすることも理解しています。彼女はきつとただ単純に人間を驚かせたいだけ。そこに明確な悪意など無いはずですよ」
あればそれを見誤ったさとのり過失である。さとりにも絶対の自信があるからこそぬえを送り出したのだろう。そうでもなければ、いくらさとり自身が彼女に嫌われていたとて簡単に地上に逃がしていいような妖怪ではないからだ。

紫もそれは理解できるのでそれ以上の追及はしない。罰する必要があるれば遠慮なく罰すればいいだけ。そこに私情を挟む余地などないし必要も無い。

「それが貴方の考えなのね」

「そうです。言うなれば私の運命を賭けた大博打ですね。私は自分の能力には絶対の自信を持っていますので」

さとりは自身の能力故に一般的な賭場では何も楽しめない。だからこそこのようなハイリスクな賭けであっても楽しめたりするのだ。紫はそんなさとりの様子に心の中で呆れながらも首肯する。さとりの能力の優秀さは紫も痛いほどよく知っている。それが運命を賭けるためのチップとして十分なのかどうかは知るところではないが。

復古令

霊夢と魔理沙が人里に到着したのは丁度逢魔時の頃だった。

そろそろ薄暗くなってきたいる人里では既に帰路についている者たちが多い。まだ仕事のある者や飲み屋に向かう者でもなければ、この時間以降は基本的に家に籠って妖怪の脅威をやり過ごすものである。

現在も例に漏れず、里は帰宅する人々で混雑している。それほど里を歩き慣れていない霊夢にとっては目当ての場所を探すのさえ手間取ってしまう。

「つとに人が多いわねえ。ただでさえ横道がたくさんあって面倒なのに」

「おい霊夢、そっちじゃなくてこっちだ。あの蕎麦屋を曲がったところ……だったはずだ」

魔理沙も里を離れて幾年が経過してしまっているので確実に覚えているわけではない。しかし彼女の薄っすらとした記憶は彼女らをきちんと目的地に導いた。

彼女らが初めに目指した場所は人里唯一の学び舎である慧音の寺子屋。つい数年前にできたばかりの施設であり、魔理沙が人里にいた頃にはまだ無かったものである。

運営しているのは半人半妖である上白沢慧音ただ一人。人でありながら妖怪でもある彼女は過去に差別的な扱いを受けたことも多々あったが、それでも人間好きを貫き通したような少し変わった半妖だ。酷い扱いを受けたのも数年などではない。阿弥の縁起にも書かれているほど昔、百年以上前からごく最近まで続いていた。

今では人里内で最も信頼されるようになった慧音だが、その裏にはそのような悲しい積み重ねがあったのだ。しかしそれすら知る者はほとんどいない。慧音が人里の未来のためにその歴史を書き換えたからである。その過去を知る者は慧音自身を除けば稗田と妹紅、そして紫の三人だけ。それ以外の者にとっては半妖でありながら人間から広く受け入れられている存在だと思われぬ。

「あ、あく……まだ子供たちの遊びを監督しているみたいだ。もう少し待つか？」

「そうね。団子でも食べながら待つとしましょう。魔理沙の奢りでね」

現在の時刻から考えてももうすぐ子供たちは家に帰って行くだろう。それならば一度神社に帰るよりも里で時間を潰す方が都合が良い。今の慧音も忙しそうには見えないが、それでも小さな子供たちの前で妖怪の話題を出すのはあまりよろしくないだろう。

二人は手近な茶屋に入って団子とお茶をそれぞれ注文した。これからの調査次第では今晚帰るのが遅くなるかもしれない、という霊夢の発言により団子の数が想定よりも多くなってしまうのはご愛嬌。自分の金でないのを良い事にたくさん頼んだ霊夢も霊夢だが、彼女の言葉にホイホイ乗せられてしまった魔理沙も悪い。

ほどほどに満足した霊夢と不満げな魔理沙。そこに帰宅途中の少女が一人声をかけてきた。

「あれ？ 霊夢さんに魔理沙さん？ こんな時間にこんな場所にいるってことは例の怪異の調査ですか？」

「ん？ 誰かと思えば小鈴じゃないか。んでその言い方、小鈴も何か知ってるのか？」

もちろんです！ と言って小鈴は二人に最近人里で起こっていることを話し始める。小鈴の話は概ね二人も知っていることだったが、UFOが丑三つ時にしか現れないこと、既に聖白蓮が解決に乗り出したことは初耳だった。

「丑三つ時にしか現れないってことなら目撃者は漏れなく酔っ払いなんじゃないか？ 何とも信憑性に欠ける情報だなあ」

先にも述べた通り、逢魔時を過ぎて外を歩き回るのは妖怪か酒場に向かうような者だけであり、しかも健全に酒を呑む者は日を跨ぐような真似をしない。本来最も危険な時間とされる丑三つ時に外を出歩いている時点で泥酔しているのはほぼ確実。その情報に信憑性も何も無いというのは誰の目から見ても明らかなのだ。それでも現在人里で話題になっており、博麗の巫女にまで話が行っている理由は単

純。目撃者が非常に多いから。それだけである。

「私も頑張つて起きて一つ拾ったんですよ。もう白蓮さんに返しましたか」

「小鈴ちゃんも？ そんな時間に起きてたら妖怪の餌食になるわよ？」

「おい霊夢、そんな心配している場合じゃないだろ。小鈴も見たつてことでこの話には一気に信憑性が増したんだ。夜更かしは決定だぜ」

なんとも非情な物言いにも聞こえるが、出回っていた情報がデマではないということがここで初めて明確になった。情報提供には感謝すれども解決のための準備に小鈴は邪魔となる。気が急いでいたせいで些か無遠慮な言葉になってしまったが、別に魔理沙に悪気があったわけではない。

それよりも霊夢が気になったのは小鈴の口から出た白蓮の名だ。小鈴と彼女には特に繋がりなど無かつたはず。それでも小鈴がUFOを飛倉の欠片として認識し、正確に白蓮に返しているという事実が引つかかった。

「さつきまで阿求のところに行ったんですよ。阿求が白蓮さんを選んでみたいで、私も少しお話したんです」

小鈴に聞いてみるとそんな答えが返ってきた。なるほど幻想郷縁起に関する事か、と霊夢も魔理沙も心当たりを辿る。その会談の場に小鈴がいた理由は分からないものの、それならば小鈴が白蓮に会ったということにも然したる違和感は無いらしい。

癪なことに、小鈴が白蓮の話信じているであろうことは二人の目からも明らかだ。とは言え白蓮の人当たりの良さを考慮すれば当然の事ではある。

癪だと思ってしまうのは二人の心が汚れているからなのだが、そんなことを指摘してくれる性悪な妖怪もここにはいない。

小鈴と白蓮の事について考えを巡らせていた二人はしかし、次に発された小鈴の言葉に固まるしかなかった。

「そう言えば白蓮さんもこの怪異の解決に参加してくれるらしいですよ！ 良かったですね！」

そう、小鈴をはじめとした里の人間たちにとっては、誰がこの不気味な異常を解決してくれても有り難いことだ。異変解決をした者がたとえ妖怪であっても、それで人里への脅威が去るならば等しく益となる。

つまるところ、今の小鈴にとっては白蓮と霊夢たちがまるで異変解決をする仲間のように見えているのである。

しかし実際には当然そうではなく、特に霊夢にとって白蓮はただの商売敵に過ぎない。魔理沙の方は異変解決者としての新しいライバルとして好意的に彼女を見ているようだが、いずれにせよ仲良しこよしで解決しようなどという考えは持っていない。

白蓮が異変解決に参加することは少なくとも二人にとっては良くないことだ。

そんなことを知らない小鈴は白蓮から聞いた話を嬉々として二人に話す。二人にとっては苦痛でしかない時間だが、何も知らずに良かれと思つて話している小鈴を無下にすることもできない。どうしようもない感情に板挟みになつてしまった二人は、ただ小鈴に適当な相槌を打ち続けるしかなかった。

そろそろ家に帰った方が良く、小鈴を帰らせた後、二人は茶屋を出て寺子屋に向かつていた。あまり長居すると店主に叱られるから、という理由も無きにしても非ず。

「あいつも来るつてのは少々厄介だな。飛倉の破片は元々あいつの物だ。さつさと回収されると犯人までたどり着けない可能性もあるぜ」
「魔理沙……あんた小鈴ちゃんの話聞いてなかったの？ あいつは不届き者を懲らしめるために解決するつて言つてたじゃない。少なくともUFOを集めて終わりとはならないはずよ」

だからこそ厄介なだけけれど、呟く。白蓮は不届き者を懲らしめるという名目で動いているものの本質的には妖怪の味方。霊夢たちと

は全く相容れない信念で行動する。霊夢たちがいざ妖怪退治を行おうとした時に邪魔になる可能性が極めて高いのだ。

霊夢にとつては白蓮がさっさと帰ってしまった方が楽である。最悪三対一が二対二の構図に変わる未来まで見えてしまっているからだ。そうなってしまうと手間が増えるだけでは済まないだろう。

魔理沙の方もその可能性に気づいたらしく、顎に手を当てて少し考えられるようなポーズをとる。白蓮が元人間だと言えども現在は妖怪に味方する存在だ。先日だって妖怪を退治して進んで行った二人をそれだけの理由で非難した。今回だって本当に異変解決に注力してくれるとは限らない。

爆弾を抱えたまま解決に突入するくらいなら初めから来ないように仕向けることはできないだろうか。そう考えるものの、結局は『難しいだろう』という結論に落ち着いてしまう。今回の一件で迷惑がかっているのは白蓮側も同じこと。来るな、とは言いがたい。

「ま、とりあえずは慧音に目撃の多い場所を聞いてみるしかないわね」
ようやくたどり着いた寺子屋は既に一室に灯りがついていただけになっており、そこに慧音がいるであろうことは容易に想像がつく。迷惑を顧みず声掛けもせずにサツと開いた障子の先には慧音の他にも見知った人影があった。

「げっ、よりにもよってなんであんたがここにいるのよ」
「あらお久しぶりですね、霊夢さんに魔理沙さん。私がおりにいる理由を敢えて説明するまでもないと思いましたが人里の事ならばこの方に聞くのが一番手っ取り早くて確実でしょう？ 現に阿求さんにもそう助言されましたので」

白蓮が慧音と話すためにここに来ていた。

彼女は人里はおろか幻想郷の中でも新参だ。分からないことがあれば先人にすぐ聞ける素直さも持っている。人里の事が知りたければ阿求か慧音に聞くのが一番早いというのも人に聞けば教えてもらえることだ。白蓮がここにいるのは本来何もおかしなことではない。にもかかわらず霊夢がこのような反応をしたのは、白蓮に邪魔されずに事を収束させるという彼女の中での目標が事実上達成不可能に

なつてしまったためである。会つてしまつた以上、目的が同じである彼女と行動を共にしようとするのはむしろ不自然だ。

「まあまあ、二人とも落ち着け。お前たちもここに来た目的はこの僧侶と同じなんだろう？　だが残念ながら私も詳しくは知らないんだ。満月の前は普段以上に忙しいんでな」

事情を知らない白蓮のために慧音が自分の素性を交えながらよく知らない旨を語る。人里で半妖が普通に生活していることに感動している白蓮を見るに、阿求からそのような説明は受けていなかったのだらう。慧音は嬉しそうだが純人間の二人は呆れ顔である。

「慧音が知らないんならもうここにいる意味はないわね。邪魔したわ」

まだここに来て二分と経っていないのに霊夢が寺子屋を出るのに続いて魔理沙も出る。あわよくばここで白蓮を置いて行けないかという考えもある。しかしその希望も儂く、白蓮も慧音に一言礼を言う二人について外に出てきた。

「人里のことはまだよく知らないので教えてくれませんか？　丑三つ時まで時間はありますし」

「私眠いから一旦仮眠とりたいんだけど」

「あら残念。ですが仮眠なら命蓮寺の一室をお貸ししますよ。ここからもすぐ近くなので」

霊夢の考えている以上に白蓮は善人だった。無理矢理別れようとしているのに、それを気にも留めず親切な提案をされてしまう。しかも断ろうにも特に理由が見つからないので断れない。霊夢は早くも白蓮を面倒な同行者に認定した。

結局時間が来るまで魔理沙に白蓮の相手をさせて自分だけ寝ることにしたようだ。こんなことを普段からしているから他人からの信用は上がらないし、他の神社や寺に人気を奪われるのだが本人はまるで気づいていないようである。



「今代の巫女はまあ何とか威厳が無いわね」

紫さんの映し出す映像を見ながらそう独り言ちる。妖怪の棲みつくお寺で何の警戒も無しに寝てしまふところがお気楽というか能天気というか。

「良くも悪くも今の幻想郷は平和すぎるのよ。先代以前の巫女ならばいつ妖怪が暴れ出すとも限らない夜中に熟睡なんて到底できなかったもの。妖怪と一つ屋根の下というのも有り得ない光景だったわ。スペルカードルールの制定、その遵守があつてこそその今」

地上の事はやはり紫さんが詳しい。誰よりも過去の巫女を見てきたであろう妖怪だからこそ彼女の言う事は十分信用に値する。

彼女の言う通り、今の幻想郷は数十年前に比べれば格段に平和になったと言える。しかし逆に平和ボケし過ぎているとも言える。妖怪退治の巫女が妖怪寺で眠るなど本来あつてはならないようなこと。人間にとって妖怪とはそこまで信頼してはならない存在のはずだ。

「霊夢はスペルカードルールにおいては最強に近い。でも実戦になったら？ 先代までは奥の手を使わずとも鬼と張り合えたかもしれない。でも霊夢は違う。反則的な奥の手こそ持っているものの、それ以外の部分で先代には決定的に劣っている」

「あの子は天才。前に紫さんはそう言つてませんでした？」

「ええ、確かにあの子は過去類を見ないほどの才能も霊力を持っているわ。でも違う。力の籠め方がスペルカードに縛られてしまつている。あれでは強力な妖怪を怯ませることはできても殺すことは難しいでしょう」

人、妖の双方を護るためのルールは博麗の巫女という幻想郷の歯車を完全に狂わせている。その歯車が失われてもルールが残る限り、幻想郷は今の形を保ち続けることができるだろう。

「この状態が続けばいつかは博麗そのものが不要になつてしまうのではないですか？」

「そうはならない。幻想郷がある限り博麗の巫女は継承されるわ。問題は博麗という存在そのものが妖怪の娯楽へと変貌してしまう事。

博麗に解決させるために異変を起こすような者が現れてしまった以上、その辺りについては慎重に検討しなければならないでしょうね」
紫さんが天人に対して珍しくキレた原因の一つはそれなのかもしれない。強い妖怪たちの道楽のために博麗が使われる。それこそ幻想郷のバランスの崩壊を意味する。

博麗という存在の形骸化を防ぐためにも、まずは博麗霊夢自身が妖怪との付き合い方を考えなければならぬ。今の腑抜けきった幻想郷を引き締め、正す。それができるのは魔法使いでも余所の巫女でもない、博麗の巫女たる彼女唯一人だけだ。

活躍する勝つ役と喝役

「貴方が思う博麗の巫女とはどういうモノですか？」

魔理沙が人里のことをある程度話し終えた後、小休止を挟んでから白蓮が次に魔理沙に問いかけたのはそんな質問だった。白蓮にとってそれは単なる問いかけだ。「魔理沙が自分の友人をどう思っているか』ではなく『魔理沙が博麗という存在をどう思っているか』という、新参ならばまず知っておきたい幻想郷での博麗の位置づけに関する質問。

だからこそ博麗霊夢という名ではなく博麗の巫女という役職で質問をしたし、魔理沙もきちんとその意図を酌むことができた。

しかし魔理沙にとってこの質問はなかなか回答に困るものである。普段から霊夢を霊夢として見ている魔理沙にとって、彼女を巫女として見た時の位置づけをあまり意識していないからだ。それでも分かる事はある。

「博麗の巫女ってのは誰からも恐れられる存在だ。妖怪からも、人間からもな。そりゃそうだ。およそ人間とは思えないような人間なんだから恐れられない方が不自然だろう？」

魔理沙にとって博麗の巫女は精神が異常に強靱な者になる職だというイメージがあつた。人里への脅威を追い払っても感謝はされど受け入れはされない。それを知っているながら人里を護らなければならぬという使命を背負って彼女らは生きているのだ。

魔理沙にはそんなことが耐えられなかった。受け入れてもらえないと分かっているながらそいつらを護るなどという事が彼女には到底できそうになかった。精神がよほど強靱でもなければそれに耐えかねて自ら命を絶ってしまうこともあるだろう。博麗とはそれに耐えられる者だけがなれるのである。

「なるほど……あまりにも人外めいた力を得ることで同じ人間からも恐れられているのですか。私にも痛いほどよくわかる辛さです。私はそれに耐えられなかったので敢えて封印されるという手段をとりましたが」

「そうだったのか？」

「ええはい。時間を待つ間にひとつ、私の過去のお話でもしましょうか」

くく回想くく

聖白蓮は元々ただの人間であった。弟の命連共に山奥で毘沙門天を信仰する生活を送っていた。

当時の人間たちは白蓮と命連がバラバラに暮らしていたかのように描いたが、これは共に暮らしていたという事実を知らなかったからである。命連の死ぬ間際まで、白蓮は人前に姿を現さない生活をしていたので知らなくて当然であろう。

白蓮は命連から法力の扱い方を教えてもらい、数年をかけてそれを会得した。白蓮が尼僧として本格的に歩き出した瞬間である。

無我を見つめて十数年。悲劇は突然に訪れた。命連の死である。この時点で白蓮も命連も七十に近く、時代を考えればかなり長生きだったといえる。しかし、この弟の死が白蓮を変えてしまった。

老いを自覚してしまったのだ。死を恐れてしまったのだ。仏教に身を浸しながら、彼女は死の先を見つめることができなかったのだ。死を恐れた彼女はそれを回避するための手段を探した。

一つは妖怪となること。寿命はあれどほとんどないようなものだ。
一つは仙人となること。死神を追い払えさえすれば死は訪れない。
一つは魔法使いとなること。妖怪となることの延長線上でもある。

最も確実に簡単なものは初めの選択肢だろう。妖怪へと至るには長い修行も鍛錬も必要ではない。しかし人間としての形を捨ててしまふのは彼女の望みではなかった。

最も難しいのが二番目の選択肢である。もはや仙人へと至るための修行をする時間さえ彼女には残されていなかったからだ。年下である命連が死んだことから、彼女の死期はかなり近づいているのが確実だった。

結果として最も現実的となったのが最後の選択肢になる。とはいえ当時の日本には魔法使いなどいなかった。直接西洋と交易をして

いたわけでもなく、その手の道具や書物は中国からしか入手ルートがなかった。当然何の権力も無い白蓮にそのルートを開拓できるはずはない。

心優しい仙人がいなければ彼女は人間のまま腐ってしまったであろう。運命が彼女に味方した。大陸出身だという見ず知らずの仙人は白蓮のためにできる限りの資料を集めてくれたし、年を取った彼女にできる限りの世話を焼いてくれた。

なんでも、白蓮が弟子にそっくりだったかららしい。優秀な人材をそのまま腐らせてしまうのはもったいないということだった。

くくく

「その方の事を私はよく思い出せません。若返りによる記憶障害では説明がつかないほど他の記憶は残っているというのに、その方の記憶だけがほとんど抜け落ちてしまっているんです。ある特定の記憶だけを処理するなど魔法でもおよそ不可能なことなので信じがたい事です。彼女がいなければ今の私は無いんです。封印が解けた今の私の一番の目標はその仙人を探して礼を言うことなのです……あら、こちらも寝てしまっていましたか」

抑揚のあまりない白蓮の語りには魔理沙も耐えられなかったらしい。白蓮が本題として残していた、魔界に封印された理由は結局話されることなかった。

それでも白蓮は満足している。彼女が人間として生きていたころには無かった博麗という存在。その一端を知ることができただけでも収穫はあったというものだろう。

満足感と物足りなさの両方を感じながら、白蓮はそっと部屋を後にする。誰をも起こさぬようひっそりと彼女は寺を出た。



紫さんとともに地上の監視を始めて数刻。そろそろ丑三つ時だと

いう頃によく動きがあった。

「あれです。あれがぬえですね」

「あれが……文献で見たものとは随分と姿形が異なるようだけれど。そもそも獣の形をしているわけでもない」

人里によくやく封獣ぬえが現れた。誰にも見られていると思っていない彼女は本来の姿を私たちの前に晒している。歪な羽が真っ暗な中にぼんやりと輪郭を残している。色は確か青と赤。

「人間が彼女を見るときはほとんどの場合正体不明というフィルタを一枚挟むことになりますからね。今の彼女は油断していますが、ここから誰かが現れれば姿は変化するでしょう」

フィルタを素通しして見えてしまう私には全く通用し得ない能力。私が彼女を恐れる理由は単純な強さだけだが、他の者にとってはその能力こそが恐れる一番の理由になる事だろう。当人にとっては対峙しているのがぬえ本人であるのかどうかすら分からないのだから。

不思議な力で浮遊している宝船の欠片はUFOに見えてしまう。飛ぶ鳥すらも彼女の能力にかかればUFOに見えることがあるだろう。彼女の能力の汎用性はかなり高い。人間に種を仕込むと、他人からは必然的に異形に見えてしまう。やろうと思えば同士討ちすらも誘発できるはずだ。

愛犬や愛馬、愛する人……その全てを彼女の手を汚さずに処理してしまえるかもしれない。物ではなく動物に種を仕込む時には何かしらの制約があるのかもしれないが、それができるかもしれないという最悪の想定くらいはしておいて損はない。楽観視できる程私の頭は都合よくできていないし、彼女の能力について分かってもない。

もちろん強力な能力であるためにそれなりの枷はついているはずだ。基本的には読心は表面しか読み取れない。境界は時を越えられない。そんな風な枷が彼女にも必ずある。問題はそれがどんなものか予測できないことだ。

私には彼女の能力が効かないために、彼女の能力の本当の恐ろしさを知ることができない。

あるいはそれこそがその能力の弱点なのかもしれない。知ってい

る者には何の恐怖も与えることができないのかもしれない。

長屋の屋根に陣取っている彼女の周りには今も木片が飛び交っているが、一般人から見ればカラフルなUFOに見えていることだろう。

そこに着いてからじつと佇んでいた彼女は何かを察したのか、急に立ち上がると不気味な声を発しながらある一点を指して飛んでいく。

しかし彼女が如何に素早く移動しても、紫さんの優秀な覗き穴からは逃れられない。彼女の移動した先にいたのは聖白蓮ただ一人。

『丑寅から不気味な声と共にやってくる正体不明の黒煙。聞いた事があるかい？ げに恐ろしき平安の大妖怪を』

頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如く……と紫さんがブツブツ言っている通り、今のぬえは正体不明の状態だ。紫さんの境界越しでは私の能力が通用しないので、私も彼女を化け物の姿として見ることができる。

『さあ？ 私も平安に生きた人間でしたがそのような妖怪の話は聞いた事ありません。人間に封印されてしまったので』

封獣ぬえと聖白蓮が二人で話しているが、こちらはそれを悠長に見ている場合ではない。何故聖白蓮一人でここにいるのか、それを探らなければならぬからだ。彼女の性格からして命蓮寺で何かしたとは思えないが、それでも異変解決者である二人が来ていないというのは心配の種になる。

紫さんもその事は気になったようで、しばらくスキマを通して二人の様子を見ているようだ。そしてふと呟いた。

「ただ熟睡してしまっているだけ。起こした方が良さそうかしらね」
「そうですね。そうしなければ余計に面倒なことになると思いますよ」

聖白蓮が二人を起こさずに敢えて一人で向かった理由は想像がつく。彼女は妖怪が傷つくことを良しとしないからだ。たとえそれが弾幕での決闘だったとしても、黙って妖怪が傷つく様を見ているわけにはいかないのだろう。それは彼女の信念であり優しさである。

彼女が一人で妖怪のもとへ赴けば、彼女なりの説得ができる。説教は恐らく彼女の得意とするところだろう。話し合いで平和的な解決を願ったからこそ彼女は二人を置いて人里へ向かった。

しかし今回はそれでは解決できない。ぬえが今回の騒動を起こしたのは単に退屈だったからではない。人里を恐怖へと陥れたかつたからである。噂にはなれど恐怖は全くと言っていいほど得られていない。到底満足できていないのである。

故に今は話し合いでは彼女を落ち着かせることができない。彼女の鬱憤を晴らすためにはそこその刺激……具体的には先の異変を解決した人間との遊びが一番なのだ。

今、ぬえと聖の話聞いていても何ら進展は見られない。ぬえ自身は聖のことを知っているようで、彼女が妖怪の味方であることも相まって好感度は悪くなさそうである。

しかしそれだけだ。話し合いたい聖と戦いたいぬえ。その構図は変わらない。

「寝ているところをそのままにしてぬえたちの前に落とせば良いんじゃないですか？　そうすれば手っ取り早いですし嫌でも目が覚めるでしょう」

「ま、それでいいわね。これ以上長引いても面白い事は無さそうだし」



「いてっ」

「いたた……」

寝ていたところを急に空から落とされた二人は驚きつつも警戒して周囲を見回す。

見回した結果分かったことは、場所は明らかに人里であること。そして白蓮の隣に明らかな異形がいることだった。

それさえわかればそこから先の行動は頭で考えるより先に身体が動いてくれる。妖怪の動きを封じるためのお札を投げつけてから夢

想封印である。

霊夢の頭の中では人里内で暴れた妖怪を白蓮が諫めている、という風に見えているわけで、当然ご法度である異形の行為に対してはごっこ遊びで済ますわけにもいかない。

結果、弾幕ごっこ用に調整された夢想封印ではなく妖怪退治用の夢想封印がぬえを襲うこととなった。

霊夢の方は急に地面に叩きつけられたものの、そこから先は本能的に身体が動いた。しかしぬえの方は急に人が現れて驚き硬直した上に、追い打ちをかけるような夢想封印を喰らってしまった。しかも高威力のものを。

完全に不意打ちとなってしまうたものはいくら大妖怪であっても避けることは叶わず、直撃する形となってしまうたのである。

何もできずに倒れ伏してしまった異形はいつの間にか歪な羽を持った少女へと変わっている。気絶したことにより能力が切れてしまったのだろう。つくづく不運な妖怪である。

「何してるんですか！」

「何って……あんたも見たとおりに妖怪を退治しただけじゃない。人里で騒ぎを起こしていいのは人間だけよ。あんたも深夜に騒ぐんなら一緒に退治してあげるけど」

白蓮が声を荒げるのも無理はない。彼女はただぬえと話をしているだけ。今のところ彼女は何も危害を加えていなかったのだ。そこに唐突に現れ、ぬえを退治してしまった霊夢に対しては長い説教をしても良いはずだった。

しかしそんな白蓮の気持ちを露も知らない霊夢の言葉は軽いものだ。実際、霊夢本人は自分が正しい事をしたと思っっているのだから。彼女にとって妖怪は慈悲をかける相手になり得ない。

博麗の巫女つてのは誰からも恐れられる存在だ。妖怪からも、人間からもな。そりゃそうだ。およそ人間とは思えないような人間なんだから恐れられない方が不自然だろう？

魔理沙の言葉が蘇る。かつての自分の境遇に重ね合わせたはずのそれは、いつの間にか無視できないほどのズレを生じていた。博麗霊夢という人間と白蓮は、彼女の想定していたものよりも相当に大きな壁に隔てられているのだということを実感してしまった。

彼女は、彼女だけは博麗霊夢を等身大の人間として見ることができると勝手に思っていた。博麗霊夢の痛みを知ることができると思っていた。

けれど違うのだ。博麗霊夢は彼女の測れるスケールをはるかに超えて異常な存在だった。死を超越して以来千年ぶりに彼女は恐怖を覚えた。底知れない強さに、冷静さに、そして何よりもその冷酷さに。

さとりと怪書

私の死ねない理由

「あんだ、あの妖怪を命蓮寺で匿うことにしたそうじゃない。なかなか挑戦的ね」

もうすっかり春色になった暖かな昼下がり、人里の茶屋では霊夢と白蓮がそんな会話をしていた。

『あの妖怪』というのは先日騒ぎの元凶になった封獣ぬえのことだ。結局霊夢の勘違いだったとはいえ、人里で騒ぎを起こしたのは事実であるため、霊夢は別段自分が悪いとも思っていない。それよりも彼女は、そんな妖怪を保護した命蓮寺を警戒しなくてはならないという面倒くささに注意を引かれている。

「誰に対しても分け隔てなく、が私の求めるあり方ですからね。いかなる種族であつても決して虐げられてはならない。そう思いませんか？」

対する白蓮の姿勢は初めから一貫している。誰に対しても等しく救済を与えるために彼女は妖怪を保護しているのだ。野生の妖怪というものはいつ博麗の巫女に目を付けられるか分からない。それに対する恐怖がある妖怪が寺に転がり込むために、幻想郷に現れてからの命蓮寺には比較的力の弱い妖怪がよく集まっている。

霊夢が直接相手にしなければならぬ者など精々白蓮とその側近たちくらいのもの。だからこそ今までは大して警戒もしていなかったのだが、最近入ったぬえは明らかに大妖怪の風格である。

既に紅魔館、冥界、八雲、花妖怪、妖怪の山、天界、地底などなどに厳重に警戒すべき場所がいくつもあるというのに、ここにさらに命蓮寺も加わったというのだから霊夢の心労は推し量る必要すらないだろう。

白蓮の問いに霊夢は気の無い返事をする。同意してしまつては巫女としての活動ができなくなるのだから当然だろう。白蓮もそのこ

とは分かっており、ただ自分の意見を述べたいがために質問にしておいたに過ぎない。

「妖怪なんてものがいなくなれば世の中は平和になるんでしょう……はあ、面倒だわ」

「何言ってるのよ霊夢。妖怪がいなくなれば困るのは人間の方よ？」
「げっ、なんであんたがここにいるのよ」

神出鬼没ここに極まれり。紫が何の脈絡も無く現れるのは、彼女を知る者にとってはもはや慣れっこだ。

霊夢の質問と白蓮の驚きを無視して彼女は団子を三つと饅頭を二つ注文した。饅頭は霊夢と白蓮の分としてのものだ。スキマ妖怪流巫女対処法である。

「で、なんでしたっけ……ああそうそう、妖怪がいなくなった世界の話でしたね。ここは一つ、妖怪の非常に少なくなった外の世界についてお話してあげる。妖怪がいなくなれば、それまで妖怪や妖精が関与してききたような些細な事象にまで人間が干渉し始める。人間は靈力の代わりのエネルギーを使って自然を切り拓き、最後には天然の食糧は無くなってしまふのです」

既に人間は鴉天狗よりも速く飛行することに成功している。月より遠くへ物を送ることに成功している。地底より深くまで穴を掘ることに成功している。

近い将来、森林は全て人工林に置き換わり、野菜やキノコ、果ては肉まで人工で生み出すようになる。そこに妖怪や妖精の入る余地はなく、霊夢たちのような人間が入る余地もない。世界は悉く異端分子を排除し、全てを科学的に証明できる形に押し込める。

「人間の心が妖怪を生み、霊を生み、神を生んだ。私たち妖怪と貴方たち人間は切っても切れない、そんな関係に必然的になつていくの。妖怪を排除した世界が目指す先はただの破滅でしかないでしょう。その頃には貴方は死んでいくでしょうけれど、貴方の子が、孫が……人類の破滅の日を目の当たりにしてしまうことでしょう。だから妖怪はいなくてはならないのです」……ん？ え……と、貴方は確か貸本屋の娘だったかしら」

「そうです！ なにやら霊夢さんがいるのを見つけたので丁度良いと思つて来たんですよ。そっちの方は確か聖白蓮さんでしたよね。こちらの方は？」

阿求曰く歩くトラブルメーカーこと本居小鈴の登場で茶屋の軒先はさらに賑やかになった。つい先ほどまでは霊夢と白蓮がのんびりとお茶をしていただけだったというのに数分でこの有様である。

小鈴の突然の登場に額を抑えながらも霊夢は丁寧に対応する。他者からはよく意外に思われる事だが、霊夢はこう見えて案外面倒見が良い。相手が戦う力ももたない人間ならば尚更だ。

「八雲紫。胡散臭い奴だから小鈴ちゃんは関わっちゃ駄目よ。んで、小鈴ちゃんも何か私に用事があったみたいだけど？」

「そうそう、そうなんです。実は数年前からこんな本が鈴奈庵にあるんですけど……解読しようとしても一体何が言いたいのかさっぱりわからないんです」

どれどれ、と霊夢がその本を開いてみると、そこに書かれていた文字は全く見覚えのないものだった。潰れた饅頭のようなもの、ただの点にも見えるもの、民家に窓のようなもの……およそ本であるとは思えないような奇天烈な記号が並んでいたのだ。

「こりゃ解読できなくても不思議じゃないわね。何かの暗号かもしれないけれど」

「いや、そうじゃないんです。読めるには読めるんですよ。例えばここは『我と共に来るべし。奔る才有り』と書いてありますし……」

「……古代天狗文字。人間に読めるようなものではないはず。人里で暮らしてきた子供ならなおさら」

驚いているのは紫だけではない。白蓮も霊夢も目を言葉を失い、見開いて小鈴を見つめている。明らかに日本語ではない文字列の内容を理解できている小鈴に、彼女らは驚愕と警戒を強めることとなった。ただの人間には収まらない“本居小鈴”が阿求以外の目に留まった瞬間である。



死んでしまいたい。

お燐の淹れてくれたお茶を飲みながらふとそう考える。最近、前にも増して忙しくなっているように感じる。戒に仕事を全て任せてしまいたいという私の願いとは裏腹に、私の周囲はちつとも落ち着かない。

戒が悪いわけではない。あの子はもう随分とできることが増えただけならばそれでも全く問題は生じない。

地底が悪いわけでもない。一昔前ならまだしも最近の地底の連中はかなり大人しくなった。主に鬼たちによる旧都管理の成果である。魔窟においては恐怖政治こそが大正義だと改めて認識した。

ペットのせいではない、式神のせいでもない、地底のごたごたのせいでもない。ならば私が深く関わっているもので残るのは一つ、地上である。

最近猛烈に後悔していることがある。地底と地上の不可侵条項撤廃だ。今思えばあれのおかげで私の安寧はある程度守られていた。だがもうそれは無くなってしまった。私の下手な勘定のせいで取っ払ってしまった。

元を正せばお空に勝手に力を与えた神様が悪い。……が私はそれにすら気づけなかった。もつと他にやりようはあったかもしれない。お空に何か別の方法で力を与えていけば神の力には靡かなかったかもしれない。

こんなものは全て理想の話だ。私には過去に戻る力など無いし、今見えている現実から逃れる術ももたない。ずっと向き合っていたかなければならないのだ。これから数千年、あるいは方に至るかもしれないほどの年月を耐えなければならぬのだ。

ああ、死んでしまえばどれほど楽なことか。人間が羨ましい。人

間程度の短い寿命であればどれほど気楽に生きられることか。辛い事があっても数十年すればきれいさっぱり消え去ってしまう。死にたいと思えば心臓を一突きしてしまえばいい。それだけでこの世から去って新たな肉体へと生まれ変わることができる。

何故私は妖怪になど生まれてしまったのだろうか。私の寿命があと数十年しかなければもつと自由に過ごすことができるのに。今あしがらみる柵なんて気にしないで未来を見つめられるはずなのに。

「さとり様、駄目ですよ。あたいたちを置いて先に逝ってしまうなんて許さないんですから」

「あらお憐……声に出ていたかしら？」

「いえ。ですが死にたい人の顔というのは見るだけで分かるものです。あたいは今までそんな人間たちを幾度となく救ってきましたから」

「……………ふふ」

そんな状態で死んでもちつとも楽しい会話ができないから、か。未来のさらなる楽しみのために死体お楽しみを我慢するなんていかにも彼女らしい。そいつが本来の死に際にもう一度お憐の前に現れてくれる保証なんてどこにもないというのに。

「分かってないわね、お憐は。私は死にたいと思っていてもいざとなれば怖くなるの。何故か分かる？ 私は自分の身よりも貴方たちが大切だからよ。死んでも地獄で罪を償い続けるだけ。そんなのはなんてことも無い」

鬼も私に対しては強く言ってこないだろう。関わりたくもないはずだ。だから地獄は別に怖くない。地獄に落とされる前に四季様にいちやもんをつけられるのは少し怖いがそこから先の悠久の時間はほとんど誰ともかかわることのない、ある意味平和な世界が待っている。

「私にとっては貴方たち家族だけが心の拠り所足り得るの。だから安心なさい。貴方たちが生きている限り私も生きるから。……情死？ するわけないでしょう？ 私は貴方たちに生きてほしい。その生を楽しんでほしいんだから」

今いる家族なんて元々私が勝手に拾ってきた子ばかりだ。お燐もお空も……そしてこいしも。皆私と血はつながっていないけれど、私の傍で生きることを選んでくれた。

私のせいで本来進むべき道を歪ませてしまったのだから、せめて今生きていることを楽しんでほしい。それに妖怪の死は人間のそれよりもはるかに重いし残酷だ。

お燐の淹れてくれたお茶を飲みながらホッと一息つく。どう足掻いても私は決して死のうとは思えないのに、どうして死にたいと思ってしまうのか。それは私が長い生に疲れているからだ。何故妖怪が異常に長命なのか、それは先ほどまで考えていたことに繋がる。

お燐が運んでくるのは人間の死体だけである。旧都や幻想郷を見れば妖怪の死亡数の方が人間よりも圧倒的に多いのにもかかわらずだ。

スペルカードルールなど関係ない所で喧嘩は頻繁に起きるし死者も出る。酔っぱらった鬼が暴ればそれほど力の無い妖怪はひとたまりもないだろう。

対して人間の死体は外の世界や幻想郷で埋められ、地底に流れ着いたものだけに留まる。だからそれほど多くの死体は出てこないのが普通だ。実際旧地獄の熱源を保つだけならばお空の力もあるので数日に一人分投げ込めば十分であり、今はお燐が適当に見つけてきては放り込んでいる。

経験上、死体は外の世界からよりも幻想郷からの方が流れ着きやすい。結界を超える必要がないからだろう。しかし幻想郷の人間は大して数がないので死者があまりでない。その結果、お燐が運んでくる死体は大抵流れ着きにくい外からのものになる。

もしお燐が妖怪の死体も持って来られるのなら今までよりもかなりハイペースで運べるに違いない。幻想郷では毎日新しい妖怪が生まれては死んでいるからだ。地底の死者に頼らなくても十分に賄えるだろう。

しかし実際にそうはなっていない。お憐が運んでくるのは数日に一回、人間の死体だけ。その理由はそもそも妖怪の死体というのが何処にも見つからないからだ。

妖怪は肉体ではなく精神に依存する。妖怪という存在が人間の恐怖や関心から生まれた存在だからである。肉体はあくまでも飾りに過ぎず、本質としての精神が最も重視されるのだ。これが妖怪の『死』にも深く関わってくる部分である。

人間は死ぬと肉体から魂が分離し、彼岸に運ばれて閻魔に裁かれる。地獄へ行っても罪を償い終えれば転生し、新たな生を得る。そこで新しい肉体を得るわけである。

だが妖怪は違う。死ぬと肉体から魂が分離する。ここまでは人間と同じだが、ここから先が人間とは大きく異なる。

転生という選択肢がないのである。閻魔によって裁かれる先は地獄か極楽。妖怪は基本的に地獄にしか落とされないと一応この二択は存在する。極楽とは天界であるというという説も聞いたことがあるが実際のところは分からない。

さて、妖怪に転生が無いというのがどういう事かと言えば、まあそのままの意味である。転生させるという選択肢を閻魔が意図的に消しているのではない。閻魔にもそれを選択できないというのが正しい。妖怪は死んだ時点で本来持っていたアイデンティティが消滅したことになる。そして妖怪の肉体とは魂に付随してきたものであり、ただの入れ物というわけではない。

閻魔が魂の行先を決定した時点で妖怪の魂は肉体を纏う。しかしそれも生前の肉体とは異なり、死んだ後の魂の形を体現したものであるため、生前のような力は肉体に宿らない。

残された生前の肉体は魂が分離した後もしばらくはその場に残り続けるが、魂が彼岸に到着し、二度と帰ってこない事が確定した段階で肉体は消滅してしまう。ただの魂の入れ物ではなく、魂と肉体が密接に結びついている妖怪ならではの現象である。

だから妖怪の死体はお憐にも見つけれない。死んで数刻も経て

ば消滅してしまうからだ。

失われた肉体は死後の魂の形を示すものとなり、死んだ妖怪を包み込む。そして地獄では肉体レベルで苦痛を味わうことになる。人間は魂だけを虐められ、十分に反省して償えば輪廻に戻ることを許されている。対して妖怪は永遠に肉体を虐め続けられるのだ。

この永遠に等しい恐ろしい地獄が用意されているために、妖怪の生は人間よりもはるかに長く用意されているのだろう。

人間は死んでも生まれ変わる。それしか知らない人間は妖怪の死の事情を無視して妖怪狩りを幾度となく行った。私たちには今と違う肉体で生きる未来なんて存在し得ないというのに。

道端の妹

もうこの世に覚妖怪は私以外存在していない。

はるか昔に起こった迫害により覚妖怪は人間だけでなく妖怪にまで狩られ、ついには私とこいしだけになった。地底に逃れてきた私に待っていたのは追いうちだった。実の妹のように可愛がっていたこいしが覚としての生き方をやめてしまったのだ。

その日から私と同種族の存在には会ったことがない。妖怪が外で生きられないような時代になって久しいというのに、だ。

こいしが私の目に映らなくなった日の事は今でもはつきりと思い出せる。あれはまだ地獄がここにあった頃、私がこんな未来をまだ想像もできていなかった頃の事だ。

こいしはその昔、覚妖怪とは思えない程美しい心を持っていたと思う。同族の心は読めなかったからあの子の本心はついぞ知ることが無かったが、話を聞き、対峙した妖怪や人間への対応を見る限りではとても純粹で優しい子だったはずだ。

あの子にとって最大の成功は私を姉として慕いついてきたこと。私があの子の姉だったからこそ今もこうして生きていられる。私以外の覚妖怪はもう全て消されてしまったことを考えれば、私以外について行ったあの子の未来はなかったと考えるもあながち間違いではあるまい。

しかし、あの子にとって最大の失敗は覚妖怪としてこの世に生まれて来てしまったこと。あまつさえ妖怪という長命な種族に生まれ、その中でも最大の嫌われ者に生まれてしまった優しい子。そんな子の未来がどうなるかなんて火を見るよりも明らかだ。

私にとって最大の失敗はこいしを分かってやれないこと。今も昔もあの子の心は読めないが、昔のあの子ならばもう少し感情を、気持

ちを理解してあげられた。

私の留守の間に置手紙だけを残して私の前から去ってしまったあの日、出かける前にあの子の顔を一目でも見てあげていれば今が変わっていたかもしれない。数日経って戻って来たあの子が空っぽになっっているのを知覚した時のあの感情を私は決して忘れることがないだろう。

何よりも大切にしているはずだった。何よりも気にかけているつもりだった。でもあの子にとって私は支えの一つにもなりはしなかった。

あの子の帰ってくる場所に私がいる必要はもはや無いに等しい。あの子から見た私はただの知り合い。周りより多少知っている程度。そこに愛はない。……だって私つい最近あの子に殺されかけたらしいですし？

あの子はもう私を必要としていない。私だけがあの子を想い続けているという儂い一方通行。この数百年で嫌というほど繰り返してきた虚しさだ。

時間が私を変えた。あの頃の悲しみや悔しさのほとんどを私はもう持っていない。でも、だからこそこうして冷静に考えることができた。もうにもなったしあの子との新しい付き合い方を模索することもできた。

これで良かったのだ。あの子は嫌われたくなくて、自分の望みを叶えるために覚妖怪をやめた。寂しいがむしろその過程で消滅しなかったことに感謝するべきではないか。

私はあの子が分からない。昔よりも長い時間あの子を見ているはずなのに今は昔より理解できない。あの子の居場所も抱えている感情も、大切にしている物も何もかも。



「次は何する？　ポーカーでもしようか？」

「嫌よ。貴方ずつと表情崩さないんだもの。しかも私より心理戦に長けてるし」

「えー、つまんないの。あ、じゃあ本でも読む？　世間知らずなフランちゃんにはちようど良いんじゃない？」

古明地こいしは空気を読まない。気を遣わない。躊躇なくズバズバと心を抉るような内容を言ってくるのだからその相手はもろに精神的ダメージを負う。

フランドール・スカーレットも普段は何の躊躇いも無く相手の心を抉るような発言をする。ただこいしとは違い、悪魔らしく純然たる悪意を含む。しかし人妖問わず、真に心に傷をつけるのは悪意のない暴言である。フランドールはその点において決定的にこいしに劣っていた。

しかし双方共に互いに対して劣等感を抱くような心は持ち合わせていなかった。だからこそ誰よりも良い関係を築けているのだろう。こいしもフランドールも数か月前と比べて自分が変わったことを自覚していないが、その心の在り方は実はかなり大きく変化している。

初め、二人が出会う前までは、どちらも相手の話を聞かずに珍妙な返事をするばかりであった。しかし今はしつかりと会話が成立している。相手の話を聞いて、考えて、答えられているのだ。これは実に大きな成長と言えるだろう。

会話が成立しているという事は、自分の思うままを伝えるだけでなく自分を律して言葉にしているということに他ならない。一度自分を見つめなおす習慣がついていれば理性を失って狂気に飲まれることも格段に減る。フランドールはこいしに出会ったことで理性を育てたのだ。

フランドールだけではない。こいしも失っていた大切なもののかつかを取り戻すことができた。そのうちの一つが今彼女の手にしている本である。

その本は百年ほど前にさとりがこいしのために書いた物であり、そ

のため非常に分厚い見た目に対して内容は薄い。内容量以外はフランドールの部屋に何冊かある児童書とどっこいどっこいである。

さとりがこの本を書いた理由はただ一つ。こいしに世間の広さを知ってもらいたかったからだ。閉じられた空間でしか生きていけない妖怪達にとつて外の世界を知る手段は書物か流れてくるものであり、多くの妖怪にとつてはそのどちらも興味の無いものだった。

さとりは少数派であったため外の世界の広さを知っていた。その知見を活かして妹のために読みやすくまとめたのがその本なのだ。現在の外の進歩レベルから見れば些か古いが、幻想郷が狭くて外が広いのは昔から変わらない。内容は薄くともこいしの成長には役立つだろうというなかなか浅はかとも言える考えだ。結果的にそうなったので良し。

さて、その本であるが、フランドールからの評価はあまり芳しくないようだ。

それもそのはず。つい十数年前までは外の世界に住んでいたフランドールである。地下に幽閉されていたとはいえ多少の情報は入つて来ていたのだろう。本の内容の薄さと情報の古さはいかんともしがたい。

「でも活版で刷ったものでもないのに綺麗な字ね。お姉様とは大違いだわ」

「そうでしょそうでしょ！ お姉ちゃんは昔からずっと本を書いているいろいろな書類とにらめっこしてるからね」

姉をデイスる妹と姉を自慢する妹。姉への感情は両極端だ。

「どんな本を書いているの？ 全部こんな本？」

「全然違うよ。もつと難しい本。えーつとねえ……確か『春は別れの酒瓶で』とか『地獄紀行』とかの小説だったかな……どうしたの？

フランちゃん」

「そ、それってもしかして佐戸愛子の？ え、どうしよう。サインとかもらえたりしないかな」

何を隠そう、フランドールは推理小説家である佐戸愛子のファンである。正確に言えば推理小説として最良にしているのが佐戸愛子の

作品なのだ。ちなみにミステリー小説ならばアガサクリスQのものが好きらしい。

紅魔館の不思議な図書館にある小説コーナーにはわざわざ買わなくても新しい本が入ってくる事がある。佐戸愛子の小説は幻想郷移転時にドバつと入って来た物で、アガサクリスQの小説はここ数年で徐々に数を増やしている物だ。

佐戸愛子の新作がここ十年以上出ていないのは作者の死でなく単に多忙が理由らしいと分かってフランドールも多少安心したようだ。同時にキヤラクターがブレブレになっっているが、本来の彼女はむしろこつちなのだらう。

彼女の持つ不気味な知性もそれらの本から来ているのかもしれないし、他者の心理把握に関しても多分に影響を受けているのかもしれない。

佐戸愛子と言えばフランドールなど一部のコアな推理小説を好んでいるような者ならば当たり前に知っている名前だが、当然こいしはさとのペンネームなど知らない。たださとりが度々時間を見つけては書いている小説のタイトルを知っただけに過ぎない。

キョトンとしているこいしを差し置いてフランドールは一人考えを巡らせている。どうすれば新しい小説を書いてもらえるか、どうすれば彼女のサインをもらえるか……。気が触れているとは言われるが、彼女は姉よりもよほど慎重で計算高い。

しかしそれも良い事ばかりではない。レミリアならば地霊殿に押しかけてさとりに直接話をしに行っただらう。紅魔館の住人がそれを許すかどうかに関係なく、彼女は彼女の欲望のための行動を厭わない。

それができないフランドールはどこからか羊皮紙を取り出すとサラサラと何やら書き付け始めた。英語なのでこいしにはフランドールが何が書いてあるのかは分からないが、どうやらかなり達筆らしいというのは分かった。

「フランちゃんも字が上手いんだね。なんだか意外」

「私は昔世界を変えるような本を書きたかったから。今はもうそんな

子供っぽい事考えないけど」

「フランドールが世界を変えたかったのは随分と過去の話だ。

自分が何故に地下に幽閉されているのかさえ詳しく知らなかった時分、幼い自分を差し置いてチャホヤされている姉を知ってから彼女の心は随分と荒んだ。ただ毎日食事だけを与えられ、娯楽と言えば読み古した本ばかり。何故生かされているのかすら分からない。

外でのびのびと羽を広げている姉と違い、狭苦しい地下牢に押し込められている自分の惨めさを自覚するのは幼い子供にとっては耐えがたい苦痛だった。

初めての能力の暴走はそんなときに起こった。溜まるストレスが彼女の能力を開花させた。まだ蕾であった段階である程度歪だった心は開花したことで完全に捻じれた。

しかし理性がなくなつたわけではない。鋼鉄の檻が破壊され、それについて父母に怒られている間も彼女は自身のしてしまったことを自覚していたし悪いとも思っていた。そしてそれが幽閉するに足る能力であることも幼いながらも理解できてしまった。精神だけは五つ年上の姉をも凌駕するほどに育っていたのだ。

しかしだからこそ彼女は世界に対する恨みを募らせた。先天性の能力のせいで自分は何も悪くないのに幽閉されなければならない理不尽。

世界を変えたいと考えた。恨みつらみをふんだんに混ぜ込んだ文章と強力な魔力。そんな恐ろしい本を夢見て彼女は不自由な暮らしをやり過ごしたのだ。魔法を覚え、それを実験する。それに疲れたら紙に何かを書き付けては不満げに燃やす。そんな繰り返し。

だがそんな日々は唐突に終わりを告げた。パチュリイという魔法が屋敷に住みつき始めてからというもの、フランドールは彼女のものよりもはるかに高い魔力が込められた本を何冊も見た。

しかしそのどれにも世界を変える力など無いと判明したのだ。彼女は再び生きる意味を失ったのだ。無気力という言葉がぴったりなほど彼女は無気力になった。飲食すらまともにしない日もあつたく

らいだ。

誰が来ても扉は開けないし会話もしない。そんな生活が百年あまりも続けば心は乾いてしまう。育て上げた精神は崩壊し不安定になった。

得た知識だけが彼女に残り、傍から見れば簡単な会話すらまともにできない気狂いへと変貌してしまったのだ。

フランドールにとって不幸だったのは姉を含め誰も本当の彼女を知らなかったこと。まだ日が浅い咲夜は当然の事、百年以上館に居座っている魔女や実の姉でさえ今でもフランドールを気の触れた可哀想な子だと認識している。

少し前までは確かにそうだったが、波長の合うこいしと出会ってからは人の話に耳を傾けることができるようになった。自分の主張を押し通すだけが正義でないことを思い出した。

「私が書きかけていた本、まだここにあるんだよね……つと埃被ってるけど」

「うわあ、禍々しい本だね。内容は分からないけど」

「まあ内容は読めなくて良いのよ。恥ずかしいことしか書いてないし。この本は私の魔力がかなり籠められているから読んだら発狂するわよ？ 人間の書いた奇書なんて目じやないくらいに。まさに怪書。妖魔本としても八雲に没収される程度ではあるんじゃないかな」「そんな危ない物をねえ。よくバレないね」

「馬鹿ばっかだからね」

フランドールは寂しく笑う。バレていないのは誰も彼女に興味がないからであるということを知っているからだ。

彼女をまともに気にかけているのは姉であるレミアくらいのもの。他の者たちはフランドールの動向にこそ気を向けるが彼女の気持ちには気を向けない。

本当に家族と呼べる存在にだけ愛されているというのは彼女らの大きな共通点でもある。

「じゃあこれ、お姉さんに渡してきてちょうだい」

「何？もしかしてラブレター？」

「ただのお手紙よ。忘れず渡してね？」

「はいはい。じゃあね〜」

こいしが突然現れて突然消えるのはもう慣れた。彼女が来ると無意識に鍵を開け、去るとまた無意識のうちに鍵を閉める。気づいたときには部屋の中において、気づいたときには既に自室に錠がかかっている。

そんな日常。寝て起きて読書をして、たまにこいしと話をして……

正常時の彼女はどこまでも平凡な幽閉少女である。

私の新しい夢

いつからか、また何故なのか分からないが、小鈴にはあらゆる文字を読むことができる能力が身に付いていた。物心ついたときにはまだ日本語しか読めなかったもので、少なくともここ数年の間に身に付いた能力であることは確かである。

本の虫ではあるが然して勉強熱心なわけではない。しかしいつの間にか洋書が読めるようになり、妖魔本にまで手を出すようになった。

鈴奈庵は現在八雲の監視対象になっているが、それを要請したのは小鈴の友人である阿求だ。ただの人間であるはずの友人が妖魔本を読める、などという事は流石に言えなかったので理由は伏せてお願いした。それが五年ほど前の事。紫が深く詮索しなかったのは旧知の間柄である阿求だったからだろう。

理由を伝えなかった阿求とそれを詮索しなかった紫。今深く後悔しているのは紫の方である。たった今明らかになった本居小鈴と鈴奈庵の危険性。人里はここ数年ずっと爆薬を抱えていたようなものだった。

幻想郷にある妖魔本の多くがたつた十数坪の空間に集まっている。しかも所持者はそれを読むことで封じられた邪悪な妖怪たちを解放することだっただけでできるといふのにその危険性を把握していない。危険。あまりに危険。

紫は小鈴の持つて来た本には目もくれず、阿求と話をするために稗田邸の方へと姿を消した。

一方で残った面子はその本の方に夢中になっている。かなり分厚い本だが行間はかなり広く、所々に挿絵も交えてある。全ての文字を読む分にはそう時間はかからないだろう。

「小鈴ちゃんの能力はとても危険だし詳しく話も聴いておきたいけど、今知るべきは目の前の妖魔本ってやつね」

スカスカな文字列にお世辞にも上手いとは言えない絵。一見すれば馬鹿馬鹿しいだけの代物だがしかし、霊夢はその本から僅かながら

も確かに妖気を感じていた。霊夢だけではない。白蓮もまた禍々しい妖気をその肌を感じ取っていた。

知らぬは本人ばかりなり。毎日妖魔本に触れている小鈴は目の前の本の異常性をいまいち認識できていない。普段から目に行っている妖魔本とは決定的に異なる点を認識できる程彼女はまだ妖怪を知ってはいなかった。経験不足である。

「この本からは有り得ない程数多の妖魔の気配を感じます。恐らくそれだけの妖怪文字を駆使して書かれている。いったい何人の妖怪がこの本の制作に協力したのかは分かりませんが小鈴さん、貴方にこの本は危険すぎるのではないでしょうか？」

白蓮の言う通り、この本は見開きごとに異なる文字が記されている。小鈴もそれくらいは理解している。どの種族の文字なのかは不明だがページを捲る度に変化しているくらいは嫌でも分かっていた。しかし彼女にはこの本を読みたい理由があった。

「そう言われましても……これはとある方からのプレゼントなんです」

「いったい誰よ。こんな危険な物を贈りつけてきた奴は。まさか紫じゃないでしょうね」

「いえ、あの人とは先ほどが初対面だったので。送り主は実は私にも分からないんです。ある日この紙と一緒にこの本が店の机に置かれていましたね」

『多くの書を貸してくれたことには非常に感謝しています。この本はお礼のつもりなので店に置くなり読むなりは小鈴さんのご自由にごぞ』

そう、この本は小鈴のために誰かが置いて行った本なのだ。しかしその誰かが小鈴には全く見当もつかない。妖魔本蒐集というのは両親にさえも隠している秘密の趣味であり、それを知っている身近な妖怪はおろか人間にさえ覚えがないからである。強いて言うならば阿求だが、彼女は決してこのようなことをするはずがない。

「これはどうやらドイツ語で書かれているようです。この書置きと一緒にこれとは別の本も置いてあったんですが店に置いてきてしまい

ました。良ければそれも見にいらっしやいますか?」

「行くわ。場合によってはその本を没収しないといけないかもしれない。聖はどうするの?」

「私も行きましょう。ここまで来れば乗りかかった船ですし最後まで付き合いますよ」

人里は外から守られているが内部からの攻撃への対抗策は持っていない。人里にとって何か不都合な事が起きてしまえば神社でも寺でも信者を減らしてしまう事態になる。尤もそんな打算をするまでもなく人間を脅威から守る巫女と、人間に愛をもって接している尼僧は動いたであろうが。

人間の魔法使いが聴けば面白がって話を大きくするかもしれない。守矢の風祝が聴けば興味本位で勇んで飛んでくるかもしれない。鴉が聴けばあらぬ噂までも広げられるかもしれない。

そんな面倒ごとを避けるためにもさっさと処理をする。昨日の敵は今日の友。いけ好かない相手であっても、商売敵であっても、目的が同じならば協力しないなどと非効率な方を選ぶ理由はない。

「あ、その本は大丈夫だと思いますよ? 超長編ですが全編日本語で書かれていましたし著者は私も知っている有名な先生です」

ピリピリしている二人の強者を差し置いて小鈴は割と余裕を持っている。何せ彼女だけがもう一冊の本とやらを見たことがあるわけで、その内容も別におかしなことはなく、読み進めることで正気を失っていくようなことも無いというのを知っているからだ。

二人にはその前提がなく、ただ危険すぎる妖魔本と共に置かれていた本というだけで警戒心をマックスにしているのだ。仕方のない事だとはいえ、小鈴は初めて見る真剣な表情の霊夢を少し可笑しそうに眺めていた。

「そんなに警戒せずとも大丈夫ですよ。霊夢さんにも貸したことがあったでしょう? 探偵側と犯人側がどちらも反則的な手法を用いることで有名な推理小説家——佐戸愛子先生の新作です」



不意に気配を感じて振り返る。

「おかえりなさい、こいし。今回は帰ってくるの早かったわね」

いつもなら一月以上は屋敷を留守にしているのに。

珍しいなと考えながら彼女を眺めてみると手に何かを持っているのが分かった。

丁寧に作られた封筒を見ながら『ああもうすぐ地底満足度調査でもしてみないと』と考えてしまう。久々に妹が目の前にいるのに考えるのは仕事の事ばかりだ。我ながら嫌な姉だとは思いつつもそれは何かと聞いてみる。

中身はどうやら手紙らしい。しかも差出人はフランドール。最近こいしが行っていたのは紅魔館だったのだろうか。とすると内容はこいしの相手を押し付けていることに対する恨み節か何かかもしれない。

恐る恐るこいしから手紙を受け取って宛名を見てみれば、そこに書いてあったのは私の名ではなかった。いや正確には私のペンネームが書いてあった。どのような経緯で本人バレしてしまったのかは分からないが、どうやら私のペンネームを知っている程度には本を読んできてくれているらしい。でも『Aiko Sado』と書かれると私の原形が消えてしまうのよね。折角書いてくれたのだから気にしないことにするけれど。

書いてある内容は非常にありきたりな物だった。この作品のこう言うところが好きだとか、誰それが犯人だと思っただのに凄いぞんでん返しがあつて終始ハラハラしただとか、探偵の精神的弱さを上手く表現しているだとか、所謂ファンレターのようなもので、読んでいて少々気恥ずかしくなったが一番心に刺さったのは最後の方に書いてある一言だ。

『早く次が読みたい』

それだけ。たったそれだけだというのに手放しの賞賛よりよほど私の心に刺さった。きちんと出版したのは三十年前が最後。それでも新しく好きになって読んで手紙まで送ってくれる人がいる。私の作品を待っていてくれる人が確実にいるというのはそれだけで嬉しかった。

「どうしたの？ お姉ちゃん。そんなに泣くほどひどい事が書いてあったの？」

「……………へ？」

こいしに指摘されて初めて気が付いた。

私が泣いている。紫さんに睨まれても四季様に怒られても月で恐るべき神霊と争いになった時だって泣かなかった私が、今こんな小さな紙きれ一つに泣かされているのだ。たった五百年ぼっちな生きていない吸血鬼の子供に泣かされているのだ。

「違うのよ、こいし」

涙を拭ってこいしに向き直る。こいしにはもう分からない感情かもしれないけれど

「妖怪は嬉しい事があった時にも泣いてしまうのよ。今私はとても嬉しいの」

「ふうん。じゃあお姉ちゃんもフランちゃんに手紙を書いてあげたら？」

それは良い。彼女の性格からして嬉しくて泣くなんてことはないだろうが、少なくとも貰って嫌な思いをすることはないはずだ。

今の私の気持ちを少しでも味わってほしい。あの子にもきちんとも味方を認識してほしい。私と違ってあの子には元来の敵などいない。味方になってくれる人妖は何人だっている。

『Dear Frandre……』

もう一枚。

『Dear Remillia』

また紫さんに頼んで送ってもらおうか。

疎ましく紅き太陽

「本日はお招きいただきありがとうございます」

今日は久しぶりの地上。と言っても前のように何百年ぶりなんてことはなくたった数年しか経っていないのだが、地上に知り合いができてからはなんとなく時間の流れが緩やかになったような気がする。

地上は嫌いじゃない。木も草も水も妖精も、同じはずなのに全てが地底の物とは異なるように感じる。生気がまるで違うからだろう。そして何より地底と異なる物と言えば太陽である。この世の全てを照らすその光は幽霊のように白い私の肌を容赦なく焼く。

好きじゃない。

元々妖怪は陰の存在。地上に住んでいたころから太陽は得意ではなかったが今となつては疎んでしまうほど好きじゃなくなった。

私が地底での生活に慣れてしまつて太陽が眩しすぎるから？ それもあるだろう。それは明るさの問題だけではなく、肌を焼く太陽がこんなに苦痛を齎すものだったのかと内心驚いてしまう。だがそれだけではない。二、三年前地上に出てきた時にはこれほど太陽を疎ましく思う事は無かつたのだから。

その間に私と太陽の間で何か関係が変わつたことがあるのだ。少し考えてみれば心当たりが出てくる。お空に入り込んだ八咫鳥だ。あれのおかげで地底は確かに以前より明るくなった。しかしあれが私に益を齎すとは到底思えないのだ。いつかお空という人格を奪つてしまうのではないかと、杞憂だと思いつつもそう考えてしまう。

地上との太すぎるパイプも不要なものだった。地底という広大な監獄は人知れず荒廃してしまつても……………。

「……………いけない」

いけない。耽るとついこのような考えに陥つてしまうのは私の悪い癖だ。直していかねば。

「どうか致しましたか？」

「いえ。それよりも随分と丸くなりましたね、咲夜さん。前回までとはまるで別人です」

おそらく何かきっかけがあったのだろう。私を異常に敵視していたこの間までとはまるで違う。この人の記憶を読めばその原因も分かるのだろう。実際に彼女もそれを危惧している様子だし。

「安心してください。私が常に読んでいるのは心の表層だけです。私の能力はそこまで万能ではありませんので読もうと思わなければ記憶など読めませんよ」

もっとも以前までの咲夜さんのままなら無理矢理記憶を覗いたでしょうが。今の彼女にそんなことをするほど私の性格は腐っていない。

いや、甘くなってしまうたのかもしれない。自分の身の安全を第一に考えて誰彼構わず本音を暴こうとしていたところに比べれば随分と他人への警戒心が薄くなったものだ。

「そうですか……。奥でお嬢様がお待ちです。では」
「貴方はレミリアの傍にいないくて大丈夫なのですか？」

私がレミリアを呼び捨てにしたときにピクリと反応したが、私でなければ気づけないであろうほど一瞬で持ち直した。主人の面目のため自らを殺すのはお手の物か。本当に心の在り方だけは今まで会ってきたどの人間より異質だ。

「無論貴方がお嬢様に危害を加えるような真似をすれば瞬時に飛んでいきますがね」

私に対する当たりが緩くなったとはいえ忠誠心も変わらず。まあレミリアに手を出すつもりなんて毛ほどもないけれど。

咲夜さんに通されて入ったのはレミリアの個室。個室であって自室ではなく、生活感というものは一切ない。机の隅に追いやられている紙の束は何かしら処理すべき書類だろう。

この辺りには私とレミリアの考えの違いがある。私は自室が則ち仕事部屋かつ趣味の部屋でもある。レミリアはそれが別々。あるいは寝る場所と趣味に使う場所すら分けているかもしれない。私が一部屋しか使わないのは単純に屋敷内を移動するのが面倒だから。使っていない部屋はいくらでもあるが、やはり趣味も仕事も一部屋で

完結すると何かと楽なのだ。

レミリアはそれを厭わない。むしろ動き回るために部屋を分けているのかもしれない。普通の吸血鬼が寝ているはずの昼間でも博麗神社に遊びに行く程度には活発みたいだし、仕事でじつとしているのも本来は苦痛なのだろうと思う。

奥でご立派な玉座に尊大な態度で仰け反るレミリアが……見えないう。心の声がするからそこにいるのは分かるのだが、背を向けて座っているせいで、小さな彼女の背中が完全に隠れてしまっている。翼だけがかるうじて見える。その程度。

「お久しぶりですね、レミリア。その後ご機嫌は？」

「まあまあね。さとりの方こそ大丈夫なの？ 最近は地底……というか貴方絡みの事件が多いけれど」

レミリアが言っているのはここ数か月。地底から間欠泉が噴き出した事件からのことだろう。確かに大変だった。地底にやって来た人間を迎え撃ち、終わったと思えばこいしが暴走し、外の世界に放り出され、ぬえに協力することにもなった。

しかし私が地上絡みの事で頭を抱えるのはレミリアが幻想郷へとやってくるより前からのことであり、今となってはこれしきの事で腹痛に悩まされることも無い。嬉しくない成長だ。胃薬一瓶が長持ちするようになったのはありがたいことなだけけれど、それ以上にこの状況に慣れてしまうほど厄介ごとが当たり前になってしまったことが嫌だ。

しかしこんな愚痴をレミリアに吐いてもどうしようもないただの迷惑になるだけだ。適当に当たり障りのない返事で誤魔化して本題に入る。

「さて、私が今日ここに来た一番の目的が何かお分かりですか？」

「私は貴方ではないのよ？ きちんと口で言ってもらわないと分かりかねるわね」

嘘。レミリアの心を読む限り私の目的自体はとくに分かっている。これは部屋の外で待機しているはずの咲夜さんにも私の目的を知らせるための嘘。わざわざ自分で答えないのは私自身の口から聞

かせるためであろう。

ここの連中は特に私絡みの事になると厄介になる。レミリアもおそらくそれを知っている。だからここここでは敢えて私の口から言わせる。レミリアが私に操られているわけではないことの証明として。

それすら私の計画の内かもしれないということ踏まえれば、たとえレミリアが私から直接言うように命令したとしても彼女が私の傀儡でないことの証明とはなり得ない。その辺りはまだまだこれから知っていくのだろうし考えるようになるだろう。まだまだ頭は幼いと思わざるを得ない。

それでも百年後にはどうなっているか分からない。幼い方が物事をよく吸収できる。その楽しみに免じて今回の嘘は気づかなかったことにしよう。

今日の私の目的はフランドールに会うこと。先日貰った手紙で気づいたが、私は最新作を世に出すのを忘れていたのだ。前回印刷してもらって本を出したのはもう三十年以上前。その本も書いたのは百年以上前だったはずだけれど。

世に出し忘れていたとは言ったが、実は一冊だけはきちんと製本したものが鈴奈庵においてあるはずだ。あとは原本が私の手元にあっただけ。手紙を貰ってからの一週間、楽しみにしてくれていたフランドールのために血反吐を吐く思いで写本してきた。活版印刷した物に比べれば多少読みづらいが。

「ですがまあレミリアに話がなかったわけではありませんよ。実は今地底全体で見れば少し赤字気味でしてね……一年ほど実験的にワインの入荷を抑えたいと思っっているのです。ええ、急ですしこちらの勝手なのは自覚していますよ。それでも地底の経済が崩壊すると地上にも影響が出ます。今はもう地底と地上の境界が無いようなものですから」

外からのパイプは基本的に全て紫さんに頼っているが、紅魔館製ワインだけはここの個人的な契約によるものだ。地底でも人気のあ

るそれだが、紅魔館にとつては数少ない（あるいは唯一の）完全定期契約ということで少々値が張る。

「地底の鬼やらの化け物どもが地上に出てきて暴れるかもしれないということね。ちなみにその赤字の事は八雲には伝えているの？」

「もちろんです。彼女とも話をしましたよ。良い顔はされませんでしたかね」

当然だ。地底は半ば私の独裁状態。それで赤字国家にしているのだからその責任は少なからず私にある。旧都での食品ロス問題があるとしても穀物や獣肉などの入荷量を決定しているのも店に分配しているのも私の裁量。

あの妖怪のことだから徹底的に計算して無駄を無くせと言いたいのだろうが、私は彼女の頭を持っていないし計算処理能力も式神である戒以下……ああそうか。戒にやらせれば良いのか。

「どうしたの？ 気持ち悪い笑顔になってるけれど」

「き、気持ち悪かったですか？」

「どちらかと言えば薄気味悪い、だったかしらね。どちらにせよ見ていて気分のいい笑顔ではなかったわよ。で、まあそれは良いんだけどね、さっきのワインの件……一つ提案があるわ」

レミアアの提案。それは今までと同じ量を一割引きで売ろうというものだ。私としては非常にありがたい提案なのだが、これはレミアア個人ではなく紅魔館全体の問題だ。一割と言えど量を考えればそういうの金額になる。それをあのメイドや魔女や門番が許すかどうか。

「私気づいたんだけど幻想郷^こっていくらお金があってもメリットが少ないのよ。外に比べて物価はかなり安いし。ぶっちゃけ今紅魔館にある財産だけで向こう三十年は暮らせそうなくらい余裕なの。だから気にしないでちょうだい」

それでもこれ以上下げればパチュリーさんが黙っていない、と。今の売値も初めにパチュリーさんが提示した額よりはかなり値引いてあるし、レミアアとしてもここがギリギリの妥協ラインになるのだろう。

「それでもこちらとしてはかなり助かりますよ。ありがとうございます。すみません、レミリア」

「お礼なんてやめてちょうだい。友人が困っていたから助けた。それだけよ。貴方も私が困っていたら助けてくれると嬉しいわ」

「もちろんです。私力がなくなるかどうかは保証しかねますがね。さて、それでは本題といかせてもらっても？」

「そうね。咲夜、入りなさい」

レミリアの言葉が終わる頃には彼女は既にレミリアの後ろに立っていた。初見ならばいざ知らず、何度も見てきた光景ならば別段驚くことも無い。

「話は聞いていたでしょう？　咲夜、さとりを地下まで案内してあげなさい」

「ですが……」

咲夜さんは私がフランドールと会うことを危険だと考えているようだ。主にフランドールが私に何をされるか分からないという点で。いやおかしいだろう。私がフランドールから何かされる方がよっぽど可能性があつて危険であろう。

だがこれはあくまでも私目線で考えた場合である。あちらさんからすれば私はただの客。主人の妹に比べれば優先度はかなり低い。それでもあの娘の破壊力と凶暴性を考えれば私を心配するに足ると思うけれど。

レミリアはフランドールの部屋には来ず、図書館に遊びに行くらしい。部屋に行ってもフランドールが嫌な顔をするから、という理由だったが、私の見る限りでは決してそのような事は無いはずだ。おそらくフランドールの方が姉に気を遣っているのだろう。今まで散々冷たくあしらってきた手前素直になれないだけである。

だがそれを私の口から言うのはナンセンスだ。そんなことをしても姉妹のためにはならないし、それで心を開くほど素直な子ならば疾うに解決しているはずだからだ。

今のフランドールにはまだ姉たちに謝る勇気がない。レミリアに

は妹と話す勇気がない。彼女らを繋いでいるのは基本的には咲夜さんと霧雨魔理沙。定期的にフランドールと話をして精神安定を図っているらしい。

それでも今彼女の一番の精神安定剤になっているのはこいしだろう。こいし曰くかなりの頻度で遊びに行っているらしい。紅魔館のセキュリティを疑いたくなるが、こいしが相手ならば仕方ないかとも思う。あの子には普通気づけないし、鍵を閉めても無意識に開けさせてしまうから。能力だけなら盗人向きだと思う。実は密かにそれ紛いの事をしているのかもしれないが姉としてはあまり考えたくない。「そういえば咲夜さんはレミリアとフランドールの関係は今のままで良いと思っっていますか？」

「なんです？ 藪から棒に。この館における家庭内関係を知ることが貴方にとって何か利益をもたらすのですか？ 余計なお世話だと言っておきましょう」

「相変わらず釣れない人ですねえ」

心を読めばだいたい分かるが、彼女もこの関係性を肯定することはできないようである。そりやそうだ。主人とその妹の仲が良くないのは従者にとっても居心地が悪いだろうから。大したプランも無いのに干渉するなど言ってくるあたりは流石咲夜さんだと思う。

「私にとっては今の紅魔館が全てです。何もかもを失ったあの日にお嬢様と契約していなければ今の私はいなかったでしょう。あの方の役に立ちたい。その気持ちは貴方のような他人には決して理解し得ない。もちろん霊夢にも魔理沙にも、ですが」

いくら完璧なメイドと呼ばれていても所詮は人間であり、人間一人にできる事など限られている。誰かの心に関することならば尚更だ。いつ踏み抜いてしまうかもわからない心の地雷原でタップダンスを踊ろうとする気概だけは一丁前だ。この少女がいつか心折れてしまわないことを祈るばかりだ。

「最近妹様の精神も非常に安定しています。お嬢様との不和を解消するのには絶好機と言えるでしょう。お分かりですね？ 貴方がお嬢様と妹様の関係を本当に気にしているのでしたら、決して妹様を下手

に刺激しないで下さい。貴方にできることはそれくらいです。……
ここです。貴方の事はパチユリー様が逐一監視しておりますが決
して気を緩めないようお願いします」

ここまで饒舌な咲夜さんはなかなか珍しい。

そんなことを考えながら私はフランドールの部屋の扉を開いた。
咲夜さんがこの扉の鍵を開けた様子もない事に何の違和感も抱かず
に。

私の楽しみはまだ続く

部屋に入るとフランドールの記憶にもあったような、違和感を覚えるほどにメルヘンチックな光景が広がっていた。この部屋に幽閉されている少女の気が触れているなんて一寸も感じさせないほどに小綺麗で、それでいて本棚の中の本は横にして積み重なっていたりと整いすぎているわけではない。

ごく一般的な少女の部屋だと言われても誰も難癖は付けられないであろうと思われるほどに自然だった。もともと彼女を知っている私からすれば不自然この上ないくらいに薄気味悪い光景でもあったのだが。

吸血鬼の少女は部屋を見渡す限り何処にもいない。だが彼女の意識はこの部屋にあり、この部屋に確実にいることを私に教えている。それでもその意識は心と呼ぶにはあまりにもぐちゃぐちゃで捉えどころがない。おそらく夢の情報が私のサードアイに入ってきているのだろう。

夢の情報というのは、上手くやれば相手の深層心理にある願いを読み取ることも可能である便利なツールだが、そもそも読み解くことが非常に困難であり確実性にも欠ける。しかも失敗すれば誤ってフランドールを起こしてしまう可能性や、能力の反動で私が深い眠りに落ちてしまう可能性すらある。フランドールの深層心理を読み解くことは、今はまだそれほどまでにリスクを背負ってまでするようなことではない。

相手が何であっても寝ている者を起こすのは得策でない。特に目の前にいる吸血姫なんて獅子の比ではないほど危険な存在だ。

起こさないようにそつと本棚を覗いてみる。本は別に意識して並べてあるわけでもないようで、私の書いた本の上には数冊簡単な魔導書が置いてある。おそらく読んだ順に積み重ねているのだろう。バランスなど考えられていないので、小さな本の上にある魔導書の重みでいつ崩れても不思議ではない。

あまりにもアンバランスなので適当に整理することにする。昔書

いた本を懐かしんで読むのも悪くはないが、推理小説は一度目にドキドキしながら読み、二度目に犯人の行動を意識しながら読むのが面白いと思っている。結末や犯人の動向はおろか、各人物の内面すら知っている私がそれを読んでも楽しめないだろう。

それにしても、と私の書いた本を眺めながら思う。私の本は実は結構レアだったりするのだ。それも少し考えれば当たり前の話で、百年以上にわたって数冊を出し続けている私の本が外の世界で多数流通はしていないからだ。当然幻想郷内で流通している数よりは多いわけだが、そもそも幻想郷内での流通数がかなり少ない。以前調査した限り、私のシリーズが存在しているのは人里に一軒だけある本屋と貸本屋、寺子屋の蔵書と香霖堂にこの紅魔館くらいだ。

お金がないので増刷もしない。外の世界では各巻五十冊ずつあるかどうか、その辺りは管理者である紫さんに聞かなければわからないことである。

もつとも、レアだからと言ってプレミアがつくような代物でもないしそれほど価値のある内容のものでもない。ただただ流通数が限りなく少ないので知名度だけはあつた。そんなものだ。

私の推理小説に独特なものといえはとにかく心理描写が多いことか。事件発生前と後に全登場人物のモノローグが入るので、二週目に犯人のそれを注意深く読み込めば動機となりうる記載が必ず見つかるようにしている。このあたりの描写が非常に難しいので構想だけあつても筆が進まないことが多い。

残念だ。これが私の書いた小説でなければ、きっと私は終始心の読めない登場人物たちに対してワクワクしながら読み進められただろうに。探偵を最初の犠牲者にするなどというバッドエンドまっしぐらな展開でさえ今の私の心を揺り動かせただろうに。

非常に残念なことに、私は初めの数ページをめくるだけですべての登場人物と犯人およびその動機と手口まで思い出すことができしてしまう。長期間構想を練りに練って必死に書いたものなのだからそう

あつて当然だ。

……と、積み重なった本の山は私の本と魔導書だけで構成されていたらわけではないらしい。おそらくこれもフランドールが好きなジャンルの小説なのだろう。著者はアガサクリスQ。正体は確か今代の御阿礼だったか。

得意なジャンルは私の書く物とは異なり正統派なミステリー物。おそらく外の世界で名声を博したアガサクリスTを意識してのものなのだろうが、Qの方は名前こそ知っているが実際に読んだことはないので実力がわからない。先ほどまでのガツカリはどこへやら、久々に何が起こるかわからないワクワクが私の中を満たしているのを強く実感する。

出てくる人物全てが胡散臭く見えるし、会話中の一言一言、情景の一つ一つがどれも怪しく見えてくる。

犠牲者の恋人だった男。既に引退した元刑事は犠牲者の叔父にあたる人物だ。その他にも数年前に一世を風靡した世界的マジシャン。犠牲者に強い嫉妬を感じていた貴婦人とその夫。夫の方は犠牲者の幼馴染であり、幼い頃から婚約者と言われ続けてきた過去がある。さらには犠牲者の同僚であり、彼女に弱みを握られていた男。事件の起こった時刻に会場の駐車場で遊んでいたという少年少女計五人。近くで遊んでいただけではなく、彼らも犠牲者の女性とは面識があったという。

犠牲者の女性を中心とした醜い人間関係。たまたまパーティ会場に呼ばれてしまったという設定の凄腕マジシャンにどのような動機をこじつけるのか……というところでフランドールが目覚ましてしまったようだ。フランドールの心は……うむ、かなり穏やかで健やかそうだ。

新しい作家の開拓という面も含めてワクワクして仕方がない。また紫さんに頼んで買ってきてもらうか。面白かったらQの別の小説も読んでみたいと思う。今までのあの人の書き物と言えば百数十年に一度の幻想郷縁起しかなかったわけであるし、あの堅物がどんな人

間関係を描くのかは当然気になるところである。

「ん……あれ、もう来てたの……ですか？ さとり、さん」

「別に普通の話し方で良いですし、敬称も必要ありませんよ」

なんと、この子は私の思っていた以上に真面目な子だったようだ。前までは生意気な口を聞いていたのに私がフランドールの好きな本の著者だと知っただけで慣れもしない敬語で話してくるのだから面白いし可愛らしい。

そう言うところの一端を一目でも姉に見せてやれば姉妹仲は改善できると思うのだけれど。レミリアももう少し自分の弱い部分を見せるとかね。その辺りは私のなんとかできる領分ではないので大人しくしているが、姉妹仲が悪いのは本当に良くないことだ。

私とこいしは……姉妹仲は一応良好と言えるのではないだろうか。あの子がどのような考えを持って私に接しているのか、そもそも何か考えているのかすら全く分からなくなったので確実ではないが、私が嫌いならそもそも会いに帰ってこないと思う。

「じゃあさとり、貴方が本当に佐戸愛子なの？」

「いかにも。趣味で小説を書いている者です。この前手紙をくれたでしょう？ あのようなファンレターじみたものは貰ったことが無かったので大変嬉しかったんですよ。どれ、少し本の内容についての解説でもして差し上げましょうか？」

「本人からの解説なんて豪華だね。でも要らないよ。私はね、自分の力でこの小説内の人物の気持ちをはかれるようになりたいの。それもできないようじゃ現実世界にいる人たちのことなんてどうやっても理解できないでしょ？」

そうだろうか。私の能力を考慮に入れても現実世界の人妖は小説内の人物よりはるかに面倒で複雑な思考を持っている。何も考えていないようなおバカな妖精でさえ私の能力で全てを読み解くことは不可能に近い。

小説内の人物の感情なんて物は結局私の考えた空想上のものではなく、それがたとえ私の経験から来ているものだったとしても現実

世界のものとは違いすぎる。

「空想上の人物の感情を全て読み取ろうなんてする必要はないのですよ。それを読み解いて分かるのは私がどのような感情を人間の本質として見ているのか、それだけでしかありませんから。結局役に立つのは対人において相手の感情を酌めるかどうかです」

「でもそんなのさとりには分分からなくない？ 裏にどんな黒い感情が渦巻いているのかなんて私には知り得ない」

「それは貴方だけが悩んでいる問題ではありませんよ。私以外誰にも他人の感情なんてものは分からない。ですがそれについて苦悩して閉じこもっている者などいないでしょう。他人との会話が貴方を成長させてくれるはずです。現に貴方は今、こうして私とまともな会話ができています。その精神的な安定状態を維持できるならば、貴方はもはや対話について何を恐れる必要はないんです」

分かっている。今のこの安定した精神が私の存在によって作られていることは当然理解できている。少し前までは普通に対話しようとするだけでも支離滅裂で爆発寸前の状態になっていた。それが今こうして緩和されているのは悪い事ではない。

しかし、この心の安定が私抜きの状態であっても維持できるようにならなければ、他者との会話ですら混沌を極めることになり、それに理性が耐えきれなくなれば相手を不用意に傷つけてしまうことにもなり得る。

その相手は実の姉であるレミリアならばまだいい。だが勇儀や萃香のような鬼など、到底フランドールに情けをかけそうもない非道な連中が相手であった場合には、フランドールの方が傷ついてしまうことになるだろう。それではいけない。

「全然知らない者の感情を知りたいと思うよりも先ずは身近なところから知っていくのが近道ですよ。物理的というよりも心理的に身近に感じる者の方が話しやすいし良いでしょう。……あ、私は駄目ですよ。私は裏の感情が真っ黒ですし表情も硬いので参考になりません。尤も表情が柔らかくても参考にならない妖怪もいますがね」

紫さんとかこいしとか。あとは地獄の女神も紫さんと同じ、内心ど

す黒そうな匂いがする。もう随分昔に会ったきりなので今の彼女がどうなのかは知らないが、紫さんを見てみると腹黒いのが千年変わらなくても普通なのだろうと思う。

「一番良いのは素直で感情が表情に出やすい者ですね」

当然私の思い描いているその人物はレミリアである。魔女、門番、メイドはどれも心を見透かされるのが分かっている私にだけ表情を変えざる者たちだ。私以外に対しては基本的に真顔か笑顔を保っている。感情を隠すのが上手い人妖ばかりの紅魔館の中ではレミリアが最も純粋で分かりやすい妖怪だろう。

あわよくばこれを機に距離を縮めてくれないかと僅かな希望を抱いていた私だったが、どうやらフレンドールの中ではレミリアもその候補にいないらしい。

「うーん……じゃあ魔理沙かな。何か壊すとすぐに顔が引き攣るし」

フレンドールの遊び相手として招待されることもある霧雨魔理沙。確かに彼女ならば都合が良いかもしれない。妖怪にとつて一番の脅威が人間である以上、妖怪退治も請け負っている彼女を知ることがフレンドールの未来にもきつとプラスになるはずだ。

「では次に彼女が来た時にはいつもより少し彼女の気持ちを考えながら接してみると良いでしょう。では少しばかり基本的な事を予習しておきましょうか。……何、簡単な事です。相手が笑顔で貴方に接してきた時貴方はどう思いますか？」

「え？ うーんと、悪い気はしないかな。怖い顔をしているよりはよっぽど安心できると思う」

「そうですねそうですね。笑顔に相手をリラックスさせる効果があるのは誰でも知っています。ですが、笑顔とは最も警戒しなければならぬ表情でもあるんです。どういう事か理解できますか？」

この辺りの質問は対人経験が絶望的にないフレンドールには少し厳しいかもしれない。それでも多少読書を嗜んでいれば分かることではあるはずだ。この手の表現はよく使われるから。それに思い返せば先ほどフレンドールもこの話題に触れていた気がする。

「笑顔の裏に真っ黒い感情が渦巻いているかもしれない」

「概ねその通りです。笑顔は相手をリラックスさせることができずから、それを逆手にとつて仮面に使うことが多々あります。真つ黒い感情でなくとも有利に交渉がしたい時、ただただ自分の中で考え事をしたい時なんかは笑顔を作っている場合が多いです。ではこれらをどのように区別するのか、それを少しばかり勉強しましょうか」

来てしばらくフランドールが眠っていたためそれほど時間はなが、まともな会話をするための手段の一つや二つは教えてやりたいところだ。

世界はこんなにも広くて汚い。その汚さすら糧にできるならば、こんなに狭い場所に閉じこもっているのはもったいないと思う。

こんなに他人の事を考えるなんて私らしくもないが、今の私は地底の統治者ではなくただの古明地さとり。一介のサトリ妖怪である。

そして誰もいなくなるか？

さとりが紅魔館に出かけた日からしばらく経ち、昼間には蒸し暑くなる日が増えてそろそろ夏の足音も聞こえて来ようかという時期になった。

そんなある日の早朝、この時間帯は夏でもある程度涼しく、草引きや水やりをするのに適している。初めに異変に気付いたのは草引きをしようと畑に出てきた農夫の一人だった。

いつもなら涼しいくらいであるはずなのに今日は寒く感じるほどで、この時間には白み始めてるはずの空も今日は真っ暗なのだ。月も星も見えないが雲が出ている様子もない。不思議なのは月も星もないのに一寸先も見えないほどは暗くないこと。新月の夜程度の明るさは残されている。

男が不穏に感じて立ちすくんでいると、どこからか不気味な鳥の鳴き声までもが聞こえ始めた。いよいよもってこの場に居続けるのは危険だと判断した彼がおぼつかない足取りで家の方へと歩き出そうとしたその時――

『おめでどう。貴方は初めの一人に選ばれた……』

という声が誰もいなかったはずの背後から聞こえた。そして振り返る余裕もなく、何も理解できないままに彼の意識は闇に沈んだ。

「そう言えば一朗さんのとこの話、あなたは聞いた？」

「ええええ聞きましたよ。なんでも朝畑から帰ってこないと思ったら倒れていたんですってね」

「それだけじゃないのよ？ 目が覚めたと思ったら今度は急に叫び出したんですって。今はまた寝て静かになっていいるらしいけど……まったく仁美さんも大変よね」

「ほんとほんと。夫がそんな風になったら私の方が泣き叫ぶかもしれないわ」

——次の日——

「今度は大介さんですってね」

「一朗さんと似たような状態になっていたって話よ。小鞠さんったら泣いちゃって、慰めるのに一苦労だったわ」

「昨日まではなんともなさそうだったのに、急にどうしたのかしらね」

——次の日——

「今朝は源蔵さんと息子の源助くんも一緒だよ」

「そうそう。支織さんもふさぎ込んだりやって、お見舞いに行ったのに玄関口で突っぱねられたわ」

——次の日——

「今度は優作さん……。良子さんは大丈夫かしら」

——次の日——

『最後のターゲットを失神させたよ。確かにそろそろ巫女が動き出す頃合いだろうがまだ六人。この程度で良かったのかい？』

『十分。あとは私でやっておくから、貴方は尻尾掴まれないうちに寺に戻りなさい。怒ると怖いんでしょ？ あの僧侶』

『それは助かるね。聖にバレたら何されるか分かったもんじゃやない。しかしどうしてこんなことをする？ 人里の人間に危害を加えるのが厳罰であるのをお前が知らないとは思えないけれど』

『妖怪への恐れが薄くなった幻想郷を直すためにやっているわ。人里の外にある畑でならたとえ人間を殺めてしまっても罰の対象とはならない。他でもない、八雲紫が妖怪のために作った抜け道の一つよ』

月明かりのほとんどを遮断する黒い霧の下、人間のいない井戸端で話し合う妖怪が二匹。

しばらくすればこの暗闇は文字通り霧散し、昇り始めた太陽と共に普段と何も変わらない一日が始まることだろう………犠牲者の妻が目覚まし、悲鳴を上げるまでは。

初めの犠牲者が出た時、里の誰もが彼の妻を哀れんだ。一時的な発狂の末に深い眠りにつき、未だに目を覚ましていない。何か恐ろしい妖怪でも見たのだろうかという結論に至った里の者たちは、その日はそれ以上何を気にすることも無く普段通りに仕事に打ち込んだ。

二人目の犠牲者が出た時も、やはり恐ろしい妖怪の仕業だろうと他人事のように感じていた。

誰もが不審に感じ始めたのは犠牲者が同時に出た三日目になってようやくだ。早朝の畑仕事に出かけた男と、その手伝いに出ていた息子が同時に同じ状態に陥った。四人の共通点を洗い出して分かったことは、四人とも農家あるいはその息子であることと、犠牲となった日には一番初めに畑に出ていたらしいこと。

しかし、初めに畑に出た者と二番目に畑に出た者の時間差はほとんどないと思われ、発狂した本人が言う状況を他の者が見ていないというのはあまりにも不自然である。

稗田をはじめとする長者を集めた会議でもやはり妖怪の仕業だろうという結論になったが、会議の終わった時刻が遅かったこともあり、翌日博麗神社に調査の依頼をしようということになった。

とりあえず早朝の畑には近づかないよう注意書きを張りだしていたが、掲示板は里にいくつもあるわけではなく、見ない者の方が多い。そして今朝、その注意を見ずに畑に出た者が最後の犠牲者として発見された。

「愉快犯ね」

人里に到着した博麗霊夢は阿求から詳細を聞くなりそう断定した。

「愉快犯……ですか？」

「ええ、間違いなくね。まともな妖怪ならば人間を生かしたまま放置することは絶対に有り得ない。取って喰う方がはるかに利点があるもの。ただ気絶だけさせて畑に放置するのは愉快犯に違いないわ。その人間が別の妖怪に喰われれば万々歳ってところかしらね」

霊夢の指摘に阿求もなるほど納得する。妖怪は人間からの恐怖を生きる意味としている。ただ強い恐怖を得るだけならば喰う方が何倍も良いだろうし確実だろう。しかし、今回の犯人は何故かはわからないが全ての人間を生かしたまま危険な場所に放置するという不可思議な行動をとっている。

「何にせよ誰も死んでないのは良い事だわ。で、そいつら医者には見せたの？」

「一応二人目の方はたまたま来ていた薬売りが簡単に診てくれたようです。強いショックで目を覚まさないだけらしいですよ」

「里の医者は？」

「まだ何も。対策会議も昨日始めたばかりで……」

「それで翌朝に犠牲者が出るんじゃないわね」

口は悪いが実際その通りである。阿求でさえも里の掲示板など普段は見ないのだ。そんなところに張り紙を出したところで読む者がほとんどいないだろうというのは分かり切っていたことだった。しかし、阿求含め長者たちは対策をしたという口実を作るために張り紙を作り、不満が出て一応の逃げ道だけは残していたのだ。権力者の作る逃げ道は往々にして庶民に冷酷である。

『自分たちの権力を失うわけにはいかない』

一度権力を手にしてしまった者ならば誰しも思う事だろう。そしてそれは阿求も同じだった。微妙に前世までの記憶を保持しているせいで変に大人びているが、今世ではまだ十年あまりしか生きていない。大人の汚さを知っているせいで彼女もまたそれに染まってし

まっている。

「阿求、あんたが何のために生きているのか分かっているわよね？」

霊夢は阿求を責めるように畳みかける。

「妖怪の生態を纏めて対策とすることで里の人間に安心を与えるために生きてるんでしよう？ それがどうよ。今回は——」

「そこまでだ、霊夢。お前も阿求に偉そうに言えないだろう？ お前は一昨日買い出しに来ていたくせにこの人里の事態に気づいてもらなかつたんだからよ」

居心地の悪そうにしている阿求に助け舟をだすかのごとく口をはさんだのは魔理沙だ。急いでやって来たのだろう。箒に乗って来た彼女の髪型は少々崩れているように見える。

「魔理沙……遅かったわね」

「おいおい、馬鹿にするなよ？ お前が何も知らずに縁側で腹を搔いていた時も私は情報収集していたんだ」

「ふうん。で、何が分かったのよ」

「ふふん。被害者は全員農家の男だ。犯人は菜食系の女妖怪に違いない……おいやめろ、冗談だ冗談。お前がどう考えてここに来たのかは知らんが犯人は明らかに人里に対して悪意のある奴だ。全員畑で襲われているのが一番の証拠だな。他の集落にも寄ってみたが、その農民は何もされていない。目的は畑じゃないしむやみやたらに人間を襲っているわけでもないらしい。この人口密集地にだけ被害があるんだよ」

幻想郷には人里と呼ばれるこの場所以外にもいくつか人間の集落が存在する。魔理沙によればそこにいる人間たちには一切の被害も出ていないという。

「単純にここ以外の里を知らなかっただけじゃないの？」

「確かにその可能性はある。しかし幻想郷に棲んでいてそれを知らないような妖怪はかなり少ないと思うぜ。特にこんな手の込んだような事をする妖怪ではな。あるとすれば人里の中で生まれてそのまま里の中に棲んでいる妖怪か、あるいはここに来たばかりの妖怪くらいしかないだろう。」

で、その二択ならばあり得るのは前者だろうな。ここに来たばかりの奴が人里の決まりを知っているとは思えない」

魔理沙の言うように、幻想郷に棲んでいてこの人里以外の集落の存在を知らない妖怪はほとんどいない。その全てに対して人里と同じような規則が存在し、八雲紫によって管理されているため、幻想郷に棲んでいれば嫌でも知ることになる。

それを知らないような世界の狭い妖怪か、来たばかりの新規の妖怪か、あるいはこの人里にしか興味の無い妖怪か。普通に情報を整理すればその三択で絞っていくことになる。

その上で、人間が人里の外でしか襲われていない事実を考慮に入れば真ん中を除いた二択で考えれば良さそうだ。

「心当たりはあるか？ 阿求。人里の事は私たちよりよほど詳しいだろう？ もつと言うなら人を喰わないような、心を喰う奴がいれば教えてほしい」

「そうですね……パツと思いつくところで言うなら多々良小傘はその代表格でしょうね。由来はよくわかりませんが人里を棲み処にしている妖怪で、驚きの感情を喰らう化け傘です」

「小傘……ああ、あいつか。早速行くぞ、霊夢」

「言われなくても行くっての」

そう言っさつさと里を探索し始める巫女と魔法使い。人ごみに紛れてもはや見えなくなった二人にはもはや言葉は届かない。阿求の引き留める声は虚しく消えて行った。

「はあ。あの妖怪がそんなことをするはずがないというのに」

ため息をついて独り言ちる。多々良小傘は阿求の見てきた中でも殊更安全な部類に入る妖怪だ。彼女を危険な妖怪だと考えるのは馬鹿馬鹿しいほどで、人間友好度は高。包丁研ぎから子供の世話まで請け負う世話焼き妖怪でもある。

彼女が今回のような陰湿な事件を引き起こしたはずはない。阿求はそれが分かっているながら彼女の名前をだした自分に頭を抱えるのだった。

もし私が犯人だったら木の下に埋めて貰っても構わないよ

これは理解不能な怪談などではない。里で今まさに起こっている確固たる事実であり、誰かによって仕組まれた状況だ。しかもその犯人は完全犯罪とはならないよう、敢えて痕跡を残すように動いた。一つは一時的な発狂と昏睡。こんなことを他者にできるような者は限られてくる。確実に里の人間ではない。

犠牲者の共通点もある。これに関しては後から聞き込みをして分かったことだが、犠牲となった者たちの妻は毎日井戸端会議を開いていたらしい。犠牲となった順番に関してはよくわからない。少なくとも名前のいろは順ではないようだ。

そして最後にして最も重要な痕跡が、犠牲者の所有している畑と家の位置関係だ。多少強引ながらも少し前に覗き見した魔理沙さんの魔導書に書いてあったように五つの畑と家を線で結ぶと、魔法陣のような模様が浮かび上がる。

あとはこの陣の意味を知れば犯人にかなり近づけるはずだ。この私にミステリーで挑もうなどとふざけた真似をしてくれる。

しかしこう悠長に構えてもいられない。井戸端会議に関係していた者たちの家族が全て犠牲者となってしまった以上、この魔法陣はこれで完成してしまっただかもしれないのだ。

すぐにでも魔法に長けている者から情報を……と考えたところで広場の人だけが目に入った。

しめた、今日はアリス・マーガトロイドの人形劇の日だった。

彼女はあくまでも自分が魔法使いであることを隠しているつもりのようなので、周囲の子供たちには本当にただ糸で人形を操っているように見えているのだろう。実際私も何も知らなかった頃にはそう思っていた。

それにしても危機感の無い住民たちだ。連日人が襲われているというのに人外が行う娯楽に目を奪われるなんて。まあ、こんな時にわ

ざわぎ人里で人形劇を行うくらいなのだから彼女はやや白めがつくか。

いや、だめだ。油断は命取りになる。彼女は今まさに魔法陣を起動しようとして来ているのかもしれない。探偵に油断は許されないのだ。

人形劇が終わり、人形師の周囲から人がいなくなったことを確認して彼女に近寄る。一瞬優しそうな目を向けてきた彼女は私が焦っていることに気づいたのか、少し困惑した表情に変わった。

懐から里の地図を出し、十個の点を線で結んだ魔法陣を彼女に見せて何か知らないかと聞いてみたが、彼女はこんな陣を見たことが無いという。

「でもあれね、ちよつと違うけれど私の人形召喚に使っているものと似ている気がするわ。でも私は犯人じゃないわよ。人里がこんなことになっているのも今あんたに聞いて知ったばかりだし」

魔女の言うことは信用ならない。いくら彼女の人間友好度が高いとしてもだ。この澄ました顔の裏で何を考えているのかなんて分かったものではない。

「貴方ではないというのなら他には誰か心当たりが？」

「そうねえ……紅魔館の引きこもり魔法使いとかならこの巨大な魔法陣の使い道を知っているかもしれないわね。彼女は知識と魔力だけは豊富だから」

「もしよろしければ紅魔館まで連れて行ってもらえませんか？ 人里は今一刻を争う事態なんです」

「ふうん……そうは見えないけれど。まあ連れて行くくらいなら良いわよ」

よし。これでこの魔法使いを人里から引き離す口実ができた。門番には誰であっても人里への出入りをさせないよう指示し、自警団や慧音さんにも人里を監視するようにお願いして出発の準備は万端だ。「そうだ。出発する前に人形を何体か置いて行ってもいいかしら？」

心配しなくても紅魔館からここまでの遠隔操作は不可能だし、後から

回収して視覚情報を調べるだけよ。もしかしたら何か決定的な物が映り込むかもしれないでしょう?」

外の世界でいう監視カメラ……だったか。そんなような役割を人形にさせたいと申し出てきた。この魔法使いが味方であればこのような協力は大変ありがたいものだが、味方である保証はどこにもないし、遠隔で操作できないというのも本当の事か分からない。

「既に人間の目を方々に張り巡らせていますからその必要はありません。ありがたい申し出ですがお断りさせていただきます」

「そう、残念だわ。ではさっさと行きましようか。身体に変な力を入れないで頂戴ね。下もなるべく見ないようにした方が良いわ」

かけられた言葉の意味を理解するより前に私の身体がふわりと浮き上がる。彼女お手製の人形が私の身体を支えて飛んでいるのだ。その数十五体。過保護かとも思えるような数だが、空を飛んだことのない私にとってはこれくらい安心感があつた方が良い。

下を見ない方が良いという彼女のアドバイスは正しく、二間(4 m 弱)上昇した時点で私の足はすくんでしまった。そこからはずっと目を閉じているので今どあたりを飛んでいるのか全く分からない。

「寒くないですか? もう夏ですよ?」

上空に行くほど気温が下がるというのは嘘ではなかったらしい。夏用の着物であることもあるかもしれないが、今の私の体感では雪が降りそうなくらい寒く感じる。

「あら、ごめんなさい。私って気温をほとんど感じないから何も気にしていなかったわ。そう言えば貴方は普通の人間だものね。高度下げるから丁度良くなったら言つて頂戴」

「……………この辺りですかね。ありがとうございます」

空を飛ぶのも良い事ばかりではないようだ。上空ほど寒く風は強いし、夢に描いていたような景色を楽しむ余裕は一切ない。しかも一歩間違えば落下死の危険があると来るのだから、私はもう二度と飛行なんてごめんだ。少なくとも普通の人間は地に足を付けて生きるのが一番お似合いだと思うし正しいと思う。

飛行のメリットを敢えて上げるならば比べるまでもなく移動速度

が速い事と楽な事。目を閉じながら適当な雑談をしている間に、もう紅魔館が目と鼻の先まで来たらしい。首筋を伝う汗が、だんだんと地上に近づいていることを教えてくれる。

ほどなくして足が柔らかい草を踏んだ。紅魔館に到着したのだ。閉じていた目をゆつくりと開けると、太陽の眩しさよりも先にただただ紅い壁が目刺激した。

「こんにちは、アリスさんに……稗田阿求さんでしたっけ。本日は何用得？」

「この子の付き添いよ。パチュリーに会いたいそうよ」

「パチュリー様でしたら今日は図書館ではなく小さい方の客間にいると思いますよ。例の客人が来てましてね」

「例の客人とは？ 私はいても大丈夫なのでしようか？」

「大丈夫じゃない？ あの子は別に貴方を気にしないと思うわよ。」

ああ、あの子って言うのは古明地さと、地底の支配者でもある覚妖怪のことよ」

覚妖怪……確かかなり昔の縁起に名前だけ載せた気がする。会ったこともあったのかもしれないが、そのあたりの記憶は定かではない。しかしここ数代聞いていなかった妖怪がまだ存命だったとは。最近はまだ鬼が現れたりもしたらしいし、九代目はかなり歴史的にも重要になりそうだ。

今日はその覚妖怪と吸血鬼のレミリア、魔法使いのパチュリーが何やら話しているらしい。アリスさんと紅美鈴の話を知っている限りでは、実際に話をしているのはさとりとレミリアだけで、パチュリーはさとりが変な気を起こさないか見張っている？ らしい。関係性がよく分からない。

「一応確認しておきましょうか。ここで待っていてくださいね」

そう言い残して紅美鈴は館の中へと消えて行った。一名を除く紅魔館の方たちについては既に縁起に纏める分の取材を行った。一応顔見知りではあるが、やはり妖怪の巣窟に来るといっつのはいつの時代も生きた心地がしない。

魔理沙さんが言うには、レミリアの相手なんて子供をあやすような

ものらしいが、私にとってはレミリアのデコピン一発が命取りである。魔理沙さんでも手を焼くような吸血鬼の妹がまだいるという話だし、本当に下手を打てば明日が無い。

レミリアだけではない。此処に住む者は妖怪も人間も皆実力がトップクラスの化け物たちだ。そんな場所にやってくる古明地さとリという妖怪もそれに見合うだけの実力は持っているはず。地底の支配者というならばそれ以上か。

覚妖怪と言うからにはおそろく毛むくじやらの猿のような妖怪が出てくるのだろう。言葉は通じるみたいだが、見るだけでも言葉を失いそうな気がする。でも覚妖怪って心を読んだっけ……嫌だなあ。いつか鈴奈庵に置いてある雑誌で見たゴリラみたいな妖怪だったらどうしよう。なんて考えている間に門番が戻って来た。流石は妖怪。この暑さの中走っていったのに呼吸が乱れるどころか汗一つかいていない。その頑丈さが時たま羨ましくなる。

「問題ないそうですよ。阿求さんも全妖怪を纏めているいずれ取材することになるでしょうし、会ってみるのをお勧めします。いざとなればお助けしますよ」

「こら美鈴、そんなこと言ったら本気にしちゃうでしょう？ 大丈夫よ、阿求。さとりはそれほど悪い妖怪じゃないわ。嫌な妖怪ではあるかもしれないけれどね」

悪い妖怪でない、というのを事前に知っておくだけでも心の持ちようは変わる。アリスさんならば変な嘘をつかないだろうと思うし。

「アリスさんも初めてでしょうから案内しますよ」

「いえ、結構よ。貴方が走って行った時に後ろから人形を走らせたから、道順も部屋の間もバッチリ分かるわ」

ここからその客間とやらの距離でも遠隔操作は訳無いということか。これはこのアリス・マーガトロイドという魔法使いについても油断できなくなってきた。ここから人里までの距離と比べれば、確かに紅魔館内部の部屋は近いといえる。しかし、この距離であっても紅美鈴に追いつく速さで人形が正確に操作できるのだと考えれば認識も変わるといふものだ。

先ほど人里にいる時は、里に置いた人形を後で回収して調べると言っていたが、今しがたの人形操作を考えるとリアルタイムで視界ジャックができる可能性も高い。

落ち着け稗田阿求。まだまだ誰が容疑者なのか分からないのだから一瞬でも油断してはならない。

「そう言えば阿求はレミリアたちとは顔見知りらしいけどフランドール……レミリアの妹には会ったことがあるの？」

「まだありませんね。魔理沙さんから聞くまでは存在すら知りませんでしたし、聞いたのもこの取材が終わった後でしたしね。アリスさんは？」

「見たことしか。でも話だけ聞いている限りでは会わない方が身のためだと思うわ。スペルカードというルールを度外視した戦いになれば私でも勝ちの目は薄いでしょう。予測不可能な破壊攻撃って話だから。何にせよ直接会うのはお勧めしないわ」

アリス・マーガトロイドも相当に実力のある魔法使いだと聞いている。その彼女をして勝ち目が薄いと言わしめる力か。確かに軟弱な私では何もできないまま死んでしまうに違いない。まあそれはどんな妖怪が相手でも変わらないことだろうけれど。

紅魔館の廊下を歩くのはいつも落ち着かない。私の屋敷の廊下より三倍ほど幅が広いし、窓が少ないせいで全体的に雰囲気がい暗い。そのくせ不自然に明るいキャンデルがいくつも置いてあるものだから古の日本人としての脳が拒否反応を起こしているのだ。あとは何より履物のまま部屋にあがったりするのは少々気が引ける。

洋式の館と和式の屋敷にはたくさんの違いがある。玄関の大きさであったり扉の開き方、部屋を隔てる物もそうだ。里の家の多くは小さいので、作りが異なるが、私の屋敷ではほとんどの部屋が壁ではなく襖ふすまで仕切られている。会議の時など人をたくさん入れたい時には襖を全て外せば、それだけで最大三十二畳の空間が作られる。

一方で紅魔館のような洋館では一つ一つの部屋が壁と扉で明確に仕切られている。その代わりにパーティを催すための広間が設けら

れているのだ。機能的ではないが権威を示すには丁度良い空間の使い方なのだろうと思う。

部屋の大きさもまちまちで、客は通される部屋の大きさで自分の立場を知ることができるとかできないとか。レミアは自室にも執務室にも客を入れないらしいので、今から入る部屋がそのどちらでもないのだけは確定であるが、ここはとにかく部屋の数が多すぎてどこが何をする部屋なのかさえ全く分からない。

アリスさんが目的の部屋の扉をノックしているのも私の屋敷では見ない光景だ。襖や障子はノックに適さないからである。

ノックに答えて出てきたのは十六夜咲夜。紅魔館に棲む唯一の人間だ。時を操る能力を持つ人外めいた者ではあるが一応人間である。彼女が何故レミアに忠誠を誓うようになったのかは不明であるし、どのようなして紅魔館に拾われたのかも一切分からない。聞いても知らんぷりして流されてしまうだけだ。

彼女は私たちが二人だけなのを確認して部屋へ招き入れた。いつの間にかアリスさんの周囲を飛んでいる人形が二体に戻っている。いつ回収したのだろうか。全く気付かなかった。

入った部屋は思いのほかこじんまりしていて、とても地底の主を迎え入れるような部屋とは思えなかった。扉から一番遠い（と言っても直径八尺ほどの円卓の奥側）椅子にレミアが座り、他の二人が均等に距離を空けて座っている。

「今日はレミィ……リアではなく私に話があるんですけどね。阿礼乙女が里を出るなんて珍しい」

パチュリー・ノーレッジ。やややる気の無さそうな顔をしているが、目は油断なく私を見つめている。確かに私が仕事以外で里の外に出るのは珍しい。

「おや、では今日は仕事で来たのではないのですね」

これが古明地さとりなのだろう。想像していた化け物の如き見た目ではないが……なるほど、二人が嫌な妖怪であると評した理由は今の一言でよくわかった。無許可の読心に加えて躊躇なくそれを口に出す行為。なかなかいやらしい。

「挨拶が遅れましたね。私は貴方の思っている通り、古明地さとりに、覚妖怪の生き残りです。稗田と会うのは初めてですね」

「……はじめまして。ご存じの通り稗田阿求です。また取材をさせていただきますこともあると思いますのでその時はよろしくお願ひします」
とりあえずこう言っておけばいいだろう。えらく華奢で打たれ弱そうな妖怪だが変に上手に出るのはよろしくない。妖怪というのは総じてプライドが異様に高い者たちだからだ。

うわ、私の方を見てクスクス笑っている。そう言えばあの妖怪は心を読めるんだった。まったくやりづらいことこの上ない。

一先ず古明地さとりを無視してレミリアとパチュリーに軽く挨拶をして用件を伝える。こちらの二人は心を読まれる心配がないので少々気楽であるが、その間にも古明地さとりに心を読まれ続けているので居心地が悪いつたらありやしない。

こんな状況で普通に話し続けられる魔女と吸血鬼が如何におかしいか、この耐え難い空間に数分も居れば誰でも分かるだろう。

「ふうん。人里の人間のみを襲う謎の症状と描かれた魔法陣……確かにこれは召喚魔法に使うものに似ているわね。私が小悪魔や精霊を召喚する時にはこんなのを使うわよ。規模はこれよりはるかに小さいけれどね。こんなに大きな魔法陣は……そう、ここに越してくる前にレミリアが使った眷属召喚クラスかしら」

どうやらアリスさんもパチュリーもこれが召喚魔法に使う陣に似ているということで見解が一致した。嘘ではないのだろうか……あ、そう言えば今この部屋には強力なウソ発見器があるんだった。

「古明地さとりさんはどう思います？」

「私に聞かれても困りますよ。私は魔法を使わないので……ああ二人の意見に嘘があるかと言えば正直なところ分かりません」

心を読む妖怪が何故嘘かどうかを見抜けないのか分からない。心を読めるのならば、嘘か誠かだけでなく彼女たちが今何を考えているのかすら分かるはず。

「ふふ……その辺りは私では不十分でしょうね。この手の問題には外の世界で売っているウソ発見器の方がよほど便利です。何せ心は隠

することができませんが血圧や心拍数は自由に変化させられませんからね。心を隠すのは当然難しい事ですよ。しかしできないわけではない。八雲紫クラスの大妖怪ならば行う事はできます。魔法はそれを簡単にすることも出来ない。私はここで何も断言できませんよ、探偵さん」

この妖怪は絶対に私の反応を見て愉しんでいる。もしかしたらこの場に居る全員の心を読んだうえで犯人に目星をつけているのかもしれない。ネタバレが一番つまらないとはいえ、この私を馬鹿にするのは別の話だろう。

もう絶対にこの妖怪には頼らない。人を小ばかにしたようなにやけ顔を見るだけでイライラするだけだし。

「それならそれでありがたいですね。私は面倒ごとが嫌いなので」

正論の刃

「この規模の魔法陣を扱ったことがあるという事はパチュリーさんに加えてレミリアさんも容疑者という事になりますか」

「それで良いんじゃないの？ 探偵つてのは全てを疑ってかかるべきでしょう」

私の確認に対してもパチュリーは何ら焦る様子もない。レミリアの方もその言葉にうなずくだけで反論してくるわけではない。分からない。容疑者であるとされたならば自らの潔白を証明するための反論があるものだと思っていたが、この二人には一切そのような気配がみられない。

二人に限ったことではなくさとりに対しても言える事だが、この場の妖怪達は一人を除いて今回の事件についてあまりにも非協力的だ。まるで全員がグルであるかのように話が進まない。

「あのですねえ阿求さん、私はほとんど地底にこもっていますしこのお二人も基本的に外に出ません。そんな私たちから人里の事件の情報を聞き出そうとすること自体が間違っているのです。貴方の目的は事件の詳細ではなく魔法陣の詳細でしょう？ ならばそのことを尋ねるべきです。今この場ですべきことは犯人捜しではないでしょうに」

この妖怪が分からない。私に一切関わる気が無いのかとも思ったがそうではないらしい。心を読んだのか私の最初の目的も知っているようだ。

確かに彼女の言う通り。初めはこの魔法陣の使い道を探るためにここに来た。しかしそこから話しは進み、用途までは大まかにわかった。今はこの規模の魔法陣を扱える者を絞っている最中なのだ。

「貴方は一つ勘違いしているようですね。パチュリーさんが訂正しなかったせいもあるでしょうが、魔法陣の大きさと使用者の魔力量は一般に相関がありません。強大な魔法使いであるパチュリーさんが小さい陣を使うのが良い証拠」

む……確かに。しかし単純に魔力を扱える者となれば幻想郷に溢

れかえるほど存在している妖怪達のほとんどがそうだ。人間の中にも魔理沙さんなど魔力を扱う者はいる。ここまでの容疑者捜しは徒労に終わったということか？

「しかも貴方はひどく思い込みが激しいようで」

「なんですつて？」

「話を聞いていれば分かることですよ。パチュリーさんも、アリスさんだってあの魔法陣を召喚魔法のものと断定していません。似ているだけの別物である可能性を忘れている。貴方の結んだ線による魔法陣は魔法に明るいお二人が知らない模様を描いているんですよ。もしかすると起動に必要なのは魔力ですらないかもしれないですね」

私が口を噤んでいるのを良い事に、さとりは紅茶を一口啜つてからまた話し出す。

「そうなると容疑者を絞ることだって難しいでしょうね。何せこれが未知の陣である以上どのような力が起動に必要なのか分かりません。魔力かもしれないかもしれません。霊力であればどうですか？ 本来ならば人間だって全員扱えるはずの力ですから人里の人間が絶対に安全かも分からない。内部犯であれば人里を閉鎖する意味すら全く意味を為しませんよ。」

そも、その描かれた模様だって阿求さんが勝手に引いたもの。参考先が魔導書であるならば魔法陣に似るのは自明ではありませんか？

いわばこれは偶然の産物。探偵が偶然や勘に頼って事件を解決してはならない、というのは貴方が一番よく知っているのではないですか？ Ms. Qc.」

薄らと私を馬鹿にしたような笑みを浮かべながらさとりは言葉を並べる。癪だが彼女の言っていることは間違っていない。私は勝手に発生現場に意味があると信じて模様を描いたわけだし、実際に記憶にある魔法陣を参考にしたわけだ。アリスさんやパチュリーが『似ている』としか言わなかったのも当たり前な事ではある。だってあれは私が作った模様なのだから。

たった十個の点を都合よく結んでできた物が本当に魔法陣として機能してしまうと一時的にでも考えてしまっていた。魔法とはそんな

なに単純なものではないと分かり切っているのに。ああ……悔しい。その事をさとりと言われるまで無視し続けていた自分が情けない。

「貴方はいつも探偵の視点に立って小説を書いているのではない。決められた結末に向かうように容疑者を動かし、辻褄が合うように探偵を動かしているだけ。主観でしか考えられないような現実の探偵はあんなに鮮やかかつ正確に事件を解決に誘えません。その事を分かっているから今回のように自分に都合の良い手がかりを生み出すことになってしまうのです。貴方が首を突っ込もうとしている世界は貴方の作る世界よりよほど残酷で耐えがたい世界。探偵気取りのごっこ遊びなら今のうちにやめてしまった方が身のためですよ」

この妖怪は私の小説も知っていると確信した。私の裏の顔^{アガサクリス}だけでなくその内容まで知っているに違いない。その上で私に説教しているのだ。私では役不足だと言っている。探偵となるにはあまりにも主観で物を見過ぎていると言っている。

私は自惚れていた。探偵はいつも自分のつもりで書いていたからか、私にも同じことができると思いついていた。特別だと思っていたのかもしれない。

けれど違うのだ。私は他でもない私自身でしかなく、犯人は思いもよらない行動をとり得る。犯人と解決方法から逆算して私を動かすなんてことは到底できるはずもない。私には早かったのだ。

「がっかりですね、九代目阿礼乙女。私の言葉に頼らないと誓ったのはつい先ほどだったというのに、その私にたった数分で心を折られるなど……ええ、がっかりです。

ではレミリア、先ほどの件はまたよろしくお願いしますね。私はお暇させていただきます」

言うが早い、さとりは咲夜の案内を伴うことも無く一人でエントランスの方へ歩いていった。私はただ自分の情けなさに唇を噛むばかりだ。あれほどまでに邪悪な妖怪が地の底に眠っていたなんて思いもよらなかった。

「気にすることはないわ」

消沈していた私にそんな声をかけてくれたのは意外にもレミリア

だった。もつと傲慢な妖怪だと思っていたので、私のような人間を氣遣う言葉がその口から出てくるとは思わなかった。

「さとりは嫌な奴だけど悪い奴ではない。最後に貴方の心の中と彼女との間でどんなやり取りがあったのか私は知らない。けれど期待していたからこそその落胆ではあったでしょうね。まあ彼女が何に期待して落胆していたのかは皆目見当もつかないけれど」

「それに古明地さとのりと言っていることが全て正しかったわけではないわ」

今度はパチュリー・ノーレッジだ。ずっと黙っていたので協力する気が無いのかと思っていたが、どうやら単純に話すタイミングが無かっただけのようだ。

「確かにあいつの言う通り、魔法陣の大きさ自体は使用者の実力を問わない。けれどそれは私たちが魔法陣を描くのに魔道具を使っているからこそ。里の家や畑にまわりついている魔力はそれとは比べ物にならない程少ない。つまり、仮にその規模の魔法陣を里の家や畑を使って起動しようと思えば、使用者が莫大な魔力を補助として使用しなければならぬことになる。今の幻想郷にそれができる妖怪はいないわ」

パチュリーはおろか、あの八雲紫をもってしても魔力では補助しきれないらしい。あの妖怪ならばそんなことをしなくても能力でどうとでもできるだろうが。

「あいつの言葉には確かに誤った情報が乗っていたけれど、貴方の探偵としての能力は私も擁護できるようなものではないと思うわ。こういった事件の解決こそ霊夢や魔理沙に頼るのが良いんじゃないの？」

「……今回に関してはあの二人はあまりアテにならないと思っています。彼女たちは優秀な異変解決者ですが事件と異変は違うものです。何より今回の犯行を見るに人間にちよっかいを出しただけのようにも思えます」

危害を加えようと思えば何人だって対象はある。畑に出る者たちから作為的に一人ずつ狂わせる。しかしその狂った者だって何か危

険な行動をとるわけでもなく叫んで眠りにつくだけ。昏倒状態と言っても数日すれば自然に目覚めるだろうという医者意見もある。恐らくそれをタイムリミットとした計画的な愉快犯。わざと痕跡を残していくくらいなのだから自信はあるのだろう。

「霊夢や魔理沙はひたすら容疑者を叩き潰していく迷惑極まりないスタイルだからね。それにしてもさとりのせいで阿求の持つて来た事件が余計に宙ぶらりんだ。こここのところ退屈だしパチエも何か手伝ってあげたらどう？」

「面倒よ。退屈なのは私ではなく貴方でしょう？ ……それにしてもこの事件の手口はどこかで見たことがある気がするのよね。どこで見たのかは忘れたけれど、確かかなり新しい本だったはず。図書館を貸すくらいの手助けはしてあげるわ。どの本かは知らないけれど」

紅魔館の大図書館と言えば勝手に本が増え続ける棚もあるくらい、数えられないほどの蔵書数を誇る場所だ。そこで目当ての一冊を探すとすれば私に残された十年余りを費やしても到底足りないだろう。

パチュリーの言う『かなり新しい』がどのくらいの年月までを指すのか私には想像できない。百年ほど魔女をやっていると考えるとここ十年以内に図書館に入った本と仮定しても大きく外さない気がするが、問題はその間に入った本だけでも相当量あることである。

「あの……新しい本というのはどのあたりに置いてあるんですか？」

「……咲夜、案内してあげて。その先は小悪魔に任せてまた戻って来なさい」

阿求と咲夜が部屋を出たため、この部屋に残されているのはレミリアとパチュリー、それとアリスになった。

「パチュリーが直接案内してやっても良かったんじゃないの？ もうさとりは帰ったんだしここにいる理由もないわよね」

「阿礼乙女がいる間はここにいるわ。読書は静かな場所でしたいも

の」

「あの子は魔理沙や霊夢と違ってうるさくしないと思うけれどね。それにレミリアがいる方がかえって賑やかになるのではなくって?」

そう言ったアリスに対し、パチュリーは一瞬だけ目を上げて睨む。『何が言いたいのかは分かっているだろう』とでも言いたげな目に、アリスだけでなくその会話を見守っていたレミリアも思わずクスリと笑みをこぼす。

パチュリーは静かな場所で本を読みたいのではない。落ち着ける場所で本を読みたいのだ。普段全く関りの無い他人がいる空間というのは彼女にとって落ち着かない。それならば多少賑やかでも友人たちと同じ空間で過ごす方が幾分かマシなのである。

「それにしたってパチュリーが図書館に人を通すのは珍しいわね」

「別に……私はコソ泥ねずみども以外にはいくらか寛容なつもりよ。それにあれは十分信用するに足ると判断した。それだけよ」

「やれやれ………それにしてもパチエったら意地悪よね。どうせどこで読んだ本なのかなんて覚えていたんでしょ? 教えてあげればよかったんじゃないの?」

「簡単に教えたってつまらないでしょう? 答えを与えてしまったら探偵ごっこもすぐ終わってしまうわ」

底意地の悪い妖怪の内面を人間は知ることができない。ヒントを与えられれば、そのヒントに基づく答えを知っている可能性を捨て、先出しされたヒントの方に飛びついてしまう。

「それにしても何故犯人は佐戸愛子の小説なんて参考にしたのかしら」

「さあね。外道な解決法すら許容するってことかもしれないわ。それよりも佐戸愛子の小説にそんな内容の物あったかしら」

「レミイが知らないのも無理ないわ。最新刊だもの。タイトルは確か『前方後円墳になる村』」

解決できるのは私だけ

十六夜咲夜に連れられてやって来た図書館は、その規模を知っていてもやはり言葉を失ってしまう。何処にどのジャンルの本があるのか私にはさっぱり分からない。

そういう時に役立つのがこの図書館で本の管理を任されている小悪魔や妖精たちだ。まあ妖精は馬鹿なので基本的に小悪魔しか頼りにならないし、実際この小悪魔さえいれば本の案内は十分であろうと思えるほど図書館を知り尽くしている。悪魔と言っても契約に縛られた存在なので危険度は非常に低く、口数は少ないが不気味さや恐ろしさは感じない。

小悪魔がこの数の本を把握しているのは、もちろん普段から管理しているからという理由もあるだろう。しかしそれよりもパチュリーが自分のリソースを割いている部分が大きいと思われる。

これに関しては完全に私の中の仮定であり確認のしようはないが、契約の際に蔵書に関する記録を丸ごと共有するようにしたのだと推測している。この量の本を契約してから記憶しようというのは流石に無謀だからである。

咲夜が手を一つ叩くと、並び立つ本棚の一つの陰から赤い髪の小悪魔が飛んできた。私に気づいた彼女はちよつとばかり姿勢を正して何の用なのか聞いてきた。

「最近パチュリー・ノーレッジが読んだミステリーあるいは事件簿かつ日本語で書かれたものを教えてほしいのですが」

私がそう言うと彼女はまた本棚の海に飛んで行ってしまった。彼女の頭の中ですぐさま対象の本を選び、その本のある棚まで取りに行ったのだ。恐るべきはその選定速度。二秒に満たない程の短時間で候補を選び出し、その場所までの経路を計算している。

私の推測はあながち間違っていないなさそうだが、パチュリーがこの悪魔に割いているリソースがどれほどのものなのだろうか。私では到底想像できない。

数分待っていると薄い物、厚い物合わせて十冊ほどの本を抱えて戻って来た。ちなみに咲夜は待っている間に帰ってしまった。

持って来た本を見れば全てミステリー小説で統一されているのが分かる。実際の事件ではなく、架空の事件の話をしていたことがこれで分かった。だから何だという話にもなるが、これは非常にありがたい結果なのだ。

なぜならば事件簿とは違い、小説では絶対的な解決法が記されているからである。事件の詳細や犯人の動機、手法までも当然語られている。あらすじだけを追って、今回の事件に似ているものがあればチェックする。とりあえず持って来られた分それを繰り返せばいい。並べられた本を見ていると、最近パチュリーがどのような本にハマっているのかが分かる。私の本が三冊。これは私が今まで出した本の全てだ。私の本は候補から外せる。

となれば残りは七冊。著者は佐戸愛子。シリーズ物のようだが、番号は途中からになっている。七冊全てが私の小説よりも分厚いが、その中でも一際存在感を出しているのがおそらく最も新しい物。他に比べて三倍近くの厚さがある。上中下巻に分けるよりはかさばらないかもしれないが、手軽に読もうと思えるサイズではない。

ここで一つ問題がある。チェックするにあたってあらすじを追うことになるのだが、ミステリー小説は基本的に初めから丁寧に読まなければ面白さが分かりづらいと思っている。何も知らない初見の面白さが消滅してしまうのだ。

試されている。相手にその気がないにせよ、パチュリーがシリーズとして読み続けたものならば少なくともそこそこ以上には面白い小説のほずで、私自身他人が書いたミステリーに興味湧いてきたところなのだ。結果を知った上で読むという人もいるが、それは私のポリシーに反する。

いや、何も最後まで読む必要はないのでは？ 結局知りたいたいののは犯人でも動機でもなく、里で起きている事件に似た犯行そのもの。初めの方を少し読むだけならば犯人も分からない。流石、私って天才。

六冊目までを流し読みしたことで、この人間の書く小説がここまで分厚い理由が分かった。他ではあまり見られないような独特な比喻がいたるところに使われている。酒を呑んで喉が焼けるというような使い古された表現も、『まるでママシが食道を内から喰っているような気持ちの悪い痛みが走る』という風に常人には理解できないような独特な比喻表現が使われている。理解はできないが、吐きそうなほどの気持ち悪さと激甚な痛みは伝わってくる。

比喩以外に、緻密な心理描写も多く描かれている。各登場人物がそれぞれに対してどのような感情を持っているのか、どの程度言葉を信用しているのか、またそれが何故なのか……。思わず引き込まれてしまいそうになる。きちんと文章を追ってしまっている自分に気づいては流し読みに戻る、という過程を難度繰り返し返したか。

六冊目までぎっと見た感じでは無い。最後に残った七冊目。異常に分厚いそのどこに書いてあるのか、探すのさえ億劫になる。急いで読んでしまいたいところではあるがそろそろ日も傾き始める時間。里に帰らねば心配されてしまうだろう。変に騒動が増えるのは望ましくない。

「蔵書の貸し出しは行っているんですか？」

ダメもとで聞いてみるが小悪魔から返って来た答えはやはりNO。分かってはいたがしかし、ここで『はいそうですか』と簡単に引き下がるわけにもいかない。今日たまたま用事が無かっただけで、明日は長者との話し合いがある。なるべく早く読んでおきたいのだ。

「時間は限られているんです。たとえば貴方が断つても主人に直談判する覚悟ですよ」

迷惑だと分かっているとしても今の私にできることはこれだ。魔理沙さんのように無理矢理盗って行くなんてことはできない。

私の口調の変化に戸惑っているのか、それとも主人になんと云えば良いか分からないのか、小悪魔はただオロオロするばかりだ。

「貴方の主人……パチュリー・ノーレッジを呼んでください」

「それには及ばないわ。それで？ その本の貸し出しだったかしら」

振り返れば図書館の入口にパチュリーとアリスさんが立っていた。

レミリアは自室へと帰り、咲夜もそれに従って行ったか食事の準備で
もしに行つたのだろう。

「貴方なら本を貸し出すのはやぶさかでない。魔理沙とは違つて信
用に値する人間だから」

「では……」

「けれどその本から手掛かりを得るにはもはや時間が無過ぎる。
ええ、貴方の持っているその本が私の言っていた本よ。……何？ 私
が読んだ本を忘れるわけがないでしょう？ 本に限れば貴方と同程
度の記憶力を持っていると自負しているわ」

パチュリーは私の探していた本を初めから知っていた。その上で
敢えてぼかしてヒントだけ与えたうえで放流していたのだ。性格の
悪さ云々ではない。妖怪にとってはこれこそが長い生を埋める愉し
みの一つだからだ。

私はそれに弄ばれた。この世界では騙される方が悪い。今回はた
またま遊ばれただけだったから良かったものの、もっと凶悪な相手で
あれば簡単に命を落としてしまう。この辺りの注意も縁起には記し
ておこうと思う。

とにかくだ、今私が抱えている本こそが探していた本であるらし
い。また騙されている可能性も一瞬頭をよぎったが、パチュリーは無
意味に他人を騙すような性格はしていない。彼女自身が面倒くさが
りだからだ。

「時間がないとは？ また同様の事件が起こると言うのですか？」

「起こるわ。その本を読めば分かるでしょうけれど」

「全てが本の通りになるとは限らないと思いますわ」

ここまでは確かにパチュリーの読んできた内容通りに事件が進ん
できたのかもしれない。しかしそれがミスリードだとしたら？ ど
こかでこの事実に基づいて探偵気取りの愚か者を誤つた方向へ導く
ための罠だとしたら？

私の考えを余所にパチュリーは、絶対にこの通りに事は進むと確信
している、と断言した。

「手に持っている本の一番後ろを他の本と比べてみなさい。……分

かったでしょう？ その本だけが公に出版されたものではない。その本を知っている者はごくごく一部に限られるという事よ。その上でわざわざミスリードを狙おうとしているのなら、はつきり言ってセンスがない。探偵役が上手くその本に辿り着くとは限らないのだから。その本は世界に一冊しかないかもしれない。そう考えると犯人は自ずと絞れるわね」

「まあそれはそうなんです、肝心の次の事件について教えていただけませんか？」

「貴方は探偵でしょう？ でも時間も少ないしヒントだけ教えてあげるわ。今、事件は井戸を囲むように円形に起こっている。この事件は最終的にあと二軒の襲撃と一人の失踪者を出したのちに解決される。襲撃された家を辿ると前方後円墳の形になるそうよ。規模は知らないけれどね」

それこそがこのタイトルに現れていたわけか。なるほど。今回里で起こっていることが殺害であったならば、もう少し大規模に行われていたならば確かに巨大な墓にもなっただろう。

同刻、人里ではパチュリー以外にもこの事件に勘付いた者がいた。貸本屋の一人娘、本居小鈴である。店の営業時間が終わるや否や、彼女は店を飛び出して次の事件が起こりそうなポイントを目指す。遊び心のある犯人ならば今夜子の刻近くにここに現れるだろうと踏んだのだ。

その犯人の顔を拝み、あわよくば捕まえて本の感想を聞いてみようかと企んでいるのである。しかし、彼女は殺人事件にばかり気を取られていたせいで一つ重要な点を忘れていた。失踪者である。

『本居小鈴……お前は知りすぎた。解決は探偵の仕事だ。さあついて来い』

脳に直接話しかけられたような、か細いのに雑踏の中でも不思議と確かに聞き取れる声が彼女を呼んだ。次の瞬間、彼女は人里の外へと歩

き始めていた。傍から見ればなんてことも無くただ普通に歩いているだけ。

門の出入りを取り締まるはずの門番は日中の疲れからなのか眠りこけており、小鈴を止める者は誰もいない。

「まったく……ただの暇つぶしがこんなに変だったとは思わなかった。でもこれであと二人。殺しちゃいけないのはやっぱり手間だね」「ここは幻想郷だもの。私は暇でもないんだけど」

四つの人影が山の方へ消えていく。本居小鈴の失踪は今夜中に人里を駆け巡ることになるだろう。知りすぎた者は容赦なく排除する。解決者は探偵役を買って出た阿求ただ一人でなければならぬ。

鍵は開かれた

痺れを切らしたパチュリーによりヒントどころか答えに近いものを得た阿求は、礼だけ言つてアリスと共に里へ歸つて行つた。

「どう見る？ パチエ」

「犯人様の動機が楽しみみたいだけなのならば、おそらく探偵の実力に合わせてくれるでしょう。どんな道筋を辿つても解決までは漕ぎつくと思つて。レミイは？」

「さて……未来なんていかようにも変わり得る。たとえ今のままでは探偵が負けるとしてもね」

レミリアが見るのはいくつもの分岐の先に現れるであろう未来。そのひとつひとつが、ほんのわずかな出来事によつて変化し得る。あらゆる行動の結果により数ある運命は徐々に絞られてゆく。今までの阿求の行動が自らの未来を作るきっかけとなる。

今レミリアが見ているのはそんな未来たち。阿求が敗北している未来が全体の九割を超える絶望的な状況も、それを作つたのは阿求自身である。

事実、阿求は断片的な情報以外何も知らない。犯人の手口も、詳細な場所も、時間帯も、そして犯人の動機が本当に彼女の考えている通りなのかも。

「まあ解決できなくても仕方ないと思つて。探偵の初動が遅すぎた。もう少し早くにここに来ていれば急ぎつつも焦らずには済んだでしょうに」

彼女が動き出したのは既に六人の犠牲者が出た後のこと。全員命に別状が無かつたと言えどあまりにも遅い。小説の通りに事が進むならば、タイムリミットは明日の正午。

レミリアは小説の内容なんて知らないが、自身の見たものによりそれを確信している。パチュリーももちろんそれを知っている。

知らないのは当事者たる探偵だけだ。阿求だけはまだあと二日程度余裕があるだろうと思ひ込んでいる。これまで一日一件のペースで事件が起こつていたからだ。無知が思い込みを生む。誤つた思い

込みは油断を生む。そしてその思い込みを訂正してくれる友人は既に失踪してしまっている。

現実の探偵は小説家の操り人形ではない。自らの得た情報だけで犯人を追いつめなければならぬ。阿求はこの件でその難しさを嫌というほど実感するだろう。少なくともレミリアはそう確信していた。

「ま、今更私たちには関係の無いことね。咲夜、食事の準備をしなさい」

咲夜はかしこまりました、と一礼してから姿を消した。一時間もすればまた呼びに来るだろう。静かになった図書館にはしばらくの間パチュリーの本を捲る音だけが響いていたが、やがてレミリアも暇を自覚したのか、まだ読んでいなかった本を手にとった。

佐戸愛子。この人間の書いた本を手にとる度にレミリアは薄気味悪さを感じる。ごく最近入って来たという本をひよいと裏返してみれば、案の定出版年はたった二年前。

幻想郷の性質上、たどり着くのは外の世界で忘れ去られたものばかり。それは幻想郷の結界を通す以上この大図書館でも変わらない。ここにある外来書はすべて外の世界で読み古されてボロボロになったもの。それをパチュリーが見た目だけ修復しているものだ。

しかしこの著者の本だけは完全に新品のような状態で入っている。紙の匂いも質感も他のものとは比べ物にならない。パチュリーがそのことについて何も言わないのもレミリアにとっては不審なことだった。もつとも、彼女にとっては本が読める状態であるならば何でもいいのかもわからない。

もう既に内容を知ってしまった本をなんとなく眺めながら食事の出来上がりを待つ。騒がしい事も多いレミリアだが、実は静かな場所も嫌いではない。それでもなければとつくにパチュリーを紅魔館から追い出していたらう。

後から思い返せば刹那が如き時間なのだろうが、今この瞬間だけはゆつたりと時間が過ぎていくように感じられる。永い時を生きる彼女たちにとって、生きていくことを実感できるだけのひと時は重要な

のだ。

頬を机につけて手足も伸ばす。そんな楽な姿勢でただぼんやりしていたレミリアだったが、次の瞬間急に起き直った。その拍子に広げられた翼によつて机上の本が数冊床に落ち、パチュリーはレミリアに不機嫌な顔を向けた。

そんなことは気にも留めずに驚いたような、それでいて興奮したような顔でレミリアはパチュリーに話しかける。

「パチエって本はどこまで読む？」

「そりゃ全編一通り読むわ。内容も忘れはしない。あとがきまで読むこともあるわね。たまにだけけど」

「それじゃあ気づかなくて当然か。これを見なさい、パチエ」

そう言つてレミリアがパチュリーに突きつけたのは例の本のカバー裏。普通に小説を読むならばまず気にならない部分でありわざわざ見ようとも思わない部分である。レミリアが気づいたのは持ち無沙汰だったがゆえだ。

黒で縁取られた真つ赤な表紙だ。『前方後円墳になる村』というタイトルが小さく書かれており、文字の下には前方後円墳らしき絵が描かれている。しかしその絵が前方後円墳だと考えられるのはタイトルがあるからにはかならず、何も知らない者が見れば別の物を想像するだろう。

「まるで典型的な鍵穴表現でしょ？ 真つ黒いシルエット。しかも首の部分が古墳のそれよりはるかに細い。それにほら、表紙だけじゃなくって裏表紙にも読めないけど何か書かれてるわ」

・ e v i t c e t ・ d e l t s e , c , i l c a l

真つ赤な表紙に対して裏表紙は真つ黒だ。真ん中あたりにはアーチ状に赤抜きで文字が書かれている。端のほうの文字が少し歪んでいるのもあってレミリアにはとても読めないらしい。

「まさに鍵穴、か。阿求を向かわせるべきではなかったかもしれないわね。レミィの言う通り、どうにも良くない予感がするわ」

レミリアにはさっぱり理解できなくとも世界中の本を読み漁って来たパチュリーにとつてはこの文章の解読程度わけなかった。先ほどのまでの気だるげな様子とは打って変わり、目を瞑ってブツブツと独り言しながら何か考え事を始めた。

この推理小説の内容を思い出しているのだ。犠牲者が七人に失踪者が一人。今現在分かっている犠牲者は六人だが襲撃が起こったのは五件だ。あと二人の犠牲者が出るであろうとパチュリーは予測している。実際にそうなるだろう。しかし場所は？ 小説で分かるのは形だけ。挿絵も一切ないのだから人里の規模と小説内の村の規模を比較することもできない。

「そう言えばレミィは犯人が誰かも分かっているのよね」

「それが分からないのよね」

パチュリーがぼつりとこぼした独り言に返したレミリアの言葉。それに最も驚いたのはパチュリーだった。平たく言えば未来が見えるという強力な能力で、今回の事件についても探偵と犯人の勝敗が見えているような発言をしていたはずだ。それにもかかわらず犯人が分からないというのは理解しがたいことだった。

「何？ 知らない奴が犯人だってことかしら？」

「それすら分からないのよね。見てやろうと思うほど遠ざかるように犯人像を結ぶことができない。まるで私の能力が操られているような気にもなるし、正直に言えば不快極まりないわね」

基本的にプライドの高いレミリアにとって能力が自分の思う通りに働かないことへのストレスは大きかった。

阿求が見える。横たわった小鈴の傍で頹れる彼女が見える。だがそこまでだ。にわかには暗い影が彼女たちを覆ったと思えば分岐の本源へ戻っている。

こんなことは初めてだった。見ようと思った物が見えない。運命が別の分岐へ繋がらない。まるで死の直前を見ているかのように、唐突に暗転して運命が見えなくなる。あり得ない。幻想郷という土地で、八雲紫が管理する人里の中で人間は妖怪に殺されない。しかし全く幻想郷に関りの無かった者が犯人だったら？ 掟を知らない者が

犯人だったらどうだろうか。

もはやレミリアに分かるのは探偵の敗北だけだった。犯人が何の目的で事を起こしたのかという問題以前に犯人の顔さえ分からない。結果以上の情報が何も見えてこないのだ。

「阿求は必ず挫かれる。とにかく八雲には話を通しておきたいところね」

何が正しい未来なのか分からない。レミリアはただ、自分の能力を信じたうえで人里壊滅の危機を紫に伝えることしかできないと判断した。運命を操る能力ですら介入できない絶対的な運命を彼女は感じ取った。

それが正しい判断であるという自信も彼女にはないが、とにかくこの状況から逆転の一手を打てるとすれば八雲紫にほかならないだろう。稗田は幻想郷の中枢を担うべき人間であり、彼女を寿命以外で失うのは幻想郷のシステムにも影響が及ぶ可能性がある。

「やつほど自由気ままな妖怪もいないわ。何処に居るのかなんて分かったものじゃない。レミイも分かってるでしょ?」

「そうね。ならばもういつそのことこちらから手を打った方が良くいかもしれない。手柄を立てればもう少しここでの待遇も良くなるかも shouldn't ないからね」

吸血鬼異変で圧倒的な力量差の前に敗北を喫してからというもの、レミリアは令嬢としての生活から長らく遠のいていた。仲間や眷属、小間使いもそのほとんどが消し去られ、館に仕えていた者の中で残ったのは耐え抜いた精鋭二人だけ。

今の生活に大きな不満があるわけではない。吸血鬼異変後の取り決め通り、紫は定期的に食糧としての人間を攫ってくるし、きちんと好みの血液型に合わせた新鮮な血液も支給してくれる。それこそ外の世界で血液不足が騒がれる程度には大量の血液が仕入れられているわけだ。

「これ以上何か望むものがあるのかしら? 別の世界へのアクセスなら私も興味があるけれど」

「具体的に何かと言われると確かに難しいわね。でも心理的な問題

よ。私たちは世間一般からは大きな異変を二度も起こした迷惑者として認識されているでしょう？　それが外出時なんかには枷になるのよね」

生活スタイルが幻想郷とまったく違うことも理由ではあるのだろうが、レミリアも咲夜も外に出れば奇異な目で見られる事がある。それが気に食わないのだ。八雲紫に圧倒的な力量差で敗北した後、彼女たちはもう幻想郷で暴れないことを約束させられた。吸血鬼にとって約束が絶大な効力を持つことを紫も知っていたのだろう。

そこからレミリアはその約束に盾突くような事をしていない。この間の紅霧異変だってスペルカードルールを世に広めるために頼まれてやったボランティア活動でしかなく、幻想郷を真の恐怖に陥れてやろうなどという気は一切なかった。だどというのに紫やさとりといったごく一部の者以外からはお騒がせ妖怪のレッテルを貼られている。この境遇に納得がいかないのも当たり前だろう。

「だから慈善活動でもして人里からの評価を上げようというわけね。殊勝な事ね。応援しているわ」

「違うでしょ。貴方も一緒に来るの。紅魔館のブレインとしてこの事件の解決をするのよ。幸い貴方は元となった小説を一通り読んで。何があるか読めない以上、貴方の知識は必要不可欠よ」

「嫌よ。面倒くさい。心配しなくても誰も死にやしないわ。いざとなれば八雲紫が割って入るでしょうし」

レミリアの訴えも虚しく、パチュリーは解決に赴く気が一切ないようだ。それもそのはずで、彼女は別に今の生活を変えたいとも思っていない。さらにレミリアが見えているような運命など一つも見えない。うえに紫の実力も知っている。人里の人間が危険に晒されるような状況になればなるほど人間の安全はより強固なものになるだろうと考えている。

親友からの突き放しにレミリアは数瞬呆然とする。まさか断られるとは思わなかったからだ。正気に戻った後もレミリアの考えは変わらない。今度はどうすればパチュリーを駆り出すことができるのかについて考え始めたが、こちらも妙案が浮かばない。

「そも他人を頼りすぎじゃない？ 本と現実が同じになる保証はないし、そうなたら私にの方が足手まといに——あら咲夜、食事の時間……ん？ 何かあったのかしら？」

気づけばもう小一時間は経っており、食事に呼びに来てもおかしくない時間ではあった。

しかし呼びに来たはずの咲夜の様子がおかしい。何故かとても焦っているようで、顔面を蒼白にしながら息を切らしている。レミリアも咲夜の異変に気付いたのだろう。呼吸を整えさせながら話を促す。

「い……」

「い？」

来た時から息も絶え絶えで蒼白だった咲夜の顔がさらに青白くなった。

「妹様が行方不明です！」

咲夜の口から力なく、しかしはつきりと発せられたその言葉は、レミリアはもちろんパチュリーを動かすにも十分すぎる威力を持っていた。先日の脱走以来、フランドールの部屋の鍵の開閉を管理しているのはパチュリーだったからだ。

何故気づかなかったのか分からない。フランドールの部屋の鍵は確かに開錠された跡があったのだ。それもパチュリー自身の魔法によつて。

得体の知れない恐怖が彼女の首筋を撫でた。

仮像

人里に戻った阿求はアリスに礼を言って別れたかと思うと足早に歩き出した。目的地は鈴奈庵。小鈴が例の本の事を知っているとは思わないが、あの小説家については知っているはずだからだ。

小鈴はどんな本だっけと読む。ジャンルどころか言葉や種族にも縛られないほど、本なら何だっけと片っ端から読むような少女だ。件の作家、佐戸愛子に關しても何か言及していたことを阿求は忘れていない。

しかしいつもいるはずの場所に彼女の姿は無かった。店内にはただ時計が時を刻む音が聞こえるのみであり、ページを捲る音は一切しない。不思議に思い、いつも小鈴が本を読んでいる椅子の辺りに歩みを進めたところで一枚の書置きを発見した。

『本居小鈴は我らが機密に触れたために捕らえた。返してほしければ明日正午に山の巫女を連れて中心の井戸へ来い。来なければ友の命は無いのと思え』

見覚えのない筆跡でしたためられていたのは小鈴誘拐の旨。あまりにも急だったため、阿求の頭は逆に現実を受け容れまいと冷静になった。だが何度読んでも文章は変わらない。しかも実際に小鈴はどこにいるのかわからない。結局彼女は現実を受け入れたうえでその後を考えることにした。

今代唯一の友人の行方が分からなくなり、パニックに陥ってもおかしくないような状況でも彼女を冷静でいさせたのは、彼女の蓄積した三百年近くの人生経験と彼女の能力である。

『一人の失踪者』

阿求はパチユリーが語ったシナリオを覚えていた。

当然誘拐された小鈴が失踪者であるという根拠はどこにもない。しかし今までの事件の傾向から、少なくとも被害者と呼ばれるような対象ではないと言えるし、この事件の最終盤に起こった誘拐ならば犯人側が失踪に置き換えている可能性は高い。

そして何よりも書置きの内容が不自然だ。本来誘拐するならば対

価は金銭だ（早苗の奇跡の力は金では買えないものであるが）。それにこの書置きを誰に宛てて書いてるのかと言えばおそらく阿求。少なくとも親ではない。

この情報を得た結果、彼女は余計にわからなくなった。犯人が何故このような大胆な行動をとったのか、場所まで指定していったい何をしようとしているのか。

不愉快だった。友人を攫うことによって強制的に阿求が動かねばならない状況を作り出すとする犯人が。そして何よりも阿求がここに来ると分かっていたかのように置いてあつた書置きが。

相手の掌の上で弄ばれている感覚。それは探偵として彼女が行動を始めたすぐ後から感じていたものだった。向かう先には必ずヒントが用意されていた。稀覯本とも言える本が運よく図書館にあつたというのも冷静に考えれば不自然極まりない。

だとすれば犯人の目的は本当にどこにあるのだろうか。自分はいったいどこからどこまでを誘導されていたのだろうか。

そんな考えが彼女の頭を駆け巡る。犯人の誘導通りに行動すれば確かに解決まで漕ぎつけられるのかもしれない。しかし本当にそれで良いのだろうか。それで解決して、本当に探偵として事件に向き合ったと言えるのだろうか。そもそも今更抗おうとしたところで自己満足以上の結果は得られるのだろうか。

下手を打てば小鈴に危険が及ぶかもしれない。ここまで人間を肉体的に傷つけるような真似はしていないが、だからといって楽観できるわけではない。相手は確実に妖怪なのだからいつ本性を表しても不思議ではない。

阿求はますます思考の沼にはまってしまふ。探偵にとって考えるべき時間を浪費することが何を意味するか、彼女が知らないはずはないというのに。

進めばヒントが見つかるかと分かりきっているのに進むことができない。それが自分の意思であるような気がしないからだ。小鈴の両親が店に戻ってきて騒ぎだすまでの一刻もの間、彼女は何もできずにただ佇んでいることしかできなかった。

「約束の物は？」

「動くかどうかはさておきバッチリできてるよ。あとはもう彼女次第さ。でも本当に彼女は来るのかい？」

「間違いなく。これを彼女が黙って見過ごすわけがない。それに最悪の場合は私が動かすこともできるでしょう。よくやってくれたわ。明日の準備も順調かしら？」

「それは別の奴らが進めてくれた。久しぶりだね。楽しい祭りの始まりだ」

「ええ。失敗は許されないのでから場所まで慎重に調整お願いします」

「分かっているさ。一番失敗したくないのは我々だからね」

レミリアはパニックに陥っていた。嚴重に警戒していたフランドールが気づかぬ間に脱走してしまったのだから当然だ。咲夜が作った夕食など食べている暇はない。何処に行けば良いのかも分からないまま、玄関の方へすっ飛んで行った。幻想郷中を探し回るつもりなのだろう。咲夜もワントンポ遅れながらレミリアに追従していった。

他方、図書館に取り残されたパチュリーはレミリアよりもよほどひどく動揺していた。フランドールを閉じ込めていたのは彼女の魔法であり、フランドールが錠を破壊しない限りはいかなる怪力であっても扉は開かないはずだった。実際に錠が破壊された形跡はない。

しかし扉は開いた。錠は開かれたのだ。他でもないパチュリー自身の手によって。信じられなかった。どのタイミングで魔法を使用したのか思い出せない。そもそも彼女が自らの意思でフランドールの部屋の開錠をしようとするとは思えない。誰かの意思が介在した

に違いないのだ。

小説の内容通りではない、全く予想もしていなかった事件に動揺するなという方が酷である。自身が関わっているならなおさらだ。その動揺が貧弱魔法使いには効いたのか、パチュリーは小一時間ほど意識を失うことになった。

パチュリーが目を覚ました時に目の前にいたのは美鈴だった。こんなにも早く目覚められたのは美鈴が何かをしたからだろう。

美鈴はレミアたちから何も話しを聞いていなかったようで、パチュリーに事情を聞いた後、パチュリーがフランドールを探すのに自分もついて行こうと提案した。パチュリーの外出は常に危険が隣り合わせだからだ。

レミアたちから一步遅れるかたちにはなったが、一時的に意識を失ったことよってパチュリーの頭は冷静さを取り戻した。他人の意思の介在。パチュリーはその言葉から連想される者に心当たりがあった。そう、さとりである。

パチュリーはさとりの事を詳しく知っているわけではない。できる限り関わらないように努めてきたからだ。そんな彼女もさとりの重要な能力については知っている。他者を操る力だ。どのレベルで行えるのかについては完全に不透明だが、少なくとも数十の妖精を操る分には何の問題も無いらしい。

だからこそ、今回の不思議な経験についてはさとりが犯人だと断定した。もちろんパチュリーを操ろうというのは妖精たちの比にならないほど難しいことだろう。しかし数十もの妖精でも余裕を持って操ることができるのならば、たった一人の魔法使いを操ることができないと楽観することはできない。しかも相手はあの古明地さとりである。

今日紅魔館にやって来たのははたして偶然だったのだろうか。阿求に会って行ったのも偶然で片づけて良いものだったのだろうか。考えても分からないならば直接問いただせば良い。

そんなことを考えて地霊殿へと向かったパチュリーと美鈴であつ

だが、お燐によるとまだ帰ってきていないらしい。

「今日は紅魔館で話があると出て行ったきりですから……てつきりまだ話をしているのかと思ってたんですがねえ。まああの方は時々変な事に首を突っ込むところがありますからそのうち帰ってくると思いますよ。中で待つてますか？」

もちろんさとりが自らの意思で首を突っ込んでいるわけではない。普段から何かと面倒ごと^①に巻き込まれているだけであるが、それをお燐が知るはずもなく、結果的にさとりへの勝手な思い込みが加速していくのだ。

「私たちにそんな暇はないわ。それにしても……なんだか地底全体が騒がしいみたいだけれど」

「ええ。さとり様のおかげですよ。明日は久しぶりに地上へ出る許可が下っているんです。もちろん暴れたら厳罰が下るみたいですが」

妖怪の中でもさらに忌み嫌われ排除された者たちが明日再び地上へ出ることが許された。さとりや萃香含め既に不可侵条項の撤廃を知っていた者たちは勝手に出入りしていたが、そうでない下っ端に位置する者たちにとっては堂々と地上に出られるのはこれが最初で最後かもしれない。さとりは不可侵条項の撤廃を周知する気が無いから下っ端はそれを知らないままなのだ。下手に問題を起こされてはたまったものではないのだから当然である。

浮かれているお燐とは対照的にパチュリーは警戒を強める。明日と言えばシナリオ通りならば事件が解決するはずの日だ。犯人像として濃くなるさとりの影。しかし目的が一切分からないままだ。地上を混乱に陥れたいのならば暴れてはいけないなどという注意を与える必要はない。

ただ地底の妖怪を地上に解き放つ理由は何だ。わざわざフランドールを連れ去った理由は、こんなバカげた風呂敷の広げ方をした理由は……紅魔館を敵に回してまでこんなことをする理由は何だというのだろうか。パチュリーにはその一切が分からない。理解できない。

「あら、こんな場所にいたのね。酷い顔よ？ パチエ」

パチユリーを思考のスパイラルから救い出したのは先に行動していたはずの親友だった。何でもフランドールが向かいそうな場所を回りまわった挙句、もうあと可能性があるのは地底くらいだろうという結論に至ったらしい。

しかし残念な事に彼女は地底にもいない。地上よりもはるかに広い地底をくまなく探すことはできないが、地霊殿内部と旧都くらいの比較的狭い範囲ならば美鈴の気配探査が行える。そのどちらにも反応は一切ないし、お燐もフランドールを知っていそうな言動は一瞬も起こしていない。

「となるとあと行っていない場所は……」

「太陽の畑と妖怪の山、人里くらいですね。どこから参りましょうか、お嬢様」

「人里かしらね。山はここに来る前に一瞬通ったけれどいつも通り河童がうるさかっただけだし、それに人里は今回の事件の舞台でもある。フランがいなくても何か話が聞けるかもしれないわ」

ここにフランドールがいないと分かると詳しい事は何も聞かずに次の目的地を決めるレミリア。今の彼女にとっての最優先はやはり妹なのだ。明日行われるらしい百鬼夜行など気にも留めない。

「パチエたちもついてきなさい。ブレインがいてこそ君主は輝くものよ」

かくして紅魔館の四人組は揃って人里へと向かう。フランドールもさとりもいったいどこにいるのだろうか。犯人は何を思っただろうか。四人は探偵の助手足り得るか。

決着

「ねえ探偵さん、ちょっと私についてこない？」

そんな声が聞こえたのは小鈴の両親が騒動を起こしている真つ只中だった。私はまだ鈴奈庵に残っているが、小鈴の両親は共に娘を探しに出て行ってしまった。

里中が騒がしくなっている中でも幼い少女が発したような声はよく通り、私の耳にスツと入ってきた。しかし、走り回っている者たちにはそんな声を聞く余裕もないらしく、相変わらず目を里の隅々まで光らせているだけに見える。

はじめ声のした方を見た時には誰もいなかった。

外の騒ぎの声を何かと聞き間違えたのかとも思ったが、どこからか蝙蝠が集まってきたかと思えば次の瞬間にはそこに幼い少女が佇んでいた。

「レミリア・スカーレット……？」

「違うわよ」

そう、違う。この少女はレミリア・スカーレットではない。しかし見れば見るほどレミリアに似ているように思えて仕方がない。目立つ違いと言えば髪色と翼の作り。金色の髪はともかく、宝石をぶら下げた枝のようなカラフルかつ頼りない翼は、吸血鬼と言われてイメージする姿と一線を画している。

「私はフランドール・スカーレット。赤子も泣き叫ぶ、誇り高い吸血鬼よ」

赤子は何もせずとも泣き叫ぶものだとツッコむのは野暮だろうか。

「貴方が今回の探偵さんなんでしょ？ 名前は……なんだっけ？」

「……稗田阿求です」

しかしこの少女がフランドール・スカーレットなのか。噂通りならば、スペルカードルールの外での戦闘では幻想郷最上位に位置する恐るべき吸血鬼。単純なパワーでは姉のレミリアをも凌駕するという悪魔の妹。しかも持っている能力は理不尽な破壊の力。

今までどうして問題にならなかったのか不思議になるほど弩級の

厄災だ。それが今私の目の前に佇んで私を見ている。

怖い。

蛇に睨まれた蛙。鷹の前の雀。脚に力を入れているのにまるで身体を支えているような気がしない。動かすこともできない。磔刑に処されているかのごとく、指一本動かさずに恐怖ばかりが身も心も支配していく。頬を伝う汗は外気の暑さによるものではない。

コレだ。目の前のコレこそが本来縁起に載せるべき災厄。人に絶望と恐怖を与える真正の妖怪^{バケモノ}。今の幻想郷にこのような恐怖が眠っていたとは。

「そっか。それで探偵さん、私について来るの？ どうなの？」

結局名前を聞かれたのに意味は無かったらしい。あるいは興味が無かったか。フランドールの口調は砕けているし、敵意を持っているわけでもないだろう。そうだとこのに感じるプレッシャーは他の妖怪たちと比べても桁違いだ。制御が効いていないだけかもしれないがそれでも恐ろしいのは変わらない。

彼女について行くか、行かないか。実質選択肢など無いに等しい。この恐怖に打ち勝って彼女の誘いを断ることができれば、私はきつとこんなに弱くない。

「……貴方が犯人なんでしょうか？」

「来るの？ 来ないの？ 早く決めてちょうだいよ」

私が勇気を振り絞って何とかひねり出した質問に返答などなかった。

聞いていない。この妖怪にとって興味の無い言葉は右から左なのだろうか。分からない。何も分からないが今はコレを無視するわけにはいかない。

ついて行く、と返事すれば彼女は満足そうに先導し始めた。ついて行った先は里のほぼ中心部、井戸だった。犠牲者の妻たちはいつもここで漫談を楽しんでいたという話がある。そしてここを中心として何かしらの魔法陣が形成されているのでは、と今朝の私は考えていた。もつとも、今の幻想郷にはそんなふざけた魔法陣を起動できるような妖怪はいないらしいので、その仮定は崩れ去ったと言っても良

い。

「貴方が犯人なんでしょうか？」

フランドールが立ち止まったので、私は先ほどした質問をもう一度投げかけてみる。

今度は質問に答える気になってくれたのか、彼女は私を嘗めるように見た後、品定めするように私の顔をじつと見つめてきた。私の身体はやはり動かない。まるで何かの魔法をかけられたかのように顔を引き攣らせたまま棒立ちになってしまう。

周囲には帰りを急いでいる人々がいるというのに、まるで私とフランドールだけの世界になってしまったかのように、誰も私たちの事に気に留めない。それは時間にして僅か数秒のことであっただろう。しかし私には一刻にも感じるほど長い時間そうしていたように感じる。

彼女は質問に答えるわけでもなく、私の方に歩み寄ってきたかと思うと唐突に私を米俵のように抱えて井戸に飛び込んだ――

急激に身体にかかった負荷と気持ちの悪い浮遊感によって私は意識を瞬時に手放してしまったようだ。どうやら今の私は薄暗い部屋のベッドに寝かされているらしい。やけに蒸し暑い部屋だ。初夏とはいえ、夕方から夜にかけてはまだ涼しいはずだ……と考えていると少し頭が痛む。意識を飛ばした後、目覚めて間もない脳ではちよつとした考え事をするだけの余裕もないらしい。

痛むこめかみをさすりながらちよつとでも先ほどまでの事を整理しようとしていると、部屋の扉を開けて犬耳の女性が入ってきた。

「おや、もう目が覚めていらっしやったんですね。いやはやまったく、人里の最重要人物にこのような扱いをしてしまうなど……八雲様にどのようなお伝えすれば良いのやら……」

私が入里の最重要人物なのかはどうかはともかく、この犬耳妖怪の口から非常に気になる単語が出た。

「八雲……八雲紫を知っているんですか？」

「ええもちろん。……名乗っていませんでしたね。私は万頭狼戒ばんとうろうかい、古明地さとり様の式です」

古明地さとり。その名前が出た途端に思わず身構えてしまう。つい半日ほど前に散々言われたばかりなのだから仕方がないだろう。

しかしここで彼女の式神が出てくる理由が分からない。私は先ほどまでフランドールといたはずだ。私の記憶は絶対なのだから勘違いということも無い。フランドールは何処へ消え、何故この妖怪が私のもとへやってきたのだろうか。

「では行きましようか。さとり様が貴方を待つていますよ」

「待つてください。そもそもここは何処で、何故私はここに寝かされていたんですか？」

「ここは地霊殿です。ご存じでしょうが地底の中樞です。核と言い換えても良いでしょう。貴方がここに寝かされていたのはさとり様の指示です。貴方は気を失っていましたからね。フランドール殿が少々無茶をしたようで……誠に申し訳ございません。

さて、もう質問が無いようでしたらさとり様のところへ案内いたしますが」

聞きたいことが無いわけではない。フランドールが今何処にいるのか、古明地さとりは私と会ってどうしたのか、そもそも何故私をここに置いておく気になったのか。だがそんなことは今この場で聞くような事ではないだろう。どうせ古明地さとりに会えばすぐさま解決する。

解決……そうだ。私は探偵として事件を解決している途中にフランドールに出会った。結局彼女は私の質問に答えることなく何処かへ行ってしまったわけだが、彼女の行動からして一枚噛んでいるのは確かだ。そうでなければあそこで私の質問を無視する理由が無い。一度目はともかくとして二度目は絶対に彼女の耳に届いていたのだから。

万頭狼戒と名乗った少女は考え込む私をじっと見つめている。私がついて行くかどうか悩んでいる、とても思っているのかもしれない。

「私は彼女に会いたくありません。できれば地上へ帰していただきたいのですが」

どうせ会うことになるだろう。だって目の前の少女は式神ではないのだから。それでもささやかな抵抗くらいは見せておかなければならない。会いたくないのは事実だし。

「それはなりません。さとり様の指示ですので多少強引にでも連れて行きますよ」

やはり。妖怪相手に私が何をできるわけでもない。大人しく彼女について行く。無駄に長い廊下を歩いている途中、彼女は地底について簡単に教えてくれた。

かつてここに地獄があつたことは既に知っていることだったが、さとりがその頃からここに棲みついていたというのは初耳だ。確かに今にして思い返せば初代の頃から覚妖怪の姿を見たことは無かったか。

地底はならず者たちの巢窟だ。これまで幾度かさとり政権を終わらせようと立ち上がった者たちがいて、尽く消されていった。現在そのような争いが無くなったのはさとりが表舞台から姿を消したからだそうだ。

さとりは自らの死を偽装して身を引き、地底から大きな争いを無くすことに成功した。今表に立つて地底を纏めているのがこの式神。さとりへの反乱を目論んだ者たちのリーダーだったという。実際はさとりに敗れて良いように扱われているのだが、元の部下たちはそんなことなど知らない。さとりが死亡し、かつてのリーダーが地底を治めているという表面上の事実だけに満足して生活している。

「何故古明地さとりはそこまで敵を作ったんでしょう。やはり性格の問題？」

「いえ、さとり様が嫌われていたのは彼女が覚妖怪であつたため。それ以上の理由などありませんよ。自分の心の内が勝手に覚られてしまう、というのは誰にとっても気分の良いものではありません。貴方もそうでしょう」

確かにそうかもしれない。あの性格が苦手なのかと思っていたが、

思い返せば心を読まれることを自覚してすぐに気分が悪くなったよ
うな気がする。嫌われ者の棲まう地底においても最も嫌われている
妖怪というのは存在そのものが嫌悪の対象だったというわけだ。

「もしそこまで嫌われていて彼女がまだ存命であることが地底に広
まってしまうば現体制は崩壊するのではないですか？」

「間違いなく。ですからあの方は私が本当の統治者になれるよう手を
尽くしてくださいます。まだまだ道のりは遠そうですが」

古明地さとりが何を考えているのか分からない。何故未だに裏で
地底を牛耳り続けているのだろうか。死んだとされたならば即座に
統治者の席を式神に譲るべきだったはずだ。初めから上手くできる
者などいないのだから、この式神が多少雑な行いをしたとしても昔な
らば許されただろう。

最も不可思議なのは今になって席を譲ろうと苦心していることだ。
するならばもっと早くするべきだったし、しなかったのならば現体制
が崩壊するまで続けても良い。昔に戻るだけだが、あの妖怪ならば力
で黙らせることもできるだろう。実際に千年近くもそうしてきたわ
けだし。

私に言わせれば何もかもが中途半端だがもちろんあの妖怪のこと
だ。何か人間には予想もつかないようなことを目論んでいる可能性
も否定できない。

「それを貴方が考えたところで何にもなりませんよ」

廊下の角を曲がって古明地さとりが現れた。てつきり客間で椅子
に座って待っているものだとはばかり思っていたからこの出会い方に
は少々驚いてしまう。お手洗いにでも行っていたのだろうか。

「少しペットたちに癒されていただけです。……先刻ぶりですね、稗
田阿求。そちらから出向いていただけで光栄ですよ」

何が『そちらから出向いていただけ』だ。ほぼ強制的だったでは
ないか。こういうところにこの妖怪の性格の悪さが滲み出ている。
しかしそんな感情は胸の中にしまって、こちらからも至極丁寧に挨拶
を返しておく。どうせ内心はバレバレだろうが、式神の方だけでも誤
魔化しておかねばなるまい。

「ふふ。貴方も随分と私に近い存在であるように思います。まあ立ち話はこのくらいで良いでしょう。中へお入りください」

紅魔館よりはやや暗い印象のある部屋だ。煌びやかな魔法照明シャンデリアが無いからだろうか。それとも装飾が少ないからか。掃除は行き届いているがどことなく無機質な感じがする。色は落ち着いているのであちらよりはかなり目に良い。

「さて……では貴方の推理を聞きましょうか」

「推理、ですか？」

「ええ。現在地上で起こっている事件についてです。私も詳細が気になつて色々調べましたよ。私は文字通りの反則探偵ですので犯人は知っています。貴方の推理の正否くらいは判断して差し上げましょう」

この事件にまず間違いなく絡んでいるのがフランドール・スカレット。しかし彼女が属する紅魔館は深く絡んでいるわけではないだろう。パチュリーが何気なく私を解決に導こうとした可能性はあるが、少なくともレミリアの方は何も心当たりがない様子だった。

犯人は数日かけて襲撃を行った。しかし話に聞き、実際に見た感想としてはフランドールにそれほどの忍耐力は無さそうだ。彼女は実行犯であつても首謀者ではないだろう。その彼女が私をここに連れてきた。

「犯人は貴方ですね、古明地さとり」

「ほう？。なかなか面白い結論ですね。ではそう考えた理由をもう少し実際の証拠に基づいて教えていただきたいのですが、よろしいですか？」

証拠か。この事件で犯人はわざわざ現場に証拠を残すような行動を繰り返してきた。被害者の状態は一時的な発狂で一致している。これは覚妖怪が行う心の破壊を軽度にしたものだと考えられる。そしてほぼ私宛に書いたであろう置手紙。指定された場所は私が落とされた井戸だ。これが地底に繋がっていたとなるとやはりこの妖怪が犯人に最も近い。

昼間紅魔館を訪れた際にフランドールに何か伝えたに違いない。

今にして思えばあの時のさとりは私が真実に近づかないよう妨害していたような気もする。私に探偵として何か期待していたのも、きちんと犯人を見つけて事件を解決に持っていくこと、その結果さとりを糾弾することを期待していたのだとすれば納得がいく。

「……そういうわけで貴方が犯人だと考えるのが妥当であると判断しました。どうでしょうか、反則探偵さん？」

「素晴らしい、と言いたいところですがもう少し補足しておきましょう。まず私が主犯である。これは正解です。一時的発狂の原因も私です。貴方に期待していたことも概ねその通りです。しかし他は少し違います」

昼間紅魔館に行っていたのはただレミリアに用事があったからであり、フランドールへの接触はもう随分と前に行っていたらしい。真実に近づくことへの妨害も本人的にはそれほど意図的なものではなかったとのこと。

「そして井戸について。これに関してはもう少し遡らなければなりません。私はこの井戸を中心に襲撃を行いある紋様を描いた。貴方も知ったでしょう？」

そう言っただけで彼女は例の本を懐から取り出した。佐戸愛子の『前方後円墳になる村』だ。パチュリー以外にも持っている者がいたらしい。

井戸を中心にして犯行現場の点を結べば前方後円墳の形になるという話だ。

「しかし貴方はこの本の意味するところを何も知らない。カバーを外せばこの本の本物の姿が現れるのです」

黒く縁どられているせいでカバーを付けた状態ではこの真っ赤な表紙に気づかなかった。本のタイトルの下には前方後円墳と言われ想像するものよりもやや細いそれが黒抜きで描かれている。

裏表紙は真っ黒に赤抜きでアーチ状に何やら文字が書かれている。

· e v i t c e t · d e l t s e ' c , · l i c a l

「フランス語で『鍵は探偵』と書いてあります。もうお分かりでしょ

う。表紙のこれは前方後円墳などではなく鍵穴です。そして裏表紙のこれが何を意味するのかという……そう、探偵である貴方こそがこの事件の最終目的に必須なのです。フランドールが少々誤解してしまったようで、探偵を予定よりも早く鍵穴へ送りこんでしまったので予定が少々狂いましたが。まあ早苗さんはオプシオンですしいなくても計画に影響は出ないでしょう」

この妖怪が犯人であることは分かった。私がまんまと嵌められたことも。しかし何をするつもりなのだろうか。わざわざ明日の正午早苗さんを井戸に連れてこいと指定した理由も関係あるのだろうか。いまいち分からぬ。

「祭りですよ。久しくなかった地上での祭り騒ぎ。地底からも大勢が参加するので私は欠席しますが……安心してください。正午になる前には貴方を地上に送り届けさせますよ。貴方もその眼で見たいでしょうからね」

「何をするつもりなのかは知りませんが、里でそんなことをして八雲紫が黙っていませんよ」

「今回の祭りは私と八雲と河童の共催です。彼女の名前による脅しは効きません。それと、本居小鈴はもう人質として意味を為さないので鈴奈庵に帰しておきました。地上に戻ったら会いに行くと良いでしょう。推理も概ね間違っていますし今回は貴方の勝利で終わらせましょう。おめでとございます。ではまた会いましょうね、探偵さん」

ここまで味のしない勝利も無いだろう。全て彼女の手の上で事が進んだように思った。私が言い当てたのも彼女が犯人であるという、ただそれだけ。本の意味も全く理解していなかったし、禁忌とも言えるネタバレでようやく事件に追いついたというもの。まだまだ足りていない。

実質的には私の敗北で間違いない。これは彼女なりの慈悲のつもりなのだろう。しかし残酷だ。私は探偵としてほとんど何もできなかった。探偵ぶっこに多くの者を付き合わせただけ。

「そう落ち込むことはありません。もとよりあの方に完全勝利できる

方など相当に限られているのですから。あの方が貴方の勝利を認め
た……それは数代先の貴方にさえもきつと誇ることができるとしよ
う。私はそう思いますよ」

終幕

地霊殿でしばらく休んだ後、さとりは約束通り、正午前に阿求を地上へ送り帰した。

火焰猫燐と名乗った火車は阿求を人里まで送り届けるとすぐさま姿を消してしまった。主の下へ帰って行っただろう。ひとり残された阿求は、泣き崩れる両親に抱きしめられて困惑している小鈴の姿を発見し、一応事件が解決したことに安堵した。その過程に如何ほどの不満があつたとしても、結果としては元の生活を取り戻すことができたのだ。

事件の解決に奔走し始めてからまだ丸一日しか経過していない。未だかつてこれほどまでに長い一日を過ごした経験は阿求には無かった。

疲労とともに不思議な余韻に浸っていた阿求だが、その余韻も長くは続かなかつた。里の入り口付近に続々と妖怪が集まって来ていたからだ。そういえば今日は祭りがあるとさとりが言っていたな、と阿求は思い出す。

それにしてもあまりにも急だ。人里の代表として居座っている阿求も祭りをやるだなんて昨日初めて知ったくらいである。

しかしこれらに疑問を抱いているのは周囲を見渡す限り阿求一人だけのようである。里の住人は当たり前のように祭りの準備を進めているし、門番たちも妖怪が集まってきているのが当たり前のように接している。

「怖いかしら？」

突然背後から声を掛けられた阿求は距離をとりながら急いで振り返る。そこにいたのは神出鬼没のスキマ妖怪だった。

「今日このような祭りを催すなど私は知らされていなかったのですが……里を巻き込んだドッキリ企画でもやるつもりですか？」

外の世界にそのようなおかしな風習があることを本で読んで知っている阿求はそう尋ねる。自分だけが何も知らされていない状況になっっているのだからこのような考えに至るのは至極普通であろう。

しかし、紫から返ってきた答えは彼女の予想していたものとは随分異なっていた。

曰く、祭りがあることはこの人間たちも今日初めて知ったらしい。

そんなはずはない、と阿求は考える。もし本当にそうであればこのように落ち着いて準備が進められることは無いはずだ、と。

「祭りというものは本来当日に準備が始まるものでない。このように急ピッチで事が進んでいる、ということはつまりそういうことなのです」

「ですが、当日に知らされて『はいそうですか』と当たり前のように準備が進むのもおかしな話でしょう。里の外にいる妖怪たちも、そしてここに明らかに妖怪然としている貴方を誰も見咎めないことも、何もかもが仕組まれていたからなのではないですか？」

昨日まで恐怖と混乱の最中にあった人里がたった一日で落ち着いているのも変な話だ。

「これが、これこそがさとりの持つ特殊で最も危険な能力である洗脳と呼ばれるものです。さとりは催眠と呼んでいたかしらね。ともあれ貴方が地霊殿で眠っている僅か数刻の間に彼女はこの人間を全てこのような状態に変えることができますのです」

阿求は絶句した。

「彼らは今日祭りがあることを予め知っていた、妖怪が参加することも当然だと分かっている、という風に記憶が書き換えられている」

「何故……どうして彼らはそれが異常だと思わないんですか？ 妖怪が里の中に入ってくる事の危険性は誰しも知っているはずです」

普段なら人里に住みついていく妖怪にさえ猜疑の目を向けるような人々が、今は妖怪がいて当たり前前のように接している。赤蛮奇や多々良小傘といった者たちも人間の接し方の変化に何の疑問も抱いていない様子だ。

「それこそが洗脳の効果だから、と言っても貴方は納得しないでしよう。そうね、もし世界が五分前に始まったと言われたら、貴方はどう考えるかしら？」

「有り得ません。私には今生の十余年に加えて千年近く前の出来事も知っているのですから」

当然阿求はそう答える。阿求でなくても全ての生物がその仮定を否定するだろう。この世界に生きるモノのほとんどは五分以上前の事を記憶として、歴史として持っているからだ。

しかしそこに洗脳が生きてくる。超存在によつて五分前に作られた世界や生物が、歴史や記憶をあつて当然の物だと思ひ込む。本当は五分前に作られたのに十年前の記憶を植え付けられる。そうすると誰も五分以前に世界が存在しなかったなどは考えないのである。

「貴方は立派に洗脳にかかる頭を持っているようね。当人が気づけないからこそ洗脳は効果を発揮する。彼らは今、祭りがあることを知っていたが準備を忘れていた、というような認識を植え付けられているでしょう。自覚できないから誰も真実を知り得ない。この私をして恐ろしいと言わしめる存在はまだ彼女以外いませんわ」

紫の言う恐ろしき。それは阿求にも容易に理解できるものだった。自分が今本当に自分の意思で行動できているのか、自分の思考は自身のものなのか、それすら正しく判断できかねる。アイデンティティの喪失を引き起こすことさえ容易だということだ。

「今回の祭りの事を言い出したのはさとりからだっただ。地上で、地底の妖怪も参加させる祭りを開催する。思わず正気を疑ったけれど彼女の意思は固かった」

さとりは数年前から鈴奈庵にとある本を忍ばせ、それをきっかけにして今回のようなミステリーごっこをする算段だった。紫が守矢神社を勧誘しに外へ出ていた頃から決まっていた計画だ。

「思わぬタイミングで現れた守矢神社の現人神のおかげで祭りは元の計画より盛大になるわ」

いつの間にか祭りの準備は終わっていたようで、屋台に行列ができ始めた。阿求と紫が話している井戸端の周囲にも何故か人が座り込み始めている。人々や妖怪たちが何を待っているのか、阿求にはさっぱり分からない。しかし紫にはわかっているようで、微笑を浮かべながらある方向を見つめている。

「来た」

その声と同時に人混みが割れた。モーセが海を割ったように、奇跡の申し子が人混みを割って歩いてきた。

「さとりが計画し、河童が造り、私が顕現させる。早苗は舞台装置の一部。いてもいなくても結果に一切の影響はないけれど、その奇跡を目の当たりにした民衆の信仰は守矢へ流れる。だから守矢もこれを承諾した。……さあ、今こそ奇跡は成る。刮目しなさい、阿求」

さとりが仕込んだ一冊の本。それは小鈴を誘拐するための一手であり、早苗当初の予定では霊夢を人助け目的で人里に呼び寄せるための一手となるはずだった。しかしフランドールの想定外の阿求誘拐が発生し、完全に無駄なものとなってしまった。当初の計画からはかたりのずれが発生したとはいえ、最終的な結果はさとりの求めるものとなった。

計画通りに周辺の家を襲って簡易的な魔法陣を描き、それを起動させる。起動のための魔力の二割ほどは紫が賄い、残りは大量に集めた妖怪達が補う。もちろん後者に合意などないが、地上に出るという褒美への対価としてあくまでも正当な量を奪っている。

ある程度魔力を奪っておけば仮に地上で暴れるようなことになっても問題なく対処できる。魔力を奪って急に倒れ込まないよう初めに座らせておく、という変な気遣いも忘れてはいけない。

仮にこれでも魔力が足りなければ紫が自身の魔力からさらに幾分かを補う形となる。

紫の宣言と共に頭上に現れた巨大な魔法陣に驚く者は阿求と早苗以外に誰もいない。

早苗はあくまでもそれらしいふりをしているだけであり、実際には何もしなくて良いと両神から言われている。そんな状況でこのような魔法陣が突如出現したとなれば紫と阿求からは少し離れている、彼女が知らぬうちに奇跡を起こしていたのだろうと考えても仕方ない。早苗は自身の起こした（と勘違いしている）奇跡に驚いていた。

「顕現せよ……ヒソウテンソク」

膨大な量の魔力が吸い取られ、徐々にソレが形になってゆく。
バタバタと倒れ伏す妖怪たちの頭上に、雑誌で見たことがあるよう
な巨大なロボットが姿を現した。

「何故このような騒動を引き起こしてまで祭りを開催したのでしょうか？」

探偵ごっこが終わってしばらく、阿求を休憩室へ案内させた戒が戻ってきて開口一番そう尋ねてきた。

私がかここまで祭りの開催をしたかった理由……それは非常に単純なものだ。

「私が引退するためよ」

叛逆してくる可能性のある地底の妖怪どもの力を軒並み低下させる。いずれ力は戻るだろうが、その頃には戒もある程度まともに仕事ができるようになってはいるはずだ。それだけの教育はしてきたし、それに間に合うだけの力は削ぐつもりだ。

「……あまりにも急ではありませんか？ 私にはこれほどまでご隠居を急がれる理由がないように思います」

「確かに理由はないわ。でも私はできる限り早く引退したいのよ」

そのために仕込みや準備をしていた。今回たまたま上手くいっただけで、阿求がもっと早くに行動していれば魔法陣は完成しなかった。そうなっていれば私の引退は十年、数十年先になっていたかもしれない。

もちろん引退したからといって完全に何もしないわけではない。現在戒が行っている執務の手伝いもするし、私の仕事の一部もこれまで通り行うつもりだ。

ただ地底の為政への口出しを完全に無くす。それこそが目的だ。私の痕跡を表から完全に排除する。平穏な生活を送ってみたいのだ。

「理解できません。今の私では主人の頭脳の足元にも及びませんよ」

「それで構わないわ。元より貴方が私を超えることは不可能なのだか

ら。それに多少おバカでも貴方は私の式神。そこらの鬼やらとは比べ物にならないほど賢いわよ」

流石に萃香には劣るけれど。あれは私の頭脳よりもさらに先を行く、紫さんに勝るとも劣らない天蓋の化け物だ。彼女とは比べなくて良い。

私と彼女を除けばもう戒を超える者は地底にはいない。守矢の神々と関わらなければなくなるのは少し酷かもしれないが、それでも何も知らなかった昔の私よりはよほど上手く地底を捌いてくれるに違いない。

「私の仕事はこれでお終い。祭りが終われば正式に引き継ぐわ」

折角上手く事が進んだのだから逃すわけにはいかない。

河童に作ってもらったヒソウテンソクは早苗さんを虜にするのに十分な魅力があるはずだ。

毎年やればその分地底の戦力を削ることができるとは、催眠をかける私の精神的、肉体的疲労は過去一番かと思うほどのものであるし、戦力を削りすぎれば今度は地上からの支配に警戒しなければならなくなる。何事もほどほどが一番だ。

河童は今回の制作を活かして新たな技術開発を進めるだろう。

人間も妖怪への対応が多少穏やかになるかもしれない。

守矢も今回のお礼に、地底への干渉を減らしてくれるとありがたい。

紫さん……私は一足先に胃薬同盟から抜けさせてもらおう。いつかただの友人として私の部屋で談笑できる日を願って。

「戒、貴方は以前の私のように一人で抱え込まなくて良い。不安な事があれば私たちが支えるわ」

面倒ごとは分け合って、時に押し付けて、貴方なら必ず私より上手く対処できるわ。